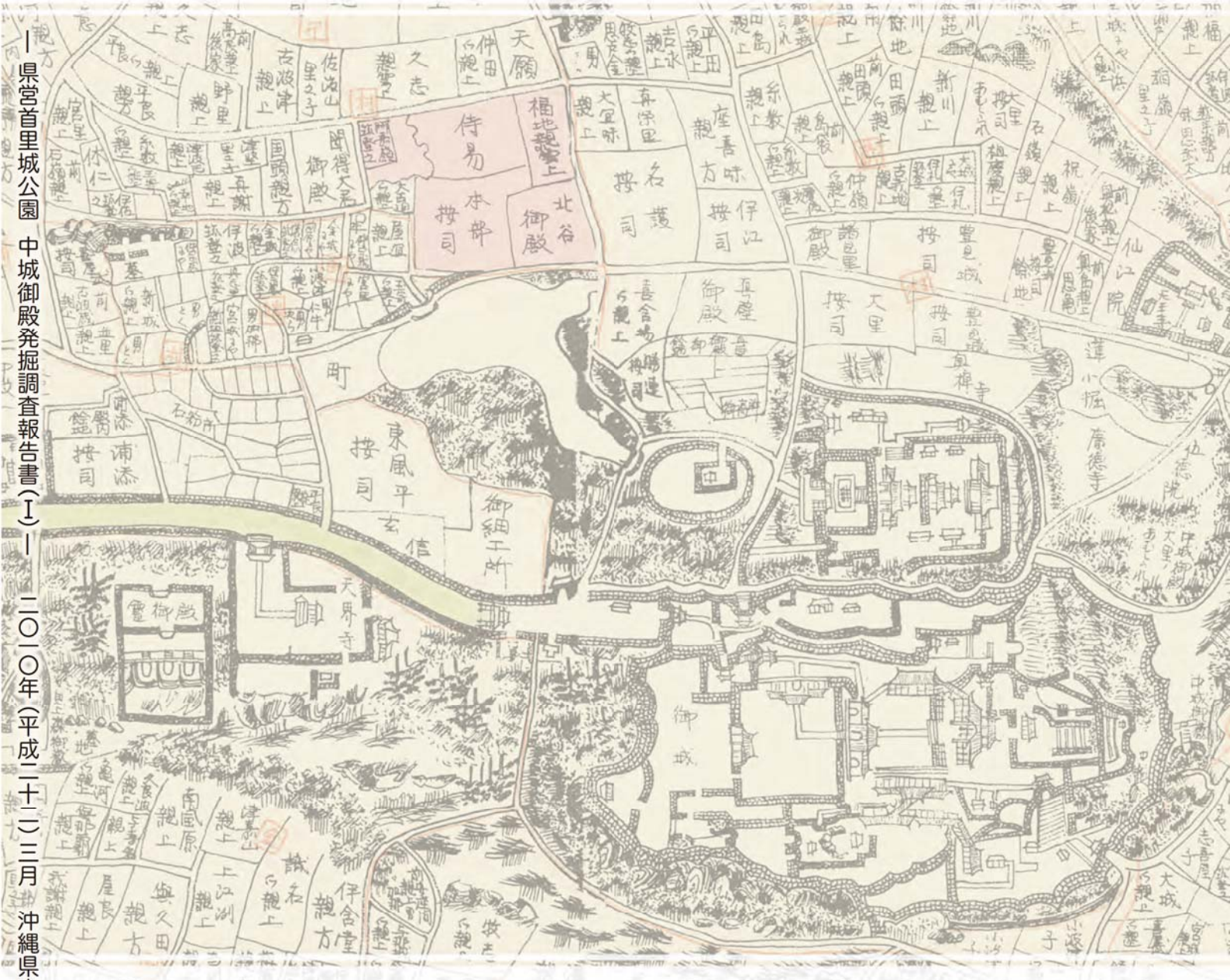
沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第53集

中城御殿跡

― 県営首里城公園　中城御殿発掘調査報告書（Ⅰ）―



2010年（平成22）3月

沖縄県立埋蔵文化財センター

中城御殿跡
―県営首里城公園　中城御殿発掘調査報告書（Ⅰ）―
二〇一〇年（平成二十二）三月
沖縄県立埋蔵文化財センター

中 城 御 殿 跡

— 県営首里城公園　中城御殿発掘調査報告書（Ⅰ）—

2010年（平成22）3月

沖縄県立埋蔵文化財センター

序

本報告書は沖縄県土木建築部都市計画・モノレール課から分任予算を受け、2007（平成19）年度に実施した県営首里城公園中城御殿地区の整備に伴う発掘調査の成果をまとめたものであります。

中城御殿跡の発掘調査は、国営沖縄記念公園首里城地区の約4.0haを除き、1986（昭和61）年に沖縄県が首里城の城壁外側の区域約13.8haを「県営首里城公園」と位置付けて、1988（昭和63）年3月より開始された公園の整備と平行して、県土木建築部からの依頼を受けて沖縄県教育委員会が首里杜館地区や龍潭地区、ハンタン山地区、上之毛地区、綾門大道跡地区、継世門周辺地区、城の下地区、城郭南側下地区、守礼門地区、真珠道跡地区等の発掘調査を今日まで継続的に実施してきました。首里城公園基本設計によると、この地区は「博物館エリア」として位置付けられ、戦前までは“中城御殿”と呼ばれ、1873（明治6）年に王世子（王子・世子）の屋敷として建設されました。中城御殿の敷地は3,000坪余り、建物は別棟の米蔵や灰蔵を除いた800坪余りで、御殿の主な建物は連結して群立し、男性だけの表御殿と女性だけの奥御殿（別名：御内原）に分かれていたようです。その他、敷地内の西側には琉球式庭園や御嶽などがあります。1879（明治12）年の琉球処分（廃藩置県）による首里城の明け渡しの後に、尚泰はこの世子殿に移り住んでいました。この中城御殿も1945（昭和20）年4月、沖縄戦で消失しました。戦後は首里市役所、㈱首里バスの用地となりますが、琉球政府が敷地を買い上げて1966（昭和41）年に沖縄県立博物館の前身である琉球政府立博物館が建設されました。復帰後、沖縄県立博物館となり2007（平成19）年に那覇新都心に移転しています。

中城御殿の発掘調査は沖縄県立博物館が那覇新都心へ移転を契機に今後の跡地利用の計画のために一部分ですが、発掘調査を実施しました。調査の結果、石列や側溝、石敷遺構等が検出され、中国産陶磁器（青磁や白磁、青花、中国産褐釉陶器）や本土産陶磁器、その他の輸入陶磁器、沖縄産陶器（施釉・無釉陶器）、タイ産褐釉陶器・半練土器、グスク土器、陶質土器、瓦質土器、円盤状製品、瓦、塼、銭貨、鉄・青銅製の釘、飾り金具、キセル、ボタン、貝製品、自然遺物（貝や骨）等の遺物も出土しました。これらの遺物は大まかであるが、生活雑貨品や建築資材、食料残滓等に分けられ、近世・近代の御殿の生活様式等を知る上で貴重な資料であると思われます。

本報告書が文化財保護思想や普及、地域の文化財への関心並びに、歴史に対する認識と理解を深め、更に学術研究の一助として多方面にご活用願えれば幸いに存じます。

末尾になりましたが、発掘調査及び、資料整理作業にあたり、多大なるご指導・ご協力を頂きました関係各位に深く感謝致します。

2010（平成22）年3月

沖縄県立埋蔵文化財センター
所長　玉栄　直

巻頭図版 1　1945年4月2日 米軍撮影 (CV20-103-63) の首里城周辺　（財団法人沖縄県文化振興会 公文書管理部史料編集室所蔵）

巻頭図版２　旧博物館周辺（1993年撮影の航空写真）

撮影者：坂本 万七　出 典：工芸100号(1939)　所蔵機関：沖縄県立博物館・美術館

撮影者：鎌倉 芳太郎(1924)　出 典：沖縄文化の遺宝(1982)

巻頭図版３　上：正門　下：大広間東南面と庭園(奥は中門B)

例　言

1．本報告書は、平成19年度に実施した県営首里城公園内の中城御殿地区の発掘調査の成果をまとめたものである。なお、平成19年度は、旧沖縄県立博物館建物の前庭の一角において遺構確認の発掘調査を実施し、平成20年度は、平成19年度に行った発掘調査のA地点の平面図の実測を実施した。

2．本事業は、県営首里城公園整備事業に伴うもので、沖縄県土木建築部からの分任（委託）事業として沖縄県教育委員会が実施したものである。なお、発掘調査事業の総括並びに、業務調整等は所管課の教育庁文化課が行い、発掘調査並びに、事業事務に関しては沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した。

3．本報告書に使用した地図は、国土地理院発行の1/25,000の地形図を使用した。

4．本報告書に掲載した航空写真は、国土地理院の93OKINAWA49-12と、財団法人沖縄県文化振興会公文書管理部 史料編集室 所蔵する1944年の米軍撮影のCV20－103－63を複写した。

5．出土遺物の同定並びに、検出遺構の解釈指導は、下記の方々の協力を賜った。記して謝意を表す次第である（職名等は当時、敬称略）

大橋 康二（佐賀県立九州陶磁文化館 特別学芸員）

上 原　静（沖縄国際大学総合文化学部 教授）

6．本報告書は、上地　博、天願 瑞笑、伊藝 由希を中心に、外間　瞳、上原 園子、仲宗根 三枝子、城間 千鶴子、我那覇 悠子、久田 慎子、津多　恵、宮国 さおり、金城 政史の協力を得て編集した。
なお、各章・各節の執筆は以下に示したとおりである。

上 地　博 ： 第1章、第2章、第3章、第4章、第5章2・4・6・7・10～12・14・16・18・19節、第6章

天願 瑞笑 ： 第5章3・5・13・15節

伊藝 由希 ： 第3章、第5章1・8・9・17・20・21節

7．本報告書に掲載された検出遺構の写真撮影は、伊藝 由希、天願 瑞笑、また、出土遺物の写真撮影は、矢船 章弘と伊禮 若奈が行った。

8．本報告書のデジタル編集及び版下データ入稿、PDF等のDTP処理は、外間 瞳と金城 政史が行った。

9．発掘調査で得られた遺物及び実測図、写真等は、全て沖縄県立埋蔵文化財センターに保管している。

目　次

序
巻頭図版
例 言

第１章　調査に至る経緯

第１節　調査に至る経緯 …… 1
第２節　調査体制 …… 2

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境 …… 7
第２節　歴史的環境 …… 8

第３章　調査の概要

第１節　調査経過 …… 13
第２節　調査区の設定 …… 16
第３節　調査日誌抄 …… 16

第４章　層序と遺構

第１節　層　序 …… 21
第２節　遺　構 …… 29

第５章　出土遺物

第１節　遺物の概要と出土状況 …… 35
第２節　青　磁 …… 37
第３節　白　磁 …… 46
第４節　青　花 …… 50
第５節　褐釉陶器 …… 64
第６節　その他の輸入陶磁器 …… 68
第７節　本土産陶磁器 …… 72
第８節　沖縄産施釉陶器 …… 87
第９節　沖縄産無釉陶器 …… 98
第10節　グスク土器 …… 106
第11節　陶質土器 …… 108
第12節　瓦質土器 …… 110
第13節　円盤状製品 …… 113
第14節　瓦　類（瓦・塼・レンガ） …… 117
第15節　銭　貨 …… 126
第16節　金属製品 …… 129
第17節　煙　管 …… 140
第18節　ボタン …… 142
第19節　貝製品 …… 144
第20節　貝類遺存体 …… 145
第21節　脊椎動物遺存体 …… 151

第６章　結　語

報告書抄録

挿図目次

第１図　沖縄本島の位置図 …… 5
第２図　中城御殿および首里城位置図 …… 6
第３図　首里の南北縦断図 …… 7
第４図　首里古地図における中城御殿位置図 …… 11
第５図　旧中城御殿概略図「旧中城御殿関係資料集」…… 12
第６図　中城御殿屋根伏せ
　　旧博物館跡およびH19年度発掘箇所 …… 14
第７図　中城御殿屋根伏せ図およびH19年度発掘箇所 … 15
第８図　旧博物館跡全体平面図およびH19年度調査区 … 18
第９図　グリッド配置図 …… 19
第10図　H４年度調査区 …… 24
第11図　A地点層序図 …… 25
第12図　B地点層序図 …… 27
第13図　A地点遺構平面図 …… 30
第14図　青磁１　実測図 …… 42
第15図　青磁２　実測図 …… 44
第16図　白磁　実測図 …… 48
第17図　青花１　実測図 …… 56
第18図　青花２　実測図 …… 58
第19図　青花３　実測図 …… 60
第20図　青花４　実測図 …… 62
第21図　褐釉陶器　中国産(1～10)・タイ産(11) 実測図 … 66
第22図　その他の輸入陶磁器　実測図 …… 70
第23図　本土産陶磁器１　実測図 …… 78
第24図　本土産陶磁器２　実測図 …… 80
第25図　本土産陶磁器３　実測図 …… 82
第26図　本土産陶磁器４　実測図 …… 84
第27図　沖縄産施釉陶器１　実測図 …… 90
第28図　沖縄産施釉陶器２　実測図 …… 92
第29図　沖縄産施釉陶器３　実測図 …… 94
第30図　沖縄産施釉陶器４　実測図 …… 96
第31図　沖縄産無釉陶器１　実測図 …… 100
第32図　沖縄産無釉陶器２　実測図 …… 102
第33図　沖縄産無釉陶器３　実測図 …… 104
第34図　グスク土器　実測図 …… 107
第35図　陶質土器　実測図 …… 109
第36図　瓦質土器　実測図 …… 111
第37図　円盤状製品　実測図 …… 114
第38図　瓦１　実測図 …… 122
第39図　瓦２　瓦(7～14)・塼(15)・レンガ(16) 実測図 … 124
第40図　銭　貨 …… 127
第41図　金属製品１(青銅製品)　実測図 …… 134
第42図　金属製品２(青銅製品)　実測図 …… 136
第43図　金属製品３(鉄製品)　実測図 …… 138
第44図　煙管　実測図 …… 141
第45図　ボタン　実測図 …… 143
第46図　貝製品　実測図 …… 144

図版目次

図版１　A地点全景（スカイマスターより撮影）…… 31
図版２　A地点発掘状況 …… 32
図版３　B地点発掘状況 …… 33
図版４　発掘前の状況と調査の流れ …… 34
図版５　青磁１ …… 43
図版６　青磁２ …… 45
図版７　白磁 …… 49
図版８　青花１ …… 57
図版９　青花２ …… 59
図版10　青花３ …… 61
図版11　青花４ …… 63
図版12　褐釉陶器　中国産(１～１０)・タイ産(１１) …… 67
図版13　その他の輸入陶磁器 …… 71
図版14　本土産陶磁器１ …… 79
図版15　本土産陶磁器２ …… 81
図版16　本土産陶磁器３ …… 83
図版17　本土産陶磁器４ …… 85
図版18　沖縄産施釉陶器１ …… 91

図版19　沖縄産施釉陶器２ …… 93
図版20　沖縄産施釉陶器３ …… 95
図版21　沖縄産施釉陶器４ …… 97
図版22　沖縄産無釉陶器１ …… 101
図版23　沖縄産無釉陶器２ …… 103
図版24　沖縄産無釉陶器３ …… 105
図版25　グスク土器 …… 107
図版26　陶質土器 …… 109
図版27　瓦質土器 …… 111
図版28　円盤状製品 …… 115
図版29　瓦１ …… 123
図版30　瓦２　瓦（7～14）・塼（15）・レンガ（16） … 125
図版31　銭 貨 …… 127
図版32　金属製品１（青銅製品） …… 135
図版33　金属製品２（青銅製品） …… 137
図版34　金属製品３（鉄製品） …… 139
図版35　煙 管 …… 141
図版36　ボタン …… 143
図版37　貝製品 …… 144
図版38　貝類遺存体１　巻貝 …… 149
図版39　貝類遺存体２　二枚貝 …… 150
図版40　脊椎動物遺存体１ …… 154
図版41　脊椎動物遺存体２ …… 155
図版42　脊椎動物遺存体３ …… 156
図版43　脊椎動物遺存体４ …… 157

挿表目次

第１表　H4年度調査の南B地区と東A地区の層序対比表 … 23
第２表　H4年度調査とH19年度調査の層序表 …… 24
第３表　主な出土遺物の比較グラフ …… 35
第４表　出土遺物集計表 …… 36
第５表　青磁集計表 …… 37
第６表　青磁観察一覧 …… 37
第７表　白磁集計表 …… 46
第８表　白磁観察一覧 …… 47
第９表　青花集計表 …… 50
第10表　青花観察一覧 …… 50
第11表　褐釉陶器　集計表 …… 64
第12表　褐釉陶器観察一覧 …… 65
第13表　その他の輸入陶磁器集計表 …… 68
第14表　その他の輸入陶磁器観察一覧 …… 68
第15表　本土産陶磁器集計表 …… 72
第16表　本土産陶磁器観察一覧 …… 73
第17表　沖縄産施釉陶器集計表 …… 87
第18表　沖縄産施釉陶器観察一覧 …… 88
第19表　沖縄産無釉陶器集計表 …… 98
第20表　沖縄産無釉陶器観察一覧 …… 99
第21表　グスク土器観察一覧 …… 106
第22表　陶質土器観察一覧 …… 108
第23表　瓦質土器観察一覧 …… 110
第24表　円盤状製品観察一覧 …… 113
第25表　屋瓦集計表 …… 117
第26表　屋瓦観察一覧 …… 118
第27表　銭貨観察一覧 …… 126
第28表　金属製品集計表 …… 130
第29表　金属製品観察一覧 …… 132
第30表　煙管集計表 …… 140
第31表　ボタン観察一覧 …… 142
第32表　巻貝出土状況 …… 145
第33表　二枚貝出土状況 …… 145
第34表　貝類生息場所類型（habitat）表 …… 145
第35表　貝類遺存体集計表（巻貝） …… 147
第36表　貝類遺存体集計表（二枚貝） …… 147
第37表　脊椎動物遺存体の出土地分布表 …… 151
第38表　脊椎動物遺存体の種別割合 …… 151
第39表　魚類出土割合 …… 151
第40表　獣類出土割合 …… 151
第41表　魚類集計表 …… 152
第42表　ニワトリ集計表 …… 152
第43表　ブタ集計表 …… 153
第44表　ウマ集計表 …… 153
第45表　ウシ集計表 …… 153
第46表　ウシorウマ集計表 …… 153

第１章　調査に至る経緯

第１節　調査に至る経緯

沖縄県は1429年琉球王国の成立から1879（明治12、尚泰32）年の首里城明け渡しによる琉球王国崩壊までの約450年間、中国をはじめ、日本、朝鮮、東南アジア諸国との外交貿易を通して、海洋王国へと発展し、琉球王府時代には独自の歴史や文化等を形成してきた。特に、歴史や文化等の中心地であった首里城跡周辺には多くの文化財が集中していたが、去る沖縄戦で国宝（建造物等）をはじめとする貴重な文化遺産の多くが焼失してしまった。戦災によって貴重な文化遺産を失ったことから、当時の琉球政府文化財保護委員会（現在の沖縄県教育庁文化課）は首里城跡及び、周辺の戦災文化財の復元整備や修理、修復等、更に、文化財の保護と保存を行ってきた。それは1956（昭和31）年の園比屋武御嶽石門の復元整備を嚆矢とし、その後、守礼門や円覚寺総門、弁財天堂、天女橋、円鑑池、龍淵橋等の戦災文化財の復元整備等が次々と行われた。

1970（昭和45）年に、琉球政府文化財保護委員会は首里城跡及び、周辺の戦災文化財の復元計画を策定し、戦災文化財としての首里城復元構想が始めて提案された。同年に日本政府は第１次沖縄復帰対策要綱を閣議決定し、「沖縄の文化財の重要性を鑑み、戦災文化財の復元修理などを推進する」ことを明らかにした。1971（昭和46）年に総理府沖縄北方対策庁予算の中で、首里城跡戦災文化財復元調査費が計上された。1972（昭和47）年に第１次沖縄振興開発計画の中で、「・・・戦災文化財の復原を積極的に推進する・・・」ことが明記された。1972（昭和47）年に日本本土へ復帰した年から戦災文化財復元整備事業として、総理府外局沖縄開発庁（現在の内閣府沖縄振興局）の予算で沖縄県教育庁文化課が首里城歓会門や久慶門、木曳門、継世門等の城門や、城郭等の整備が始まった。その後、1992（平成４）年度に第３次沖縄振興開発計画の中で「特に、首里城正殿、城郭等失われた文化財の復元・整備を図るとともに、・・・」とあり、事業規模や予算等が拡大され、2001（平成13）年度までに首里城城郭等の復元整備は完了した。1950（昭和25）年から首里城跡に立地していた琉球大学は、1967（昭和42）年～1982（昭和57）年度にかけて西原町への移転統合整備事業が進められ、1982（昭和57）年に移転は完了した。その間、跡地利用として沖縄県立芸術大学構想や公園化構想等が展開された。

首里城公園基本計画調査委員会が1984（昭和59）年度に策定した『首里城公園基本計画』において、「古都首里の歴史的環境を、水系、地形、植生など自然環境の中でとらえ、今後の首里の町づくりの方向性として打ち出した“首里杜構想”のもとに、その中核となる首里城一帯について歴史的な都市公園として保全を図る」という構想を表した。1986（昭和61）年11月28日に、首里城公園計画区域約17.8haのうち、城郭内側の区域約4.0haについては沖縄復帰を記念する国の都市公園整備事業（国営沖縄記念公園首里城地区）として、復元整備されることが閣議決定され、併せて城郭外側の首里城公園区域約13.8haを県営公園事業として庁議決定され（計画区域及び、面積は1987（昭和62）年２月20日付けで建設大臣の認可を受けた首里城公園区域）、首里城跡及び、その周辺の復元整備等が具体化した。現在までに、国営首里城公園では首里城正殿を始め、南殿・北殿・二階殿・書院鎖之間等の建造物や、奉神門や瑞泉門・漏刻門・廣福門・右掖門等の櫓門やアーチ門等が復元された。

遺構の確認調査は、沖縄県土木建築部が1988（昭和63）年度に策定した『首里城公園基本設計』に基づき公園整備を目的としたものである。県営首里城公園では1989（平成元）年度から首里城サービスエリア

地区の発掘調査が実施され、その成果を受けて、1991（平成３）年度から首里杜館地区の整備が行われた。現在までに、龍潭地区やハンタン山地区・上の毛地区・管理用道路地区・継世門周辺・綾門大道地区・守礼門地区等の発掘調査を実施し、その後整備が行われている。

中城御殿の過去の発掘調査については1992（平成４）年11月３日に国営首里城公園の開園に伴って、1992（平成４）年度から1994（平成６）年度まで３次に渡って南側や東側と西側の一部の石牆並びに石垣の整備に伴う発掘調査が当時の沖縄県立博物館（現在、沖縄県立博物館・美術館）によって行われている。同地には、1966（昭和41）年11月３日から2007（平成19）年３月31日までの約42年間、本土復帰以前の琉球政府が建設した沖縄県立博物館があったが、同は2006（平成18）年３月31日に那覇市おもろまちへ移転の準備のために休館し、2007（平成19）年３月31日に閉館、４月１日に移転、11月３日に沖縄県立博物館・美術館として開館しました。

今回の発掘調査は県営首里城公園地区において、首里城周辺並びに綾門大道地区、守礼門周辺等の発掘調査や公園整備が既に完了し、公園計画で未整備であった中城御殿の今後の整備・活用を図るための基礎資料（遺構確認）を得る目的で行われた。更に、建物群があった箇所における発掘調査は今回が始めてということもあり、戦後の造成土の堆積状況並びに、遺構の残存状況を確認することも重要視している。発掘調査は公園整備を目的とし、沖縄県土木建築部（所管課：都市計画・モノレール課）から分任予算を受けて、沖縄県教育委員会（所管課：文化課、事業実施：沖縄県立埋蔵文化財センター）が埋蔵文化財の発掘調査を実施した。

【参考文献】

『首里城公園基本計画調査報告書』 1984（昭和59）年９月　首里城公園基本計画調査委員会

『首里城公園基本設計』 1988（昭和63）年３月　沖縄県土木建築部

旧中城御殿『―石牆工事地域にかかる第一次発掘調査―』 1993年３月　沖縄県立博物館

旧中城御殿『―石牆工事地域にかかる第二次発掘調査―』 1994年３月　沖縄県立博物館

旧中城御殿『―石牆工事地域にかかる第三次発掘調査―』 1995年３月　沖縄県立博物館

第２節　調査体制

平成19・20年度に発掘調査を実施し、資料整理及び調査報告書刊行は平成21年度に沖縄県立埋蔵文化財センターが以下の体制で行った。

○平成19年度　発掘調査

事　業　主　体　　沖縄県教育委員会

教　　育　　長　仲村守和

教育管理統括管　杉浦友平（予算担当）

教育指導統括官　金武正八郎（事業担当）

事業所管課　沖縄県教育庁文化課

課　　長　千木良芳範

副 参 事　比嘉敏子（予算担当）

文化班　班長：識名 敦（予算担当）、主任：仲間ひろみ、
主事：勅使河原 朋江、主事：登川明香

記念物班　班長：島袋 洋（事業担当）、専門員：新垣 力、専門員：瀬戸哲也

事業総括・事務　沖縄県立埋蔵文化財センター

所　　長　名嘉政修

副所長兼庶務課長　瑞慶覧 康博

庶務課　主査：山田 恵美子、主査：玉寄 秀人、主事：村吉 由美子

調査課　課長：岸本 義彦、主任専門員：金城 亀信、主任：上地 博

文化財調査嘱託員　伊藝 由希、天願 瑞笑

発掘調査作業員　翁長 博明、嘉味田 千枝子、米須 清太、桃原 佐恵美、久田 慎子、
平安名 哲子、仲宗根 孝、仲程 亜紀

○平成20年度　発掘調査

事業主体　沖縄県教育委員会

教　育　長　仲村守和

教育管理統括管　岩井健一（予算担当）

教育指導統括官　金武正八郎（事業担当）

事業所管課　沖縄県教育庁文化課

課　　長　千木良芳範

文化班　班長：識名 敦、主任：篠田　卓也、
主事：大城 朋江、主事：上原 明香

記念物班　班長：島袋 洋、主任：瀬戸哲也

事業総括・事務　沖縄県立埋蔵文化財センター

所　　長　名嘉政修

総務班　班長：嘉手苅 勤、主査：山田 恵美子、主査：知念 百合子、
主事：村吉 由美子、主事：弓削 典子（臨時的任用職員）

調査班　班長：岸本 義彦、主幹：金城 亀信、主任：上地 博

文化財調査嘱託員　天願 瑞笑、本村 麻里衣

発掘調査作業員　嘉味田 千枝子、喜瀬 彰、呉我 フジ子、佐渡山 正子、砂辺 理恵、
玉城 初美、中塚 末子、中村 フサ子、平安名 哲子、宮國 恵子

調査協力機関　沖縄県土木建築部都市計画・モノレール課

公園緑地班　班長：嶺井 秋夫、主任技師：永田 貴之、
主任：赤嶺 涼一、主任：呉屋 圭俊

○平成21年度　資料整理・報告書刊行

事　業　主　体　沖縄県教育委員会

教　　育　　長　金武 正八郎

教育管理統括管　岩 井 健 一（予算担当）

教育指導統括官　大 城　浩　（事業担当）

事 業 所 管 課　沖縄県教育庁文化課

課　　長　大 城　慧

文 化 班　班長兼副参事：仲本 興彦、 主任：篠田 卓也、 主事：大城 朋江、
主事：上原 明香、 主事：赤嶺 大介（臨時的任用職員）

記念物班　班長：島袋 洋、 主任：瀬戸 哲也

事業総括・事務　沖縄県立埋蔵文化財センター

所　　長　玉 栄　直

総 務 班　班長：嘉手苅 勤、 主査：本永 恵、 主査：知念 百合子、
主任：村吉 由美子、 主事：中村 久仁子（臨時的任用職員）

調 査 班　班長：金城 亀信、 主任：上地 博

文化財調査嘱託員　天願 瑞笑

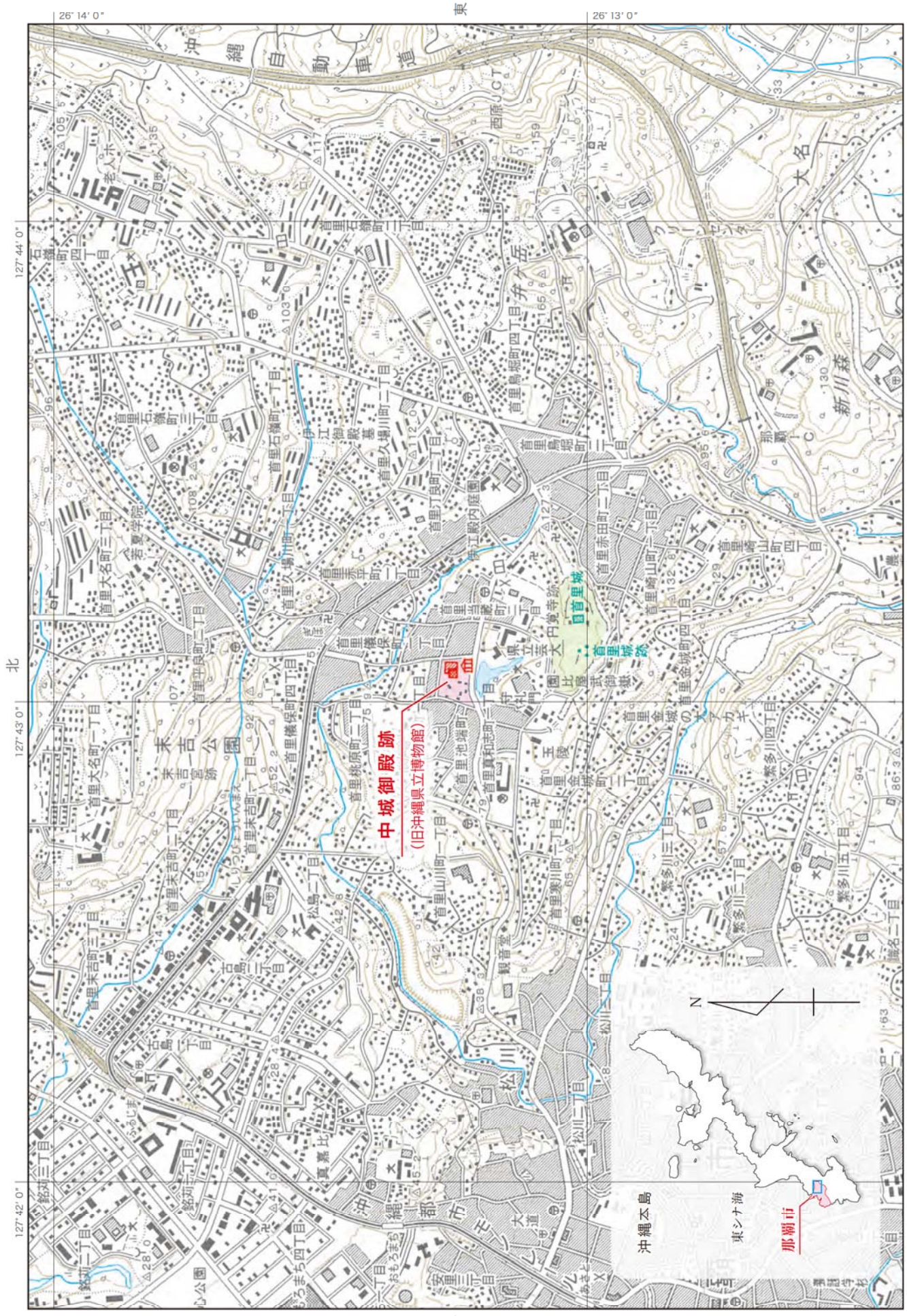
埋蔵文化財資料整理嘱託員　伊藝 由希、 上原 園子、 我那覇 悠子、 金城 政史、
城間 千鶴子、 仲宗根 三枝子、 久田 慎子、 外間 瞳

資料整理作業員　宮國 さおり、 津多 恵

調査協力機関　沖縄県土木建築部都市計画・モノレール課

公園緑地班　班長：嶺井 秋夫、 主任技師：永田 貴之、
主任：赤嶺 涼一、 主任：呉屋 圭俊

第１図　沖縄本島の位置図



第２図　中城御殿および首里城位置図

第２章　位置と環境

第１節　地理的位置

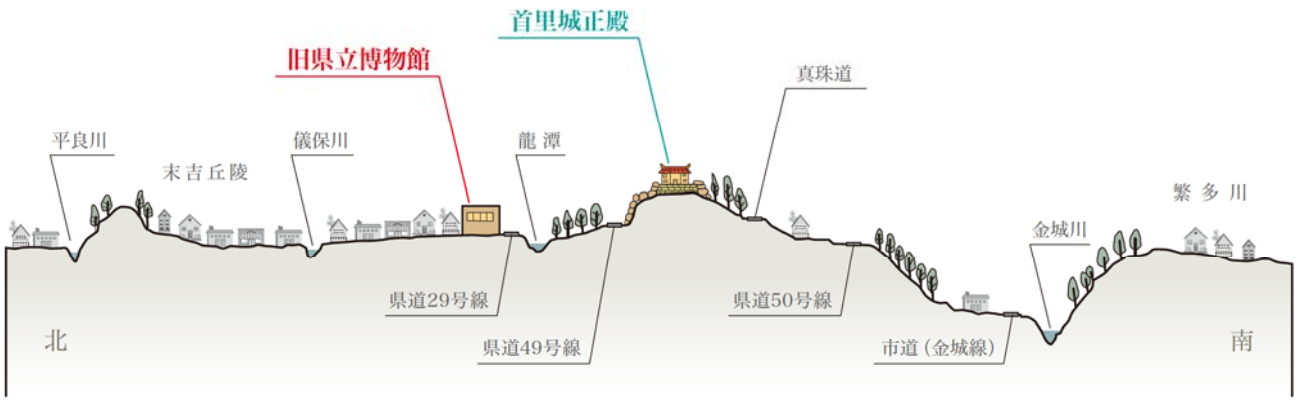
中城御殿が所在する那覇市は沖縄本島南部の北緯26°14′44″、東経127°40′44″にあって、沖縄県庁が所在し、政治や経済、文化等の中心地である。那覇市の人口は312,393人（平成17年10月1日現在）、面積は、39.23km²（豊見城市と按分した推計面積。平成19年10月現在）である。市域は、東西約10.0km、南北約8.0kmの長方形状を呈する。市の東側は南風原町並びに西原町、同北側は浦添市、同南側は豊見城市の２市２町と市区町村界に接し、同西側は東シナ海に面している（第２図）。

琉球王府時代の王都首里は那覇市北東部に位置し、標高約70～135mの琉球石灰岩丘陵地に立地する地形上に形成された城下町である。城下町の四方は石灰岩の丘陵や山と谷によって遮られており、北側には虎頭山、東側には弁ヶ嶽等の丘陵及び、ナゲーラ川、西側には真嘉比川が延び、南側は安里川の浸食により形成された凹地及び、金城川があることから、自然の要塞を巧に利用し、都城の立地に相応しい地形を呈している。

首里周辺の地質は第三紀鮮新世の島尻層群の泥岩・砂岩を基盤とし、第四紀更新世の琉球石灰岩が上層に分布する。透水層の琉球石灰岩と不透水層の島尻層群泥岩との境界で水分が湧水として現れている。首里城を中心に多くの湧水や樋川、井戸等の水源地が多い。現在、中城御殿において確認されているもので、水脈まで掘り水を溜めたカーの掘り抜き井戸と、井戸に水が多く溜まるように彎曲状に広めている掘り抜き井戸（ワンドゥーガー）がある。最初の発掘調査でコンクリート製の円筒形状の井戸が確認されています。

古都首里の南縁にあたる一段と高くなった箇所に嘗ての王宮首里城が営まれていた。王世子（王子・世子）の御殿にあたる中城御殿は首里城の北側に位置し、御殿の南側正面から龍潭を介して首里城の城郭並びに、復元された首里城正殿等を仰ぎ見ることができる位置にある。中城御殿が所在する首里大中町は、標高約90～100ｍの琉球石灰岩台地上に立地している。

中城御殿は、沖縄県那覇市首里大中町１丁目１番地他（旧沖縄県立博物館）に所在する近世から近現代の遺跡である。中城御殿は世界遺産・国指定史跡「首里城跡」の北側に位置し、南側に県道29号線並びに、県指定史跡「龍潭及びその周辺」が所在する。また、首里城久慶門を起点に国頭や中頭の西海岸方面へ至る琉球王府時代（1429～1879年）に整備された道、いわゆる国・中頭方西海道が中城御殿の東側を



第３図　首里の南北縦断図

通る。主なルートとして、首里城久慶門から守礼門方面へ向い、世界遺産・重要文化財「園比屋武御嶽石門」の手前から下り、国指定史跡「円覚寺跡」の指定地内にある円鑑池と龍潭の間の水路にかけられたアーチ状の橋、いわゆる龍淵橋を渡り、県指定史跡「国学・首里聖廟石垣」の石垣前面の広場は松崎馬場と呼ばれ、冊封使をもてなした「重陽の宴」が行われた場所であり、そこを出ると県道29号線へ至る。県道を横断すると、旧沖縄県立博物館並びに、中城御殿の東側の道へ出る。更に、進むと安谷川坂のなだらかな道を下ると、県道28号線へ合流し、右折をすると、儀保交差点へ至る。儀保交差点を北上すると、太平橋（平良橋）を渡り、左折をすると、首里平良町や大名町、更に、浦添市経塚や安波茶、仲間を経由して本島西海岸を北上する道です。なお、恩納村にある国頭方西海道は平成16年９月30日付けで国指定史跡に、浦添市にある中頭方西海道は平成17年10月７日付けで市指定史跡に指定されています。

なお、那覇市首里大中町や当蔵町、赤平町一帯には琉球王府時代の按司や御殿等の摂政並びに、三司官等の高級役人の屋敷があった地域である。特に、大中町には向象賢、羽地王子朝秀（羽地御殿六世）の生家があり、中城御殿の北側に位置する。当蔵町には、以前大中町に屋敷があった大村御殿跡や伊江御殿跡（元沖縄開発庁長官伊江朝雄）等の屋敷があった。赤平町には摂政を勤めた読谷山御殿跡や義村御殿跡等の屋敷が存在し、御殿以外にも赤平町には三司官蔡温具志頭親方文若の屋敷があった。

また、中城御殿が所在する地域には国や県、市指定の有形文化財（建造物）や史跡・名勝等の文化財が多く存在します。戦前には、古社寺保存法並びに、国宝保存法（註）で指定を受けた国宝等の文化財もありましたが、これらの文化財は去る沖縄戦で焼失しました。それに伴って、戦後、1945（昭和20）年５月15日に国宝指定の解除を受けました。

註）古社寺保存法（1897（明治30）年６月10日法律第49号）は日本の文化財保護に関する、廃止された法律。
古器旧物保存法方（1871（明治4）年5月23日太政官布告）を引き継いで制定され、1929（昭和4）年7月1日、
旧国宝保存法施行に伴い廃止された。

【参考文献】

那覇市勢要覧2009（PDFファイル）

『資料 旧国宝建造物指定説明』 昭和57年12月　財団法人 文化財建造物保存技術協会

『文化財行政要覧 ～平成17年度～』 平成17年９月　沖縄県教育庁文化課

『文化財行政要覧 ～平成18年度～』 平成18年11月　沖縄県教育庁文化課

『沖縄県歴史の道調査報告書 ―国頭・中頭方西海道（Ⅰ）・弁ヶ嶽参詣道―』 1985年３月　沖縄県教育委員会

『那覇市歴史地図 ―文化遺産悉皆調査報告書―』 1986（昭和61）年３月　那覇市教育委員会

旧中城御殿『―石牆工事地域にかかる第一次発掘調査―』 1993年３月　沖縄県立博物館

第２節　歴史的環境

中城御殿とは、次の国王となる王世子（王子・世子）が住む邸宅のことをいいます。なお、名称については王子が中城間切（現在の中城村と北中城村、うるま市（津堅島））を領有していたことに因んでいます。宏大な邸宅の周囲は、石灰岩の石垣を廻らせ、建造物は中国や日本の影響を受けながらも純朴でありながら趣味の豊富な点において琉球建築の特徴を遺憾なく発揮され創建されました。

当初、中城御殿は第２尚氏王統第８代尚豊王（1621 ～ 1640）の時代に次男尚文（佐敷王子朝益）のために綾門大道に面する沖縄県立首里高等学校敷地（首里真和志町１丁目 43 番地）の西部に創建されました（第４図）。「首里古地図」（18 世紀初）には中城御殿の北側に金武御殿（尚豊王の生家。後に首里山川町へ移転）、東側に大美御殿（首里城御内原付属の別邸）、北東側に美里御殿（大宜見御殿：向氏一世 美里王子朝禎 尚貞王四男尚紀）の屋敷等が所在します。

その後、中城御殿は 1857（尚泰 10）年に当蔵町へ移転し、その後、明治に入り首里大中町に移転することになり、1870（明治３、尚泰 23）年着工し、1873（明治６、尚泰 26）年 11 月竣工し、1875（明治８、尚泰 28）年３月５日に世子（尚典）が入居しました。

中城御殿が新しく造営される以前は、「首里古地図」（第４図）によると北谷御殿（大村御殿：向氏一世　北谷王子朝愛　尚質王四男尚弘才）の屋敷があった。それ以外に本部按司（向氏一世　本部王子朝平　尚質王六男尚弘信）、福地親雲上、侍易として記載されている。また、中城御殿の周辺には、名護按司（向氏一世　名護王子朝元 尚質王三男尚弘仁）や伊江按司（向氏一世 伊江王子朝義 尚清王七男尚宗賢）、羽地按司（向氏一世 羽地王子朝元　小禄御殿三世三男尚弘徳）、豊見城按司（向氏一世　豊見城王子朝良　尚貞王次男尚經）等の按司の屋敷があります。

1879（明治12、尚泰32）年の琉球処分（註１）による、首里城明け渡しで中城御殿に国王以下たくさんの人達が移り住みます。後に、琉球王国最後の国王である尚泰は華族令により、華族に列せられ、1885（明治18）年に世子尚典とともに東京に移り住みます。同年５月２日侯爵となり、以後22代尚裕まで代々侯爵を襲爵した。

その後、中城御殿は「尚侯爵家首里邸」として尚家にゆかりの人達が常住ようになります。明治末期には首里城附属の大美御殿や聞得大君御殿からも移り住んだ、と云われています。建物等は1945（昭和20）年３月まで完全に保存されていましたが、同年４月に沖縄戦で砲撃を受け、多くの宝物と共に炎上しました。

戦後になって、その跡地には一時期県外からの引揚者のバラックが建ちます。その後、首里市役所（1954年に那覇市と首里市・小禄村、1957年に真和志市も合併し、那覇市となる。首里当蔵町１丁目へ移転し、那覇市首里支所となる。）と、㈱首里バス（現在の㈱第一交通）の事務所とバスターミナルがありました。後に、琉球政府は尚家から全敷地の買い上げが行われます。当時、龍潭の東側にあった博物館を首里大中町に移すこととなり（註２）、1965（昭和40）年６月12日に起工式が行われ、1966（昭和41）年10月６日に落成、同年11月３日に琉球政府立博物館（復帰後、沖縄県立博物館）が開館した。2007（平成19）年３月31日におもろ町への移転（現沖縄県立博物館・美術館）により、首里大中町に所在した沖縄県立博物館は閉館した。

現在、首里城跡やその周辺は国営首里城公園並びに、県営首里城公園として復元整備が実施されている。特に、県営首里城公園については守礼門と綾門大道の一部並びに、松崎馬場、中城御殿を残し、それ以外は既に復元整備が行われ、往時の景観を取り戻しつつある。

なお、1992（平成４）年～1994（平成６）年に刊行した第1～3次調査の「第Ⅱ章　遺跡の立地と概要　第２節遺跡の概要」において、戦前の中城御殿の状況を知る記述があり、一部を抜粋する。

『旧中城御殿概略図は、1940年から1945年の間中城御殿に出入りして中城御殿を実見し、そこで生活する古老たちと親しく接することのできた真栄平房敬氏からの聞き取りで作図したものである（第５図）。概略図を参考に御殿の内容を記すと次のとおりとなる。

敷地は約3000坪余、建物は米蔵や炭蔵などの別棟を除いて約800坪余である。御殿の主要な建物は二十数棟が連結して群立し、すべて赤瓦葺きであった。主殿は表御殿と奥御殿（御内原）に分かれ、表は男性だけ、奥は女性だけでその接点には（鈴引き）で取次ぎがなされた。表御殿は玄関を入ると御番所があり、その東側に

御伺候間、大広間、御書院が並び内部は書院造りであった。さらに政庁の役割をもつ前之御座と取納座殿、御蔵などが西側に連結していた。

御殿に勤める役人は、三司官の一人が中城御殿紫官大親を兼ね、その下に大親以下46人が任じられ、さらに下代、門番などがいた。

奥御殿には、屋敷内で一番大きい建物である寝廟殿を中心にして寝殿造りを思わせるコの字型に主要な建物を配し、その回りにいくつかの建物を連結させてひとまとまりになっていた。これらの御殿の内部構造は平安・鎌倉時代の御所造りに似ていたという。

女官から下女にいたるまで数十人の婦女子が仕えていたが、明治以降は大幅な人員削減が行われ、1941年（昭和16）には男女あわせて80人余が仕えていたという。1879年（明治12）の「首里城明け渡し」の時には、国王はこの世子殿に移り、その後大美御殿や聞得大君御殿からも移り住んでいたという。・・・云々・・・』と記載がある。これから敷地面積や建物の配置、屋瓦の色、居住空間、中城御殿に勤める役人等とあり、当時の歴史的背景について窺い知ることができる。

註1）明治政府は、1871（明治4）年8月29日に全国で廃藩置県を実施（この時、琉球国を国家としてではなく令制国として扱い、鹿児島県へ編入）した。1872（明治5、尚泰24）年に琉球王国を強制廃止して琉球藩を設置した。
1879（明治12、尚泰32）年に軍隊と警官を派遣して琉球藩の廃止（廃藩置県）を宣言し、同年中に沖縄県を設置した。
琉球藩設置から廃藩置県までの一連の流れを琉球処分と呼び、琉球藩設置を第一次琉球処分、廃藩置県を第二次琉球処分ということもある。

註2）沖縄戦直後の1945（昭和20）年8月、石川市（現在のうるま市）東恩納に開館した「沖縄陳列館」が前身である。
翌1946（昭和21）年4月に沖縄民政府に移管し、「東恩納博物館」となる。首里市汀良（現在の那覇市汀良町）でも、同年5月に市立の「郷土博物館」が設置された。1947（昭和22）年12月に沖縄民政府に移管し、「沖縄民政府立首里博物館」となる。その後、1953（昭和28）年に首里博物館が東恩納博物館を移転合併し、1955（昭和30）年に「沖縄民政府立首里博物館」から「琉球政府立博物館」と改称した。

【参考文献】

おきなわ文庫『首里城入門 その建築と歴史』 ひるぎ社　1997年７月

『沖縄県立博物館50年史』 1996年12月　沖縄県立博物館

琉球国絵図史料集 第三集『―天保国絵図・首里古地図及び関連史料―』 1994年３月　沖縄県教育委員会

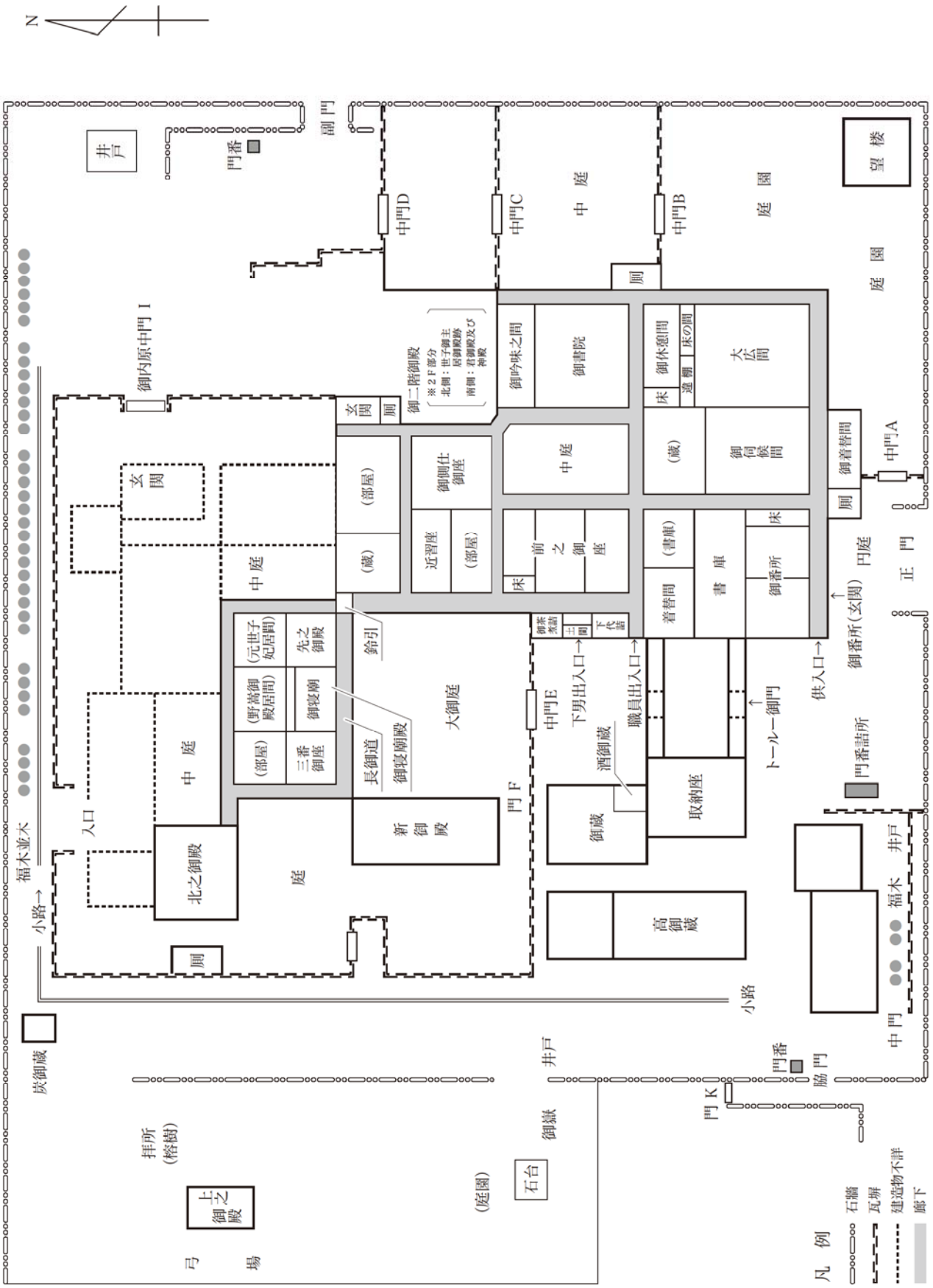
『那覇市歴史地図 ―文化遺産悉皆調査報告書―』1986（昭和61）年３月　那覇市教育委員会

旧中城御殿『―石牆工事地域にかかる第一次発掘調査―』 1993年３月　沖縄県立博物館

旧中城御殿『―石牆工事地域にかかる第二次発掘調査―』 1994年３月　沖縄県立博物館

旧中城御殿『―石牆工事地域にかかる第三次発掘調査―』 1995年３月　沖縄県立博物館

第４図　首里古地図における中城御殿位置図



第５図　旧中城御殿概略図「旧中城御殿関係資料集」

第３章　調査経過

第１節　調査経過

県営首里城公園（中城御殿地区）の遺構の確認に伴う発掘調査は2007（平成19）年11月1日から開始し、12月28日までの40日間で実施した。総面積は約118.0㎡である（A地点：約79.0㎡、B地点：約39.0㎡）。

今回、発掘調査の対象となったのは中城御殿の南東部分で、御書院・大広間・前之御座にかかる箇所である（第７図）。同箇所は、平成19年３月に閉館した旧沖縄県立博物館の前庭としても来館者の目を楽しませていた場所でもあった。しかし、閉館後は手入れがされておらず雑草等が繁茂した状態だったため、作業は始めに下草や調査の障害物となるものの除去から行い、平行してトレンチの設定を行った（B地点）。トレンチによる調査を進めていくうちに撹乱が広範囲に亘ることが予測されたため、北側にも新たな調査区（トレンチ）を設定し（A地点）、更に調査を進めることとした。調査はバックホウ（04型）を使用して表土剥ぎを行った後に、随時手掘りによって行った。

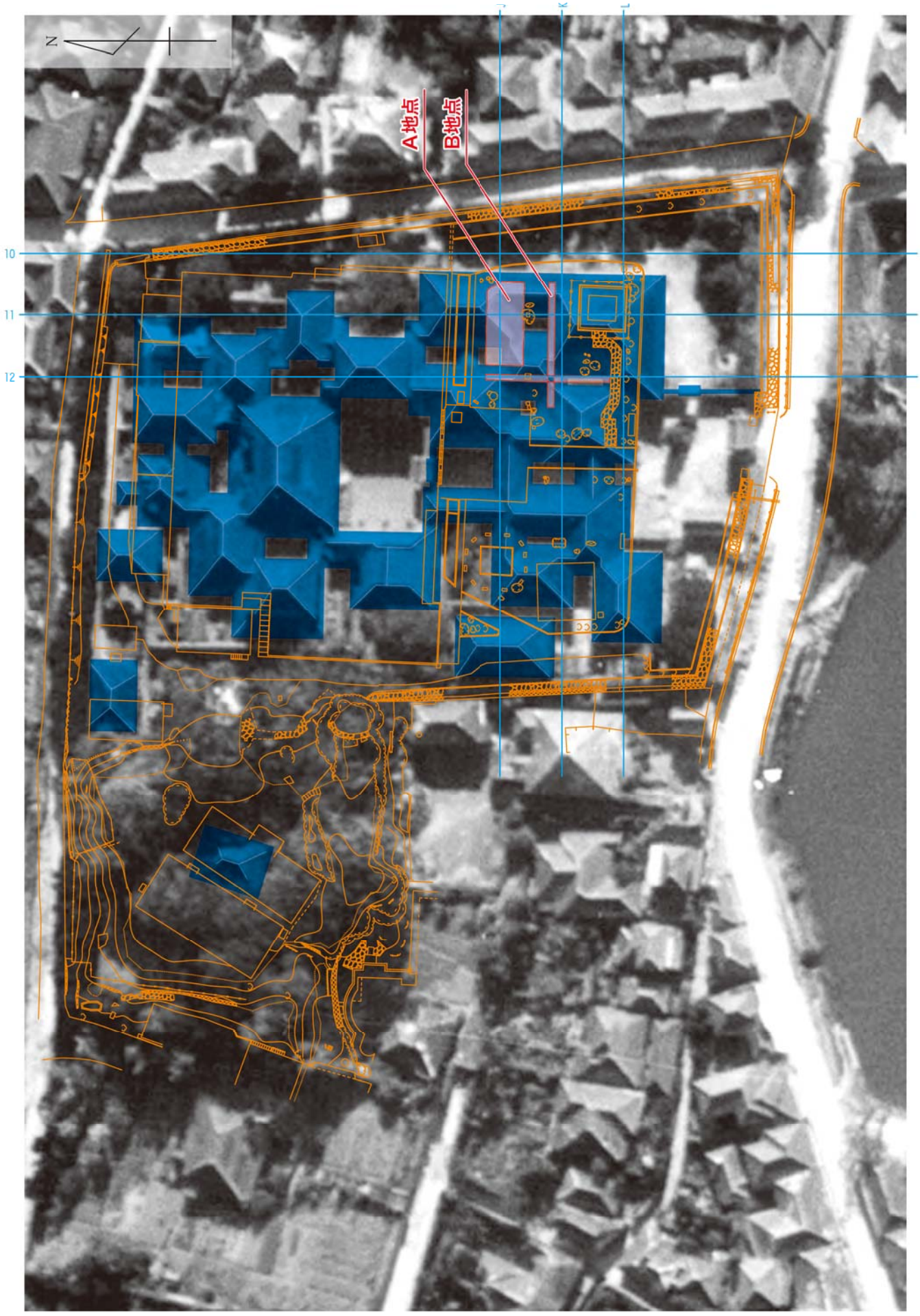
全体で８枚の層と２時期に渡ると思われる遺構面が確認されたが、B地点の南北トレンチの南側では砲弾片、そして調査区全体では明朝系瓦や陶磁器、円盤状製品等の人工遺物に混じってガラスや鉄屑（車の部品）等の現代遺物もみられることから、戦争や幾度もの建て替えによる影響で広範囲に撹乱されている様子が明らかになった。

当該年度は、遺構の残存状況や戦前戦後の造成等による地層の堆積状況を確認するために調査を実施した。A地点では石敷、側溝、石列遺構等が確認され、B地点では建物跡の床面と思われるものが確認された。今回はA地点とB地点の「十」字状トレンチの壁面図の作成と写真撮影を実施したが、A地点の平面図は次年度以降も引き続き調査を実施する予定であることから、平面図の作成は次年度に実施することにした。A地点の平面図は2008（平成20）年度の発掘調査が開始された時点で実測図の作成を実施した。

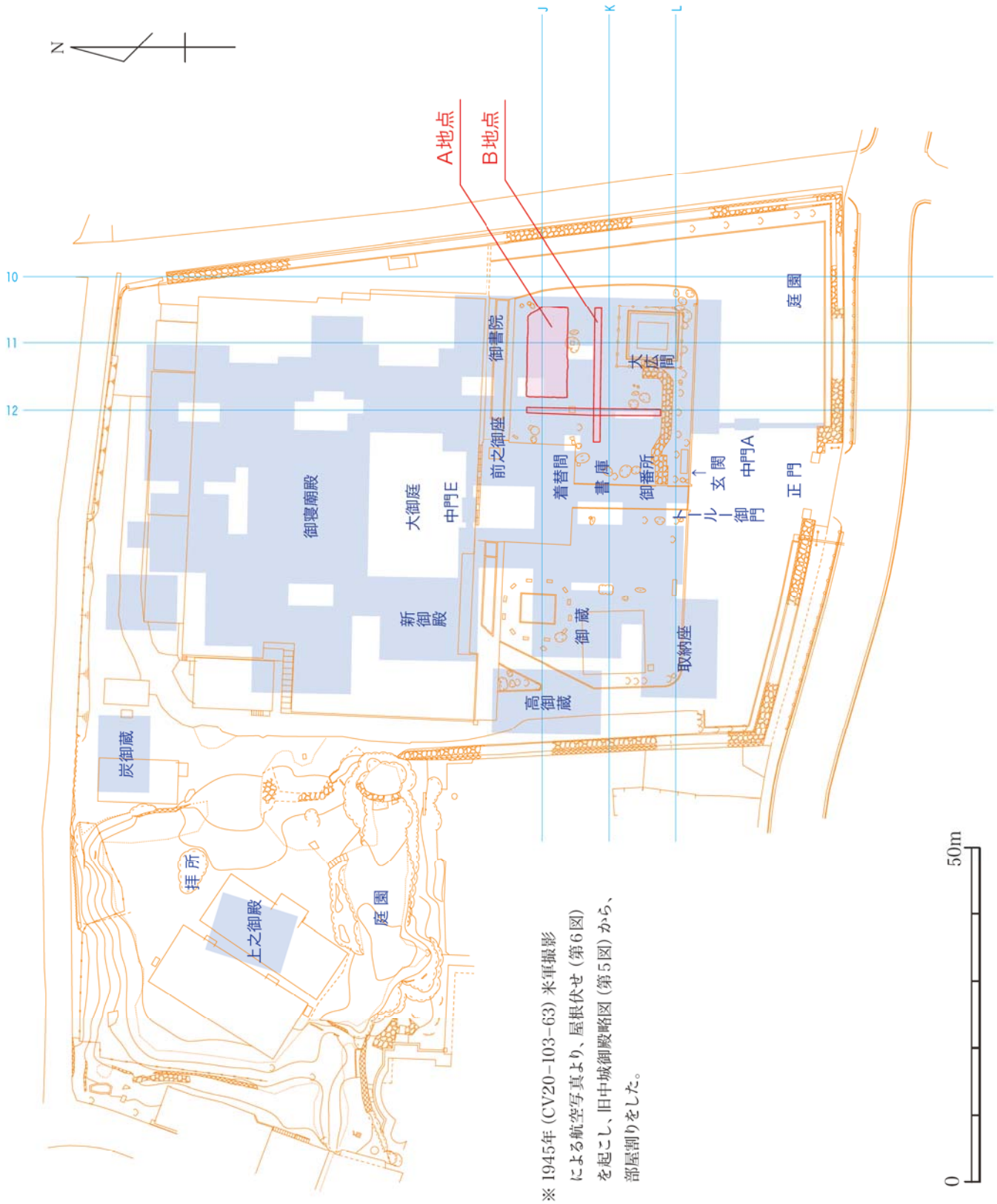
A地点については次年度も引き続き調査を行うことになっているため、遺構の保護のためにA・B地点にブルーシートを全体に覆った後に埋め戻しを行い、今年度は調査を終了とした。

なお、調査期間中、雨天時には現場事務所内において出土遺物の洗浄並びに、整理等の室内作業を行った。また、今回の調査の期間は２ヶ月間ということから、旧沖縄県立博物館を所管する県文化課と調整を行い、旧館の解体撤去工事が次年度以降に行われることから、応急的に電気と水道を繋ぎ、旧館を現場事務所とした。

発掘調査で得られた遺物や図面、写真等は調査終了後に沖縄県立埋蔵文化財センターへ持ち帰り、一部については平成20年度から遺物の洗浄等の資料整理を実施した。今年度から本格的に資料整理を実施し、注記（ナンバーリング）、分類、集計、実測、原稿出筆等を行った。報告書の編集については、写真撮影、トレース、表、原稿をデジタル化（DTP処理）し、印刷入稿は、版下データにより、報告書を刊行した。なお、報告書印刷で使用した版下データはPDF化し、保管している。遺物や図面、写真等はすべて沖縄県立埋蔵文化財センターの収蔵庫並びに、記録保存室に保管し、閲覧や貸出等の活用が図れるようにした。



第６図　中城御殿屋根伏せ　旧博物館跡およびH19年度発掘箇所



※ 1945年（CV20−103−63）米軍撮影による航空写真より、屋根伏せ（第6図）を起こし、旧中城御殿略図（第5図）から、部屋割りをした。

第７図　中城御殿屋根伏せ図およびH19年度発掘箇所

第２節　調査区の設定

今回の発掘調査は2007（平成19）年３月31日に沖縄県立博物館が那覇市おもろまちの新館へ移転したが、建物等はそのままの状態で撤去が行われておらず、限られた条件で調査区を設定することとなった。調査の範囲は旧沖縄県立博物館の前庭であることから樹木や花壇、庭石等の障害物が多く、それらにトレンチがかからないよう注意を図らなければならなかった。特に、樹木等は沖縄県教育庁文化課の公有財産であるため、直ぐには伐開等ができなかった。

そのため、樹木を避ける形になるよう配慮し、南北に約20.0m、東西に約20.0m、幅約1.0mの「十」字状のトレンチを設定し、その地区を仮にＢ地点と称した（調査面積：約39.0m²）。東西南北のトレンチが交差する箇所（1.0m×1.0m）については層序を観察するための畦として残したが、壁面図作成後、取り壊しは行わず、そのままにした。なお、B地点は方角（東西南北）で区分けを行った。更に、B地点の北東にあたる部分に、南北に約6.0m、東西に約13.5mの任意に長方形状の調査区を設け、その地区を仮にＡ地点と称した（調査面積：約79.0m²）。

中城御殿の敷地内には地番が三筆あり、敷地面積が約11,267.00m²で、全て県有地（教育庁文化課が所管）である。県営首里城公園復元整備にかかる発掘調査の対象面積が広域であり、将来、継続的に発掘調査を実施していくのであれ、キチンとした調査区を設定する必要があるので、10×10m四方のグリッドを設定することにした。

調査区の設定に際して、平成18年度に沖縄県土木建築部都市計画・モノレール課が測量業者へ委託を行った際の４級基準点21-4（X＝24,435.973、Y＝21,719.010）と21-5（X＝24,424.239、Y＝21,763.968）が県道29号線の北側にある歩道に設置されており、それを基準として調査区内にＬ－14（X＝24,450.000、Y＝21,750.000）を新設した。それを基準にして、方位に併せて、10m×10m四方のグリッドを設定した。グリッドナンバーは東西ラインに算用数字（・・・7～24・・・）、南北ラインにアルファベット（・・・C～O・・・）で表し、南西側の杭を示準として呼称した。標記方法はＪ－10、Ｋ－10等とした（第９図）。

第３節　調査日誌抄

第１次調査　2007（平成19）年　11月１日（木）～12月28日（金）

11月　１日（木）　調査開始。発掘調査作業員の辞令交付。調査道具の移動。現場事務所（旧沖縄県立博物館）の清掃。雨天の為、遺物の洗浄等を行う。

５日（月）　発掘調査周辺の草刈り作業等。十字のトレンチを設定し（東西：幅１m×20m、南北：幅１m×20m）、B地点、東、西、南、北とする。

６日（火）　B地点西を除き、20cm掘り下げを行う。

７日（水）　B地点西を除き、それぞれ掘り下げを行う。
16時より雨天のため遺物の洗浄等を行う。

８日（木）　B地点西を除き、それぞれ拡張し、掘り下げを行う。

９日（金）　B地点南が雨の影響で調査を行えず、新たにB地点西の掘り下げを行う。

12日（月）　B地点、東西南北をそれぞれ拡張し、掘り下げを行う。

13日（火）　B地点東を除き、それぞれ掘り下げを行う。
B地点北東部分に新たな調査区を設定。

14日（水）　B地点北を除き、それぞれ掘り下げを行う。

15日（木）　午前中、現場監督が不在のため、遺物の洗浄等を行う。
午後、B地点北を除き、それぞれ掘り下げを行う。

16日（金）　B地点東・南の掘り下げを行う。

19日（月）　現場監督が体調不良のため、遺物の洗浄等を行う。

20日（火）　雨天のため、遺物の洗浄を行う。

21日（水）　現場監督が不在なため、草刈り作業を行う。

22日（木）　B地点東・南の掘り下げを行う。道具の洗浄を行う。周辺の清掃を行う。

26日(月)～29日(木)　雨天のため、遺物の洗浄等を行う。

30日（金）　B地点東・南をそれぞれ拡張し、掘り下げを行う。調査地点全体の測量を行う。

12月 3日（月）　B地点東・南の掘り下げを行う。調査地点全体の測量を行う。
重機（04）でB地点、北のコンクリートを剥ぎ取る。

4日（火）　B地点東・南の写真撮影のための清掃を行う。
新たに調査区を設定した箇所を重機（04）で一気に掘り下げを行った。

5日（水）　B地点東の写真撮影終了。B地点南の写真撮影のための清掃終了後、
写真撮影を行う。新たな調査区を掘削した後に北側の壁面の清掃を行う。

6日（木）　新たな調査区をA地点と仮称し、A地点の掘削後に壁面の清掃及び、平面の清掃を行う。

7日（金）　A地点の遺構面の検出作業を行う。

10日（月）　A地点の遺構面の検出作業を行う。B地点の壁面図作成のため
レベルの設定を行う。B地点西の壁面（東西南北の4面）の写真撮影を行う。

11日（火）　A地点の遺構面の検出作業を行う。
B地点東・西の壁面図作成。B地点南の北壁の写真撮影を行う。

12日（水）　A地点の遺構面の検出作業を行う。
B地点東の北壁の壁面図の作成終了。B地点南の写真撮影終了。

13日（木）　午前中、雨天のため、遺物の洗浄等を行う。A地点の遺構面の検出作業を行う。

14日（金）　午前中、A地点の遺構面の検出作業を行う。午後は現場監督が不在なため、
遺物の洗浄等を行う。調査地点の安全対策として、トラロープで周囲を囲んだ。

17日（月）　A地点の遺構面の検出作業を行う。B地点北の瓦層下層の検出。

18日（火）　A地点の遺構面の検出作業を行う。B地点北の壁面及び、現況写真（完掘）の撮影、
A地点の壁面写真撮影の終了。北側トレンチとA地点の壁面図の作成。

19日（水）　雨天のため、遺物の洗浄等を行う。

20日（木）　遺物の洗浄等と図面作成に分担し、作業を行う。A地点と、B地点南・北の壁面図作成を行う。

21日（金）　遺物の洗浄等と図面作成に分担し、作業を行う。A地点と、
B地点南・北の壁面図作成を行う。B地点南の壁面図の作成終了。

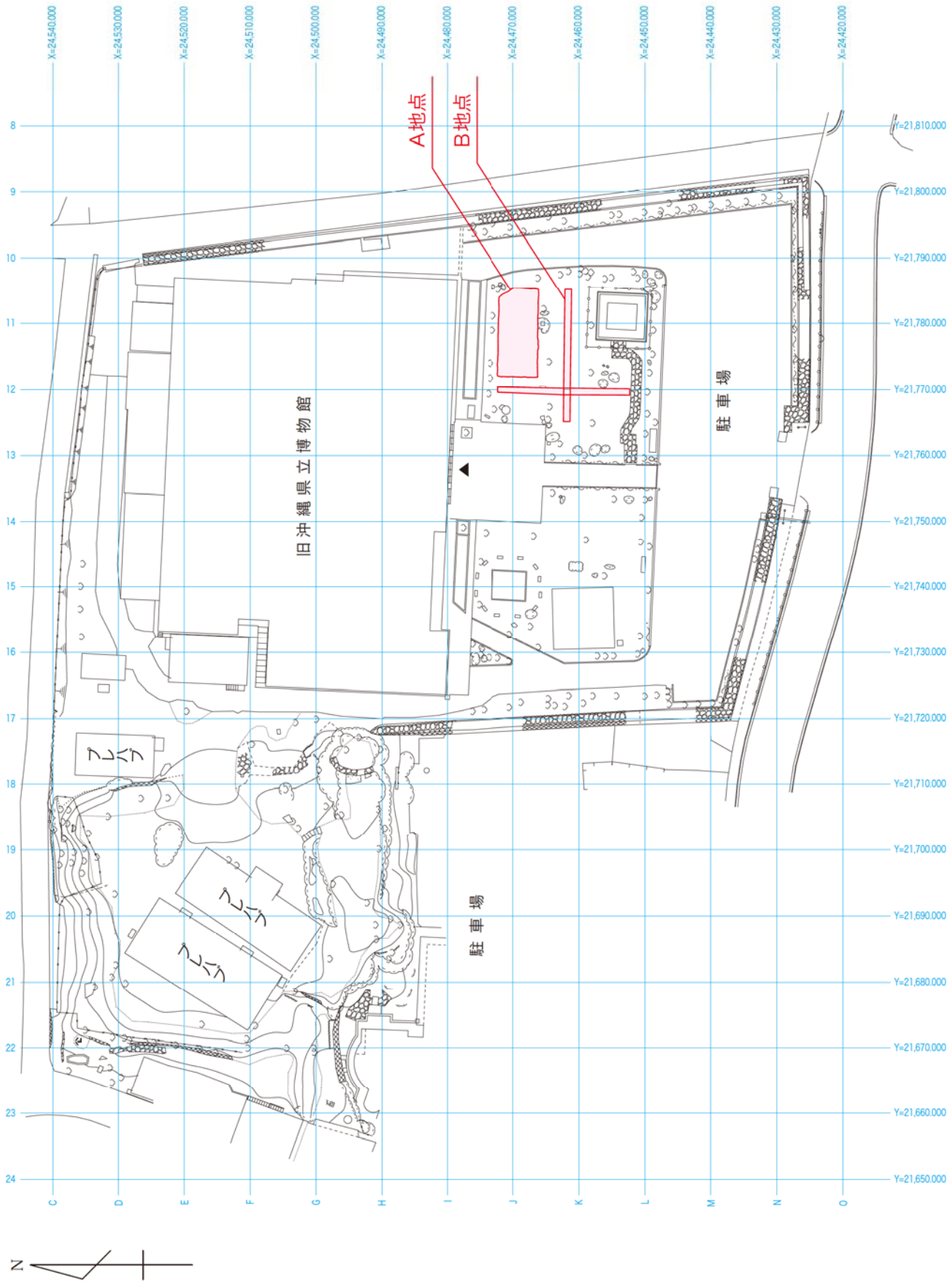
25日（火）　午前中、水抜き作業。午後、遺物の洗浄等と図面作成に分担し、作業を行う。
A地点とB地点北の壁面図作成を行う。

26日（水）　A地点とB地点北の壁面図の作成終了。A地点の清掃及び、終了後写真撮影を行う。

27日（木）　A地点の写真撮影を行う。調査地点の埋め戻し。現場事務所の片付け。

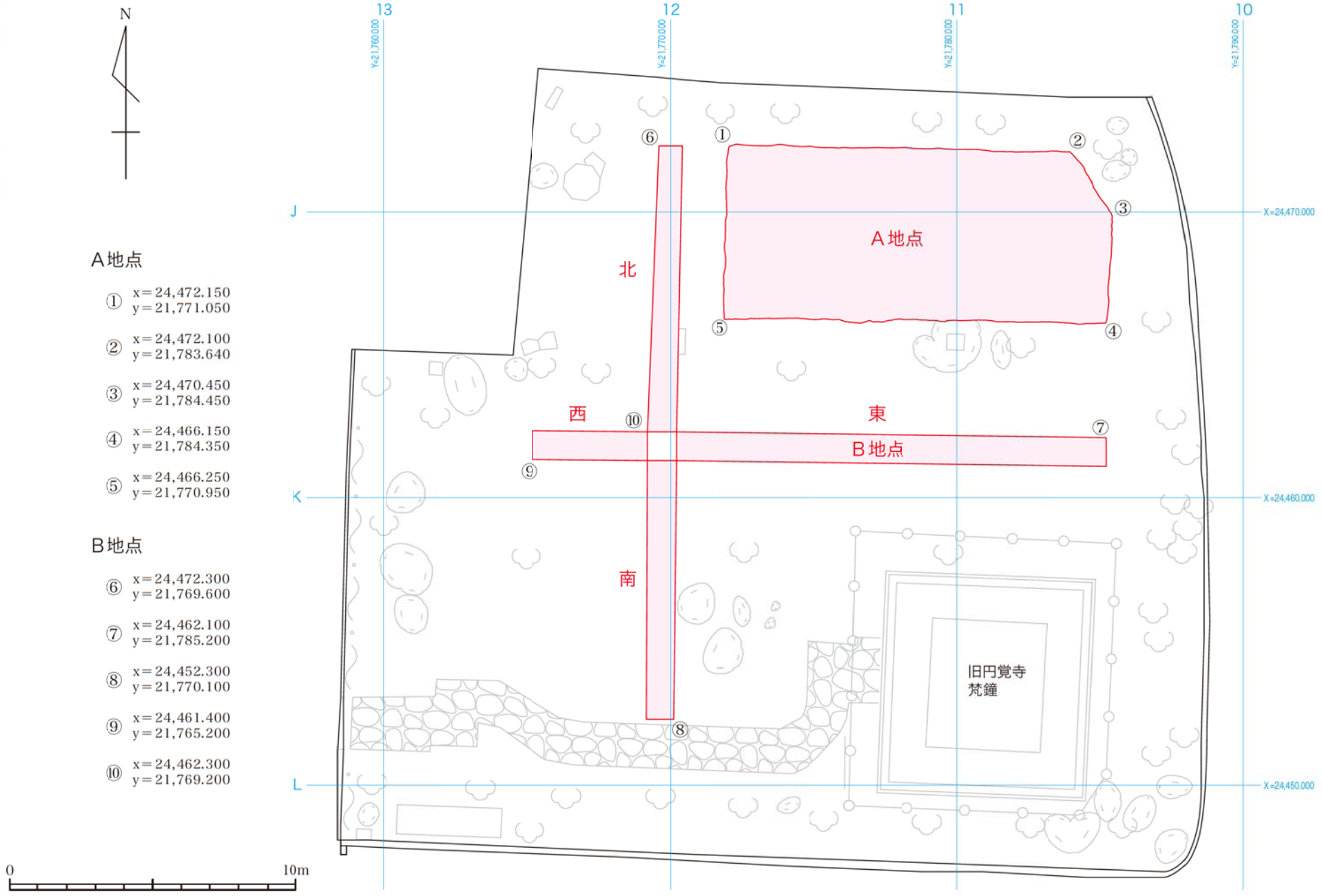
28日（金）　現場事務所とその周辺の片付け並びに、清掃。道具の手入れと搬出。
調査地点の埋め戻し。第1次調査終了。

註）なお、今回の発掘調査は遺構の確認調査が目的であったため、小規模の面積で調査を実施した。各地点の壁面図と写真撮影を終えた時点で終了とし、平面図の作成とスカイマスターによる空撮は次年度以降に実施することにした。



第８図　旧博物館跡全体平面図およびH19年度調査区

第９図　グリッド配置図



A地点

① x＝24,472.150
y＝21,771.050

② x＝24,472.100
y＝21,783.640

③ x＝24,470.450
y＝21,784.450

④ x＝24,466.150
y＝21,784.350

⑤ x＝24,466.250
y＝21,770.950

B地点

⑥ x＝24,472.300
y＝21,769.600

⑦ x＝24,462.100
y＝21,785.200

⑧ x＝24,452.300
y＝21,770.100

⑨ x＝24,461.400
y＝21,765.200

⑩ x＝24,462.300
y＝21,769.200

第４章　層序と遺構

第１節　層 序

今回の発掘調査は、旧沖縄県立博物館の東側に位置する前庭で行った。そこは樹木や花壇、庭石等の障害物が多かったので、それらに考慮した形でグリットと東西南北トレンチを設定し、それぞれについてＡ地点、Ｂ地点と仮称した。Ａ・Ｂ両地点は近接した箇所に調査地点を設定したことから、比較的堆積土層に差異がないため、層序を一括でまとめている。なお、Ａ地点では表土下約70～80cmの箇所から石敷や石列、側溝等の遺構が確認されているが、Ｂ地点では明確に遺構と確定できるものは確認できなかった。

層序については、第Ⅰ層から第Ⅷ層まで確認された。Ａ地点では壁面でⅠ～Ⅶ層、東壁付近の露出面において第Ⅷ層が確認できた。また、Ｂ地点で確認出来たのはⅠ～Ⅴ層であった。基本的に両地点とも第Ⅰ層から第Ⅴ層まで確認され、第Ⅵ層以下はＡ地点のみの検出となっている。

今回の発掘調査は中城御殿跡の遺構の確認調査を目的として行われた。同遺跡若しくはそれ以外の遺跡の遺構を確認するとその箇所で調査を止め、写真撮影や図面等の記録を取り、その下層の掘り下げは行わずに遺構の保護に努めた。第11・12図は両地点の層序図である。以下、層序について記述を行う。

第Ⅰ層　表土層。層の厚さが10～67cm程度である。戦後から近年までの造成土で、現代遺物（コンクリートや礫、サンゴ、白砂等）や一部瓦ブロック等を含む層である。基本的に攪乱層である（細かく分層すると３層に分けられる。第Ⅰ層ａは表土層で近年の造成土である。第Ⅰ層ｂは赤褐色礫土層で、瓦片や礫等が多く混在していた層である。第Ⅰ層ｃは瓦層で瓦片を多量に含む層である）。
第Ⅰ層は、両地点で確認できた。

第Ⅱ層　赤褐色礫混じり層。層の厚さが２～32cm程度である。瓦層の直下で細かい礫や炭、瓦片等を含む層である。なお、第Ⅱ層は第Ⅰ層と同様に攪乱層である。Ａ地点の南壁面で一部確認できたが、それ以外の壁面で確認できなかった。Ｂ地点では西側を除く全ての壁面で確認できたが、西側は第Ⅰ層を除去した段階で調査を止めた。なお、Ａ地点の南壁面の第Ⅱ層下部から遺構が確認された。

第Ⅲ層　黒茶褐色礫混じり土層。層の厚さが３～55cm程度である。炭や瓦片、細かい礫等を含む層である。土層の堆積状況からすると、現代遺物や撹乱等が見られないことから自然堆積層若しくは、近代の造成時の土層と思われる（細かく分層すると３層に分けられる。第Ⅲ層ａは、黒褐色混礫土層である。第Ⅲ層ｂは、淡茶褐色混礫土層である。第Ⅲ層ｃは、灰褐色混礫土層である。
全ての層で炭や瓦、細かい礫等を含むが、土層の色で差異が見られる）。Ａ地点では、東・南壁面で確認できた。Ｂ地点では北トレンチの東・北壁面、東トレンチの東・南壁面で確認できた。

第Ⅳ層　オリーブ褐色混礫土層。層の厚さが４～40cm程度である。瓦片が少し含む層である。SS1（石敷）遺構上において多量の炭が確認された。平面で明確に確認はできなかったが、遺構が検出されたレベルと出土遺物等を検討した結果、中城御殿以前の北谷按司（大村御殿）の遺構と

解釈した（『首里古地図』には北谷按司（大村御殿）と記載）。A地点の東・南北壁面で確認された。B地点では北トレンチの東西壁面で確認できた。

第Ⅴ層　茶褐色礫混じり土層。層の厚さが4～20cm程度である。細かい礫や炭、一部に赤褐色の塊が含まれる。A地点の東壁面で確認された。B地点では北トレンチの東西壁面で確認できた。

第Ⅵ層　明褐色土層。層の厚さが3～12cm程度である。A地点の東壁面で確認された。

第Ⅶ層　礫層。遺構面。層の厚さが4～12cm程度である。石敷遺構や側溝、石列遺構が確認され、3～10cm程度の大きさの礫が敷き詰められており、裏込め（栗石）の石と思われる。なお、第Ⅳ層の状況からすると北谷按司（大村御殿）以前の遺構と解釈した。
A地点の東壁面で僅かに確認された。

第Ⅷ層　黒褐色混礫土層。層の厚さが2～17cm程度である。A地点の北壁面で確認された。瓦・貝混じり層である。第Ⅷ層は第Ⅶ層下部から検出されていることから、北谷按司（大村御殿）以前の層と思われる。

参考として、平成4年度の第1次発掘調査で実施した地区（南B地区と東A地区）の層序を整理し、今回調査を実施した箇所と隣接する比較を行う。なお、南地点は県道29号線に並行して調査区を設定しており、旧沖縄県立博物館正面の石牆側、中城御殿の大御門（ウフウジョウ）を境に、西側を南A地区、東側を南B地区としている。また、東地点は市道、琉球王府時代の国道、国頭・中頭方西海道に並行して調査区を設定しており、旧沖縄県立博物館並びに、中城御殿の東側石牆があり、副門いわゆる御中御門（ウナカウジョウ）を境に南側を東A地区、北側を東B地区としている。（第10図）

因みに、同地区は敷地の南東部から東部に位置し、真栄平房敬氏の聞き取りから作図した『旧中城御殿概略図』（第5図）や鎌倉芳太郎氏が撮影を行った古写真（巻頭図版3）では御殿の庭園や望楼、中庭、中門A～Dの瓦塀があったところである。

南B地区　同地区で5枚の層が確認されている。
第Ⅰ層　コンクリートの破片や近年に客土された層である。
第Ⅱ層　赤土や褐色土層でやはり後世の攪乱層である。
第Ⅲ層　褐色土層や暗褐色土層を呈しており、近世の文化層である。この層から近世の遺物が出土する。
第Ⅳ層　暗褐色土層及び、褐色土層である。僅かに近世の遺物を含んでいる。
第Ⅴ層　基盤層である。同地区は島尻泥岩(方言：クチャ)で、南A地区は砂岩層（方言：ニービ）である。

南A地区　同地区で4枚の層が確認されている。
第Ⅰ層　表土層である。
第Ⅱ層　暗褐色土層である。近世の遺物を包含する文化層である。
第Ⅲ層　褐色土層である。近世の遺物を包含する文化層である。
第Ⅳ層　基盤層である。赤土層である。なお、東B地区は詳細な記載がないが、赤土層と思われる。

両地区の比較を行ったところ、南Ｂ地区の第Ⅰ層と第Ⅱ層はコンクリートの破片や近年の客土された層、後世の攪乱層であることから、基本的に攪乱層と考えられる。南Ｂ地区の第Ⅰ層と第Ⅱ層は、東Ａ地区の第Ⅰ層と対比が可能である。南Ｂ地区の第Ⅲ層と東Ａ地区の第Ⅱ層は、土層の色調が暗褐色系統の色であることからほぼ同じと考えても良いと思われる。更に、それぞれ近世の遺物を包含する文化層であることから、それぞれ対比が可能である。南Ｂ地区の第Ⅳ層と東Ａ地区の第Ⅲ層も上記と同様な性格であることから、それぞれ対比が可能である。南Ｂ地区の第Ⅴ層と東Ａ地区の第Ⅳ層はそれぞれ基盤層であるが、前者は島尻泥岩で後者は赤土層である。因みに、南Ａ地区は砂岩層である。

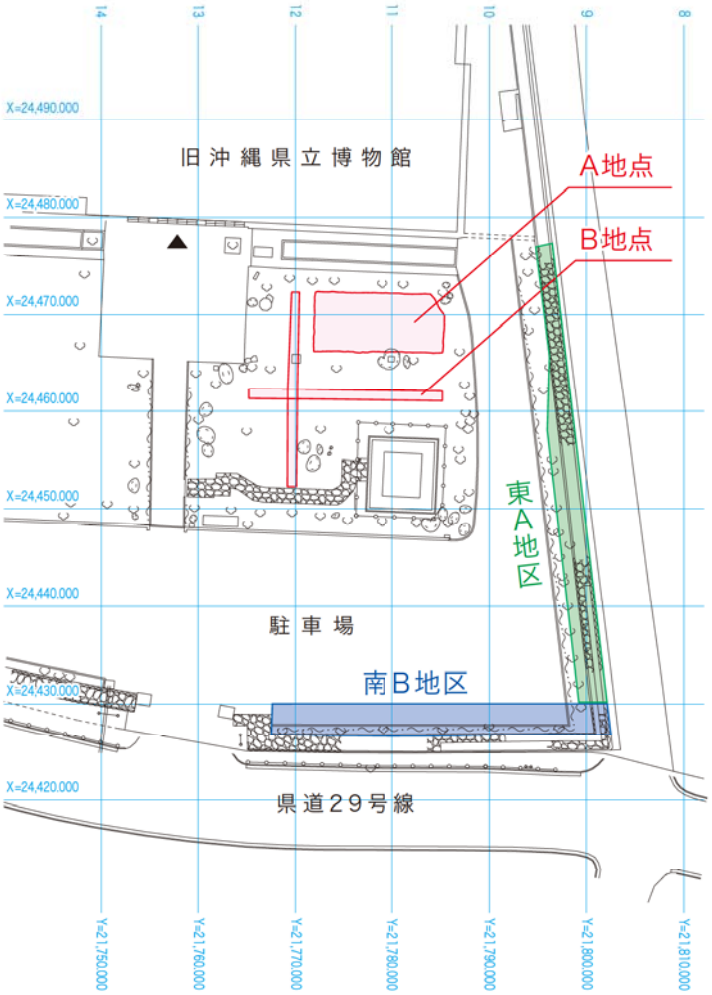
なお、第２次、第３次の発掘調査は中城御殿石牆の北側に位置した箇所で、市道に沿って東西に調査区（長さ110.0ｍ×幅2.0ｍのトレンチ）を設定している。第２次調査は調査地区（第18区～第60区）の西側で、その東半分の箇所では第Ⅴ層で石灰岩の岩盤、調査地区の西半分の箇所では第Ⅵ層で地山の黄褐色土層が確認されている。第３次調査は調査地区（第１区から第17区）の東側で、第Ⅴ層で基盤層が確認され、赤土の地山の部分と石灰岩が露出する部分があり、石灰岩の岩盤は東側で卓越している。敷地の北側では赤土や石灰岩が見られ、南側では島尻泥岩や砂岩層が確認された。基盤層はそれぞれの箇所によって異なることが解った。第２表で両地区の序層を整理し、それぞれの対比を行ったところ、何れにおいても近代の層、いわゆる中城御殿があった時期の層は確認されていない。同地区の南東部には御殿の庭園や望楼、中庭等があった。なお、古写真等で確認する限り、庭園はその当時の地表面より上層に作庭を行っており、遺構として残存する可能性は低い。戦前戦後において、これらは戦争や土地の造成等によって破壊を受け、中城御殿があった近代の層や遺構等は残っていない。

【参考文献】

旧中城御殿『―石牆工事地域にかかる第一次発掘調査―』　1993年３月　沖縄県立博物館
旧中城御殿『―石牆工事地域にかかる第二次発掘調査―』　1994年３月　沖縄県立博物館
旧中城御殿『―石牆工事地域にかかる第三次発掘調査―』　1995年３月　沖縄県立博物館

第１表　Ｈ４年度調査の南Ｂ地区と東Ａ地区の層序対比表

南Ｂ地区層序	東Ａ地区層序	南Ｂ地区と東Ａ地区をまとめた層序
第Ⅰ層・第Ⅱ層	第Ⅰ層	第Ⅰ層　攪乱層。表土層で客土並びに、攪乱した層である。
第Ⅲ層	第Ⅱ層	第Ⅱ層　暗褐色土層若しくは、褐色土層。近世の遺物を包含する文化層である。
第Ⅳ層	第Ⅲ層	第Ⅲ層　褐色土層若しくは、暗褐色土層。近世の遺物を包含する文化層である。
第Ⅴ層	第Ⅳ層	基盤層（赤土・石灰岩・砂岩・泥岩）。なお、地区によって基盤層が異なる。

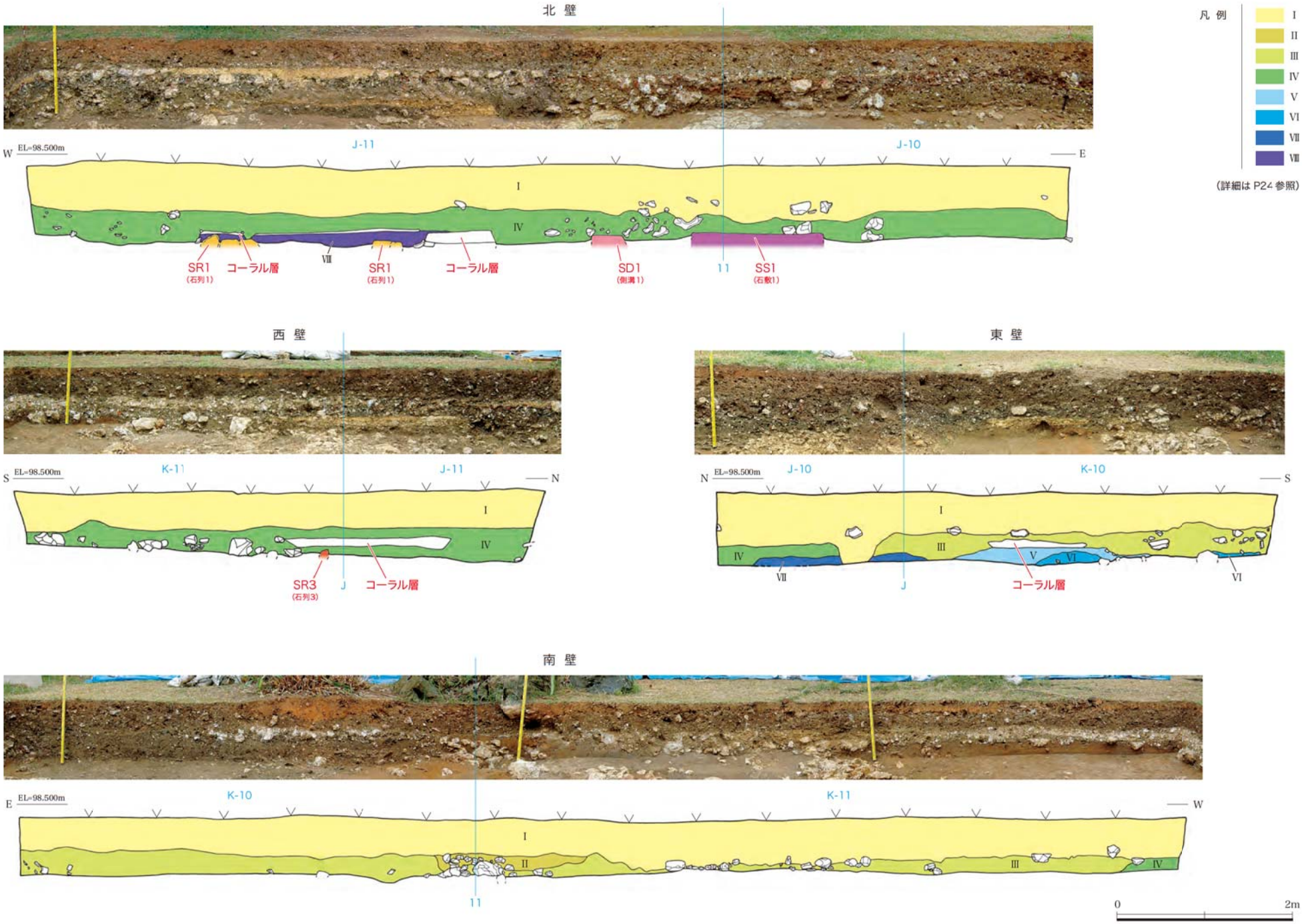


第10図　H４年度調査区

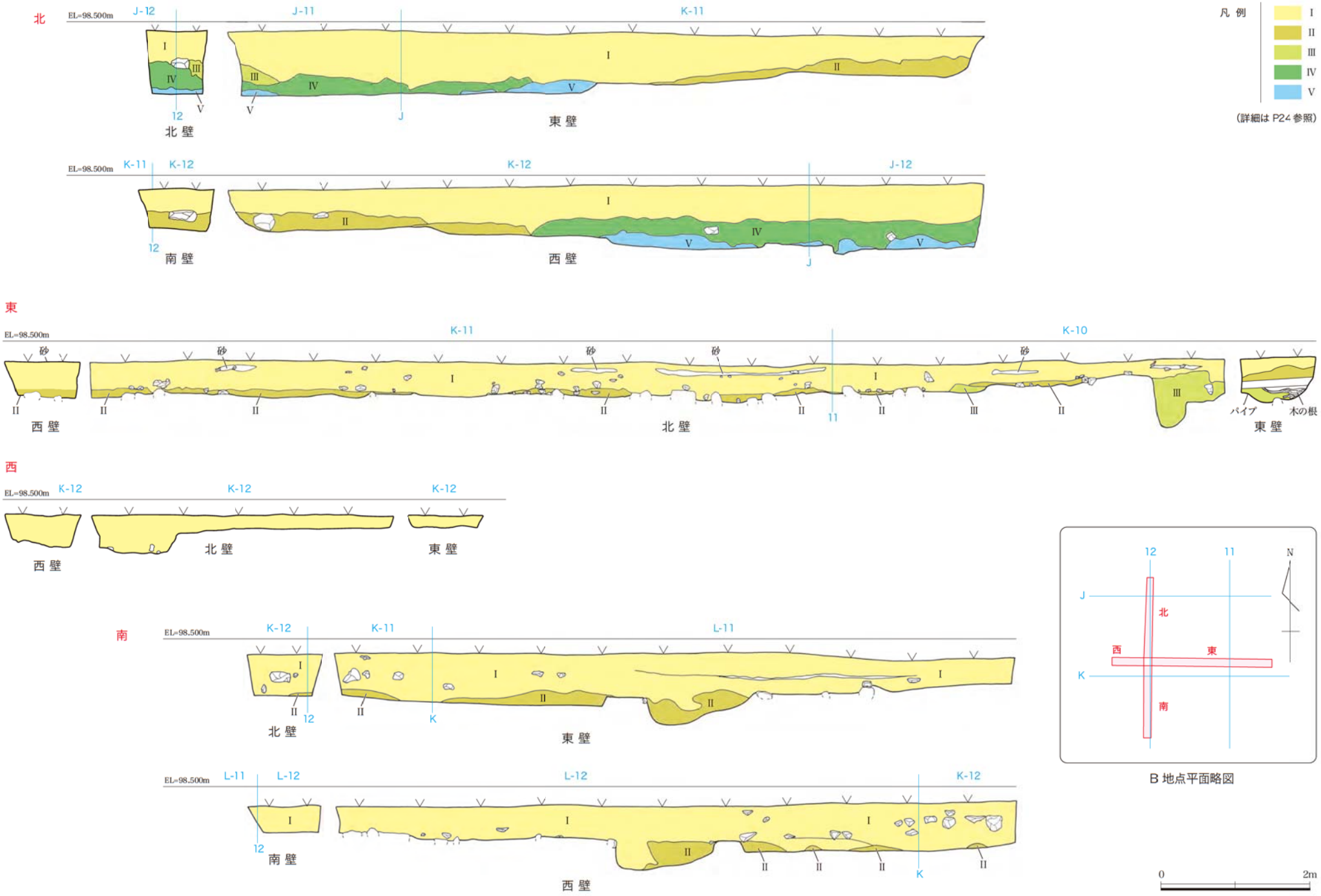
第２表　H４年度調査とH19年度調査の層序表

層 序	H4年度　南B地区と東A地区をまとめた層序	
1	第Ⅰ層	攪乱層。表土層で客土並びに、攪乱した層である。
2	第Ⅱ層	暗褐色土層若しくは、褐色土層。近世の遺物を包含する文化層である。
3	第Ⅲ層	褐色土層若しくは、暗褐色土層。近世の遺物を包含する文化層である。
基盤層	第Ⅳ層	基盤層（赤土・石灰岩・砂岩・泥岩）。なお、地区によって基盤層が異なる。

層 序	H19年度　層序
Ⅰ	第Ⅰ層　表土層。戦後から近年までの造成土。
Ⅱ	第Ⅱ層　赤褐色礫混じり層。近代の遺構面と思わる。
Ⅲ	第Ⅲ層　黒茶褐色礫混じり土層。
Ⅳ	第Ⅳ層　オリーブ褐色混礫土層。近世の遺構面。
Ⅴ	第Ⅴ層　茶褐色礫混じり土層。
Ⅵ	第Ⅵ層　明褐色土層。
Ⅶ	第Ⅶ層　礫層。近世の遺構面。
Ⅷ	第Ⅷ層　黒褐色混礫土層。
基盤層	基盤層　未確認


北 壁
凡 例
I
II
III
IV
V
VI
VII
VIII
(詳細は P24 参照)
W
EL=98.500m
J-11
J-10
E
SR1
(石列1)
コーラル層
SR1
(石列1)
コーラル層
SD1
(側溝1)
11
SS1
(石敷1)
西 壁
S
EL=98.500m
K-11
J-11
N
SR3
(石列3)
J
コーラル層
東 壁
N
EL=98.500m
J-10
K-10
S
J
コーラル層
南 壁
E
EL=98.500m
K-10
K-11
W
11
0
2m

第11図　A地点層序図


北
EL=98.500m
J-12
J-11
K-11
北 壁
東 壁
南 壁
西 壁
凡 例
I
II
III
IV
V
(詳細は P24 参照)
東
K-12
K-10
砂
パイプ
木の根
西
L-11
L-12
B 地点平面略図
N
0
2m

第12図　B地点層序図

第２節　遺 構

今回の発掘調査は第１章第１節で既述したように、中城御殿跡は県営首里城公園の整備に伴う遺構の確認調査が目的である。発掘調査の方法はグリッドとトレンチを設定し、調査を実施した。

調査箇所は中城御殿の南東部分で、御書院・大広間等にかかる箇所である（第７図）。御殿は全て赤瓦葺きの屋根であったが、そのほとんどが沖縄戦で破壊された。同箇所は旧沖縄県立博物館の前庭で、閉館後は草刈り等が行われておらず、雑草等が繁茂した状態だった。更に、樹木や花壇、庭石等の障害物が多いことから、障害物がない空間に調査地点を設定した。

発掘調査ではＡ・Ｂ地点において、旧沖縄県立博物館が存在した時期の層、表土層を剥ぎ取ると、戦前から近年の造成土の層で、コンクリートや礫、サンゴ、白砂、コーラル等や一部瓦ブロック等を含む層が確認された。戦後のたび重なる土地改変等による撹乱層であった。なお、コンクリートやコーラル等から推定すると、コンクリートは建物の基礎やバスの駐車場として造成の際のコーラルと思われる。また、Ａ地点では西・北壁において第Ⅱ・Ⅲ層は確認できなかった。なお、同地点から表土下約70～80cmの箇所から石列や側溝、石敷等の遺構が確認された。

遺構は、SR１～５（石列１～５）やSD１（側溝１）、SS１（石敷１）等があり、以下、それぞれの遺構について記述を行う。なお、発掘調査は中城御殿跡の遺構の確認調査を目的としており、同遺跡を確認した場合は遺構の露出を行い、それ以外遺跡の遺構を確認すると、平面のみで調査を終え、その下層の掘り下げは行わずに遺構の保護に努めた。今回は石列の立面と溝の縁部と溝床面、石敷の縁石等を露出する作業は行わなかった。遺構に伴う図面は、Ａ地点の平面図のみ作成した（第13図）。

ＳＲ１（石列１）　ＳＲ１（石列１）は、Ｊ－11グリッドの北壁付近で検出されている。ＳＤ１（側溝１）と平行して、東西へ延びている。石材のサイズは約30cm程度の琉球石灰岩である。残存する部分が僅かであるので、遺構の性格を確定するのは難しいが、今回、石列遺構とした。

ＳＲ２（石列２）　ＳＲ２（石列２）はＪ－11グリッドで検出されているが、一部についてはＫ－10、11グリッドで確認できる。
なお、遺構はグリッドの境界であるＪラインに沿って検出されている。ＳＲ１（石列１）と平行して東西方向へ延びている。石材は、約20cmの琉球石灰岩で構成されている。遺構は一部破損するが、全長約８m程度である。

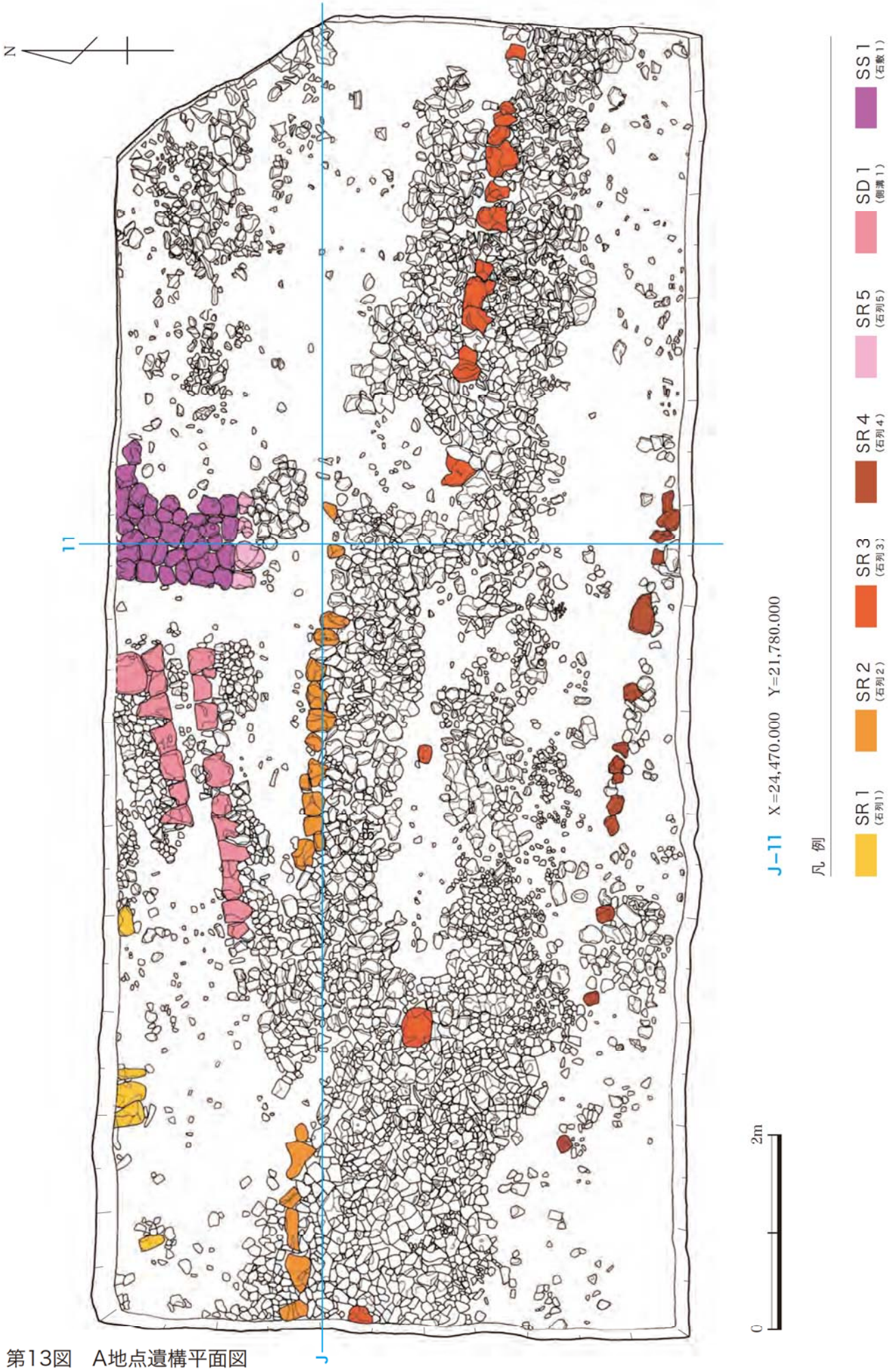
ＳＲ３（石列３）　ＳＲ３（石列３）はＫ－10、11グリッドで検出されており、ＳＲ２（石列２）と同様、東西方向へ延びている。遺構を構成する石材は琉球石灰岩で、他の石列遺構より大型で、約30cm前後である。遺構の残存長は約15mである。

ＳＲ４（石列４）　ＳＲ４（石列４）は主にＫ－11グリッドで検出されているが、一部Ｋ－10グリッドで確認されている。他の石列遺構と同様に東西方向に延びている。遺構を構成する石材は琉球石灰岩で、石材のサイズは約20cm程度で、小振りである。遺構の残存長は、約6.8mである。

ＳＲ５（石列５）　ＳＲ５（石列５）は、Ｊ－10、11グリッドの境界である南北の11ライン上で検出されている。ＳＳ１（石敷１）を囲む形で配列されている。石列の面は北壁の方向を向いている。残存する長さは、１m程度と僅かである。

ＳＤ１（側溝１）　Ｊ-11グリッドで検出された。内面20～25cm、外面60cmは、南側と北側に列を有し、残存する長さは南列３m、北列1.8mの範囲で確認されている。溝床面まで掘り下げていないので、溝床面の状況や溝の深さ、勾配等については、確認出来なかったが、東側にSS1（石敷１）が検出されている事を考慮すると東から西に向けての勾配であると考えられる。

ＳＳ１（石敷１）　SS1（石敷１）は、Ｊ-10とＪ-11グリッドの境目である南北の11ライン上で検出されており、遺構の一部は北壁へ延びている。残存する幅は1.2m、長さは1.9mである。20cmサイズの琉球石灰岩の一辺を平坦に加工し、敷いたものである。SS1の西側の縁がほぼ南北の11ラインに沿っており、南側の縁もほぼ東西のＪラインに沿っていることが解った。SS1の遺構上において、多量の炭が確認された。また、南側の縁にSR５（石列５）が接している。



第13図　A地点遺構平面図

図版1　A地点全景（スカイマスターより撮影）

SR2、SD1　検出状況

SS1、SR5　検出状況（上から）

SS1、SR5　検出状況（西から）

発掘状況　（南から）

完掘状況（東から）

図版２　Ａ地点発掘状況

東（西から）

東　北壁

南（北から）

北（南から）

南（南から）

図版３　B地点発掘状況

発掘前の状況

草刈り作業

測量風景

作業状況

室内作業

埋め戻し作業

図版４　発掘前の状況と調査の流れ

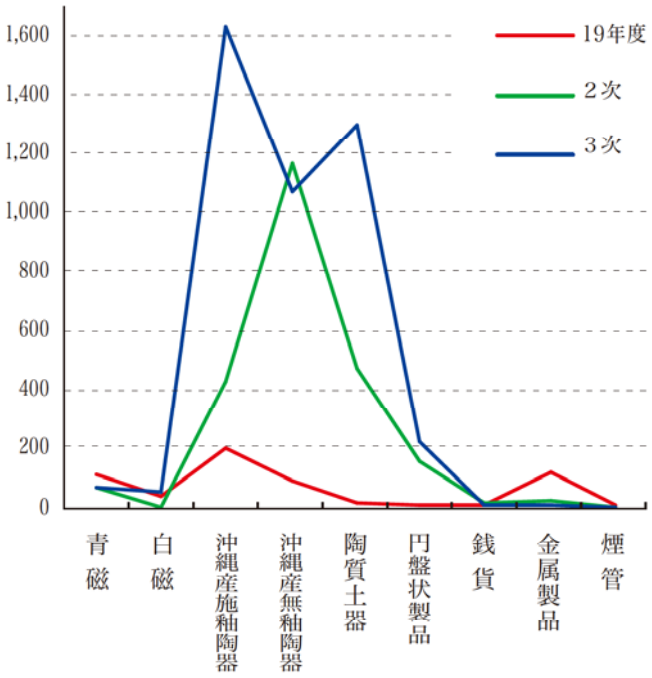
第５章　出土遺物

第１節　遺物の概要と出土状況

今回の発掘調査で中城御殿跡から出土した遺物の総数は1903点で、詳細は第4表の通りである。出土遺物の内訳は建築物に付随する屋瓦や塼、釘等、日常生活用として使用された陶器（中国産・本土産・沖縄産）や磁器（中国産・本土産）、円盤状製品、銭貨、煙管等、貝や獣魚骨等の食料残滓である。時代的に観ると、近世や近・現代に位置付けられる遺物である。出土遺物は近世の層や、沖縄戦による破壊後の造成の層、戦後に建設された㈱首里バスのバスターミナル（註）と、1966（昭和41）年に建設された当時の琉球政府立博物館（現沖縄県立博物館・美術館）の造成時の層からの出土であり、遺構に伴う出土遺物は極小量である。

中城御殿跡の発掘調査は、県立博物館によって過去3度行われており、1次調査は石牆南・東側、2～3次は石牆北側であった。それらの調査により得られた主な遺物と、今回の調査を含めて比較検討したい（出土点数の不明確な1次調査及び、分類・点数の不明確な輸入陶磁器類を除く）。第3表を見てみると、出土点数の安定している青磁・白磁・銭貨・煙管と比べ、沖縄産陶器・陶質土器・円盤状製品の出土数が激減していることがわかる。これは、戦前戦後の造成における攪乱が要因のひとつであると考えられる。更に、出土点数の安定がみられる遺物が青磁や白磁であることからも、14世紀後半～16世紀頃の遺物包含層の残存が比較的良好であり、それ以降の時期の包含層が攪乱の被害を著しく受けていることがわかる。実際に世子の移住が行われたのが1875年（明治8年、尚泰28年）ということも含めて考えると、中城御殿以前の生活層が明確に示された結果であろう。金属製品に関しては今回の調査地区における出土数が増加しているが、これは釘に占める割合が大きいことを特記しておきたい（詳細は第16節）。また、円盤状製品であるが、石牆付近における出土割合が青磁・白磁の約3倍にも上る。円盤状製品に関しては首里城関係の遺跡の中でも非常に特徴的なケースとなっており、今後の調査が待たれるとともに、中城御殿という位置付けを再確認する必要があるだろう。

第３表　主な出土遺物の比較グラフ



次節より出土遺物毎に記述を行う。

註）平成20・21年度の発掘調査期間中に、周辺の古老並びに、戦後同地にて生活をしていた方から平成19年度の調査箇所について『以前、㈱首里バスのバスターミナルがあり、本社は首里市役所の裏側にあった。』と御教示して頂いた。

第４表　出土遺物集計表（出土遺物全体の集計表）

			青磁	白磁	青花	褐釉陶器	その他の輸入陶磁器	本土産陶磁器	沖縄産施釉陶器	沖縄産無釉陶器	グスク土器	陶質土器	瓦質土器	円盤状製品	瓦類	銭貨	金属製品	煙管	ボタン	貝製品	石材・石	ガラス	コンクリート	サンゴ	合計
A	J−10	Ⅳ	5	1	7	3	1	2	1	2					7		4				1				34
	J−10・11	SR5	4	2	5	10		2	2	1					1		1					1			29
		SS1	1		2	9			6	1					1		2								22
	J−11	SD1	3		1	16			2		1				11							1			35
		Ⅰ	3	1	1			2								1	11								19
		Ⅲ	7	1	3	19			1		2			1	4		6				2			1	47
		Ⅳ				2															1				3
	K−10	Ⅰ			3		1	2									4				1	1			12
		Ⅲ	3	1	5	13	3	2	4	5					10		4				1			1	52
	K−11	Ⅰ	10	3	15	14		7	4	3				1	3	1	12				6	1			80
		Ⅲ	33	9	20	95	8	5	13	10	2				12	2	24				6	3			242
		Ⅳ	3		2	7	1	2	2	1					2		4		1						25
		Ⅷ						1																	1
		不明						4	1			1													6
	不明	Ⅰ		1		1		3	11	10				1	8		3								38
B	J−11・12	Ⅰ			3	3	1	4	2	2				1	8						4	1			29
		Ⅱ						1	1							1									3
	K−10	Ⅰ	1		1	1			2	2		1			3		8								19
		Ⅱ	3		6			1	7	2					14		52				4	1	1		91
		Ⅲ	3	2	8	13	1	7	32	14		9			45	1	43		1		2	8			189
	K−10・11	Ⅱ				2			3	1	1	2					15								24
		Ⅲ				4			3	2	1						7								17
	K−11	Ⅰ	7	3	19	14	2	24	55	10	1	1	1		4	1	203		1		1	13		1	361
		Ⅱ	2	2	4	5		2	6		1				1		5					2			30
		Ⅲ			2	1		1		1															5
	K−11	Ⅰ	3	1	4		2	9	4						4		20	2			3	7			59
	K−11・12	Ⅰ		1													1					1			3
		Ⅱ			3				5	1		2			4										15
		Ⅲ	3	1	3	8	1	11	9	2			1		9		24	1		1	9	2			85
		Ⅴ	11	1	2	33	2	1	1	2					1		3								57
	K−12	Ⅰ	3	2	10	10		10	3	6				1	6		14				1	5			71
		Ⅱ													5		1						1		7
	L−11・12	Ⅰ	2		8	3	5	16	15	7				1	27		44	2	1		1	16		1	149
		Ⅲ	1		1	1		3	2	2			1	1	8		9					4			33
不　明								1									10								11
合　計			111	32	138	287	28	123	197	87	9	16	3	7	198	7	534	5	4	1	43	67	2	4	1,903

第2節　青 磁

今回の発掘調査で、青磁は総数111点得られた。碗、小碗、碗か鉢、皿、盤、瓶、器台？等の7種類が得られた。青磁は1992(平成4) ～1994(平成6) 年の第1～3次の発掘調査では、かなりの量の遺物が得られている。完形品の出土は無く、すべて破片である。ほとんどが龍泉窯系の青磁で、一部、福建・広東が混じる。時代幅は、14～19世紀に位置づけられる。詳細については、第6表観察一覧に記す。

第5表　青磁集計表

出土地		A										B											合計
		J-10	J-10・11		J-11			K-10	K-11			K-10 東			K-11		K-11・12 南	K-11・12 北		K-12 西	L-11・12 南		
器種	部位	Ⅳ	SR5	SS1	SD1	Ⅰ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅴ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅲ	
碗	口	2			2		2	1	3	9					2		1		1	1			24
	胴	1	2	1			2	1		7	1	1				1	2	2	7				28
	底	1							2	1					3								7
小碗	口													1									1
	胴													1									1
碗か鉢	底																				1		1
皿	口								3	2									1				6
	胴								1														1
盤	口								1		1							1					3
	胴									1													1
鉢	胴									1													1
瓶	頸～胴						1																1
酒会壷	底					2									1								3
袋物	胴	1					1								1								3
器台	胴					1																	1
不明	口										1		2	1						1			5
	胴		2		1		1	1		12			1			1			2	1	1	1	24
総計		5	4	1	3	3	7	3	10	33	3	1	3	3	7	2	3	3	11	3	2	1	111

第6表　青磁観察一覧

単位：cm

挿図番号 図版番号	番号	器種	部位	口径 器高 底径	年代	観察事項	出土地
第14図 図版5	1	碗	口縁部	14.4 － －	14C後半～15C中葉	図上復元が可能な資料で、口径約14.4cmである。口唇部が玉縁状で丸味を持つ端反の口縁部である。文様は、見られない。釉色は、表裏面とも暗いオリーブ色 (Hue 7.5Y 4/3) を呈する。素地は灰白色 (Hue 10Y 7/1) をと呈し、比較的粒子は細かく、黒色鉱物を混入する。焼成は、良好である。表裏面ともに粗い貫入が見られる。器壁の厚さは、約5.0mmである。龍泉窯。	ナカウ '07 K-11 B 東 I 1203
	2	碗	口縁部	15.6 － －	14C後半～15C中葉	図上復元が可能な資料で、口径約15.6cmである。口唇部が僅かに玉縁状となり、舌状を呈する端反の口縁部である。文様は、見られない。釉色は、表裏面とも明緑灰色 (Hue 7.5GY 7/1) を呈する。素地は灰白色 (Hue 5Y 7/2) を呈し、粒子は細かい。焼成は、良好である。表裏面ともに細かい貫入が見られる。器壁の厚さは、約4.0mmである。龍泉窯。	ナカウ '07 K-11 A I 1207

第６表　青磁観察一覧

単位：cm

挿図番号 図版番号	番号	器種	部位	口径 器高 底径	年代	観察事項	出土地
第14図 図版5	3	碗	口縁部	15.6 － －	15C	図上復元が可能な資料で、口径約15.6cmである。口縁部は端反りを呈し、口唇部は丸味を帯びている。文様は見られない。釉色は、表裏面ともオリーブ灰色（Hue 5GY 6/1）を呈する。素地は灰白色（Hue 10YR 8/2）を呈し、粒子は細かい。焼成は、良好である。表裏面ともに細かい貫入が見られる。器壁の厚さは、約3.5mmである。福建・広東。	ナカウ '07 K-11 A Ⅲ 1217
	4	碗	口縁部	－ － －	15C ～ 16C 前半	図上復元が不可能な資料である。口縁部は直口を呈し、口唇部は丸味を帯びている。釉色は、表裏面ともに灰白色（Hue 7.5Y 7/2）を呈している。なお、釉薬は剥げ落ちているような状態で、艶がない。焼成はかなり低いと思われる。素地は灰白色（Hue 10Y 7/2）を呈し、粒子は細かい。表裏面ともに肉眼で貫入を観察することができないが、ルーペ（倍率30倍）で観察すると細かい貫入が確認できる。器壁の厚さは、約5.5mmである。福建・広東。	ナカウ '07 J-11 A Ⅲ 1212
	5	碗	口縁部	14.0 － －	14C 後半 ～ 15C 中葉	図上復元が可能な資料で、口径約14.0cmである。端反りの口縁部で、口唇部は舌状を呈する。口縁部外面にヘラ描き連弁文を施す。ヘラの幅は、約3.0mmである。釉色は、表裏面とも灰オリーブ色（Hue 7.5Y 6/2）を呈している。素地は、灰オリーブ色（Hue 5Y 6/2）を呈し、粒子は細かい。焼成は良好である。貫入は確認できない。器壁の厚さは、約4.0mmである。龍泉窯。	ナカウ '07 K-11 A Ⅲ 1217
	6	碗	口縁部	12.6 － －	15C 中葉 ～ 16C 初	図上復元が可能な資料で、口径約12.6cmである。口縁部は直口を呈し、口唇部は丸味を呈する。文様は、口縁部外面に鎬連弁文を施す。釉色は、表裏面ともに緑灰色（Hue 7.5GY 6/1）を呈する。素地は灰白色（Hue 5Y 7/2）を呈し、粒子は細かい。焼成は良好である。貫入は粗い。器壁の厚さは、約4.5mmである。龍泉窯。	ナカウ '07 J-11 A SD1 1210
	7	碗	口縁部	13.4 － －	15C 後半 ～ 16C 前半	図上復元が可能な資料で、口径約13.4cmである。口縁部は直口を呈し、口唇部は丸味を帯びている。文様は、口縁部外面に剣先連弁文を施す。釉色は、表裏面ともオリーブ灰色（Hue 10Y 5/2）を呈している。素地は灰色（Hue N 6/）を呈し、粒子は細かい。貫入は細かい。器壁の厚さは、約4.0mmである。龍泉窯。	ナカウ '07 K-11 A Ⅲ 1217
	8	碗	口縁部	13.0 － －	15C 後半 ～ 16C 前半	図上復元が可能な資料で、口径約13.0cmである。口縁部は直口を呈し、口唇部は丸味を帯びている。文様は、口縁部外面に剣先連弁文が施されている。釉色について、焼成が悪く、口縁部上部と下部にムラが見られ、表裏面にも若干差異が見られる。基本的に、表裏面ともにオリーブ灰色（Hue GY 6/1）を呈している。素地は黄褐色（Hue 2.5Y 5/4）を呈し、粒子は細かい。白色の砂粒を混入している。貫入は細かい。器壁の厚さは、約4.5mmである。福建・広東。	ナカウ '07 K-11・12 B 北 V 1217
	9	碗	口縁部	－ － －	15C 中葉 ～ 16C 初	図上復元が不可能な資料である。口縁部は直口を呈し、口唇部はやや舌状である。文様は、口縁部外面に剣先連弁文を施している。釉色は、表裏面とも灰オリーブ色（Hue 7.5Y 5/2）を呈している。素地は灰色（Hue 7.5Y 6/1）を呈し、粒子は細かい。焼成は良好である。貫入は粗い。器壁の厚さは、約5.0mmである。龍泉窯。	ナカウ '07 J-11 A SD1 1210 ナカウ '07 K-11 A Ⅲ 1212

第６表　青磁観察一覧

単位：cm

挿図番号 図版番号	番号	器種	部位	口径 器高 底径	年代	観察事項	出土地
第14図 図版５	10	碗	口縁部	－ － －	15C 後半 ～ 16C 前半	図上復元が不可能な資料である。口縁部は直口を呈し、口唇部は丸味を帯びている。文様は、口縁部外面に剣先連弁文が施されている。釉色は、表裏面ともにオリーブ灰色（Hue 10Y 5/2）を呈している。素地は、灰白色（Hue 7.5Y 7/2）を呈し、粒子は細かい。焼成は、良好である。貫入は粗い。器壁の厚さは、約4.0mmである。龍泉窯。	ナカウ '07 K-11 A Ⅲ 1212
	11	碗	口縁部	－ － －	14C 後半 ～ 15C 中葉	図上復元が不可能な資料である。口縁部は直口を呈し、口唇部は丸味を帯びている。文様は、口縁部外面にヘラ描き雷文が施されている。釉色は、表裏面ともにオリーブ灰色（Hue 10Y 6/2）を呈している。素地は灰白色（Hue 7.5Y 8/1）を呈し、粒子は細かい。焼成はかなり良い。貫入はない。器壁の厚さは、約4.5mmである。龍泉窯。	ナカウ '07 K-11 A Ⅰ 1207
	12	碗	口縁部	－ － －	15C	図上復元が不可能な資料である。口縁部は直口を呈し、口唇部は丸味を帯びている。文様は、口縁部外面に陰刻の雷文が施されているのが、確認できる。釉色は、表裏面ともに灰オリーブ色（Hue 5Y 5/3）を呈している。素地はにぶい黄褐色（Hue 10Y 7/3）を呈し、粒子は一寸細かく、黒色鉱物を混入している。焼成は良い。貫入は細かい。器壁の厚さは、約5.0mmである。龍泉窯。	ナカウ '07 K-11 A Ⅲ 1213
	13	碗	口縁部	15.6 － －	14C 後半 ～ 15C 中葉	図上復元が可能な資料で、口径約15.6cmである。口縁部は直口を呈し、口縁部上端はやや肥厚している。口唇部は丸味を帯びている。文様は、口縁部外面に縦位と横位に線刻文？が施されている。釉色は、表裏面ともにオリーブ黄色（Hue 7.5Y 6/3）を呈している。素地は灰白色（Hue 2.5Y 8/1）を呈し、粒子は細かい。貫入はない。器壁の厚さは、約4.5mmである。龍泉窯。	ナカウ '07 K-11 A Ⅲ 1217
	14	碗	口縁部	12.8 － －	15C	図上復元が可能な資料で、口径約12.8cmである。口縁部は直口を呈し、口唇部は丸味を帯びている。文様は、口縁部外面に圏線文？が施されている。釉色は、表裏面ともにオリーブ灰色（Hue 2.5GY 6/1）を呈している。素地は灰白色（Hue 10Y 7/1）を呈し、粒子は細かい。貫入は粗い。器壁の厚さは、約3.0mmである。龍泉窯。	ナカウ '07 J-11 A Ⅲ 1217
	15	碗	口縁部	11.6 － －	15C	図上復元が可能な資料で、口径約11.6cmである。口縁部は直口を呈し、口唇部は丸味を帯びている。文様は、口縁部外面の上端に２条？の圏線文？が施されている。釉色は、表裏面ともにオリーブ灰色（Hue 10Y 5/2）を呈している。素地は灰白色（Hue 7.5Y 7/1）を呈し、粒子は細かい。貫入は粗い。器壁の厚さは、約4.0mmである。龍泉窯。	ナカウ '07 J-10 A Ⅳ 1207
	16	小碗	口縁部	10.0 － －	18C 後半 ～ 19C 初	図上復元が可能な資料で、口径約10.0cmである。端反りの口縁部を呈し、口唇部は舌状を呈している。文様はない。口唇部に鉄釉が施されている。その釉色は明黄褐色（Hue 10YR 6/8）を呈する。また、表裏面の釉色は差異が見られる。表面は明緑灰色（Hue 10GY 7/1）を呈し、裏面は明緑灰色（Hue 10GY 8/1）を呈している。素地は、灰色（Hue 7.5Y 8/1）を呈し、粒子は細かい。焼成は良好である。貫入は見られない。器壁の厚さは、約2.5mmである。景徳鎮。	ナカウ '07 K-10 B 東 Ⅲ 1108

第６表　青磁観察一覧

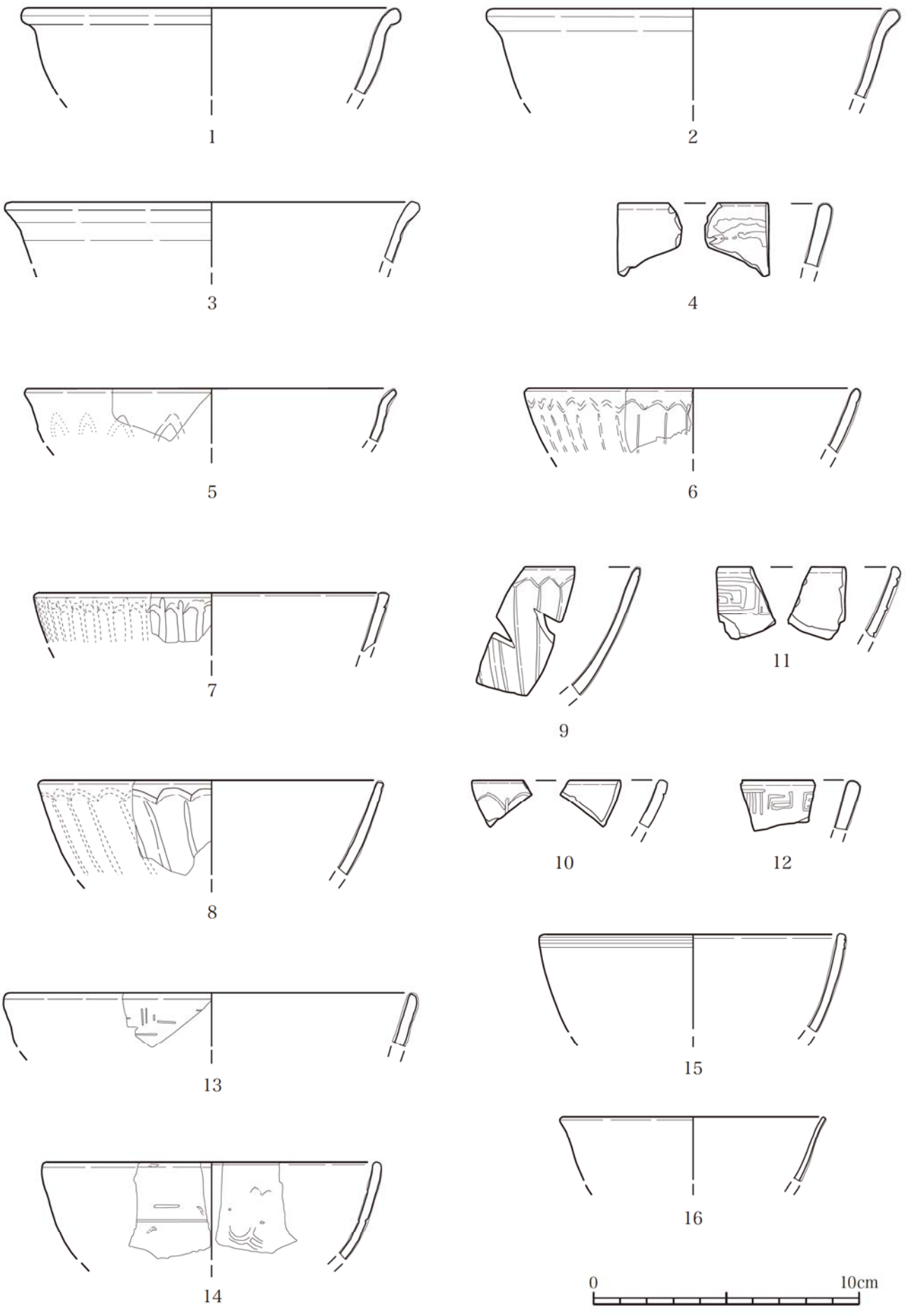
単位：cm

挿図番号 図版番号	番号	器種	部位	口径 器高 底径	年代	観察事項	出土地
第15図 図版6	17	碗	底部	－ － 7.0	14C 後半 ～ 15C 中葉	図上復元が可能な資料で、底径約7.0cmである。器形は畳み付けから若干逆「ハ」の字状に立ち上がる。畳付の形状は、丸味を帯びている。大型の碗である。底部外面に２条の圏線文が確認できる。釉薬について、高台内面は露胎である。釉色は、表裏面ともにオリーブ灰色（Hue 2.5GY 6/1）を呈する。素地は、淡黄色（Hue 2.5Y 8/3）を呈し、粒子は細かい。焼成は良好である。貫入は見られない。器壁の厚さは、8.0mmである。龍泉窯。	ナカウ '07 L-11･12 B 南 I 1203
	18	碗	底部	－ － 6.1	14C 後半 ～ 15C 中葉	図上復元が可能な資料で、底径約6.1cmである。器形は畳み付けからほぼ直線的に立ち上がる。畳付の形状について、破損が著しいが、残存部からすると平坦である。文様は見込みに花文？が見られる。釉薬について、高台内面は露胎である。釉色は、表裏面ともにオリーブ灰色（Hue 2.5GY 6/1）を呈する。素地は灰白色（Hue 5Y 8/1）を呈し、粒子は細かい。高台内面は露胎で、焼成温度の状態によって、素地が層をなしている。露胎部の素地の色調は、浅黄橙（Hue 10YR 8/4）である。焼成は、良好である。貫入は見られない。器壁の厚さは、6.0mmである。龍泉窯。	ナカウ '07 K-11 B 東 I 1203
	19	碗	底部	－ － 4.3	15C 後半 ～ 16C 前半	図上復元が可能な資料で、底径約4.3cmである。器形は畳付から逆「ハ」上に立ち上がり、その後、屈曲し、直口を呈する。畳付の形状は、平坦である。文様は、高台近くに剣先連弁文を施している。釉色は、表裏面ともにオリーブ灰色（Hue 2.5GY 6/1）を呈する。畳付と立ち上がりの部分は、露胎である。素地は灰白色（Hue 5Y 7/1）を呈し、粒子は若干粗い。焼成は良好である。貫入は細かい。器壁の厚さは、7.0mmである。福建・広東。	ナカウ '07 J-10 A IV 1207
	20	碗か 皿	底部	－ － －	14C 後半 ～ 15C 中葉	図上復元が不可能な資料である。畳付は舌状を呈し、立ち上がりは曲線を描き、その後逆「ハ」の字を呈する。文様は見られない。範囲について、高台内面は露胎である。釉色は、表裏面ともにオリーブ灰色（Hue 2.5GY 6/1）を呈する。素地は、灰白色（Hue 5Y 7/1）を呈し、粒子は若干細かい。焼成は良好である。貫入は見られない。器壁の厚さは、6.0mmである。龍泉窯。	ナカウ '07 K-11 A III 1212
	21	皿	口縁部	14.2 － －	14C 後半 ～ 15C 中葉	図上復元が可能な資料で、口径約14.2cmである。口縁部が外反するタイプである。口唇部は、丸味を帯びている。文様は、内面に花文？が見られる。釉色は、内外面ともに灰白色（Hue 5Y 8/1）を呈する。素地は明緑灰色（Hue 10GY 7/1）を呈し、粒子は細かい。焼成は、良好である。貫入は若干細かい。器壁の厚さは、5.0mmである。龍泉系。	ナカウ '07 K-11 A I 1205
	22	稜花 皿	口縁部	10.0 － －	15C	図上復元が可能な資料で、口径約10.0cmである。口縁部を稜花に面取りしたものである。腰部を屈曲させ、直線状に開き、口縁部が外反対するタイプである。口唇部は、丸味を帯びている。口縁部内面にヘラ描きの草花文を施し、口縁部外面に圏線文を施している。釉色は、表裏面ともに明オリーブ灰色（Hue 2.5GY 7/1）を呈する。素地は灰白色（Hue 5Y 8/1）を呈し、粒子は細かい。焼成は、良好である。貫入は、見られない。器壁の厚さは、5.0mmである。龍泉系。	ナカウ '07 K 11-12 B 北 V 1217
	23	稜花 皿	口縁部	11.8 － －	15C 中葉 ～ 16C 前半	図上復元が可能な資料で、口径約11.8cmである。口縁部を稜花に面取りしたものである。腰部以下は破損しているが、口縁部外面に屈曲部が僅かに残存している。口縁部は外反対するタイプである。口縁部内面に文様らしきものがあるが、詳細不明である。釉色は、表裏面ともに明青灰色（Hue 10BG 7/1）を呈する。素地は灰白色（Hue 5YR 8/1）を呈し、粒子は粗い。焼成は、良いと思われる。貫入は、見られない。器壁の厚さは、4.0mmである。龍泉系。	ナカウ '07 K-11 A I 1205

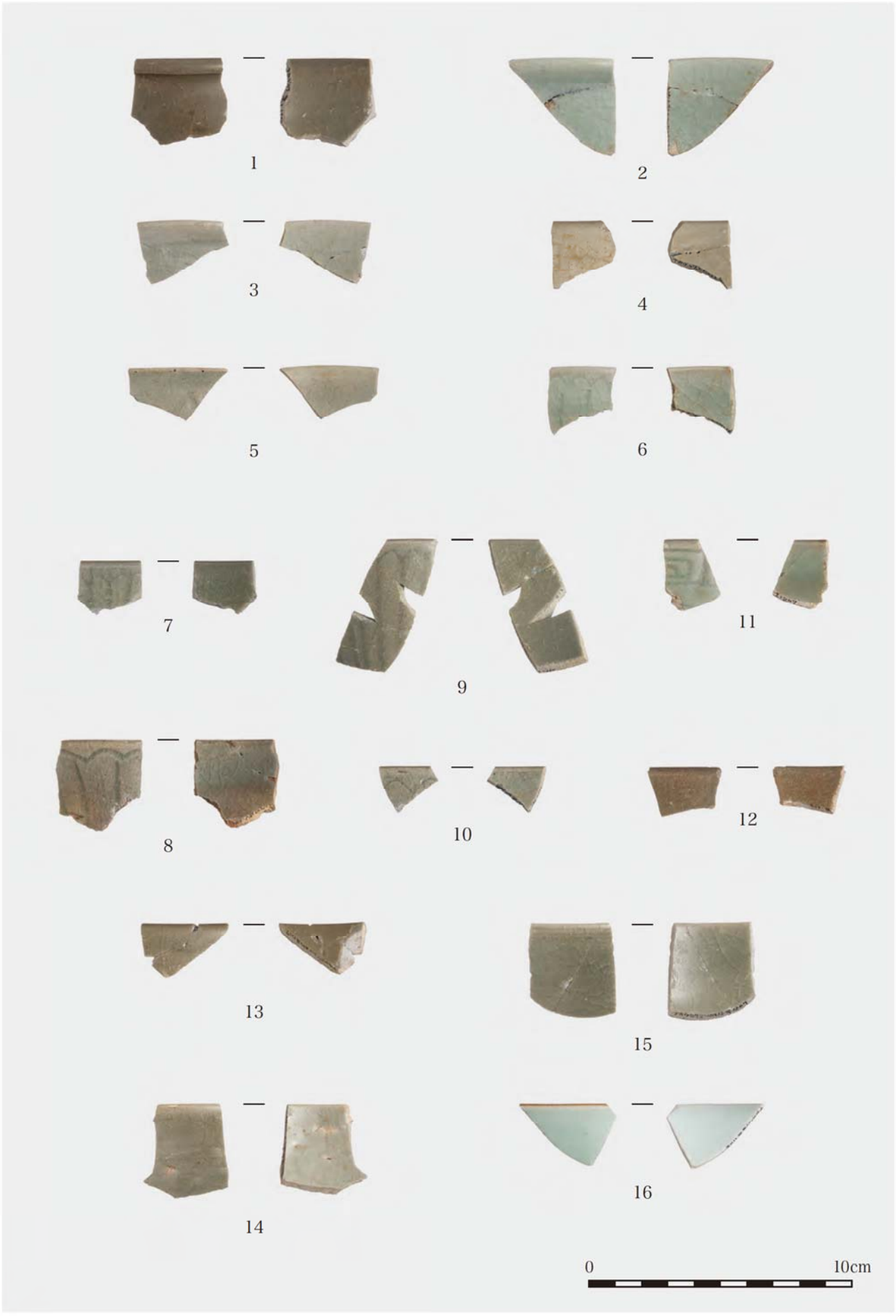
第６表　青磁観察一覧

単位：cm

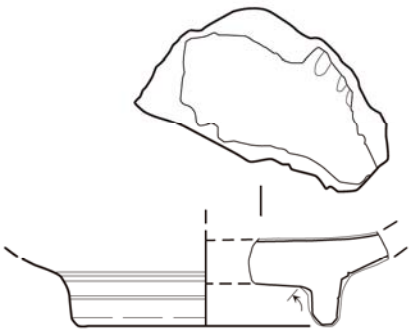
挿図番号 図版番号	番号	器種	部位	口径 器高 底径	年代	観察事項	出土地
第15図 図版６	24	稜花皿	口縁部	－ － －	15C 中葉 ～ 16C	図上復元が不可能な資料である。口縁部を稜花に面取りしたものである。口縁部上端のみの破片で、直口するタイプである。口唇は、舌状を呈する。口縁部内面に文様？が見られるが、詳細不明である。釉色は、表裏面ともに明オリーブ灰色（Hue 2.5YR 7/1）を呈する。素地は灰白色（Hue 5Y 7/2）を呈し、粒子は粗い。焼成は、やや良いと思われる。貫入は、見られない。器壁の厚さは、5.5mmである。龍泉窯。	ナカウ '07 K-11 A Ⅲ 1212
	25	盤	口縁部	21.6 － －	14C 後半 ～ 15C 中葉	図上復元が可能な資料で、口径約21.6cmである。口縁部上端のみの破片で、口縁部を鍔縁状にするタイプで、端部を上方へ引き上げた盤である。口唇部は、舌状を呈する。文様は見られない。釉色は、表裏面ともにオリーブ灰色（Hue 5GY 6/1）を呈する。素地は灰白色（Hue 7.5Y 7/1）を呈し、粒子は粗い。焼成は、やや良いと思われる。貫入は、見られない。器壁の厚さは、5.0mmである。龍泉窯。	ナカウ '07 K-11 A Ⅳ 1218
	26	盤	口縁部	－ － 18.2	明代	図上復元が可能な資料で、口径約18.2cmである。口縁部の破片で、腰部は湾曲を呈し、口縁部を折って仕上げている。口唇部は、平坦である。文様は見られない。釉色は、表裏面ともにオリーブ黄色（Hue 5Y 6/4）を呈する。素地は灰白色（Hue 2.5YR 8/2）を呈し、粒子は細かい。焼成は、良好である。貫入は、見られない。器壁の厚さは、6.0mmである。窯不明。	ナカウ '07 K-11 A Ⅰ 1205
	27	瓶	頸部 ～ 胴部	－ － －	15C 頃	図上復元が不可能な資料である。頸部から胴部までの資料である。頸部から胴部内面に轆轤痕が確認できる。文様は、見られない。釉色は表裏面に差異があり、表面がオリーブ黄色（Hue 5Y 6/3）を呈し、裏面がオリーブ灰色（Hue 10Y 6/2）を呈する。焼成は悪く、焼きにムラが見られる。素地は灰白色（Hue 7.5Y 8/1）を呈するが、焼きにムラがある箇所は浅黄橙色（Hue 7.5YR 8/6）を呈し、粒子は細かい。貫入は、見られない。器壁の厚さは、5.0mmである。龍泉窯。	ナカウ '07 J-11 A Ⅲ 1212
	28	器台？	胴部	－ － －	19C 後半	図上復元が不可能な資料である。胴部の破片である。形状から推定して、器台？とした。胴部には大きな穴が開いていたと考えられる。文様は見られない。釉色は、表面のみで明緑灰色（Hue 5G 7/1）を呈する。裏面は露胎で、素地と露胎部は灰白色（Hue 5Y 8/2）を呈し、粒子は細かい。焼成は、良好である。貫入は見られない。器壁の厚さは、14.0mmである。窯不明。	ナカウ '07 J-11 A Ⅰ 1205



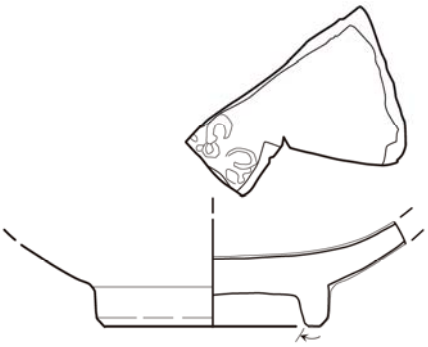
第14図　青磁1　実測図



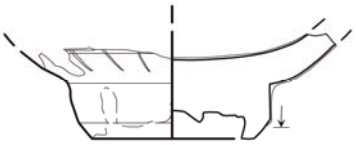
図版５　青磁１



17

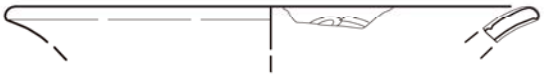


18

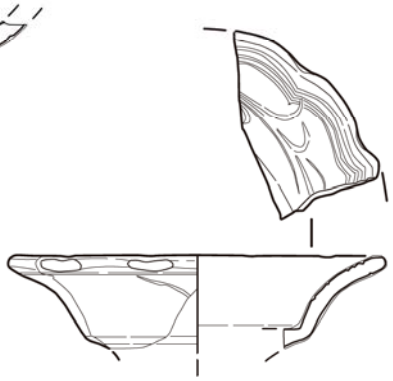


19

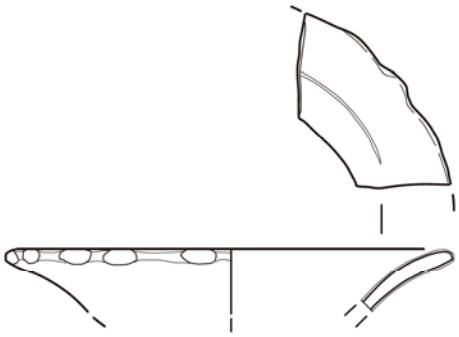
20



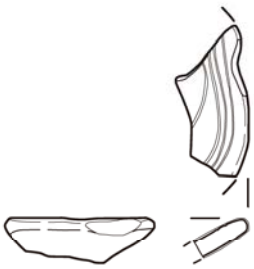
21



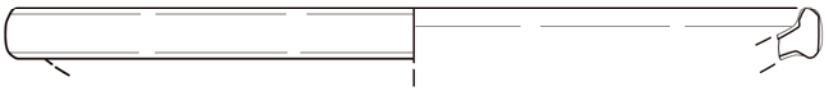
22



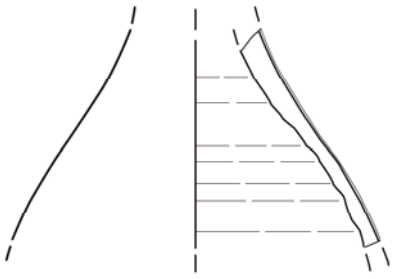
23



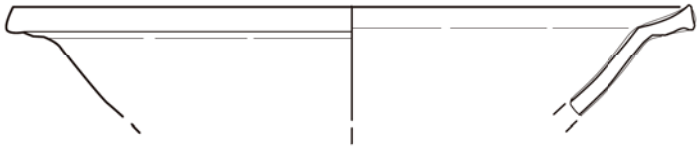
24



25

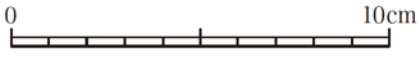


27

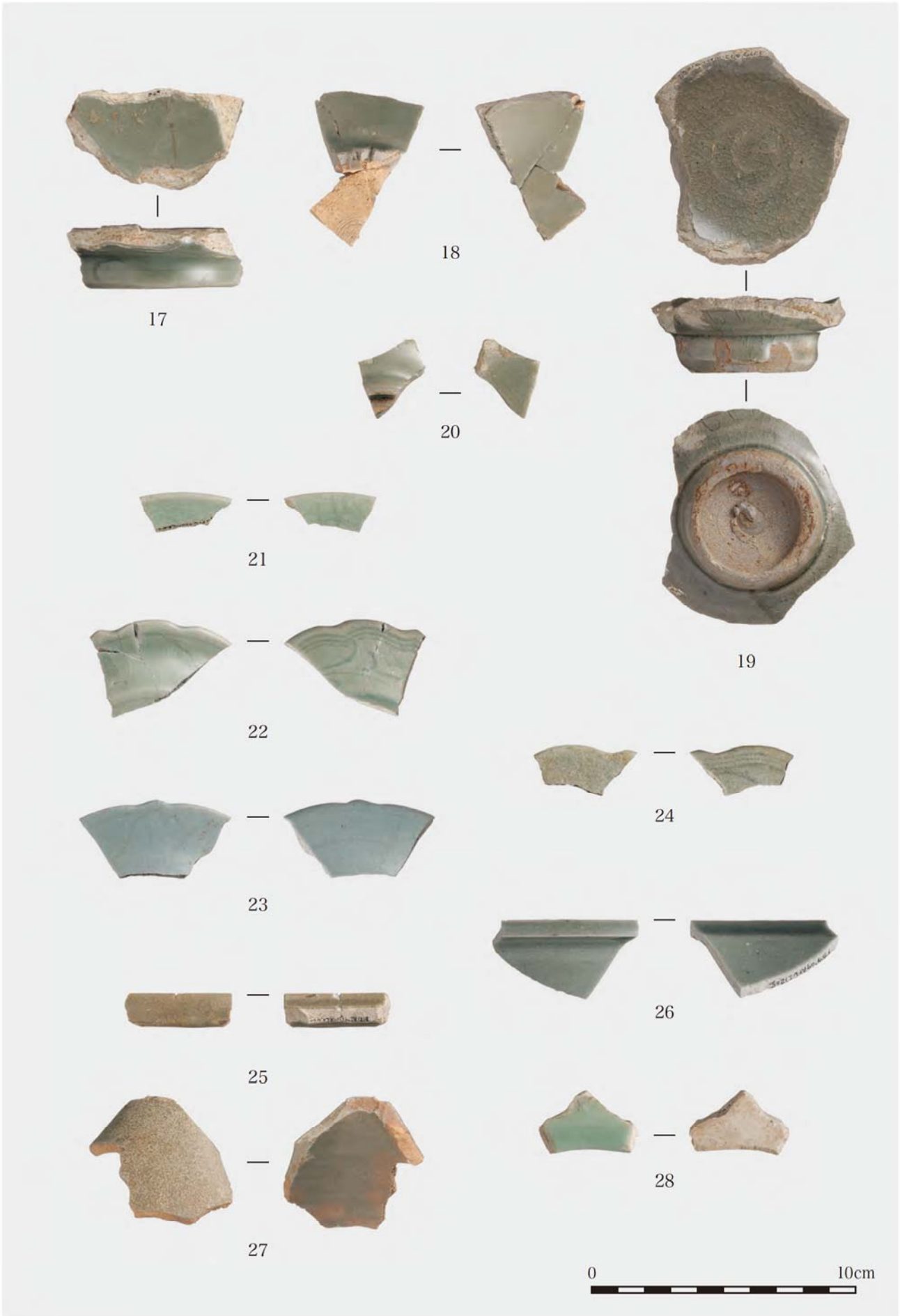


26

28



第15図　青磁２　実測図



図版６　青磁２

第３節　白 磁

白磁は32点得られ、そのうち12点を図化した。器種は碗が３点、小碗が１点、皿が４点、小皿が３点、残り１点が器種不明。時期は15～16世紀頃が多く、焼成地は福建や景徳鎮の製品が見られる。
以下、第８表観察一覧に記す。

【参考文献】

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第51集 首里城跡・真珠道跡『―首里城跡守礼門東側地区・真珠道跡起点及び周辺地区発掘調査報告書―』 2009（平成21）年３月　沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第13集 綾門大道跡『―首里城跡守礼門周辺地区発掘調査報告書―』
2003（平成15）年３月　沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第46集 渡地村跡『―臨港道路那覇1号線整備に伴う緊急発掘調査報告書―』
2007（平成19）年３月　沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第45集 首里城跡『―黄金御殿地区発掘調査報告書―』
2007（平成19）年３月　沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第42集 真珠道跡『―首里城跡真珠道地区発掘調査報告書（Ⅱ）―』
2007（平成19）年３月　沖縄県立埋蔵文化財センター

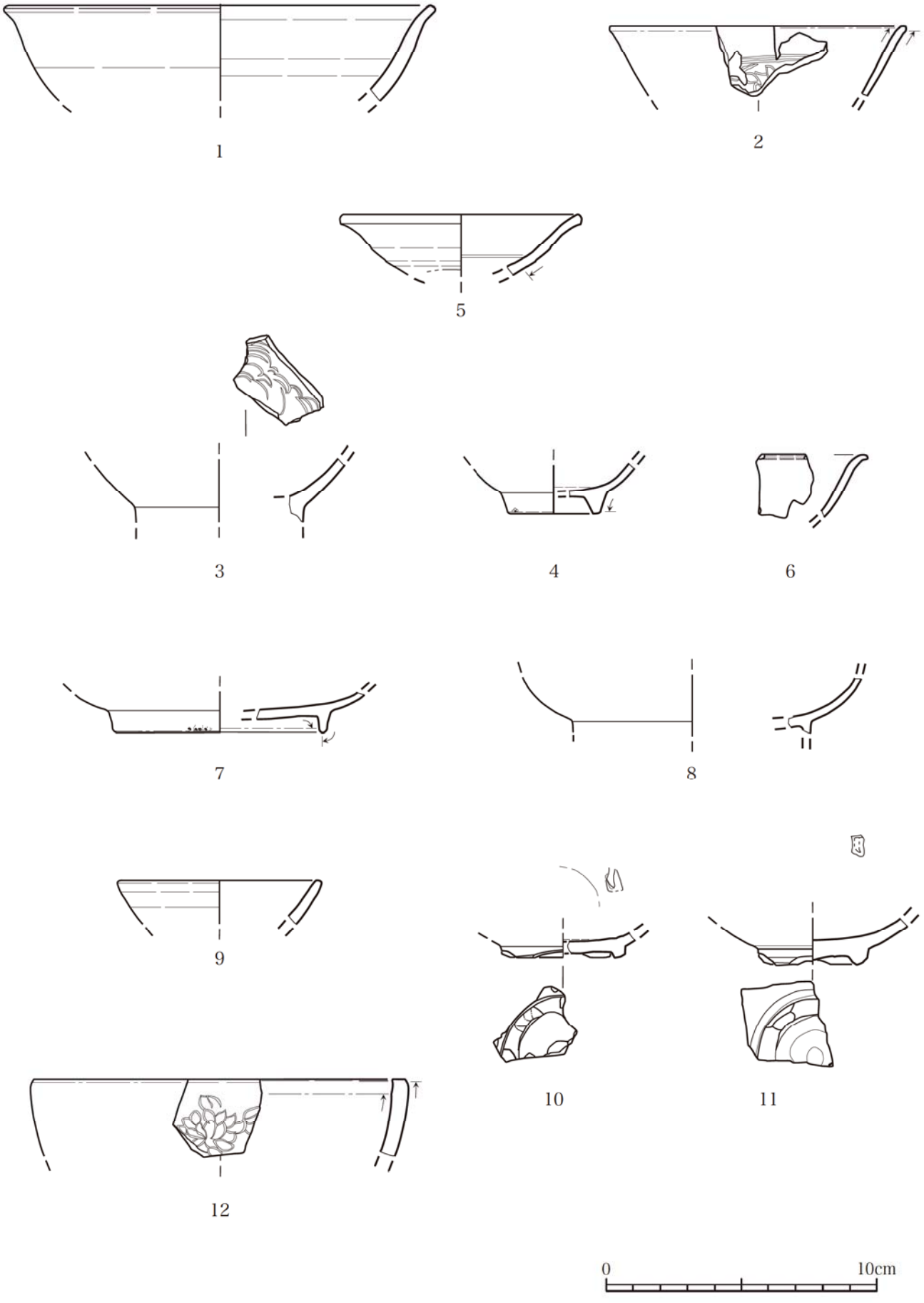
第７表　白磁集計表

		A								B								合計
		J-10	J-10･11	J-11		K-10	K-11		不明	K-10	K-11		K-11･12				K-12	
										東	東		南		北		西	
器種	部位	Ⅳ	SR5	Ⅰ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅲ	Ⅱ	Ⅴ	Ⅰ	
碗	口							1						1	1			3
	胴	1	1			1	2	1		1	1	1				1		10
	底							1										1
小碗	底										1							1
皿	口				1			2										3
	底		1	1								1					1	4
小皿	口							1										1
	底						1	1										2
小杯	胴							1										1
	底									1								1
袋物	胴							1										1
不明	口								1									1
	胴												1				1	2
	不明										1							1
総計		1	2	1	1	1	3	9	1	2	3	2	1	1	1	1	2	32

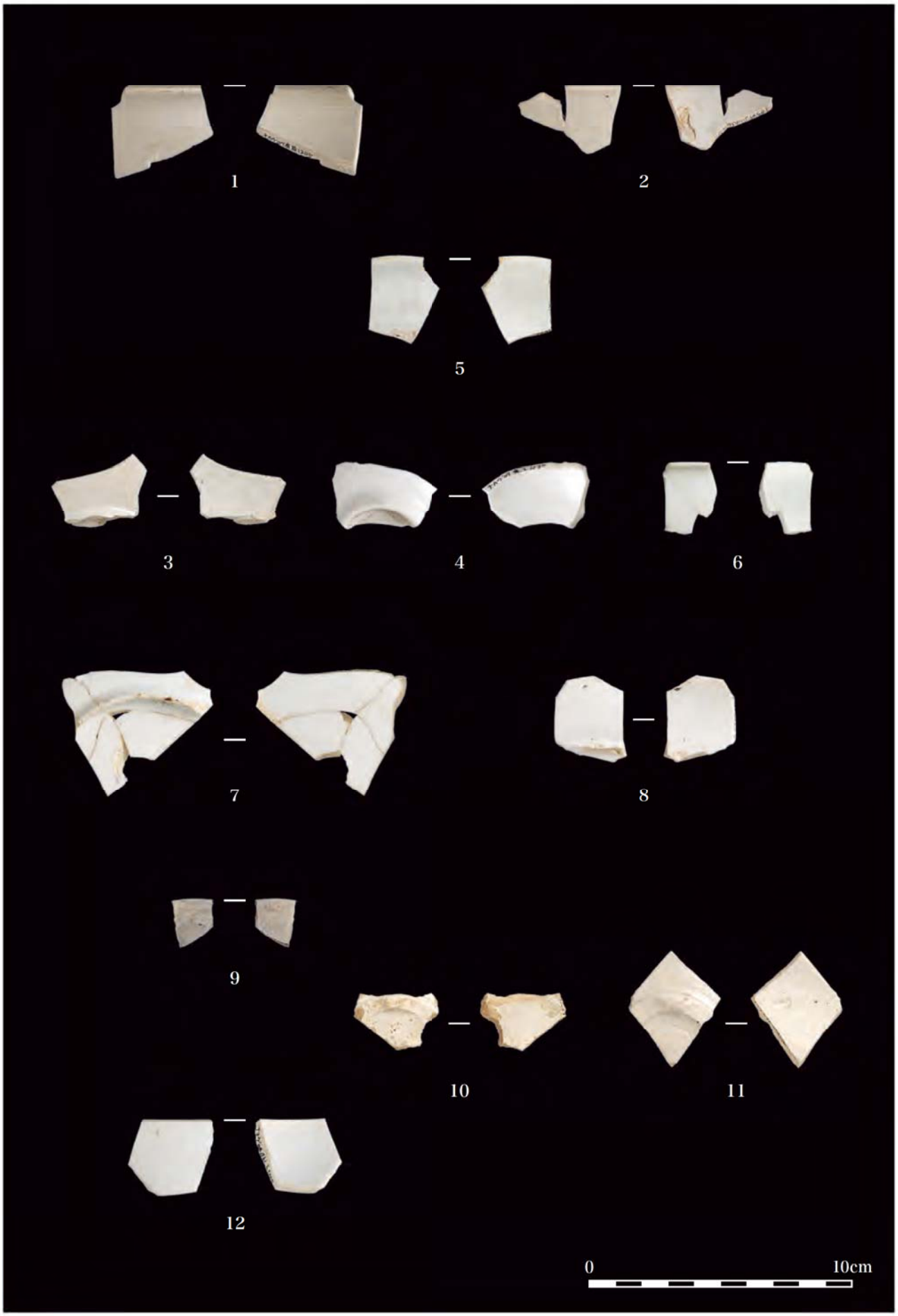
第８表　白磁観察一覧

単位：cm

挿図番号 図版番号	番号	器種	部位	口径	器高	底径	観察事項	出土地
第16図 図版７	1	碗	口縁部	16.0	－	－	口縁部が外反した碗。内外面に轆轤痕あり。 白色の素地に褐色の微粒子が見られる。 透明の釉で灰白色を呈する。貫入はなし。 14 ～ 15 世紀前半頃。	ナカウ'07 K-11･12 B 南 Ⅲ1205
	2	碗	口縁部	10.9	－	－	口唇部は無釉。胴部は直線状に移行する。 内面に陽刻文による花状の波が見られる。 胎土は密で、白と褐色の微粒子が僅かに混じる。 透明釉。貫入はなし。14 世紀頃。	ナカウ'07 J-11 A Ⅳ 1214 ナカウ'07 K-11 A Ⅲ 1211
	3	碗	底 部	－	－	－	比較的高いと思われる高台から、 逆ハの字状に胴部へいたる部分。 内面に陽刻文によって花状の波が施される。 白灰色の素地にやや光沢のある透明釉。内外面に貫入が見られる。15 ～ 16 世紀頃。	ナカウ'07 K-11 A Ⅲ 1212
	4	小 碗	底 部	－	－	3.4	型作り。高台は逆三角形状を呈し、 畳付は細くやや丸味を持つ。畳付から外底面は露胎。 畳付外端に焼成時の砂が溶着している。 素地は白色の微粒子。貫入は見られない。 福建(徳化窯？)。18 ～ 19 世紀前半頃。	ナカウ'07K-11 B 東I1130
	5	皿	口縁部	9.0	－	－	胴部が微弱に膨らみ、口縁部が緩やかに外反する。 口唇は平坦に成形され、内外端に稜を持つ。 内面には陰圏線が廻る。釉は青白色を呈し、 外面胴下部まで施釉。以下露胎となる。 胴部内外面に若干の貫入が見られる。明代。	ナカウ'07 K-11 A Ⅲ 1217
	6	皿	口縁部	－	－	－	外反口縁部片。口縁部は丸味を持つ。 全体に透明釉が掛かり、素地は白色の微粒子。 貫入は見られない。 15 ～ 16 世紀頃。景徳鎮窯。	ナカウ'07 K-11 A Ⅲ 1211
	7	皿	底 部	－	－	7.7	高台は細高く、底面及び器壁も比較的薄手の作り。 釉は畳付を除いて全面に透明釉を施釉。 畳付外端に焼成時の砂が溶着している。 素地は白色の微粒子。貫入は見られない。 15 ～ 16 世紀頃。景徳鎮窯。	ナカウ'07 J-10･11 A SR5 1207
	8	皿	底 部	－	－	－	高台際から緩やかに立ち上がる薄手の皿。 高台は欠損。釉は光沢のある透明釉が施され、 素地は白色の微粒子。貫入はなし。 15 ～ 16 世紀頃。景徳鎮窯。	ナカウ'07 J-11 A I 1205
	9	小皿	口縁部	7.6	－	－	直口を呈する口縁部片。 口唇は丸味を持ち、口唇外端に微弱な稜が見られる。素地は黄灰色の粗粒子。 細かい貫入が全体に見られる。 15 ～ 16 世紀前半頃。福建。	ナカウ '07 K-11 A Ⅲ 1210
	10	小 皿	底 部	－	－	4.5	抉入高台を有する底部片。 高台は低く、底面も薄い。内底面に目痕が見られる。 全体に白色の釉が掛かる。素地は黄色に変色しているが、元は灰白色に近いと思われる。 15 ～ 16 世紀前半頃。福建。	ナカウ '07 K-11 A I 1207
	11	小 皿	底 部	－	－	3.7	やや厚手の小皿。 抉入高台を有する。内底面に目痕が見られる。 釉は白色を呈し、素地は白色の微粒子で、1mm 程の茶褐色粒が混じる。全体に細かい貫入がはいる。 15 ～ 16 世紀前半頃。福建。	ナカウ '07 K-11 A Ⅲ 1214
	12	－	口縁部	13.8	－	－	口縁部は内彎気味に立ち上がり、 口唇は平坦に成形。 口唇及び口縁内側は釉剥ぎされる。 外面には陰沈線によって花文(菊？)が施される。 釉は光沢のある透明釉で、素地は白色の細粒子。	ナカウ '07 A I 1205



第16図　白磁　実測図



図版７　白磁

第４節　青 花

今回の調査で、青花は総数138点が得られた。完形品の出土は無く、全て破片である。景徳鎮窯を主に、漳州窯を産とする資料である。時代幅は、15～19世紀に位置づけられる。詳細は観察一覧に記す。

第９表　青花集計表

出土地		A											B													合計
		J-10	J-10･11		J-11			K-10		K-11			J-11･12	K-10			K-11			K-11･12			K-12	L-11･12		
													北	東						南	北			西	南		
器種	部位	Ⅳ	SR5	SS1	SD1	Ⅰ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅴ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅲ	
碗	口	2							1	6	4	1				1	1	1			2		1		1		21
	胴	2	4	1	1	1		2	3	3	10	1	1		2	2	6		1	2				3	5		50
	底									1	1				2		6					1		3	1		15
小碗	口																1										1
	胴												1			1		2						2			6
	底															1											1
皿	口						1			1	1						1										4
	胴										1		1			2								1			5
	底	1								1					1	1	1							1			6
小皿	底	1																									1
碗か皿	口										1			1												1	3
	胴	1					1			1					1		2	1									7
碗か小鉢	底							1																	1		2
碗か鉢	胴			1																							1
	底										1																1
鉢	口								1																		1
小鉢	口									1																	1
小杯	底																1			1							2
瓶	口																				1						1
	胴		1							1									1				1				4
袋物	胴						1													1		1					3
	底																				1						1
不明	胴										1																1
総計		7	5	2	1	1	3	3	5	15	20	2	3	1	6	8	19	4	2	4	3	3	2	10	8	1	138

第10表　青花観察一覧

単位：cm

挿図番号 図版番号	番号	器種	部位	口径 器高 底径	年代	観察事項	出土地
第17図 図版8	1	碗	口縁部	14.4 － －	17C	図上復元が可能な資料で、推算口径約14.4cmである。腰部から口縁部にかけて、膨らみを持ちながら開く器形である。口縁部は僅かに括れており、端反るタイプである。口唇部は平坦である。文様は、口縁部外面に筆描きの花文？を施している。粒子は細かく焼成は良好である。貫入は見られない。福建・広東。	ナカウ'07 L-11･12 B南 I 1203
	2	碗	口縁部	13.0 － －	17C	図上復元が可能な資料で、推算口径約13.0cmである。口縁部の資料で、口縁部が若干端反るタイプである。文様は口縁部外面に筆描きの花文？を施している。粒子は細かく焼成は良好である。貫入は細かい。福建・広東。	ナカウ'07 K-11 A I 1205

第10表　青花観察一覧

単位：cm

挿図番号 図版番号	番号	器種	部位	口径 器高 底径	年代	観察事項	出土地
第17図 図版8	3	碗	口縁部	12.6 － －	17C ～ 18C 前半	図上復元が可能な資料で、推算口径約12.6cmである。腰部から口縁部にかけて、緩やかに曲線を描き、直口する器形である。口唇部は丸味を帯びている。文様は口縁部外面に筆描きの文様を施している。釉薬は口縁部内面部の見込み付近まで施されている。粒子は粗く焼成は悪い。貫入が見られる。福建・広東。	ナカウ '07 J-10 A Ⅳ 1207
	4	碗	口縁部	14.0 － －	17C ～ 18C 前半	図上復元が可能な資料で、推算口径約14.0cmである。腰部から逆「ハ」字状に立ち上がるタイプである。口縁部は端反るタイプである。口唇部は丸味を帯びるタイプである。文様は口縁部外面に筆描きの文様を施している。粒子は細かく焼成は良好である。貫入は見られない。福建・広東。	ナカウ '07 K-11 A Ⅰ 1205
	5	碗	口縁部	14.1 － －	17C 後半 ～ 18C 前半	図上復元が可能な資料で、推算口径約14.1cmである。腰部から逆「ハ」字状に立ち上がるタイプである。口縁部は端反るタイプである。口唇部は舌状を呈する。文様は表裏面に施されている。表面には崩れた「壽」字を施している。裏面には圏線文が一条施されている。粒子は細かく貫入は見られない。福建。	ナカウ '07 K-11・12 B 北 Ⅰ 1109
	6	碗	口縁部	－ － －	18C	図上復元が不可能な資料である。口縁部の破片で、僅かに端反るタイプである。口唇部は丸味を帯びている。文様は表裏面に施されている。口縁部外面には圏線文と雷文、二条の圏線文、獣文？を施している。口縁部裏面には圏線文が一条施されている。粒子は細かく焼成は良好である。貫入は見られない。景徳鎮。	ナカウ '07 K-11 A Ⅳ 1214
	7	小鉢	口縁部	－ － －	15C 末 ～ 16C 前半	図上復元が不可能な資料である。口縁部の破片で、ほぼ直口状を呈する。口唇部は舌状を呈する。文様は表裏面に施している。表面の文様は小片のため不明。文が施されている。裏面には圏線文が施されている。粒子は細かく焼成は良好である。貫入は見られない。景徳鎮。	ナカウ '07 K-11 A Ⅰ 1205
	8	碗	口縁部	－ － －	15C 後半 ～ 16C	図上復元が不可能な資料である。口縁部の破片で、逆「ハ」の字状に開き、端反るタイプである。文様は表裏面に施している。表面には草花文を施している。裏面には、二条の圏線文を施している。粒子は細かく焼成は良い。貫入は見られない。景徳鎮。	ナカウ '07 K-11 A Ⅲ 1212
	9	碗	口縁部	－ － －	16C ～ 17C 前半	図上復元が不可能な資料である。口縁部の破片で、ほぼ直口するタイプである。文様は表裏面に施されている。表面には二条の圏線文と草花文が施されている。裏面には二条の圏線文が施されている。粒子は細かく焼成は良好である。貫入は見られない。景徳鎮。	ナカウ '07 K-10 B 東 Ⅲ 1108
	10	碗	口縁部	－ － －	16C 後半 ～ 17C 初頭	図上復元が不可能な資料である。口縁部の破片で、直口するタイプである。口唇部は丸味を帯びている。文様は口縁部表面のみで、圏線文と波文、二条の圏線文が見られる。粒子は細かく焼成は良好である。貫入は見られない。景徳鎮。	ナカウ '07 K-11 A Ⅲ 1212
	11	碗	口縁部	－ － －	16C 後半 ～ 17C 前半	図上復元が不可能な資料である。口縁部の破片で、直口するタイプである。口唇部は丸味を帯び鉄釉が施されている。文様は表裏面に施している。表面には二条の圏線文と草花文？を施している。裏面には二条の圏線文を施している。粒子は細かく焼成は良好である。貫入は見られない。景徳鎮。	ナカウ '07 K-11 A Ⅲ 1212
	12	碗	口縁部	－ － －	17C	図上復元が不可能な資料である。口縁部の破片で、逆「ハ」の字状に開き、端反るタイプである。口唇部は舌状を呈する。文様は表裏面に施されている。表面には圏線文と「金」の文字が施されている。裏面には圏線文が施されている。粒子は細かく焼成は良好である。貫入は見られない。景徳鎮。	ナカウ '07 K-11 A Ⅰ 1207
	13	碗	口縁部	－ － －	17C 後半 ～ 18C	図上復元が不可能な資料である。口縁部の破片で、逆「ハ」の字状に開き、直口するタイプである。口唇部は舌状を呈する。文様は表裏面に施している。表面には圏線文と草花文？を施す。裏面には圏線文を施す。粒子は細かく焼成は良好である。貫入は見られない。景徳鎮系。	ナカウ '07 K-11 B 東 Ⅰ 1203

第10表　青花観察一覧

単位：cm

挿図番号 図版番号	番号	器種	部位	口径 器高 底径	年代	観察事項	出土地
第17図 図版8	14	碗	口縁部	－ － －	18C後半～19C初頭	図上復元が不可能な資料である。口縁部の破片で、逆「ハ」の字状に開き、直口するタイプである。文様は表裏面に施されている。表面には草花文？を施している。口唇部から裏面にかけて一条の圏線文を施している。粒子は細かく焼成は良好である。貫入は見られない。景徳鎮。	ナカウ'07 K-11・12 B 北 I 1109
	15	碗	口縁部	－ － －	17C後半～18C中葉	図上復元が不可能な資料である。口縁部の破片で、逆「ハ」の字状に開き、端反るタイプである。口唇部は舌状を呈する。文様は口縁部外面に筆描きの文様を施している。粒子は若干細かく焼成は悪い。貫入は見られない。福建・広東。	ナカウ'07 K-11 B 東 II 1115
	16	碗	口縁部	－ － －	17C後半～18C中葉	図上復元が不可能な資料である。口縁部の破片で、逆「ハ」の字状に開くタイプである。口縁部を折って、端反るタイプである。文様は表裏面に施されている。表面は圏線文と筆描きの文様を施している。裏面は圏線文を施している。、粒子は若干細かく焼成は悪い。貫入は粗い。福建・広東。	ナカウ'07 K-11・12 B 北 V 1217
	17	碗	口縁部	－ － －	18C	図上復元が不可能な資料である。口縁部の破片で、腰部から湾曲し、口縁部は端反るタイプである。口唇は舌状である。文様は表裏面に施されている。表面には圏線文と花文を施している。裏面は圏線文を施している。粒子は若干細かく焼成は良好である。貫入は見られない。福建。	ナカウ'07 K-11 A I 1205
	18	碗	口縁部	－ － －	17C～18C前半	図上復元が不可能な資料である。口縁部の破片で、直口するタイプである。口唇部は丸味を帯びるタイプである。文様は表裏面に施されている。表面には二条の圏線文が施されている。裏面には一条の圏線文が施されている。粒子は細かく焼成は良好である。貫入は見られない。粗製である。福建・広東。	ナカウ'07 K-11 A I 1205
	19	碗	口縁部	－ － －	17C	図上復元が不可能な資料である。口縁部の破片で、逆「ハ」の字状に開くタイプである。口縁部を折って、端反るタイプである。口唇は丸味を帯びている。文様は表裏面に施されている。表面は文様らしきものが確認できる。裏面は圏線文を施している。粒子は細かく焼成は良好である。貫入は見られない。福建・広東。	ナカウ'07 K-11 A I 1205
第18図 図版9	20	碗か 小鉢	底部	－ － 4.2	16C前半	図上復元が可能な資料で、推算底径約4.2cmである。高台脇から逆「ハ」の字状に開き、胴下部で「く」の字状に屈曲する腰折のタイプである。文様は表裏面に施されている。表面には高台脇と胴部下端に二条の圏線文と二組の文様が施されているが小片のため不明である。見込みには二条の圏線文と植物文？が施されている。畳付けは露胎である。粒子は細かく焼成は良い。貫入は見られない。景徳鎮。	ナカウ'07 K-10 A I 1205
	21	碗	底部	－ － 5.4	15C後半～16C？	図上復元が可能な資料で、推算底径約5.4cmである。高台脇から緩やかに開くタイプである。文様は表裏面に施されている。見込みに二条の圏線文と植物文が施されている。表面には高台に二条、高台脇に一条の圏線文、胴部に蓮弁文が施されている。畳付けは露胎である。粒子は細かく焼成は良い。貫入は見られない。景徳鎮系。	ナカウ'07 K-11 A III 1211
	22	碗か 小鉢	底部	－ － 5.3	16C末～17C初	図上復元が可能な資料で、推算底径約5.3cmである。畳付けからほぼ直線状に立ち上がり、胴下部で「く」の字状に屈曲する腰折のタイプである。文様は表裏面に施されている。見込みには二条の圏線文と植物文が施されている。表面には高台部分に二条の圏線文、胴下部に筆書きによる文様が施されている。畳付けは露胎である。粒子は粗く焼成は良好である。貫入は見られない。景徳鎮。	ナカウ'07 L-11・12 B 南 I 1203
	23	碗	底部	－ － 4.2	16C前半	図上復元が可能な資料で、推算底径が約4.2cmである。同資料は、見込みが下に垂れる蓮子（レンツウ）型である。器形は、高台脇から緩やかに開くタイプである。文様は表裏面に施されている。表面には芭蕉文が施されている。見込みには、蓮の花の文様が施されている。高台脇から畳付けは露胎である。粒子は粗く焼成は良好である。貫入は見られない。景徳鎮。	ナカウ'07 L-11・12 B 南 I 1122

第10表　青花観察一覧

単位：cm

挿図番号 図版番号	番号	器種	部位	口径 器高 底径	年代	観察事項	出土地
第18図 図版9	24	碗	底部	－ － 4.9	17C 後半 ～ 18C	図上復元が可能な資料で、推算底径が約4.9cmである。畳付けからほぼ直線状に立ち上がるタイプである。文様は表裏面に施されている。高台内面に一条の圏線文が施されている。見込みには葉文が施されている。畳付けは露胎である。粒子は細かく焼成は良好である。貫入は見られない。景徳鎮。	ナカウ '07 K-11 B 東 I 1130 ナカウ '07 K-11 B 東 I 1203
	25	碗	底部	－ － 4.1	18C 後半 ～ 19C 初頭	図上復元が可能な資料で、推算底径が約4.1cmである。高台はほぼ直線状に立ち上がり、逆「ハ」の字状に開くタイプである。文様は表裏面に施されている。表面には梵字が満遍なく施されている。高台に二条の圏線文が施されている。高台内面に圏線文と銘款が施されている。裏面に二条の圏線文と表面と同じ様な梵字が施されている。畳付けは露胎である。焼成は良く貫入は見られない。景徳鎮。	ナカウ '07 K-10 B 東 II 1122
	26	碗	底部	－ － 7.6	17C	図上復元が可能な資料で、推算底径が約7.6cmである。高台内外面から斜めに削り、畳付けが尖った形状を呈する。器形は胴部から逆「ハ」の字状に開くタイプである。表面に筆書きの文様が施されている。高台（外面）部分から高台内面と見込みは露胎である。粗製で焼成は良くない。貫人は粗い。福建・広東。	ナカウ '07 K-11 A I 1205
	27	碗	底部	－ － －	17C 後半 ～ 18C 中葉	図上復元が不可能な資料である。残存する高台部分から推定すると、高台は逆「ハ」の字状に立ち上がり、高台脇から緩やかに開くタイプである。高台部分は高台脇から削られている。表面に筆書きによる文様が施されている。畳付けの部分が破損しているので、詳細不明である。粒子は粗く焼成は悪い。貫入は僅かに見られるが、やや細かい。福建・広東。	ナカウ '07 K-11 B 東 I
	28	碗	底部	－ － 6.7	18C	図上復元が可能な資料で、推算底径が約6.7cmである。高台が高いタイプである。畳付けからほぼ直線状に立ち上がるタイプである。高台脇から緩やかに開くタイプである。文様は表面のみに施されている。高台脇に一条の圏線文と胴部に筆書きによる文様が施されている。畳付けは露胎である。焼成は良い。貫入は見られない。福建。	ナカウ '07 K-10 B 東 II
	29	碗	底部	－ － 6.6	18C	図上復元が可能な資料で、推算底径が約6.6cmである。高台脇から逆「ハ」の字状に立ち上がるタイプである。胴部から緩やかに開くタイプである。文様は表面と高台内に施されている。それぞれ一条若しくは二条の圏線文が施されている。畳付けは露胎である。粒子は粗く焼成は良い。貫入は見られない。福建。	ナカウ '07 K-11 B 東 I 1130
	30	小碗	底部	－ － 3.8	18C 末 ～ 19C 前半	図上復元が可能な資料である。畳付けから逆「ハ」の字状に立ち上がるタイプである。高台脇からやや緩やかに開くタイプである。文様は表裏面並びに、高台内面に施されている。表面には霊芝文、見込みには花弁文、高台内面には銘款（款識）　が施されている。畳付けは露胎である。粒子は、やや粗く釉薬内に気泡が見られる。焼成は、良い。貫入は見られない。窯不明。	ナカウ '07 K-10 B 東 III 1112
	31	碗	底部	－ － －	18C	図上復元が不可能な資料である。畳付けから逆「ハ」の字状に立ち上がるタイプである。高台脇から緩やかに開くタイプである。畳付けは露胎である。表面には龍文が施され、足と爪が描かれている。粒子は細かく焼成は細良い。貫入は見られない。福建。	ナカウ '07 K-12 B 西 I 1113
第19図 図版10	32	碗	口縁部	13.8 － －	16C	図上復元が可能な資料で、推算口径約13.8cmである。口縁部の破片資料で、逆「ハ」の字状に開くタイプである。口唇部はやや舌状である。文様は表裏面に施されている。表面には二条の圏線文と花唐草文が施されている。裏面には口唇部近くに二条の圏線文が施されている。粒子は粗く焼成は良い。貫入は見られない。景徳鎮。	ナカウ '07 K-11 A III 1212
	33	皿	口縁部	－ － －	17C	図上復元が不可能な資料である。口縁部の破片で、器形は開くタイプである。口唇部は丸みを帯びている。文様は表裏面に施されている。表面には二条の圏線文と花唐草文が施されている。裏面には、口唇部近くに圏線文が施されている。粒子は粗く焼成は良い。貫入は裏面に見られる。景徳鎮。	ナカウ '07 J-11 A III 1212

第10表　青花観察一覧

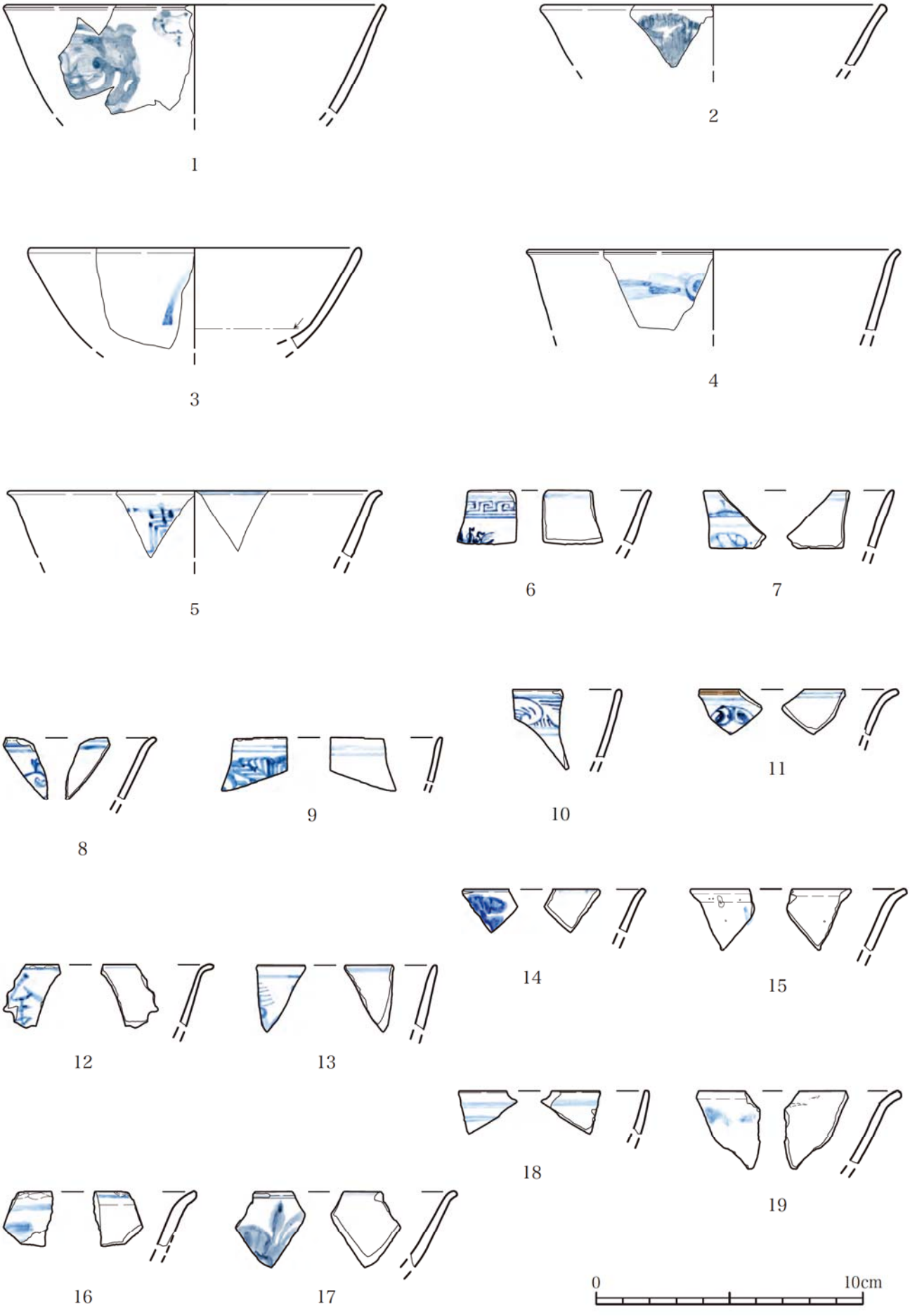
単位：cm

挿図番号 図版番号	番号	器種	部位	口径 器高 底径	年代	観察事項	出土地
第19図 図版10	34	碗か皿	口縁部	－ － －	16C ～ 17C	図上復元が不可能な資料である。口縁部の破片で、ラッパ状に開くタイプである。文様は表裏面に施されている。両面ともに口唇部付近に二条の圏線文が施されている。粒子は粗く焼成は良い。貫入は、見られない。景徳鎮。	ナカウ '07 K-10 B 東 I 1115
	35	小皿	底部	－ － 5.3	16C 前半	図上復元が可能な資料で、推算底径が約5.3cmである。高台が低く、畳付けから逆「ハ」の字状に開くタイプである。高台脇から緩やかに立ち上がり、直線上に開くタイプである。文様は表裏面に施されている。表面には圏線文と如意頭繋き文が施されている。裏面には二条の圏線文と如意頭綴き文が施され、見込みには草花文が施されている。畳付けは露胎である。粒子は粗く焼成は良いが、高台部分にひび割れが確認できる。貫入は見られない。景徳鎮。	ナカウ '07 J-10 A IV 1212
	36	皿	底部	－ － 9.1	清代	図上復元が可能な資料で、推算底径が約9.1cmである。畳付けから逆「ハ」の字状に立ち上り、高台脇からかなり緩やかに開くタイプである。文様は高台部分と見込みに施されている。それぞれ圏線文が施されるが、高台部分は二条、見込みは一条施されている。畳付けは、露胎である。粒子は粗く焼成は良い。貫入は見られない。景徳鎮。	ナカウ '07 K-12 B 西 I 1113
	37	碗か	底部	－ － 5.8	明代 ？	図上復元が可能な資料で、推算底径が約5.8cmである。畳付けから高台脇までほぼ直線状に立ち上がり、高台脇から緩やかに立ち上がるタイプである。文様は見込みに施されている。圏線文が一条施されている。粒子は粗く焼成は良い。貫入は見られない。特殊。窯不明。	ナカウ '07 K-11 B 東 I
	38	皿	口縁部	－ － －	19C 前半 ～ 19C 中葉	図上復元が不可能な資料である。口縁部の破片で、逆「ハ」の字状に開くタイプである。口唇部は、やや丸みを帯びている。文様は表裏面と口唇部に施されている。口唇には圏線文が施されている。表面には筆書きによる文様が斜位に施されている。裏面には二条の圏線文と筆書きによる文様が施されている。粒子は粗く焼成は良いが、被熱を受けている。表裏面に気泡が目立つ。貫入は見られない。景徳鎮。	ナカウ '07 K-11 B 東 I
	39	皿	口縁部	－ － －	18C	図上復元が不可能な資料である。口縁部の破片で、逆「ハ」の字状に開くタイプである。口唇部は舌状を呈している。文様は表裏面に施されている。表面には雲文が施されている。裏面には草花文が施されている。粒子は粗く焼成は良い。貫入は見られない。福建。	ナカウ '07 K-11 A III 1212
	40	皿	底部	－ － 6.9	16C ～ 16C 中葉	図上復元が可能な資料で、推算底径が約6.9cmである。畳付けから逆「ハ」の字状に立ち上がり、高台脇から丸みを帯びながら立ち上がるタイプである。文様は表裏面に施されている。高台と高台脇にそれぞれ一条の圏線文が施されている。見込みに二条の圏線文と玉取獅子が施されている。粒子は粗く焼成は、良い。貫入は粗く、鮮明でない。景徳鎮。	ナカウ '07 J-10 A IV 1207
	41	皿	底部	－ － 10.1	17C 前半	図上復元が可能な資料で、推算底径が約10.1cmである。畳付けから逆「ハ」の字状に立ち上がり、高台脇から緩やかに開くタイプである。文様は表裏面に施されている。表面は高台脇に一条の圏線文が施されている。見込みには植物文が施されている。高台内面の僅かな部分と、畳付けから高台付近では露胎である。粒子は細かく焼成は良い。貫入は見られない景徳鎮。	ナカウ '07 K-10 B 東 III 1107
	42	皿	底部	－ － 10.8	18C	図上復元が可能な資料である。畳付けからほぼ直線状に開き、高台脇から緩やかに開くタイプである。文様は表裏面に施されている。高台脇に一条の圏線文が施されている。高台内面に二条の圏線文が見られるが、詳細は不明である。見込みに二条の不明瞭な圏線文と筆書きによる文様が施されている。畳付けは露胎である。粒子は細かく焼成は良い。貫入は見られない。景徳鎮。	ナカウ '07 K-10 B 東 II 1109
	43	皿	底部	－ － －	15C 末 ～ 16C	図上復元が不可能な資料である。高台部分が破損している。高台脇から逆「ハ」の字状に開くタイプである。文様は表裏面に施されている。裏面には植物文、胴部と高台脇、高台に一条の圏線文が施されている。見込みには二条の圏線文と梅の木の文様が施されている。粒子は粗く焼成は良い。貫入は見られない。景徳鎮。	ナカウ '07 K-11 B 東 I 1203

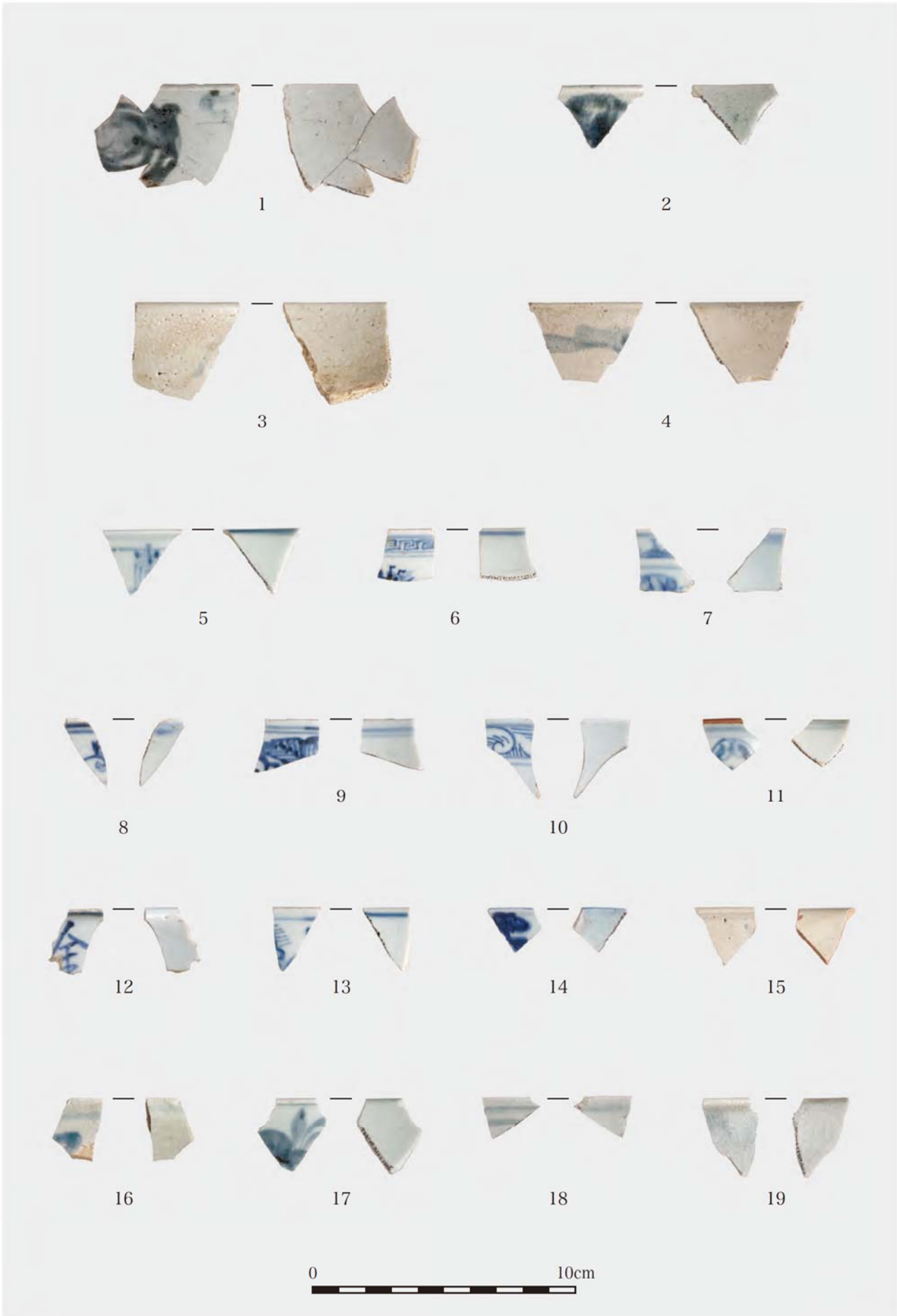
第10表　青花観察一覧

単位：cm

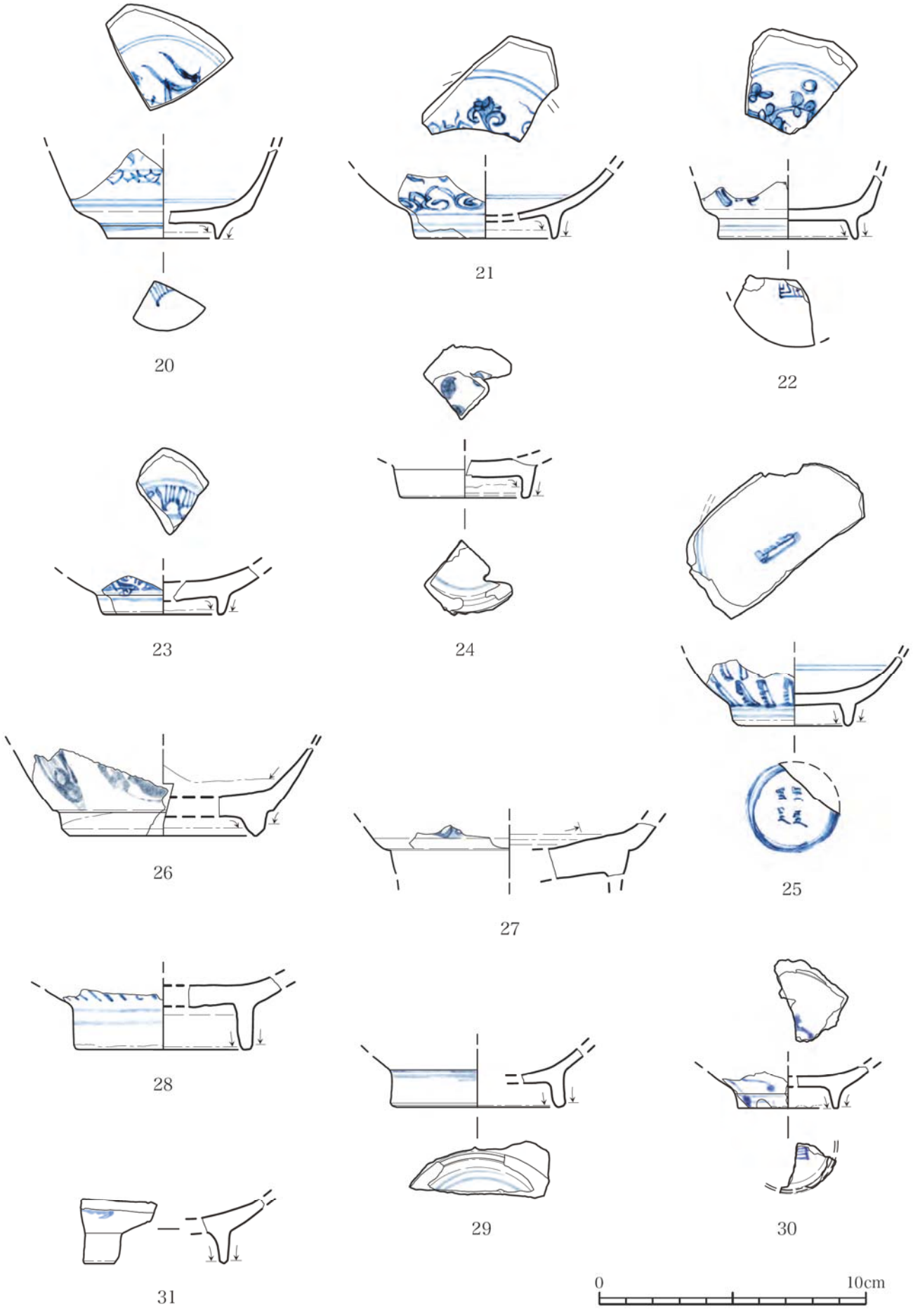
挿図番号 図版番号	番号	器種	部位	口径 器高 底径	年代	観察事項	出土地
第20図 図版11	44	鉢	口縁部	－ － －	17C 前半	図上復元が不可能な資料である。口縁部の破片で、口唇部が破損している。器形は逆「ハ」の字状に開くタイプである。文様は表裏面に施されている。表面には一条の圏線文と筆書きによる文様が施されている。表裏面には口唇部付近に一条、中段に二条の圏線文を施し、その間に二条の波状文を施すが、お互いがずれている。粒子は粗く焼成は良い。貫入は見られない。福建・漳州窯。	ナカウ '07 K-10 A Ⅲ 1213
	45	碗	底部	－ － 6.4	16C	図上復元が可能な資料で、推算底径が約6.4cmである。畳付けからほぼ直線状に立ち上がり、高台脇から丸みを帯びながら、立ち上がるタイプである。文様は表裏面に施されている。胴部に草花文が施されている。見込みに一条の圏線文と、草花文が施されている。畳付けは露胎である。高台内に放射状の鉋痕が見られる。粒子は粗く焼成は良い。貫入は粗い。景徳鎮。	ナカウ '07 K-12 B 西 Ⅰ 1113
	46	小杯	底部	－ － 2.8	16C 後半	図上復元が可能な資料で、推算底径が約2.8cmである。高台は殆ど破損しており、残存する部分からすると畳付けからほぼ直線状に立ち上がり、高台脇から曲線を描きながら立ち上がるタイプである。破損が著しい。文様は表裏面に施されている。表面に一条の圏線文が施されている。高台内面に崩れた「福」の文字が施されている。見込みには圏線文と植物文？が施されている。高台部分から畳付けまで露胎である。焼成は悪く貫入は見られない。景徳鎮。	ナカウ '07 K-11 B 東 Ⅰ 1114
	47	小杯	底部	－ － 2.0	17C	図上復元が可能な資料で、推算底径が約2.0cmである。小型な杯である。畳付けからほぼ直線状に立ち上がり、高台脇からほぼ強めに立ち上がるタイプである。文様は表裏面に施されている。高台に一条の圏線文が施されているが、一部のみである。胴部にも文様と思われるものが施されているが、詳細不明である。見込みに筆書きによる文様が施されている。畳付けから高台内面は露胎である。粒子は粗く焼成は良い。貫入は見られない。景徳鎮。	ナカウ '07 K-11・12 B 南 Ⅰ 1204
	48	袋物	胴部	－ － －	15C 後半 ～ 16C 前半	図上復元が可能な資料で、推算胴径が約8.8cmである。胴部破片で、肩部から胴部最大部分へ緩やかに下るタイプである。内面に有段が見られ、轆轤痕？も見られる。文様は表面のみに施されている。表面に三条の圏線文と筆書きによる文様が見られる。粒子は細かく焼成は良い。貫入は見られない。景徳鎮。胴径約8.8cm。	ナカウ '07 K-11・12 B 南 Ⅰ 1204
	49	袋物	胴部	－ － －	15C 後半 ～ 16C 前半	図上復元が可能な資料で、推算胴径が約9.6cmである。肩部からなだらかに開くタイプの器形である。内面に有段が見られる。文様は表面のみに施されている。表面には二条の圏線文と草花文が施されている。裏面に陽刻状のものが確認できるが、文様かどうか不明である。粒子は粗く焼成は良い。貫入は見られない。景徳鎮。胴径約9.6cm。	ナカウ '07 J-11 A Ⅲ 1212
	50	袋物	底部	－ － 10.0	18C 後半 ～ 19C 前半	図上復元が可能な資料で、推算底径が約10.0cmである。畳付けからほぼ直線状に立ち上がる器形である。畳付けと高台内面、内面は露胎である。文様は表面のみに施されている。表面に二条二組の圏線文が施されている。焼成は良く貫入は見られない。火入れ的な物。景徳鎮の可能性がある。	ナカウ '07 K-11・12 B 北 Ⅰ 1109
	51	瓶	口縁部	－ － －	15C 後半 ～ 16C	図上復元が不可能な資料である。口縁部が端反状に開くタイプである。文様は表裏面に施されている。表裏面ともに二条の圏線文が施されている。粒子は粗く焼成は良い。貫入は表面では見られないが、裏面では粗い。景徳鎮。	ナカウ '07 K-11・12 B 北 Ⅱ 1113
	52	瓶	胴部	－ － －	15C 後半 ～ 16C 前半	図上復元が可能な資料である。器形は肩部から胴上部へなだらかに開くタイプである。内面に僅かながら有段が確認され、方形状に面取りされている。文様は表面のみに施されている。表面に二条の圏線文と雲文？、草花文が施されている。粒子は粗く焼成は良い。貫入は見られない。景徳鎮。	ナカウ '07 K-11 B 東 Ⅲ 1203



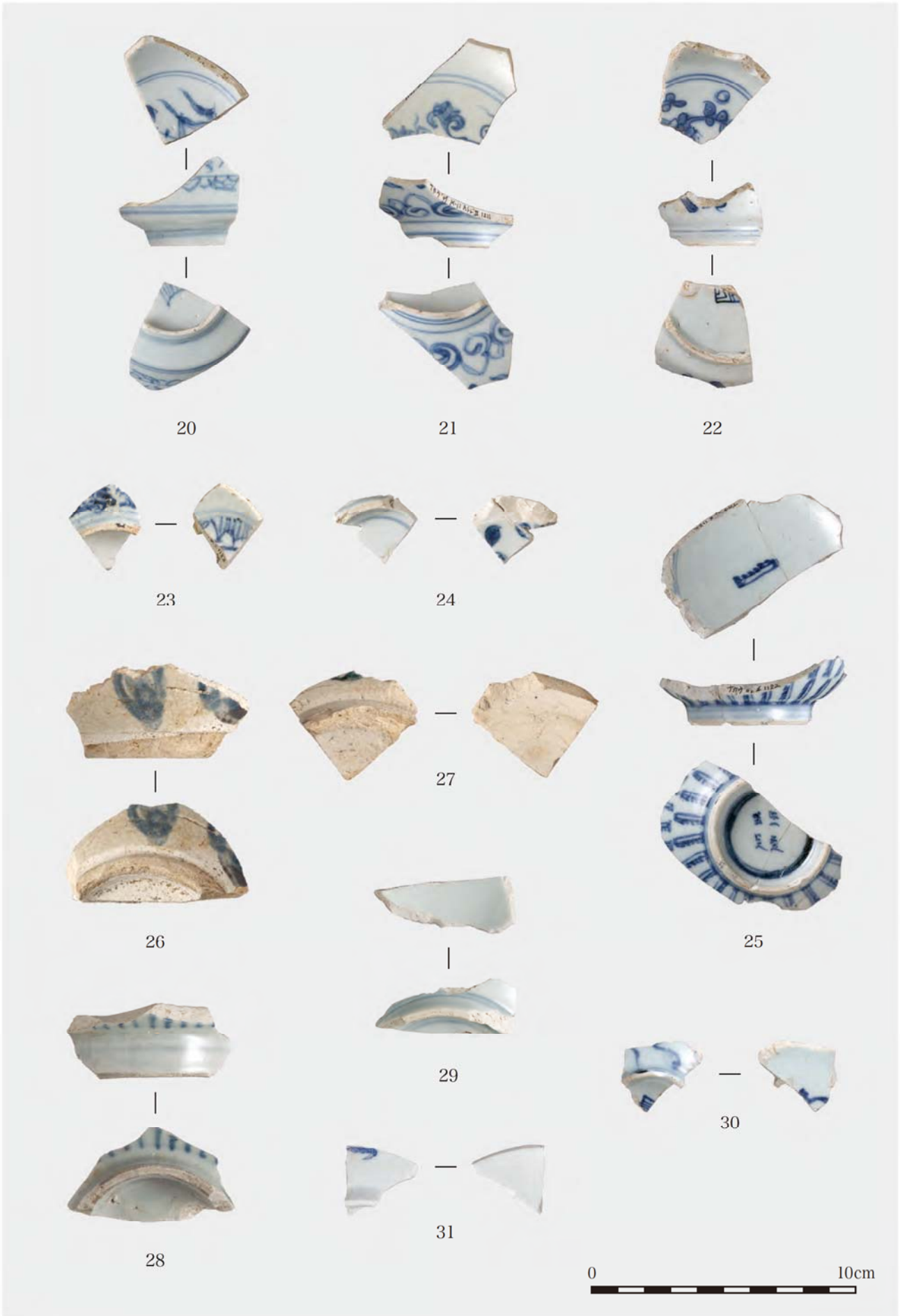
第17図　青花1　実測図



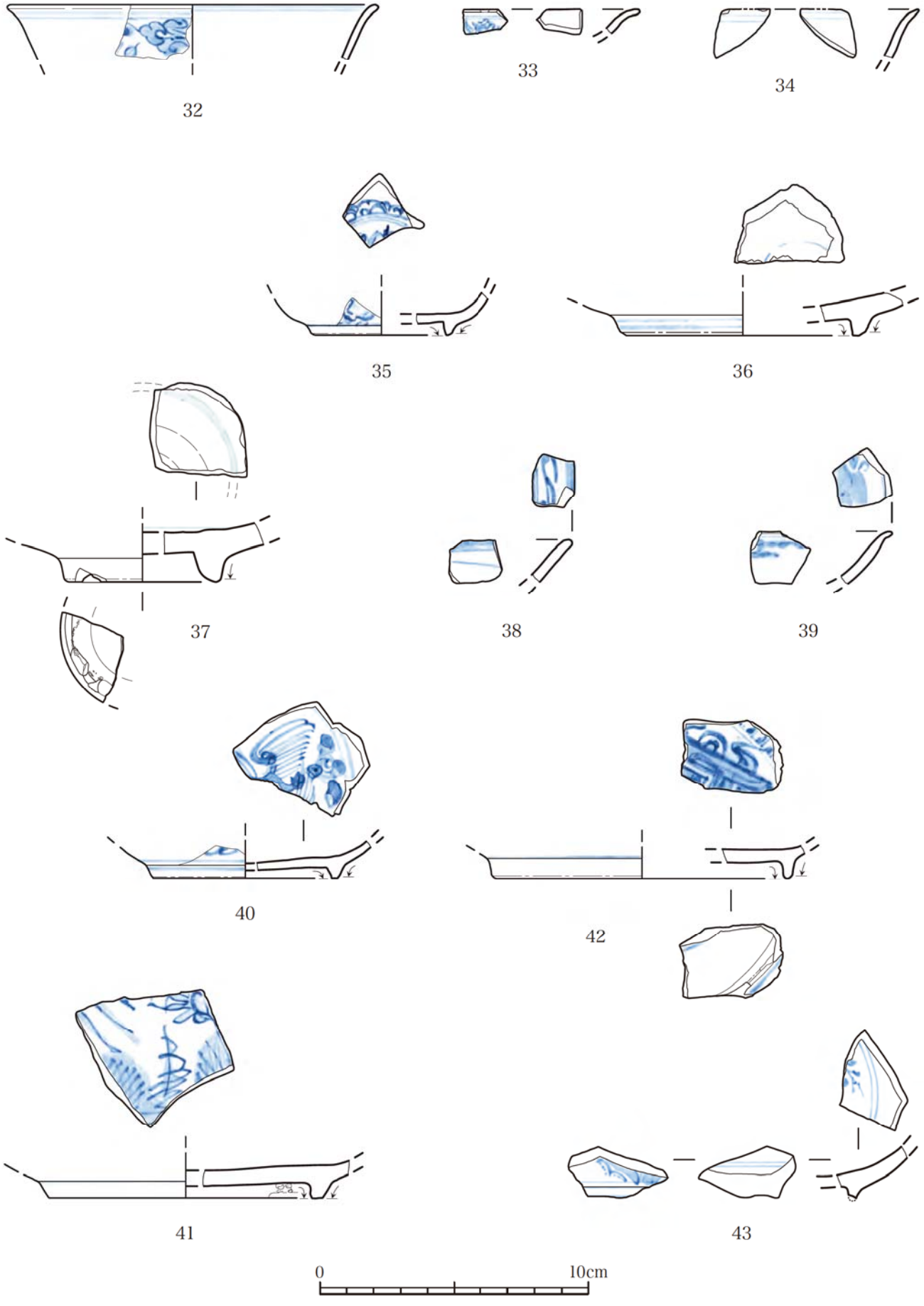
図版８　青花１



第18図　青花２　実測図

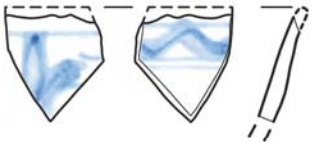


図版９　青花２

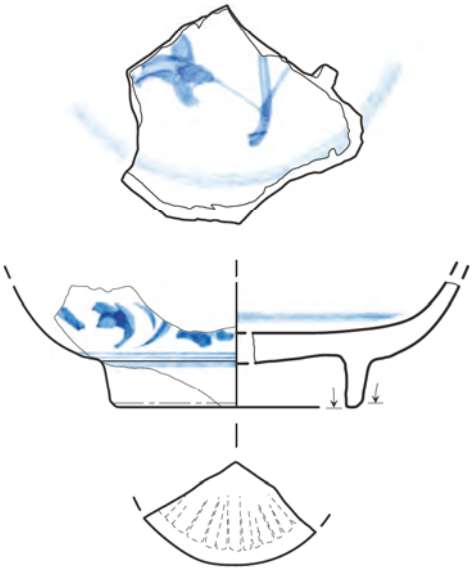


第19図　青花３　実測図

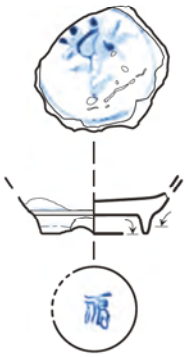
図版10　青花３



44

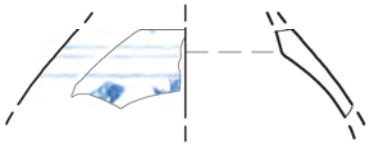


45

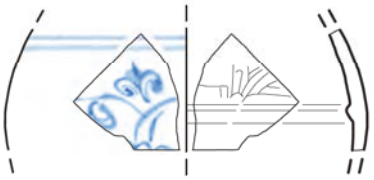


46

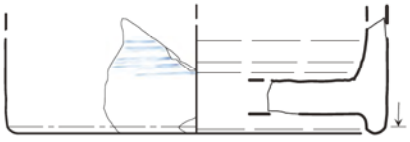
47



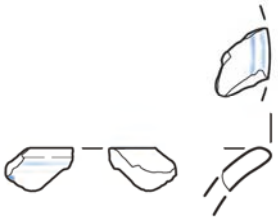
48



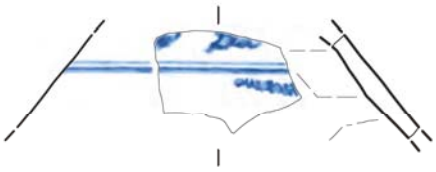
49



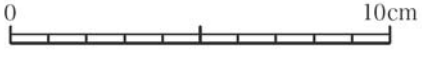
50



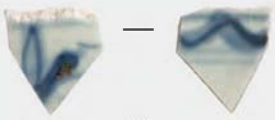
51



52



第20図　青花４　実測図



44

45

46

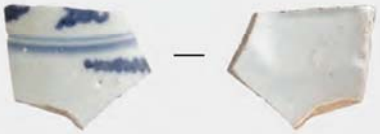
47

48

49

50

51



52

図版11　青花４

第５節　褐釉陶器

今回の調査で得られた資料は287点。そのうち11点を図化した。資料の大半が中国産の壺で、２点が器種不明、残り１点がタイ産の外耳部である。壺は大型で、口唇部が水平で外反するものや「ク」の字状に外反するものが見られる。個々の詳細については第12表観察一覧に記す。

【参考文献】

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第51集 首里城跡・真珠道跡『―首里城跡守礼門東側地区・真珠道跡起点及び周辺地区発掘調査報告書―』 2009（平成21）年３月　沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第13集 綾門大道跡『―首里城跡守礼門周辺地区発掘調査報告書―』 2003（平成15）年３月　沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第46集 渡地村跡『―臨港道跡那覇１号線整備に伴う緊急発掘調査報告―』 2007（平成19）年３月　沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第45集 首里城跡『―黄金御殿地区発掘調査報告書―』 2007（平成19）年３月　沖縄県立埋蔵文化財センター

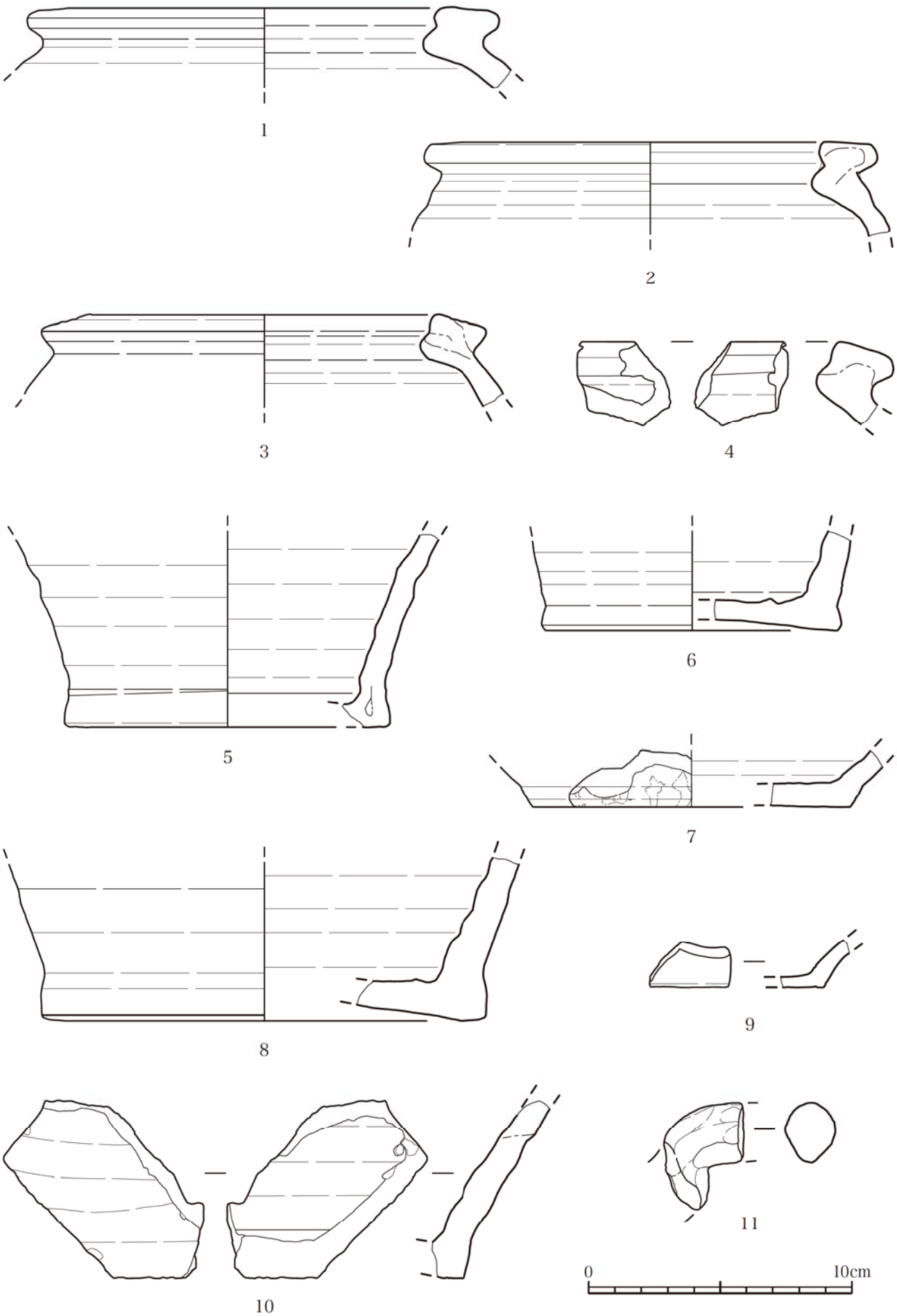
第11表　褐釉陶器集計表

器種・部位 ＼ 出土地			A											B													総計
			J-10	J-10・11		J-11			K-10	K-11			不明	J-11・12	K-10		K-10・11		K-11			K-11・12		K-12	L-11・12		
														北	東		東		東			北		西	南		
			Ⅳ	SR5	SS1	SD1	Ⅲ	Ⅳ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅲ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅱ	Ⅴ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅲ	
中国	壷	口					1																1	2			4
		頸							1		1																2
		胴	2	9	7	15	18	2	10	12	89	7	1	1	1	13	1	4	11	3	1	6	26	8	2	1	250
		底			2						1												1				4
	壷？	胴																	1								1
	不明	底									1											1					2
タイ	壷	頸																					1				1
		胴				1			2	2	2			2			1		2	2		1	4		1		20
		外耳		1																							1
		底	1																								1
中国か東南アジア	袋物	胴									1																1
合　計			3	10	9	16	19	2	13	14	95	7	1	3	1	13	2	4	14	5	1	8	33	10	3	1	287

第12表　褐釉陶器観察一覧

単位：cm

挿図番号 図版番号	番号	器種		部位	口径	器高	底径	観察事項	出土地
第21図 図版12	1	中国産褐釉陶器	壷	口縁部	18.0	−	−	口縁の断面形態は方形を呈する。 口唇上面はやや凹み、口縁内面に窪みがある。 淡黄色の釉を施し、胎土は暗褐色から赤褐色で、 白色の粒子を含む。	ナカウ '07 K-12 B 西 I 1113
	2		壷	口縁部	17.4	−	−	口縁の断面はやや方形で粘土を足して形成したようにみえる。また口唇上面は平坦に仕上がっており、 口縁内面に窪みを持つ。外面に黒褐色の釉を施し、 部分的に風化による銀化もみられる。灰色を呈する 素地に白色の鉱物と茶褐色の粒子を含む。	ナカウ '07 J-11 A Ⅲ 1212
	3		壷	口縁部	17.0	−	−	口縁部は方形で、粘土を足して形成。 口縁内面に窪みを持つ。 また、口唇上面はやや凹みがみられる。 内・外面に暗灰黄色の釉薬を施し、 胎土は橙色～灰褐色で白色の砂礫を含む。	ナカウ '07 K-12 B 西 I 1113
	4		壷	口縁部	−	−	−	口縁の断面は方形を呈し、口唇上面は平坦。 胎土に若干の空隙がみられることから、 粘土を継ぎ足して形成されたと考えられる。 内・外面ともに灰黄褐色が施され、胎土は橙色～灰黄色で白色の粒子と黒褐色の細かな粒子を含んでいる。	ナカウ '07 K-11・12 B 北 V 1217
	5		壷	底部	−	−	12.4	内・外面に横位成形痕がみられる。 底部は一旦直に立つが外に折れて開く。また、腰部にくびれを持つ。底面は外周に砂目が認められる。 黄褐色の釉薬で、胎土は灰褐色、 白色鉱物の細粒子を含む。	ナカウ '07 K-11 A Ⅲ 1210
	6		壷	底部	−	−	11.4	底面は外周のみ接地、中央は上げ底になっている。 器形は腰部にくびれがあり、内面が黒褐色で外面はにぶい赤褐色である。内面に轆轤痕が残る。 白と黒褐色の混入物を含む。	ナカウ '07 K-11・12 B 北 V 1217
	7		不明	底部	−	−	12.0	底部は平坦な仕上がり。 内器面には黒褐色の釉が施されているが、外器面は胴部までしか釉が掛かっていなかったとみられる。 淡灰色の素地に白色と茶褐色の細粒子がみられる。	ナカウ '07 K-11・12 B 北 Ⅱ 1113
	8		壷	底部	−	−	17.0	外底面が僅かに盛りあがり、立ち上がりが逆ハの字状をしている。内器面には轆轤痕が明瞭に残る。 底面は外周が広く接地して砂目がみられる。 外面は黒褐色で内面は黄褐色釉が掛かる。 胎土は黄灰色で白色の混和材を含む。	ナカウ '07 J-10・11 A SS1 1207
	9		不明	底部	−	−	−	底部は平坦で、逆ハの字状に立ち上がる。 内面は一条の沈線が見られる。また内面には、 薄い褐色の釉が掛かるが、外面は無釉。底部にしては器厚は薄い。黄褐色の素地に白色の微粒子が混じる。	ナカウ '07 K-11 A Ⅲ 1213
	10		壷	底部	−	−	−	内外器面ともに轆轤痕が明瞭に残る。 外底縁には砂が付着している。 釉は両面ともに黒褐色の釉が施されている。 淡赤灰色の素地で白色の鉱物～細粒子を含み、 若干茶褐色の微粒子も混じる。	ナカウ '07 J-10・11 A SS1 1207
	11	タイ産褐釉陶器	壷	外耳部	−	−	−	断面形は楕円形状となる。素地は淡赤褐色で、 白色や黒色の細粒子が若干見られる。 黄灰褐色の釉が掛かり、指頭痕も見られる。	ナカウ '07 J-10・11 A SR5 1207



第21図　褐釉陶器　中国産（1～10）・タイ産（11）　実測図

図版12　褐釉陶器　中国産（1～10）・タイ産（11）

第６節　その他の輸入陶磁器

今回の発掘調査で、その他の輸入陶磁器は総数28点得られた。前節では青磁や白磁、青花と各節毎に記述を行ったが、前者以外の輸入陶磁器である瑠璃釉や色絵、タイ産半練土器等の遺物が少量得られており、同節ではそれらをまとめた。なお、その他の輸入陶磁器は1992（平成４）～1994（平成６）年の第１～３次の発掘調査では、かなりの量の遺物が得られている。ここでは、瑠璃釉・色絵・東南アジア産陶器・タイ産半練土器等の順で記述を行う。

【参考文献】　沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第１集 首里城跡『一管理用道路地区発掘調査報告書一』
2001（平成13）年３月　沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第２集 天界寺跡（I）『一首里社館地下駐車場入り口新設工事に伴う緊急発掘調査一』 2001（平成13）年３月　沖縄県立埋蔵文化財センター

第13表　その他の輸入陶磁器集計表

種類＼出土地			A					B							合計
			J-10	K-10		K-11		J-11・12	K-10	K-11	K-11・12			L-11・12	
								北	東	東	南	北		南	
			Ⅳ	Ⅰ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅰ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅴ	Ⅰ	
色絵	皿	底						1							1
	不明	胴				1									1
瑠璃釉	碗	胴												1	1
	小碗	口～底							1						1
	袋物	胴				1									1
		底											1		1
	壷	胴				1								2	3
		頸									1				1
	不明	不明					1					1		1	3
釉璃紅	碗	底		1											1
三彩	皿	不明								1					1
半練	不明	蓋				1									1
不明	皿or蓋	底												1	1
	壷	胴	1			1					1		1		4
	不明	胴			3	3				1					7
合計			1	1	3	8	1	1	1	2	2	1	2	5	28

第14表　その他の輸入陶磁器観察一覧

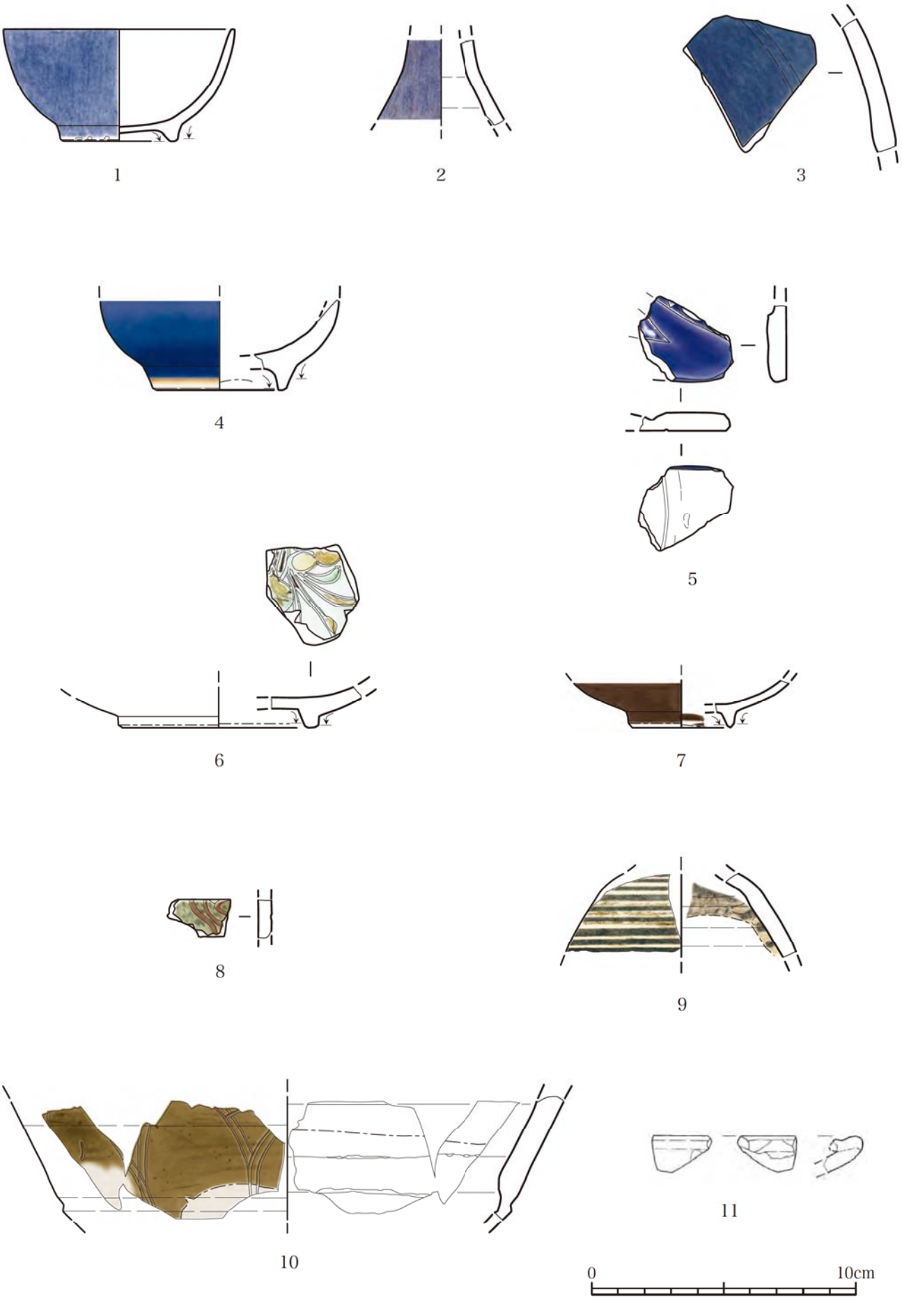
単位：cm/g

挿図番号 図版番号	番号	器種	部位	口径 器高 底径	年代	観察事項	出土地
第22図 図版13	1	小碗	口縁部～底部	8.8 4.2 4.4	18C	瑠璃釉の小碗で、図上復元が可能な資料である。畳付からほぼ直口状に立ち上がり、胴部で膨らみ、口縁部には逆「ハ」の字状に開くタイプである。口唇部は、丸味を帯びている。釉薬は、口縁部から底部まで釉薬が施されている。高台内面まで釉が施されている。畳付の部分は、露胎である。表面の色調は薄藍濁色で、裏面は灰白色（Hue10Y7/1）である。素地は、白地である。高台内面に砂が付着している。器壁の厚さは、約3.5mmである。福建。	ナカウ '07 K-10 B 東 III 1108
	2	瓶	頸部	－ － －	15C	瑠璃釉の瓶の頸から胴部までの破片資料である。図上復元が可能で、胴径が約4.8cmである。胴部から頸部へかけてすぼまるタイプである。釉は、表裏面ともに施されている。表面の色調は藍色で、裏面は灰白色（Hue10Y7/1）である。素地は、白地である。器壁の厚さは、約5.0mmである。景徳鎮。	ナカウ '07 K-11・12 B 南 I 1204

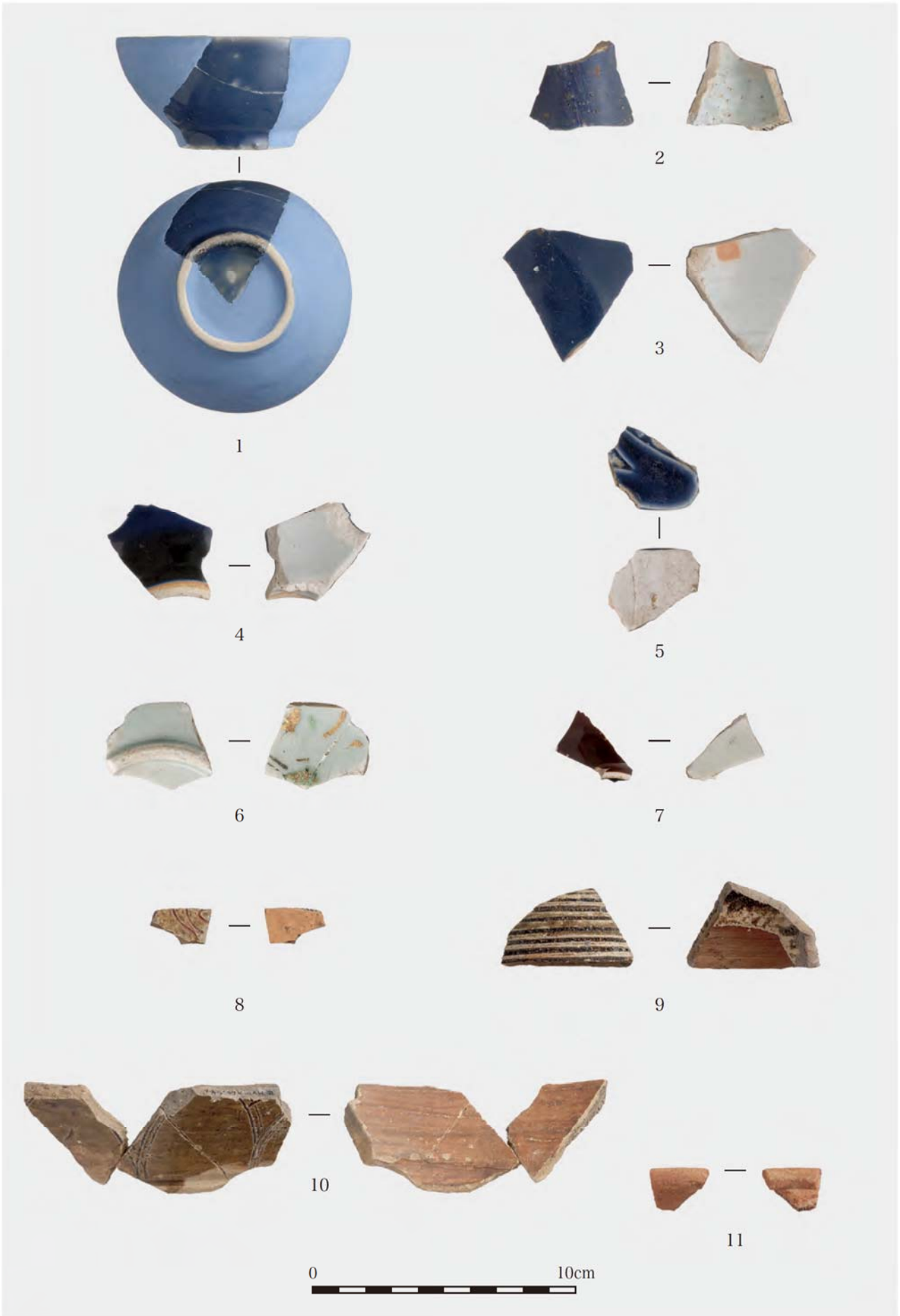
第14表　その他の輸入陶磁器観察一覧

単位：cm/g

挿図番号 図版番号	番号	器種	部位	口径 器高 底径	年代	観察事項	出土地
第22図 図版13	3	瓶	胴部	－ － －	明代	瓶の肩～胴部の破片である。胴部から肩部にかけて「ハ」の字状になるタイプである。釉は表裏面とも施されている。釉の色調は、表面が藍色で、裏面が明緑灰色(Hue 10GY 7/1)である。断面の色調は、白色である。素地は、白地である。器の厚さは、約6.0～8.0mmである。景徳鎮。	ナカウ '07 K-11 A Ⅲ 1217
	4	袋物	底部	－ － 5.0	明代	瑠璃釉の袋物の底部である。図上復元が可能で、底径が約5.0cmである。底部から逆「ハ」の字状に開き、胴部は丸味を帯びる。釉は表裏面、高台内部が施され、畳付は露胎である。釉の色調は表面が濃藍色で、裏面が明緑灰色(Hue 7.5GY 8/1)である。素地は、白地である。器の厚さは、6.0～8.0mmである。景徳鎮。	ナカウ '07 K-11・12 B 北 V 1217
	5	不明	不明	－ － －	明代か	瑠璃釉であるが、器種や部位は不明である。形状からすると板状のものであると思われる。表面に凸帯び状のものが貼付され、二股に分かれている。英字の「Y」若しくは、「V」を横にした感じである。釉は、表面に施されている。釉の色調は、濃藍色である。裏面は露胎である。素地は、白地である。器の厚さは、約7.0mmである。景徳鎮か。	ナカウ '07 L-11・12 B 南 I 1203
	6	皿	底部	－ － 7.3	18C	色絵の皿で、底部である。図上復元が可能で、底径が約7.3cmである。底部からほぼ直線的に立ち上がり、緩やかに開くタイプである。見込みに文様が施されているが、色が落ちており、文様の構成は不明である。色は、緑と茶色が確認できる。釉は表裏面に施され、畳付は露胎である。釉の色調は、表裏面とも明緑灰色(Hue 10G 7/1)である。素地は、白地である。器の厚さは、5.0～6.0mmである。福建。	ナカウ '07 J-11・12 B 北 I 1108
	7	皿か蓋	底部	－ － 4.0	明治以後	皿若しくは、蓋の底部である。図上復元が可能で、底径が約4.0cmである。底部からほぼ直線的に立ち上がり、胴部はやや緩やかに膨らむタイプである。釉は表裏面が施され、畳付は露胎である。釉の色調は表面が極暗褐色(Hue 10R 2/2)で、裏面が明オリーブ灰色(Hue 5GY 7/1)である。素地は、白地である。器の厚さは、3.0mmである。中国産若しくは、国産。	ナカウ '07 L-11・12 B 南 I 1122
	8	壺	胴部	－ － －	明?	陶器の小破片で、壺の胴部と思われる。小破片であるので、図上復元は出来ない。器の形状はほぼ直口状である。表面に1.0～2.0mmの幅の工具で波状の沈線の文様を施しているが、文様の構成は不明である。沈線の部分に茶系統の色が確認できる。それ以外に緑系統の色が確認できるが、色褪せている。裏面の色調は、橙色(Hue YR 7/6)である。断面の色調は、灰白色(Hue 5Y 7/1)である。胎土は、精製されている。焼成は、良好である。器の厚さは、約5.0mmである。中国産?。	ナカウ '07 K-11 A Ⅲ 1212
	9	瓶	頸部	－ － －	－	瓶の陶器で、肩から胴部の破片である。図上復元が可能で、胴径が約8.6cmである。胴部から肩部にかけて、「ハ」の字状にすぼまり、肩部で折れ曲がるタイプである。釉は表裏面とも施されている。表面は二次的に火を受けている。混入物も露出している。釉も剥げ落ちている。2.0～3.5mm幅の沈線(浅い凹)文が横位に施されており、白色系と黒色系の色が交互に施されている。釉の色調は、裏面で自然釉の箇所がにぶい褐色(Hue 7.5YR 5/3)である。断面の色調は、明褐灰色(Hue 5YR 7/1)を呈する。素地は、白地である。器壁の厚さは、約5.0～7.0mmである。東南アジア産。	ナカウ '07 K-11・12 B 南 I 1204
	10	不明	胴部	－ － －	－	陶器の破片で、胴部の資料である。器種不明である。図上復元が可能で、胴径が約21.0cmである。底部から逆「ハ」の字状に開くタイプである。表面に文様が施されている。幅が約1.0mmの工具で、二条の沈線文を縦位に施している。英字の「Y」のようにも見えるが、交差するように沈線文が一条確認でき、菱形状に文様が構成されているように見える。釉は表面に施され、裏面は無釉である。表面の釉について、ルーペ(倍率30倍)で観察すると、細かい貫入が確認できる。釉の色調は、表面が黄褐色(Hue 2.5Y 5/3)である。裏面は自然釉で、色調がにぶい褐色(Hue 7.5YR 5/3)である。断面の色調は、浅褐色(Hue 2.5Y 7/4)である。胎土は、精製されている。焼成は、良好である。器壁の厚さは胴部が9.5mmで、底部付近が約4.0mmである。産地不明。	ナカウ '07 K-11・12 B 北 V 1217
	11	蓋	端部	－ － －	－	半練土器の蓋の小破片で、図上復元はできない。蓋の形態は落し蓋で、部位は端部である。器形は端部を折り曲げて接着させ、折り曲げた先端部分を摘み上げている。色調は表裏面ともにぶい橙色(Hue 2.5YR 6/4)を呈する。器面調整は表裏面とも撫で調整である。胎土は精製されている。混入物に石英を多量に含んでおり、黒色の鉱物が散見できる。焼成はかなり良好である。器壁の厚さは約5.0mmである。接着の際の痕跡が確認できる。タイ産。	ナカウ '07 K-11 A Ⅲ 1214



第22図　その他の輸入陶磁器　実測図



図版13　その他の輸入陶磁器

第７節　本土産陶磁器

今回の調査で、本土産陶磁器は総数123点が得られた。完形品の出土は無く、全て破片である。肥前を中心とし、薩摩、瀬戸・美濃を産とする磁器類等やいわゆるスンカンマカイと称される印判手、銅版転写による絵付けがなされたタイル等が出土している。詳細は観察一覧に記す。

第15表　本土産陶磁器集計表

出土地			A											B														合計
			J-10	J-10・11	J-11	K-10		K-11					不明	J-11・12		K-10	K-11			K-11・12			K-12	L-11・12		不明	
														北		東				南	北		西	南			
器種		部位	Ⅳ	SD2	Ⅰ	Ⅰ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅷ	不明	Ⅰ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅴ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅲ		
磁器	碗	口			1	1		1	2		1	1		2				3			2							14
		胴	1	1			1	1	1	1				1				6				2		2	4			21
		底						2									1											3
	小碗	口																								1		1
		胴															1											1
		底						1									1				1							3
	皿	口			1									1				2							1			5
		胴																			1				2	1		4
		底						1										3			1				2			7
	小杯	底														1												1
	壺	耳																			1							1
		底																						1				1
	鉢	底																						1				1
	瓶	胴	1																									1
		底																							1			1
	蓋	－															1	2			1			1				5
	香炉	底																							1			1
		胴																							1			1
	合子	底								1																		1
	おろし器	－																			1							1
	不明	口																					1					1
		胴		1				1				2						4	1					2	2			13
		底																1										1
陶器	碗	口					1										1											3
		胴							1										1		1							3
		底															1											1
	碍子	不明																				2		2				4
	皿	口																				1						1
		胴										1																1
		底																			1	1						2
	小皿	底																			1							1
	土瓶	胴													1							1						2
	壺	胴																1										1
		頸											1															1
		底											1															1
	鍋	口																							1			1
	擂鉢	口～胴							1																			1
	瓶	胴																							1			1
	蓋	－																									1	1
	タイル	－															1	1			1	1				1		5
	不明	口																						1				1
		胴				1							1					1										3
総計			2	2	2	2	2	7	5	2	1	4	3	4	1	1	7	24	2		9	11	1	10	16	3	1	123

第16表　本土産陶磁器観察一覧

単位：cm

挿図番号 図版番号	番号	器種	部位	口径 器高 底径	年代	観察事項	出土地
第23図 図版14	1	碗	口縁部	12.7 － －	18C 後半 ～ 19C 初頭	図上復元が可能な資料で、推算口径は約12.7cmである。口縁部の器形は逆「ハ」の字状に開くタイプである。文様は表面のみに施されている。文様構成は不明である。粒子は細かく焼成は良い。貫入は見られない。肥前産。	ナカウ'07 K-11 A 1213
	2	碗	口縁部	－ － －	18C 後半 頃	図上復元が不可能な資料である。口縁部の器形は逆「ハ」の字状に開くタイプである。文様は表面のみに施されている。表面には植物文？が施されている。粒子は細かく焼成は良い。貫入は見られない。肥前系。	ナカウ'07 K-10 A I 1205
	3	碗	口縁部	－ － －	18C 後半	図上復元が不可能な資料である。口縁部の器形は逆「ハ」の字状に開くタイプである。文様は表面のみに施されている。表面には筆書きによる文様が施されている。粒子は粗く焼成は良い。貫入は見られない。肥前系。	ナカウ'07 J-11・12 B 北 I 1108
	4	碗	口縁部	－ － －	1820 ～ 1860	図上復元が不可能な資料である。口縁部の器形は逆「ハ」の字状に開くタイプである。文様は表裏面に施されている。表面には格子状の文様を施し、裏面には二条の圏線文が施されている。粒子は粗く焼成は良い。貫入は見られない。肥前系。	ナカウ'07 K-11 B 東 I 1114
	5	碗	口縁部	9.4 － －	19C ？	図上復元が可能な資料で、推算口径は約9.4cmである。胴部が屈曲するタイプである。文様は表面のみに施されている。表面に一条の圏線文が施されている。粒子は粗く焼成は不良である。貫入は見られない。肥前系。	ナカウ'07 K-11 A I 1207
	6	皿	口縁部	－ － －	1780 ～ 1820 年代	図上復元が不可能な資料である。口縁部の器形は逆「ハ」の字状に開くタイプで、胴部が内湾するタイプである。上面観が直線状を呈するので、長皿と思われる。文様は表裏面に施されている。表面には唐草文が施されている。裏面には蛸唐草文が施されている。粒子は細かく焼成は良い。貫入は見られない。肥前産。	ナカウ'07 L-11・12 B 南 I 1203
	7	皿	底部	－ － (5.0)	17C 後半	高台部分が欠損しているが、図上復元が可能な資料で、残存する高台部分は推算底径約5.0cmである。高台脇から緩やかに立ち上がるタイプである。文様は表裏面に施されている。表面には二条の圏線文と草花文が施されている。裏面には胴部と高台に一条の圏線文が施されている。粒子は粗く焼成は良い。貫入は表裏面に見られる。肥前産。	ナカウ'07 K-11 B 東 I 1130
	8	碗	胴部	－ － －	18C 後半	茶のみ用。図上復元が可能な資料で、腰部の推算径は約7.6cmである。腰折のタイプで、腰部から胴部までがほぼ直線状を呈する。茶飲み用と思われ、器は筒型の碗である。文様は表裏面に施されている。裏面には草花文？と筆書きによる文様が施されている。裏面には一条の圏線文が施されている。粒子は細かく焼成は良い。貫入は見られない。肥前産。	ナカウ'07 L-11・12 B 南 I 1119
	9	小鉢	底部	－ － 4.4	17C 後半	図上復元が可能な資料で、推算底径は約4.4cmである。高台脇から「ハ」の字状に開くタイプである。文様は表裏面に施されている。高台脇に一条の圏線文と筆書きによる文様が子何処されている。裏面には二条の圏線文が施されている。粒子は粗く焼成は良い。貫入は見られない。肥前産。	ナカウ'07 K-11 A I 1205
	10	小鉢	胴部	－ － －	18C 後半	図上復元が不可能な資料である。腰折れのタイプで、腰部から胴部にはほぼ直線状に立ち上がる。文様は表裏面に施されている。表面には圏線文と筆書きによる文様が施されている。裏面は一条の圏線文が施されている。粒子は粗く焼成は良い。貫入は見られない。肥前産。	ナカウ'07 K-10 B 東 III 1108

第16表　本土産陶磁器観察一覧

単位：cm

挿図番号 図版番号	番号	器種	部位	口径 器高 底径	年代	観察事項	出土地
第23図 図版14	11	皿	底部	－ － －	18C	図上復元が不可能な資料である。高台のみ残存する。畳付けからほぼ直線状に立ち上がるタイプである。高台の上面観がほぼ直線上にあることから、長皿になると思われる。文様は高台裏に施されている。高台裏には二条の圏線文が施されている。畳付けは露胎である。粒子は細かく焼成は良い。貫入は見られない。肥前産。	ナカウ'07 L-11・12 B南 Ⅰ1122
	12	蓋	縁部	8.6 － －	18C後半～19C初頭	図上復元が可能な資料で、縁部の推算径は約8.6cmである。縁の内部が露胎である。文様は表面のみに施されている。表面には一条の圏線文と、丸文の内部に格子状の線が施されている。粒子は細かく焼成は良い。貫入は見られない。肥前産。	ナカウ'07 K-10 B東 Ⅲ1107
	13	瓶・袋物	底部	－ － 10.8	19C	図上復元が可能な資料で、推算底径は約10.8cmである。いわゆる白物、白薩摩といわれるのもである。高台は畳付けから「ハ」の字状に立ち上がるタイプで、脚台状である。畳付けは露胎である。文様は見られない。畳付けは露胎である。粒子は細かく焼成は良い。貫入は表裏面において細かく見られる。薩摩焼。	ナカウ'07 L-11・12 B南 Ⅰ1122
	14	碗	口縁部	14.0 － －	明治～大正	図上復元が可能な資料で、推算口径は約14.0cmである。口縁部は外反するタイプである。文様は表裏面に施されている。表面には菱形の窓内に三角文を円形に表すタイプである。裏面には口縁部に三角文を巡らせ、その直下に一条が圏線文が施されている。粒子は細かく焼成は良い。貫入は見られない。型紙摺・印判手で、スンカンマカイと呼ばれている。砥部焼。	ナカウ'07 K-11 A Ⅲ1212
	15	碗	口縁部	13.4 － －	明治～大正	図上復元が可能な資料で、推算口径は約13.4cmである。口縁部は外反するタイプである。文様は表裏面に施されている。表面には菱形の窓内に三角文を円形に表すタイプである。裏面には口縁部に三角文を巡らせ、その直下に一条が圏線文が施されているが、文様はずれている。粒子は細かく焼成は良い。貫入は見られない。型紙摺・印判手で、スンカンマカイと呼ばれている。砥部焼。	ナカウ'07 K-11 B東 Ⅰ1114
	16	小碗	底部	－ － 3.4	明治～昭和	図上復元が可能な資料で、推算底径は約3.4cmである。畳付けからほぼ直線状に立ち上がるが、胴部脇から緩やかに開くタイプである。文様は表面のみに施されている。表面には草花文が施され、高台内面には一条の圏線文が施されている。畳付けは露胎である。粒子は粗く焼成は良い。貫入は見られない。瀬戸・美濃系。	ナカウ'07 K-11・12 B北 Ⅱ1112
	17	皿	口縁部	－ － －	明治～昭和	図上復元が不可能な資料である。口縁部の器形は逆「ハ」の字状に開くタイプである。上面観がほぼ直線的であるので、長皿と思われる。文様は表面と口唇部に施されている。文様構成は不明で、内面に白抜きの丸文？が確認できるが、文様かどうか不明である。口縁部に鉄釉が施されている。口縁部に錆釉を施す。粒子は粗く焼成は良い。貫入は見られない瀬戸・美濃系。	ナカウ'07 K-11 B東 Ⅰ1203
	18	タイル	—	－ － －	明治後半～大正	同資料はタイルで、破損品である。文様は表面に施されている。表面に葉文と線文並びに、丸文の組み合わせの文様が施されている。銅版転写である。裏面は露胎である。粒子は粗く焼成は良い。貫入は見られない。瀬戸・美濃。	ナカウ'07 K-11・12 B北 Ⅱ1113
	19	タイル	—	－ － －	明治～大正	同資料はタイルで、破損品である。文様は表面に施されている。表面に鱗文？と葉文のが施されている。銅版転写である。裏面は露胎である。粒子は粗く焼成は良い。貫入は見られない。瀬戸・美濃。	ナカウ'07 K-11・12 B南 Ⅰ1204

第16表　本土産陶磁器観察一覧

単位：cm

挿図番号 図版番号	番号	器種	部位	口径 器高 底径	年代	観察事項	出土地
第24図 図版15	20	碗	口縁部 ～ 胴部	7.6 － －	20C 明治 以降	図上復元が可能な資料で、推算口径は約7.6cmである。胴下部から曲線を描きながら立ち上がり、口縁部は直口するタイプである。文様は表面のみに施されている。表面には花文が施されている。釉下彩である。粒子は細かく焼成は良い。貫入は見られない。窯不明。	ナカウ '07 J-11・12 B 北 I 1108
	21	皿	口縁部	－ － －	明治	図上復元が不可能な資料である。口縁部の器形は逆「ハ」の字状に開き、直口するタイプである。文様は裏面に施されている。裏面には渦巻き文を口縁部上端に施されている。粒子は粗く焼成は良い。貫入は見られない。窯不明。	ナカウ '07 J-11 A I 1205
	22	皿	底部	－ － 6.6	明治 後半 ～ 大正	図上復元が可能な資料で、推算底径は約6.6cmである。高台が低く、直口状に立ち上がるタイプである。高台脇から立ち上がるタイプである。畳付けは露胎である。文様は裏面に施されている。裏面には波濤文が施されている。が、文様構成は不明である。粒子は粗く焼成は良い。貫入は見られない。窯不明。	ナカウ '07 L-11・12 B 南 I 1112
	23	碗	底部	－ － 5.1	明治	図上復元が可能な資料で、推算底径は約5.1cmである。畳付けの部分は欠損している。高台はほぼ直線状に立ち上がり、高台脇から彎曲しながら立ち上がっている。粒子は細かく焼成は良い。貫入は見られない。窯不明。	ナカウ '07 K-11 A I 1207
	24	蓋	縁部	9.5 － 7.6	明治	図上復元が可能な資料で、縁部の推算径は約9.5cmである。身受けの部分は、ほぼ直線状に立ち上がるタイプである。文様は表面に施されている。文様構成は不明である。粒子は細かく焼成は良い。貫入は見られない。窯不明。	ナカウ '07 K-11・12 南 B I 1204
	25	碗	底部	－ － －	昭和 (戦時中)	図上復元が可能な資料である。高台脇から曲線を描きながら立ち上がっている。文様は裏面に施されている。高台内面に「132」の文字と「岐阜県」の「岐」が崩れた文字が確認できる。戦時中に造られたものである。「岐132」の文字が確認できる。粒子は細かく焼成は良い。貫入は見られない。窯不明。	ナカウ '07 K-11 A I 1205
	26	皿	底部	－ － －	昭和	図上復元が不可能な資料である。高台部分は低い。畳付けから外反し、高台脇から曲線を描きながら立ち上がるタイプである。文様は表裏面に施されている。見込みに山文？が施され、文様構成は不明である。釉下彩。畳付けは露胎である。粒子は細かく焼成は良い。貫入は見られない窯不明。	ナカウ '07 K-11 B 東 I 1114
	27	小碗	底部	－ － 3.4	明治	図上復元が可能な資料で、推算底径は約3.4cmである。畳付けからほぼ直線状に立ち上がり、高台脇から曲線を描きながら立ち上がるタイプである。文様は見られない。粒子は細かく焼成は良い。貫入は見られない。窯不明。	ナカウ '07 K-10 B 東 II 1109
	28	小杯	底部	－ － 3.6	18C	図上復元が可能な資料で、推算底径は約3.6cmである。畳付けから直線上に立ち上がり、腰部は折れ曲がり直線状に立ち上がる。腰折れのタイプである。粒子は細かく焼成は良い。貫入は見られない。肥前産。	ナカウ '07 K-10 B 東 III 1108
	29	皿	口縁部	－ － －	19C末 ～ 20C末	図上復元が不可能な資料である。口縁部は鍔状の器形になる。文様は見られない。粒子は細かく焼成は良い。貫入は見られない。窯不明。	ナカウ '07 J-11・12 B 北 I 1108
	30	鉢	底部	－ － 9.6	大正 ～ 昭和 初	図上復元が可能な資料で、推算底径は約9.6cmである。高台は低く、碁笥底状の器形で、ボール状の鉢である。文様は見られない。畳付けは露胎である。粒子は細かく焼成は良い。貫入は見られない。窯不明。	ナカウ '07 K-12 B 西 I 1113
	31	合子 の身	底部	－ － －	19C か？	図上復元が不可能な資料である。高台は低く、碁笥底状の器形である。文様は見られない。畳付けの部分は露胎である。粒子は粗く焼成は良い。被熱している。貫入は粗い。窯不明。	ナカウ '07 K-11 A IV 1214
	32	壺	耳 (把手)	－ － －	明治	図上復元が不可能な資料である。把手は細めである。器形については、小型な壺と想定している。把手の縦位に一条の線が施されている。粒子は細かく焼成は良い。貫入は見られない。窯不明。	ナカウ '07 K-11・12 B 南 I 1204

第16表　本土産陶磁器観察一覧

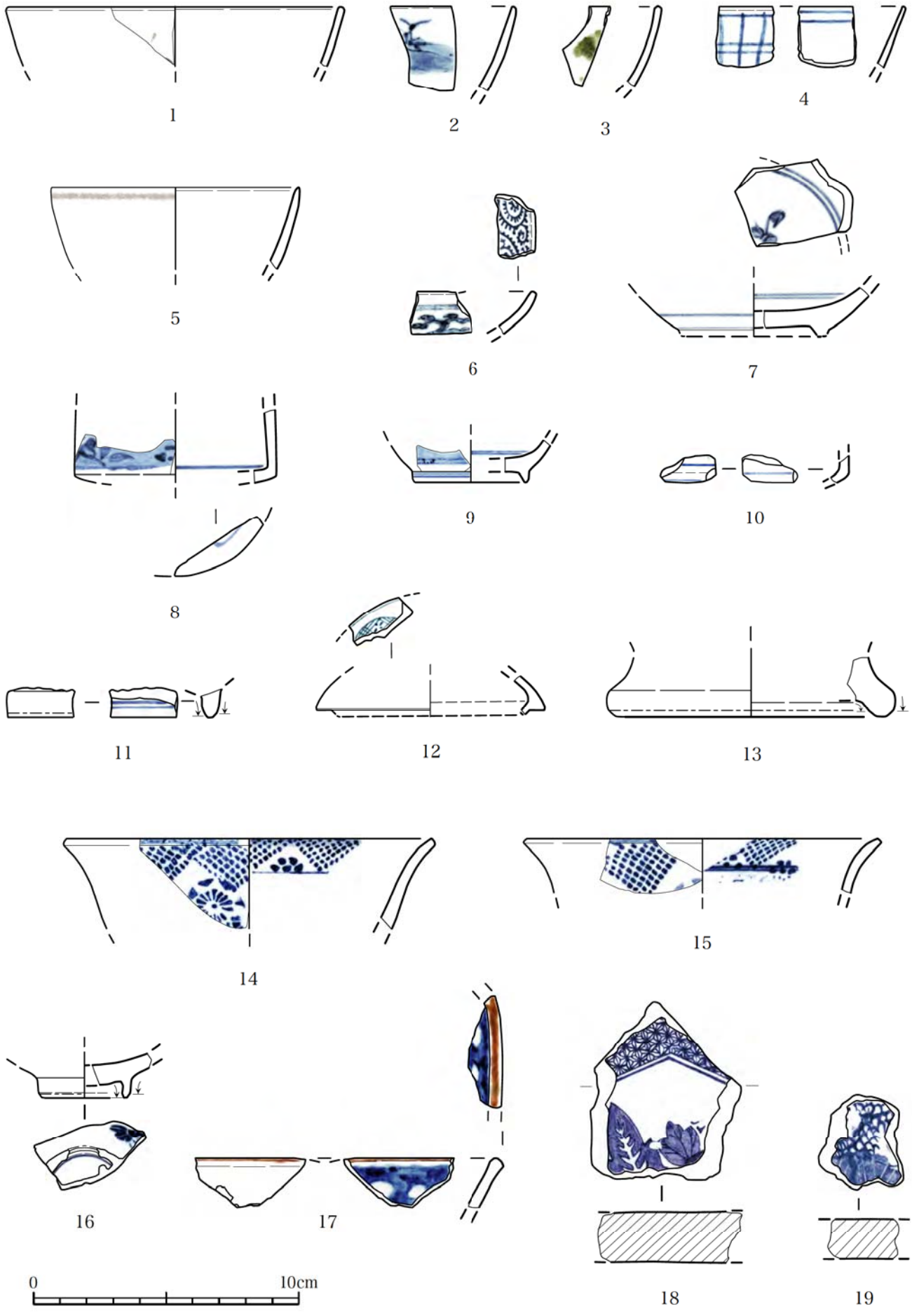
単位：cm

挿図番号 図版番号	番号	器種	部位	口径 器高 底径	年代	観察事項	出土地
第24図 図版15	33	おろし器	—	－ － －	明治	図上復元が不可能な資料である。同製品は磁器製のおろし器である。縁の一部が抉られている。粒子は細かく焼成は良い。貫入は見られない窯不明。	ナカウ '07 K-11・12 B 南 I 1204
第25図 図版16	34	香炉	胴部	－ － －	—	図上復元が不可能な資料である。頸部に有段状のくびれが見られる。段を境に頸部は直口状、胴部は丸みを帯びている。文様は見られない。表面のみ瑠璃釉が施されている。粒子は細かく焼成は良い。貫入は見られない。瀬戸。	ナカウ '07 L-11・12 B 南 I 1114
	35	香炉	底部	－ － －	明治 以降	図上復元が不可能な資料である。脚台の様な瘤状の物が中央部に張り付いているタイプである。表面のみ瑠璃釉が施されている。裏面は露胎である。粒子は粗く焼成は良い。貫入は見られない。瀬戸か？	ナカウ '07 L-11・12 B 南 I 1116
	36	碗	口縁部	－ － －	18C	図上復元が不可能な資料である。胴部は内碗し、口縁部上端で直口するタイプである。文様は表裏面に施されている。表面には菊花文が施されている。裏面には口縁部直下に四方襷文が施されている。粒子は細かく焼成は良い。貫入は見られない。関西。	ナカウ '07 J-11 A I 1205 ナカウ '07 K-11 A I 1205
	37	皿	底部	－ － 6.2	明治	図上復元が可能な資料で、推算底径約6.2cmである。高台は低く、直線状に立ち上がり、高台脇から立ち上がりは開きが強いタイプである。文様は表面のみに施されている。表面には線刻による文様が施され、その上に絵付けが施され、文様構成は不明である。畳付けは露胎である。粒子は細かく焼成は良い。貫入は見られない。窯不明。	ナカウ '07 K-11 B 東 I 1130
	38	皿	胴部	－ － －	明治	図上復元が不可能な資料である。胴下部から曲線状に立ち上がるタイプで、歪な部分が見られる。上面観において一部直線的な部分が見られることから長皿と思われる。文様は表裏面に見られる。表面には丸文が施されている。文様構成は不明である。裏面には唐草文が施されている。粒子は粗く焼成は良い。貫入は見られない。肥前・有田。	ナカウ '07 K-11・12 B 北 II 1113
	39	蓋	縁部	－ － 10.6	明治 頃	図上復元が可能な資料で、縁部の推算径は約10.6cmである。身受けの部分がないタイプである。文様は表面のみに施されている。粒子は粗く焼成は良い。貫入は見られない肥前系。	ナカウ '07 K-12 B 西 I 1113
	40	碗	底部	－ － 3.0	明治 以降	図上復元が可能な資料で、推算底径は約3.0cmである。高台はほぼ直線状に立ち上がり、腰部から曲線を描きながら立ち上がる。ほぼ直口である。文様は見られない。高台から畳付けまで鉄釉が施されている。粒子は細かく焼成は良い。貫入は見られない。窯不明。	ナカウ '07 K-10 B 東 III 1203
	41	蓋	縁部	－ － 8.2	明治 以降	クロム青磁。図上復元が可能な資料で、推算底径は約8.2cmである。身受けはほぼ直線状に立ち上がっている。文様は見られない。縁部から身受けの内側の部分は露胎である。粒子は細かく焼成は良い。貫入は見られない。窯不明。	ナカウ '07 K-11 B 東 I
第26図 図版17	42	摺鉢	口縁部 ～ 胴部	28.0 － －	16C	図上復元が可能な資料で、推算口径は約28.0cmである。口縁部の断面の形状が逆「L」字状に折れ曲がるタイプである。粒子は粗く焼成は良い。貫入は見られない。備前。	ナカウ '07 K-11 A III 1212

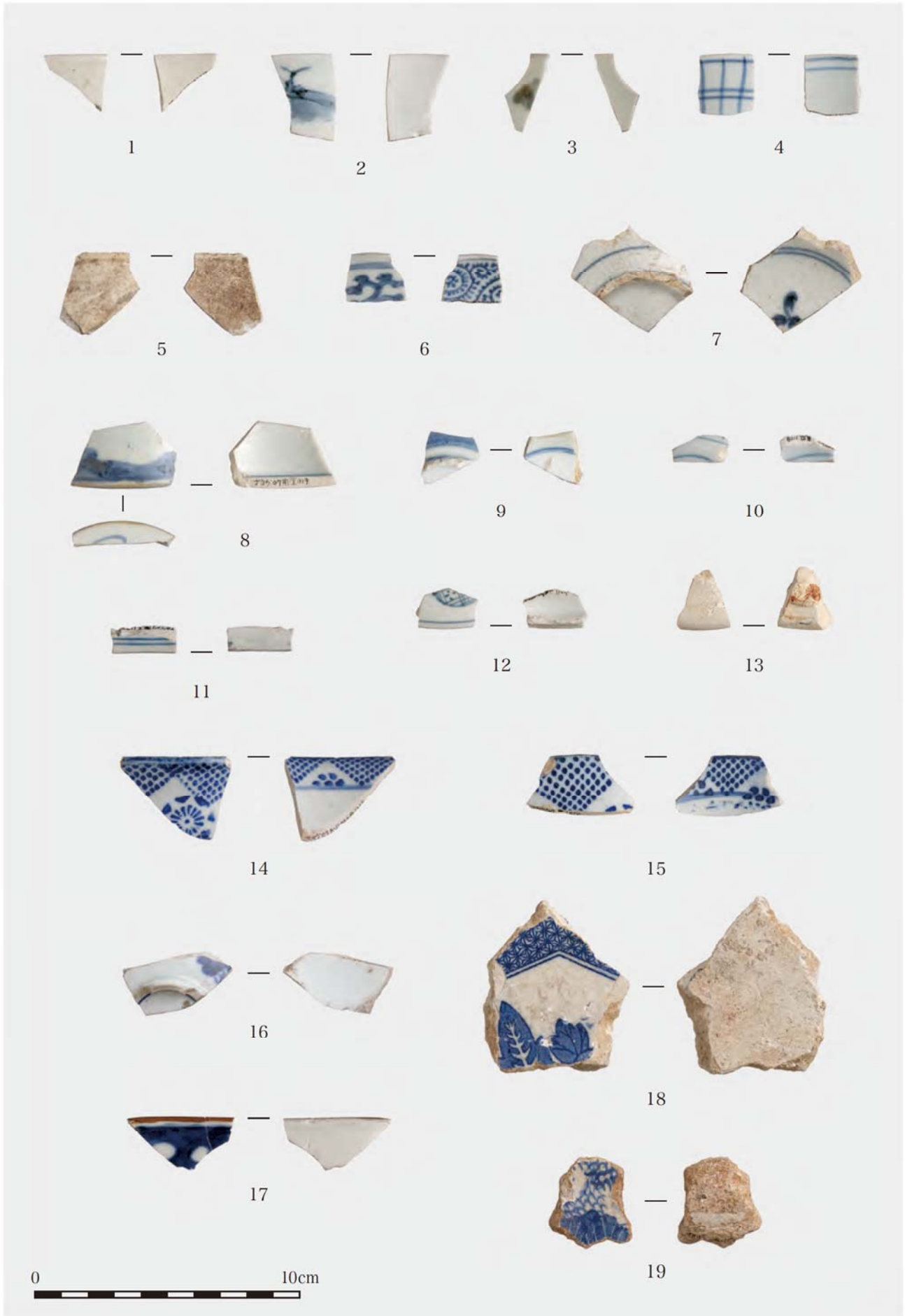
第16表　本土産陶磁器観察一覧

単位：cm

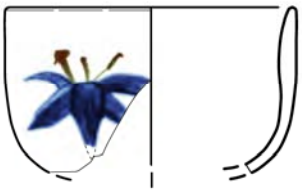
挿図番号 図版番号	番号	器種	部位	口径 器高 底径	年代	観察事項	出土地
第26図 図版17	43	壺	底部	－ － 11.9	19C	図上復元が可能な資料で、推算底径は約11.9cmである。いわゆる白物、白薩摩といわれるのもである。高台は畳付けからほぼ直線状に立ち上がり、高台脇から逆「ハ」の字状に立ち上がるタイプである。文様は表面のみに施されている。表面に草花文が施されている。色が散っている。粒子は粗く焼成は良い。貫入は表裏面ともに細かい。薩摩焼。	ナカウ '07 K-12 B 西 I 1113
	44	鍋	口縁部	18.3 － －	17C 後半 ～ 18C	図上復元が可能な資料で、推算口径は約18.3cmである。器形は口縁部が外反するタイプである。残存する口唇部は舌状である。口縁部の内面直下から外反部まで露胎である。粒子は細かく焼成は良い。貫入は見られない。九州。窯不明。	ナカウ '07 L-11・12 B 南 I 1122
	45	碗	口縁部	15.4 － －	17C 18C	図上復元が可能な資料で、推算口径は約15.4cmである。逆「ハ」の字状に立ち上がる器形である。表裏面ともに胴下部が露胎である。表裏面に形成痕が確認でき、表面は顕著である。文様は見られない。粒子は粗く焼成は良い。貫入は見られない。類例なし。中国的。窯不明。	ナカウ '07 K-10 B 東 III 1203
	46	碗	口縁部	－ － －	17C 後半 ～ 18C	図上復元が不可能な資料である。口縁部の器形は逆「ハ」の字状に開き、口縁部は直口するタイプである。粒子は粗く焼成は良い。貫入は細かく、表裏面で確認できる。呉器手碗。肥前（唐津）。	ナカウ '07 K-10 A III 1214



第23図　本土産陶磁器１　実測図

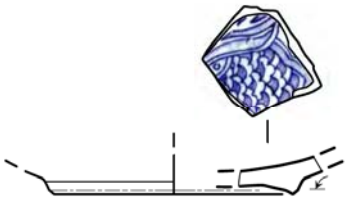


図版14　本土産陶磁器 1

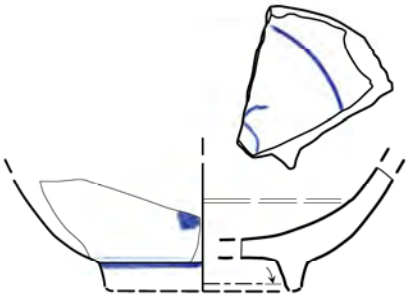


20

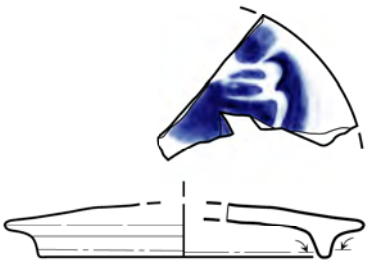
21



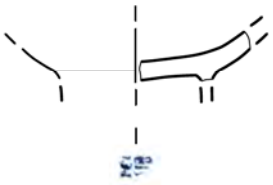
22



23



24



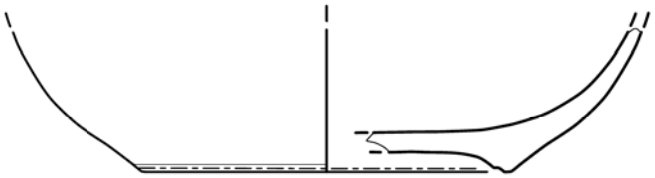
25

26

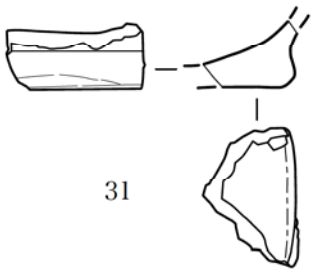
27

28

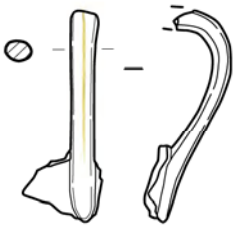
29



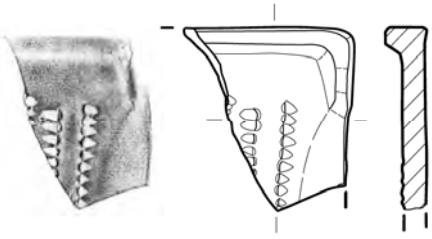
30



31



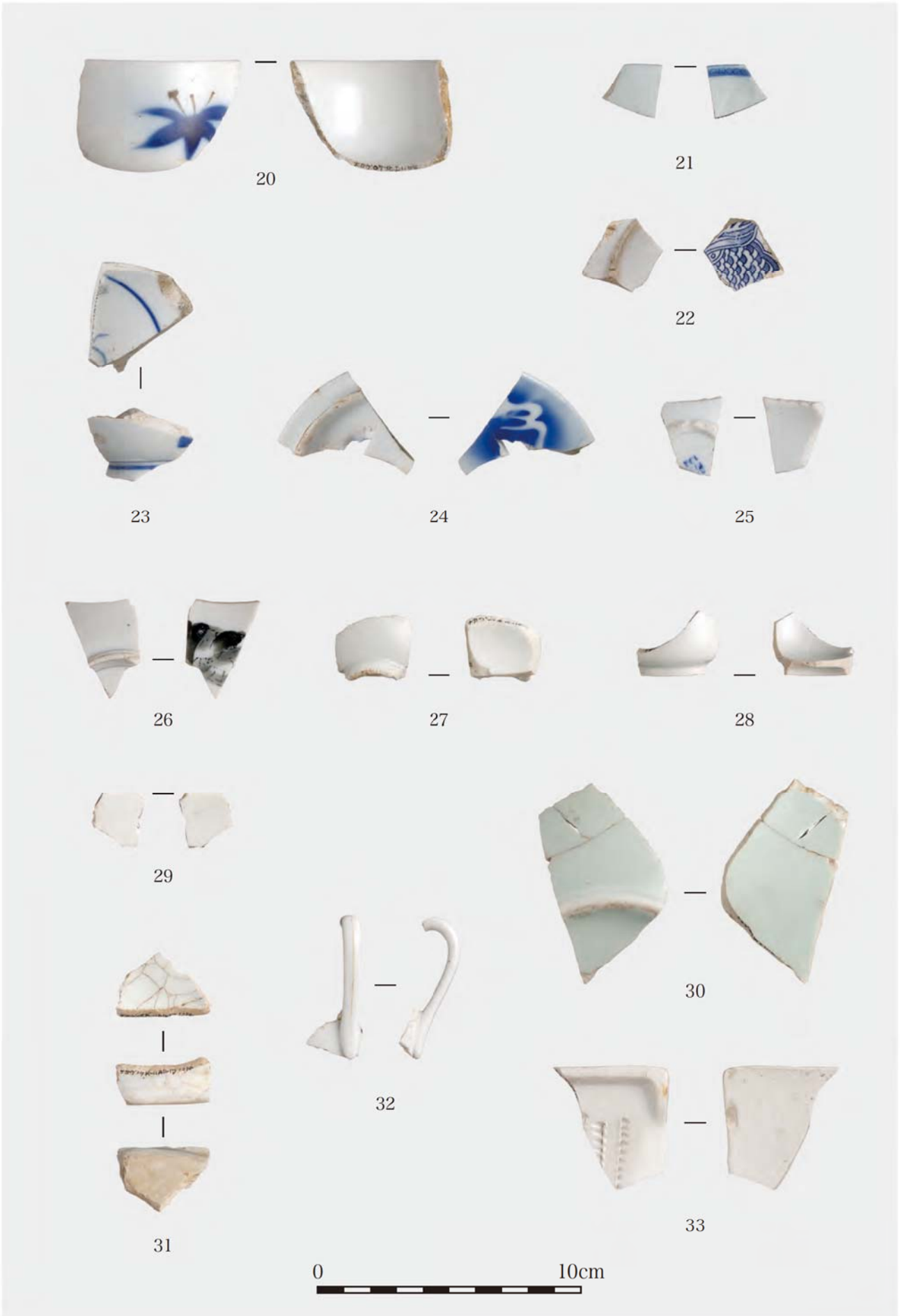
32



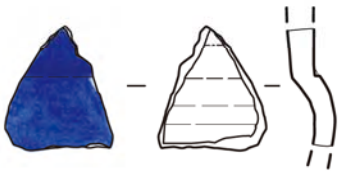
33

0 10cm

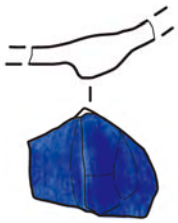
第24図　本土産陶磁器２　実測図



図版15　本土産陶磁器２

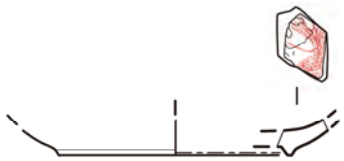


34



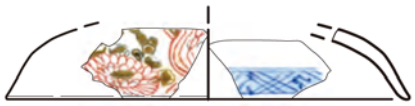
35

36

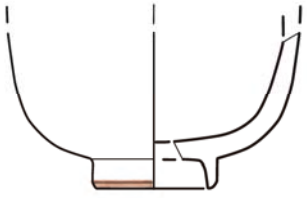


37

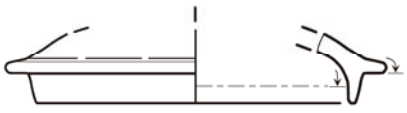
38



39



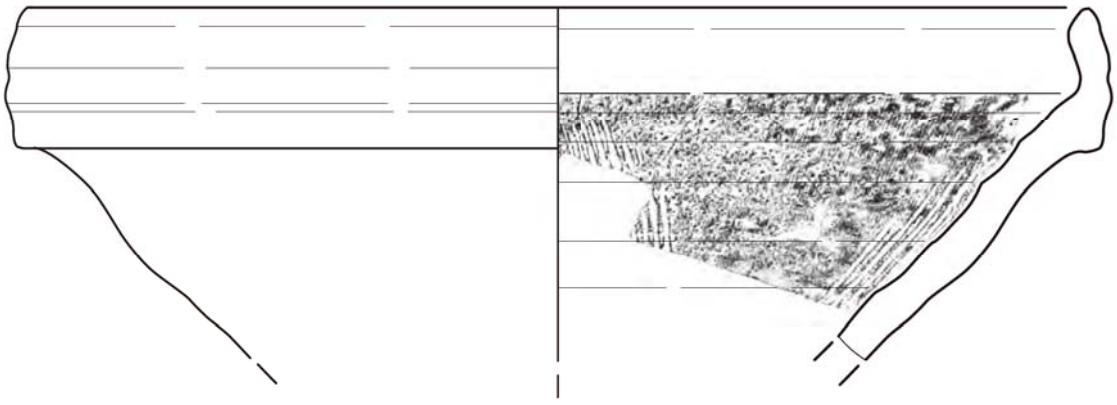
40



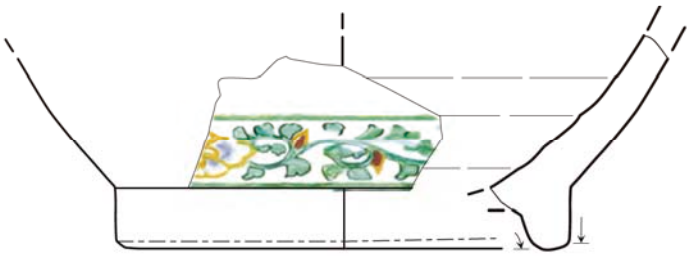
41

第25図　本土産陶磁器３　実測図

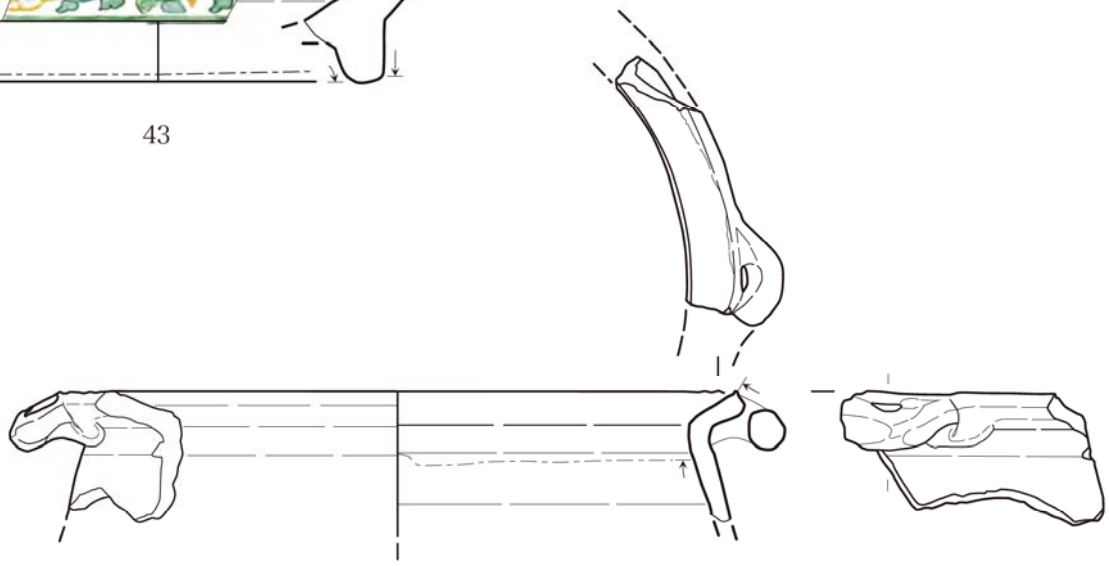
図版16　本土産陶磁器3



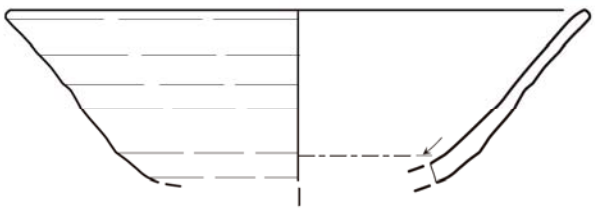
42



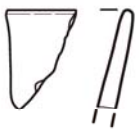
43



44



45



46

第26図　本土産陶磁器４　実測図

図版17　本土産陶磁器４

第８節　沖縄産施釉陶器

方言で「ジョウヤチ（上焼）」と称されるもので、器面に釉薬を施す陶器である。器種は碗・小碗・鉢・急須・火炉など、日用雑器を中心に確認された。全体で197点が確認され、うち碗・小碗・壺の３器種で出土数の約６割を占めている。

今回の調査では小破片が多く出土しているため、比較的残存状態の良好な44点を図化した。個々の遺物については観察一覧に記載する。

第17表　沖縄産施釉陶器集計表

器種	部位	A											B																	総計
		J-10	J-10・11		J-11		K-10	K-11				不明	J-11・12	K-10			K-10・11		K-11		K-11・12				K-12	L-11・12		
													北	東			東		東		南	北			西	南		
		Ⅳ	SR5	SS1	SD1	Ⅲ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅲ	Ⅳ	不明	Ⅰ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅴ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅲ	
碗	口	1				1						1					1		1	4			1							10
	口～底											1																		1
	胴		1				2		2			1	1				2			5	2	1		2			1		20
	底											2	1				2	1		4			1	1			1		13
小碗	口							1									2			5	1			1		1			11
	口～底																1												1
	胴						1		1								8	1	1	5				1			4		22
	底										1										1			1					3
皿	口								1																				1
	底			1												1				1									3
鉢	口																				1								1
	胴																			3		1		1					5
大鉢	胴											1																	1
小鉢	底																										1		1
擂鉢	胴														1														1
急須	口							1									1						1						3
	胴																1			2									3
	底											1				1	2	1									1	1	7
急須？	胴																						1						1
	底															1													1
瓶	胴											3				1	1			7			1						13
壷	口		1																										1
	胴			2	1		1		4	2						1	6			7	1	1		1	1	2	4	1	35
	底														1														1
壷？	胴								1																				1
小壷	胴																					1							1
香炉	底																										1		1
火炉	口																			1									1
	底							1																					1
火取	胴～底																							1					1
火炉or火取	口																1			1									2
蓋														1			1		1	3									6
袋物	口																			1									1
	胴			1					2			1				1	2			1									8
鍋	口																			2							1		3
	底																1												1
不明	口																			1									1
	胴			1	1			1	1							1				2									7
	底			1																							1		2
	不明								1																				1
総計		1	2	6	2	1	4	4	13	2	1	11	2	1	2	7	32	3	3	55	6	4	5	9	1	3	15	2	197

第18表　沖縄産施釉陶器観察一覧

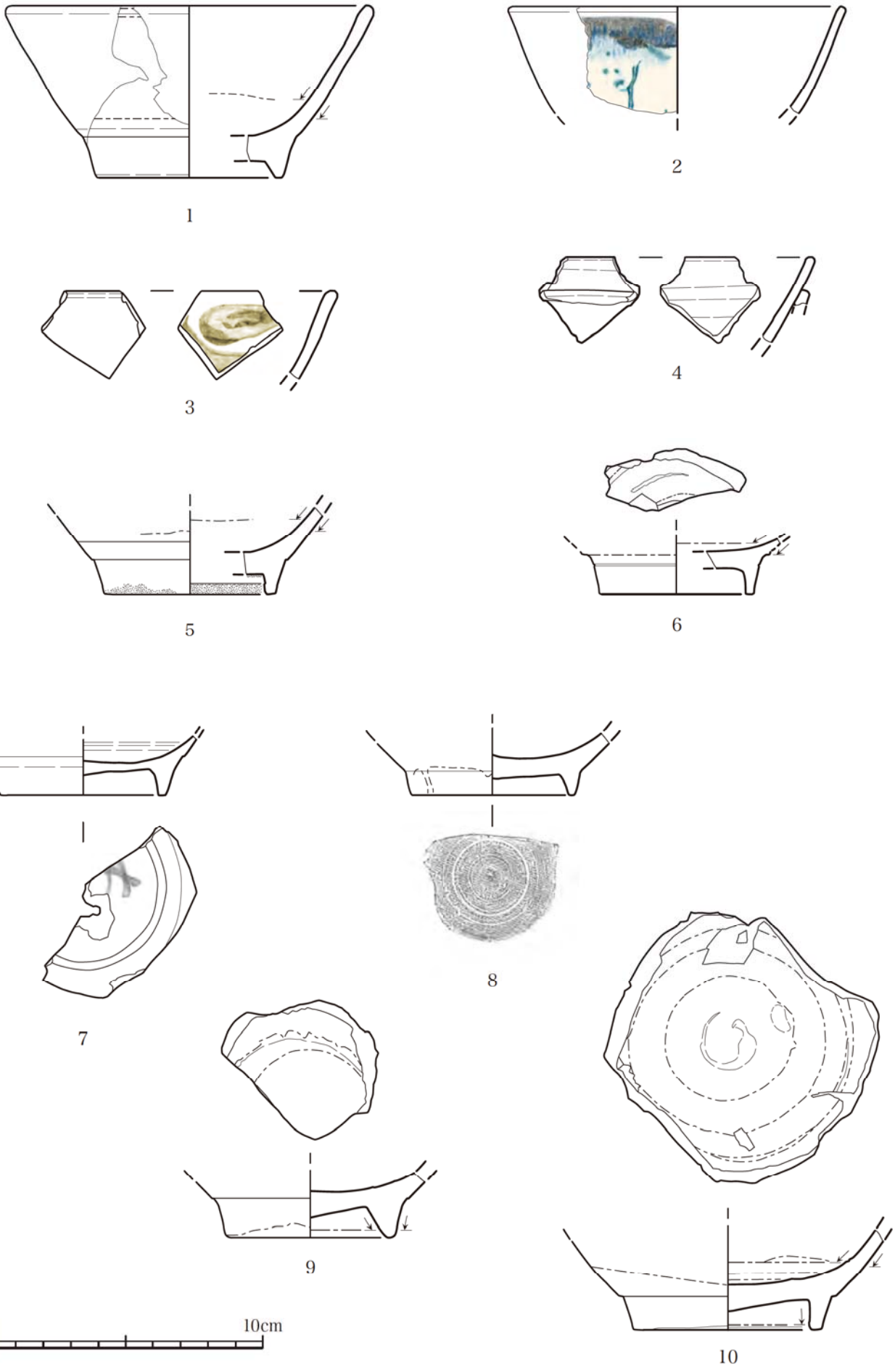
単位：cm

挿図番号 図版番号	番号	器種	部位	口径	器高	胴径	底径	観察事項	出土地
第27図 図版18	1	碗	口～底	13.4	6.2	－	6.8	素地は灰白色。透明釉の単掛け。直口碗で口唇は肥厚する。	ナカウ '07 A I 1205
	2		口	12.2	－	－	－	素地は灰色。口縁は僅かに外反し、腰部は丸みを帯びる。内面～口縁外部まで白化粧を施し、その上から透明釉を掛ける。外面には緑色釉の上から乳白色の釉を掛ける。	ナカウ '07 K-10 B 東 Ⅲ 1107
	3		口	－	－	－	－	素地は灰白色。口縁部は僅かに外反する。全体に透明釉を掛け、外面には緑色釉で絵付けを施す。	ナカウ '07 K-11 B 東 I 1114
	4		口	－	－	－	－	口縁は僅かに内彎し、口唇は丸みを帯びる。外面に別の器物の一部が付着。	ナカウ '07 K-11･12 B 北 I 1109
	5		底	－	－	－	6.2	素地は灰白色。腰部まで透明釉を掛ける。浸し掛けか。畳付に砂が付着している。	ナカウ '07 K-11･12 B 北 II 1112
	6		底	－	－	－	5.6	素地はにぶい黄橙色。飴釉単掛け。内底は蛇の目釉剥ぎし、目痕が付着している。	ナカウ '07 L-11･12 B 南 I 1203
	7		底	－	－	－	6	素地は灰色。蛇の目釉剥ぎ部分にアルミナ付着。外底部に文字らしきものがあり。	ナカウ '07 K-10 B 東 Ⅲ 1108
	8		底	－	－	－	5.9	素地は浅黄橙色。灰白色釉の単掛けで、釉垂れがみられる。外底部に轆轤痕。	ナカウ '07 K-11･12 B 北 I 1109
	9		底	－	－	－	6	素地はにぶい黄橙色。白化粧の後に内面は透明釉、外面は飴釉を施す。蛇の目釉剥ぎ。畳付に白土が付着。	ナカウ '07 K-11 B 東 I 1130
	10		底	－	－	－	6.6	素地は灰白色。見込み～外面腰部まで黒色釉を施釉し、蛇の目釉剥ぎを施す。釉剥ぎ部分にアルミナが残る。畳付に白土が付着。	ナカウ '07 K-11 B 東 I 1114
第28図 図版19	11		底	－	－	－	6	素地は浅黄橙色。灰白色釉を施釉する。見込みの部分に錆びらしきものとともに白土が付着している。	ナカウ '07 A I 1205
	12		底	－	－	－	5.6	素地はにぶい黄橙～褐灰色を呈する。白化粧後に透明釉を施す。蛇の目釉剥ぎ。貫入あり。	ナカウ '07 K-11 B 東 I 1203
	13		底	－	－	－	6.2	素地は橙色。黒色釉を内面～外面腰部まで施す。	ナカウ '07 A I 1205
	14		底	－	－	－	5.9	素地は淡黄色。白化粧の上に透明釉単掛け。蛇の目釉剥ぎ部にアルミナ付着。畳付釉剥ぎ。貫入あり。	ナカウ '07 K-10 B 東 Ⅲ 1108
	15		底	－	－	－	6.2	素地は灰白色。畳付は釉剥されており、その際部分には砂？が付着している。	ナカウ '07 J-11･12 B 北 I 1108
	16	小碗	口～底	8.8	4.6	－	3.6	素地は灰白色。口縁は外反している。内面にのみ白化粧を施し、外は黒色釉、内は透明釉のみを掛け分ける。蛇の目釉剥ぎ部分にアルミナ付着。貫入あり。	ナカウ '07 K-10 B 東 Ⅲ 1108
	17		口	9.2	－	－	－	素地は灰黄色。内面にのみ白化粧を施し、外は飴釉、内には透明釉のみを掛け分ける。外反口縁で、胴部に膨らみをもたせている。	ナカウ '07 K-10 B 東 Ⅲ 1112
	18		口	－	－	－	－	素地は灰白色。透明釉の単掛け。磁器質で、口縁は外反している。貫入あり。	ナカウ '07 K-11 A I 1205
	19		口	8.6	－	－	－	素地は灰色。白化粧あり。透明釉を施釉後、口縁内部に緑色釉、その上から青白色の釉が施されている。口縁は玉縁状を呈し、外反する。	ナカウ '07 K-10 B 東 Ⅲ 1108
	20		口	10	－	－	－	素地は灰黄色。外面～内面口縁まで飴釉を施す。口縁は玉縁状を呈し、外反する。	ナカウ '07 K-11･12 B 北 II 1112
	21		口	－	－	－	－	素地は灰黄色。オリーブ褐色～暗オリーブ褐色の釉を掛ける直口口縁の小碗。貫入あり。	ナカウ '07 K-11 B 東 I 1130
第29図 図版20	22		底	－	－	－	3.5	素地は浅黄色。白化粧後、透明釉を総釉。畳付に白土が付着している。貫入あり。	ナカウ '07 K-11･12 B 北 II 1112
	23		底	－	－	－	3.1	素地は浅黄色。白化粧後、透明釉を総釉。貫入あり。	ナカウ '07 K-11 A 1213
	24	Ⅲ	底	－	－	－	10.6	素地は灰白色。内面は白化粧＋透明釉、外面は黒色の釉と掛け分けられている。貫入あり。	ナカウ '07 J-10･11 A SS1 1207
	25		底	－	－	－	6.8	素地は灰色。白化粧あり。全体に透明釉が掛けられており、内面には絵付けが施される。青色の釉で絵付を施す。蛇の目釉剥ぎ。畳付釉剥ぎで白土付着。貫入あり。	ナカウ '07 K-10 B 東II 1122

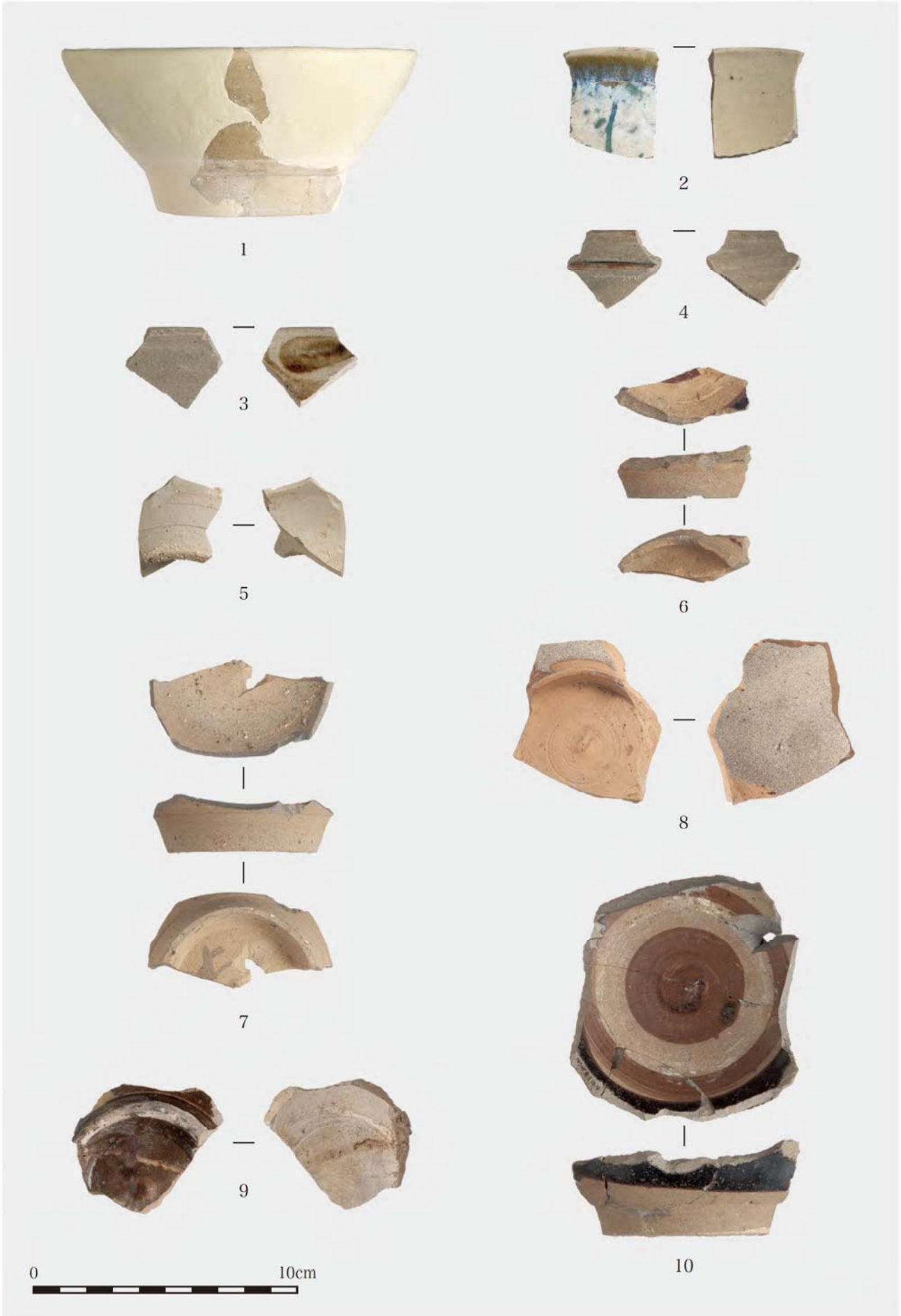
第18表　沖縄産施釉陶器観察一覧

単位：cm

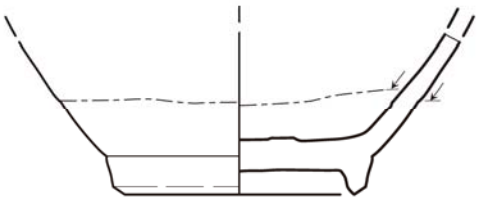
挿図番号 図版番号	番号	器種	部位	口径	器高	胴径	底径	観察事項	出土地
第29図 図版20	26	鉢	口	—	—	—	—	素地は橙色。逆「L」字状の口縁を呈し、 口縁上部は釉剥ぎされている。内面は露胎している。	ナカウ '07 K-11 B 東 II 1116
	27	小鉢	底	—	—	—	12.8	素地は灰白色。内面、外底にオリーブ灰の釉を掛けた後、 外面全体に透明釉を掛ける。内面に調整痕が残る。	ナカウ '07 L-11・12 B 南 I 1203
	28	擂鉢	胴	—	—	—	—	素地は灰黄色。茶色釉の総釉か。8～9条一組の櫛目を施す。	ナカウ '07 K-10 B 東 I 1115
	29	急須	口	—	—	—	—	素地は灰白色。外面～内面胴部まで飴色釉が施されているが、 口縁部は釉剥ぎされている。	ナカウ '07 K-11 A I 1207
	30		注口	—	—	—	—	素地は灰白色。内外面ともに透明釉を施釉し、外面には 緑色釉で絵付けを施す。貫入がみられる。	ナカウ '07 K-11・12 B 北 I 1109
	31		底	—	—	—	—	素地は浅黄橙色。内面に黒色釉を施釉する。破片のため、 外面にも施釉していたのかは不明だが、少なくとも外底部は無釉となる。	ナカウ '07 A I 1205
	32		底	—	—	—	—	素地は灰黄色。内面に見込み部分まで透明釉を施釉する。残存部を 観察する限りは外面は無釉であるが、足の付近に僅かに釉がみられる。	ナカウ '07 L-11・12 B 南 I 1203
第30図 図版21	33		蓋	10.4	—	—	(8.2)	素地はにぶい黄橙色。外面に飴色釉を掛ける。	ナカウ '07 K-10 B 東 III 1108
	34		蓋	6	—	—	—	素地は灰色。外面に黒色釉を施す。甲はやや平坦。貫入あり。	ナカウ '07 K-10・11 B 東 III 1203
	35		蓋	—	—	—	—	素地はにぶい橙色。縁部と内面の一部分に施釉。	ナカウ '07 K-11 B 東 I 1203
	36	瓶	胴	—	—	7.8	—	素地は灰白色。外面に飴色釉を施す。	ナカウ '07 K-11・12 B 北 I 1109
	37	壺	口	8.5	—	—	—	素地はにぶい橙色。白化粧あり。外面～内面口縁まで 透明釉を施す。口唇部は釉剥ぎされる。貫入あり。	ナカウ '07 J-10・11 A SR5 1207
	38	小壺	胴	—	—	10.8	—	素地は淡黄色。黒色釉単掛け。内面は露胎。	ナカウ '07 K-11・12 B 南 I 1204
	39	香炉	底	—	—	—	—	素地は灰白色。透明釉単掛け。	ナカウ '07 L-11・12 B 南 I 1122
	40	火炉	口	—	—	—	—	素地は灰白色。外面～内面口縁部まで施釉。	ナカウ '07 K-11 B 東 I 1203
	41	火炉 or 火取	口	—	—	—	—	素地は灰白色。白化粧あり。透明釉単掛け。	ナカウ '07 K-10 B 東 III 1112
	42		口	—	—	—	—	素地はにぶい橙色。口縁内面から外面にかけて明オリーブ灰の 釉を施釉する。直口の口縁が内側に肥厚する。	ナカウ '07 K-11 B 東 I 1114
	43	鍋	口	—	—	—	—	素地は灰白色。口縁は逆「L」字状に折れており、口唇部は僅かに肥厚している。全体に飴色釉が施釉されているが、口縁上部は釉剥ぎされている。	ナカウ '07 K-11 B 東 I 1130
	44	不明	胴	—	—	—	—	素地はにぶい黄橙色。白化粧あり。 飴色釉を施し内面は露胎している。器種不明。	ナカウ '07 K-10 B 東 II 1109



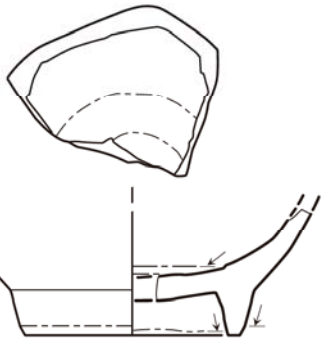
第27図　沖縄産施釉陶器１　実測図



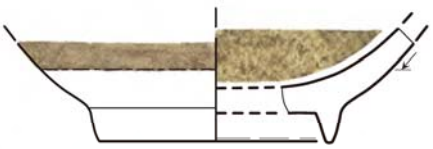
図版18　沖縄産施釉陶器 1



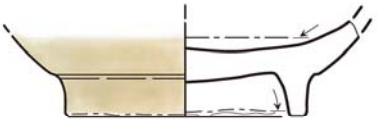
11



12

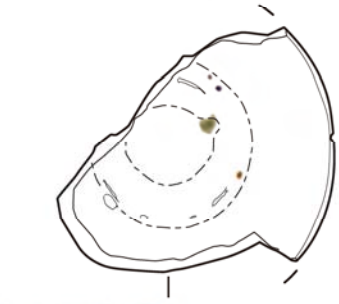


13



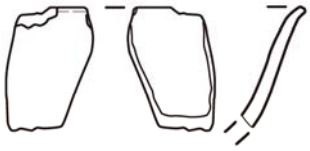
14

15



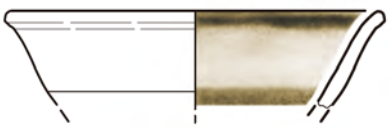
16

17



18

19

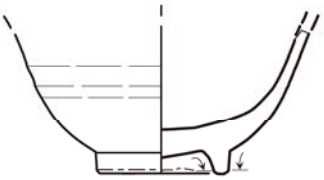


20

21

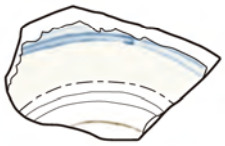
第28図　沖縄産施釉陶器２　実測図

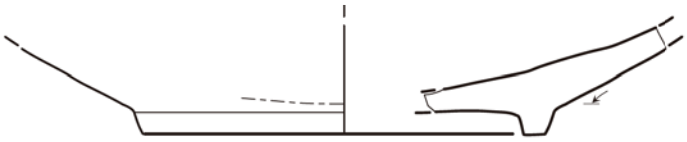
図版19　沖縄産施釉陶器２



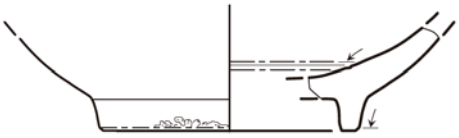
22

23



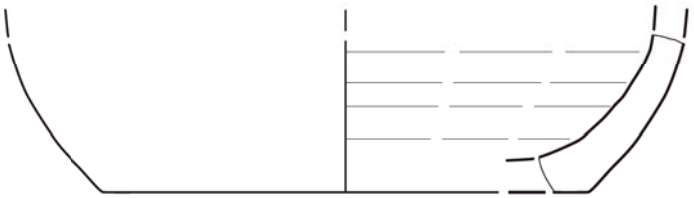


24

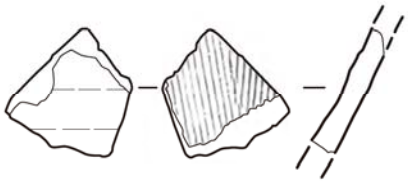


25

26

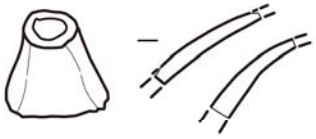


27

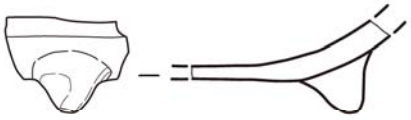


28

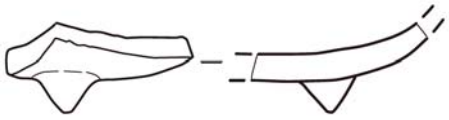
29



30



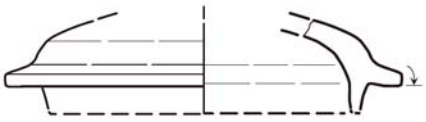
31



32

第29図　沖縄産施釉陶器３　実測図

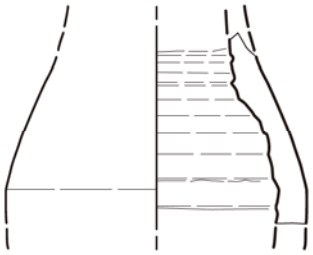
図版20　沖縄産施釉陶器３



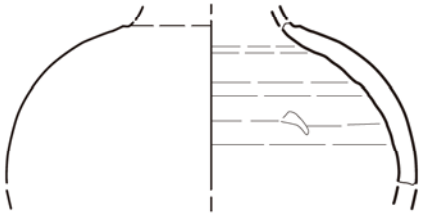
33

35

34

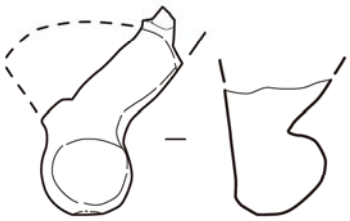


36

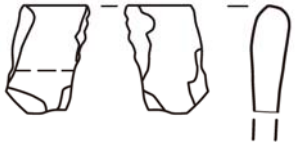


38

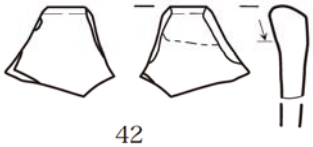
37



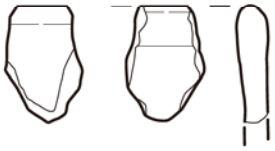
39



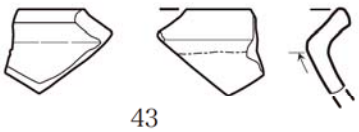
40



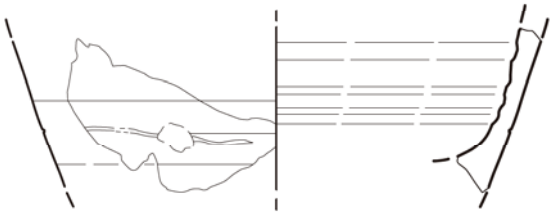
42



41



43



44

第30図　沖縄産施釉陶器４　実測図

図版21　沖縄産施釉陶器４

第９節　沖縄産無釉陶器

方言で「アラヤチ（荒焼）」と称されるもので、高火度で焼成された焼き締め陶器の一群を指す。基本的には無釉だが、自然釉や泥釉・マンガン釉が施釉されるものもある。器種は小碗・鉢・甕・火炉・蓋などが確認された。個々の遺物については以下の観察一覧に記載する。

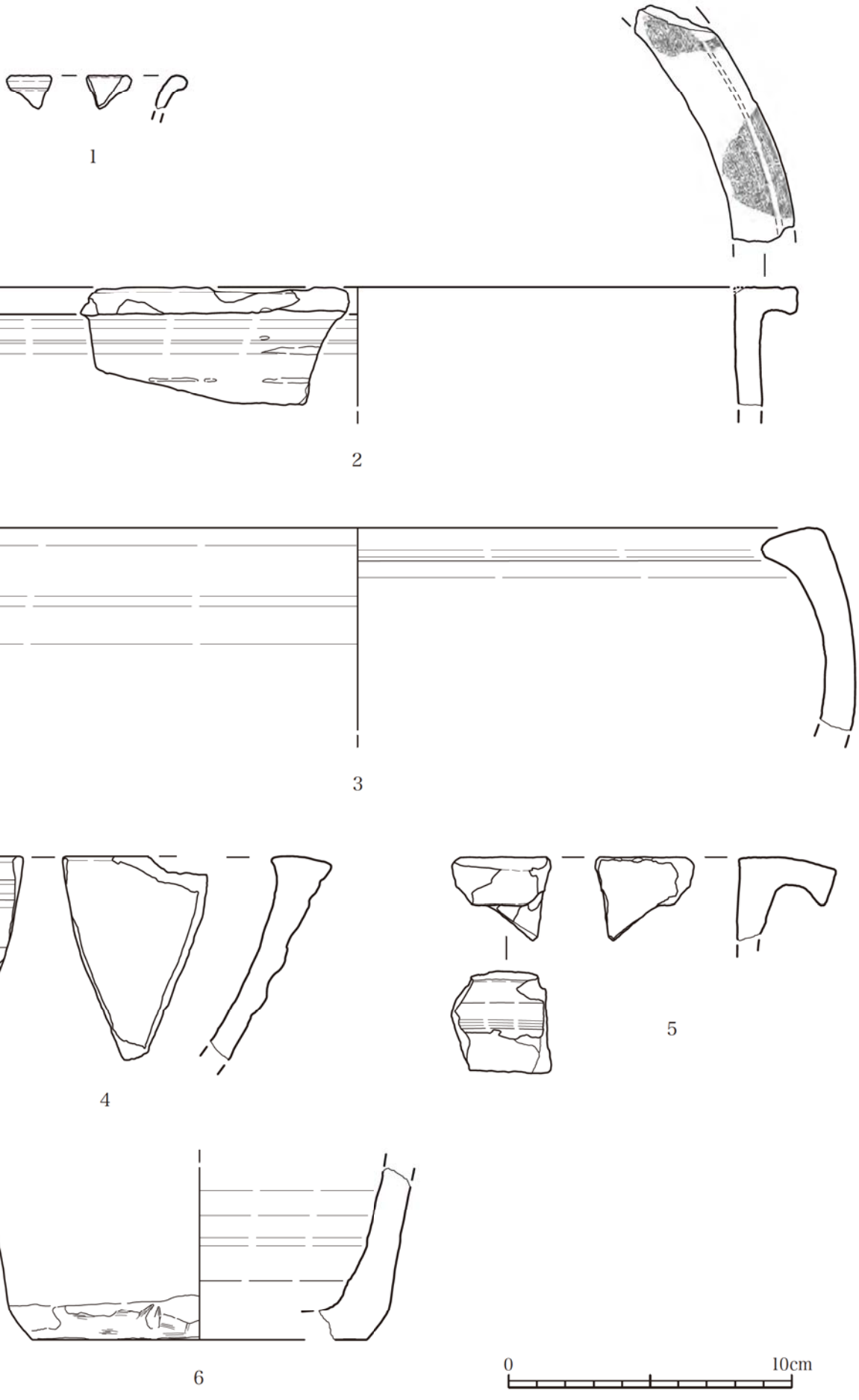
第19表　沖縄産無釉陶器集計表

		A								B														総計
		J-10	J-10・11		K-10	K-11			不明	J-11・12	K-10			K-10・11		K-11		K-11・12			K-12	L-11・12		
										北	東			東		東		北			西	南		
器種	部位	IV	SR5	SS1	III	I	III	IV	I	I	I	II	III	II	III	I	III	I	II	V	I	I	III	
小碗	口				1																			1
水鉢	口～胴																				1			1
	胴																	1						1
壷	頸												1		1									2
	胴	1			1	2	3				1		1			1				1	1	2		14
鉢	口								1			1				1					2	1		6
	胴	1			2	1	5		5	1	1	1	7			4			1	1	1	3	1	35
	底						1	1	1															3
鉢or甕	底								1														1	2
擂鉢	口														1									1
	口～胴		1																					1
	胴												2			1			1					4
	底						1			1			1											3
甕	口								1							1								2
	胴				1								2	1		1								5
火炉	口								1															1
蓋				1												1	1					1		4
不明	口																				1			1
総計		2	1	1	5	3	10	1	10	2	2	2	14	1	2	10	1	1	2	2	6	7	2	87

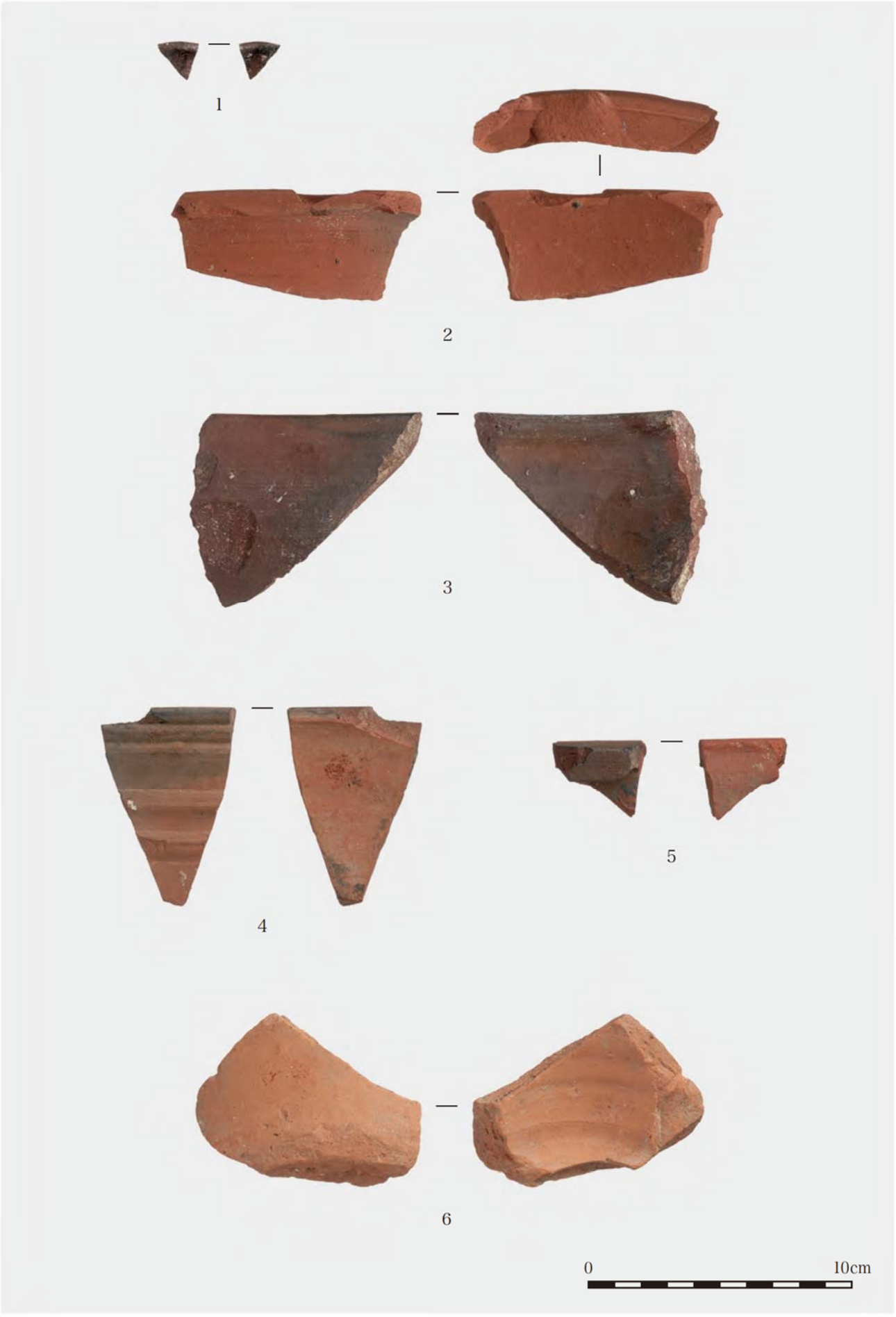
第20表　沖縄産無釉陶器観察一覧

単位：cm

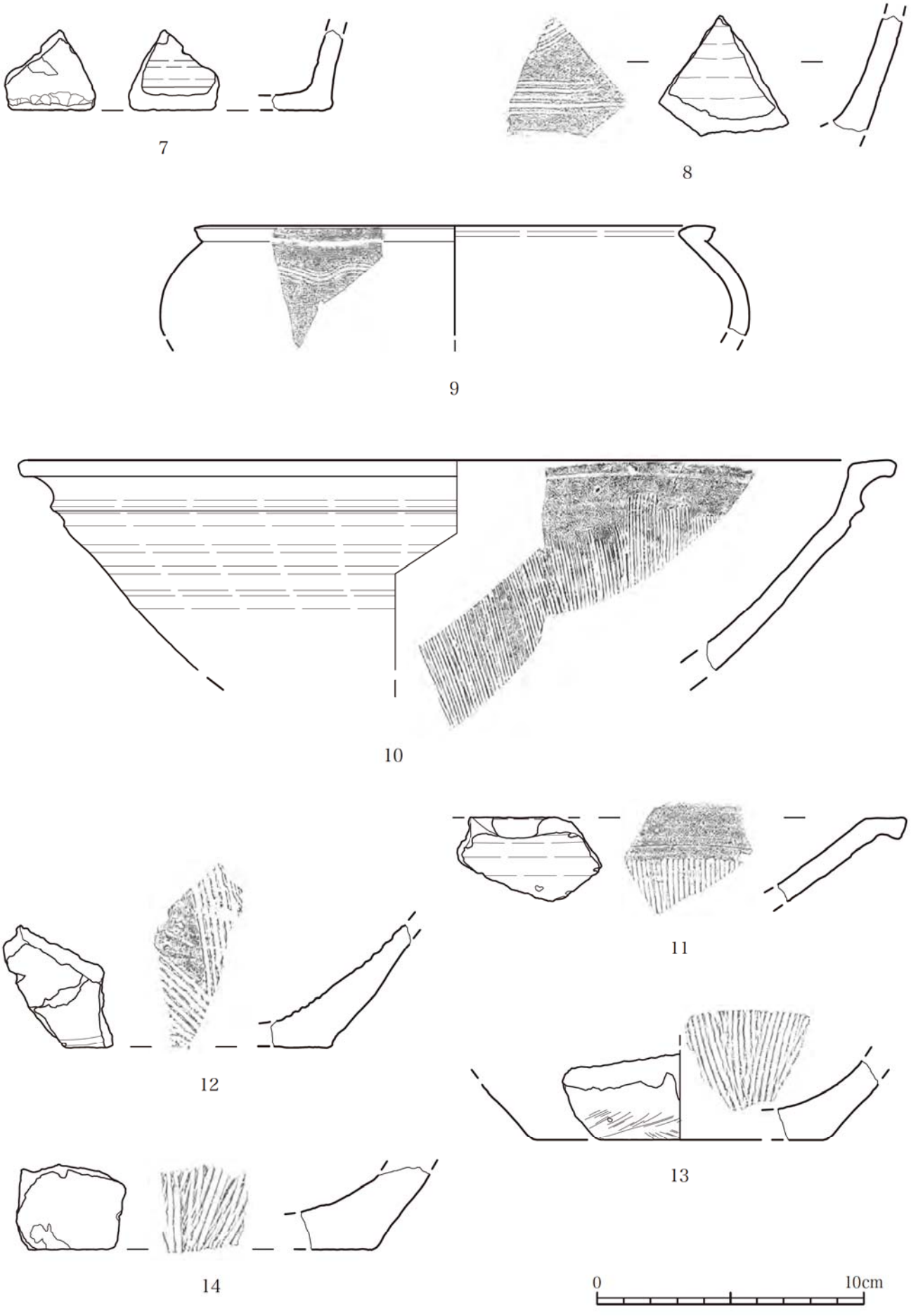
挿図番号 図版番号	番号	器種	部位	口径 器高 底径	器色	素地	観察事項	出土地
第31図 図版22	1	小碗	口	－ － －	両面ともに 暗褐色	灰褐色	外反の小碗と思われる資料。 口縁は玉縁状の肥厚を呈する。	ナカウ'07 K-10 A Ⅲ 1214
	2	鉢	口	31.2 － －	両面ともに 明赤褐色	明赤褐色	口縁部を逆「L」字状に形成する。 口唇部は平坦で、外面に１条の圏線を施す。	ナカウ'07 K-12 B 西 I 1113
	3		口	33.0 － －	内：灰褐色 外：にぶい 赤褐色	にぶい赤褐色	内彎の鉢。口縁の断面が「フ」の字状になり、 口唇部が緩やかに傾斜する。	ナカウ'07 K-11 B 東 I 1114
	4		口	－ － －	内：橙色 外：にぶい 橙色	にぶい赤褐色	肥厚帯下方に２条の沈線文を巡らせ、 胴部には２条の突帯文が貼付されている。	ナカウ'07 L-11･12 B 南 I 1203
	5		口	－ － －	内：明赤褐色 外：灰褐色	明赤褐色	口縁部を逆「L」字状に形成し、先端がやや肥厚する。 鍔上面は平坦で、外面が緩やかに傾斜する。	ナカウ'07 K-12 B 西 I 1113
	6		底	－ － 11.8	両面ともに橙色	橙 色	立ち上がりから腰部で屈曲し、胴部にかけてやや 垂直の様相を呈す。内外面には轆轤成形痕が残る。	ナカウ'07 A I 1205
第32図 図版23	7		底	－ － －	内：にぶい 黄橙色 外：灰オリーブ	にぶい黄橙色	立ち上がりはほぼ垂直で、内面と外面底部には 轆轤の成形痕が残る。	ナカウ'07 K-11 A Ⅳ 1217
	8		胴	－ － －	両面ともに 褐灰色	にぶい褐色	外面には５～６条単位の沈線文を巡らせる。 内面に轆轤成形痕が残る。	ナカウ'07 K-10 B 東 Ⅲ 1115
	9	水鉢	口	19.6 － －	内：明赤褐色 外：灰赤色	にぶい赤褐色	外面肩部に4～5条単位の波状沈線文を巡らせ、内面に轆轤 成形跡が残る。口縁内面には被熱の影響で黒ずみがみられる。	ナカウ'07 K-12 B 西 I 1113
	10	擂鉢	口	33.0 － －	内：にぶい 赤褐色 外：暗褐色	にぶい赤褐色	９条単位の櫛目が施され、 鍔上面端部から暗褐色の釉が掛かる。	ナカウ'07 J-10･11 A SR5 1207
	11		口	－ － －	内：明赤褐色 外：灰褐色	にぶい赤褐色	口縁を「へ」の字状に折り曲げている。内面の摺り 目の単位は不明。内面口縁直下の櫛目をナデ消す。	ナカウ'07 K-10･11 B 東 Ⅲ 1203
	12		底	－ － －	両面ともに橙色	にぶい橙色	交差するように摺り目が施される。 摺り目は深いが、単位は不明。	ナカウ'07 K-11 A Ⅲ 1217
	13		底	－ － 10.7	両面ともに 明赤褐色	明赤褐色	全体を丁寧に器面調整するが、腰部から底部にかけては 篦状工具での器面調整痕が残る。摺り目の単位は不明。	ナカウ'07 K-10 B 東 Ⅲ 1107
	14		底	－ － －	内：明赤褐色 外：にぶい 赤褐色	にぶい赤褐色	全体の器面調整が雑で特に底部は凹凸が激しい。 摺り目の単位は不明。	ナカウ'07 J-11･12 B 北 I 1108
第33図 図版24	15	甕	口	－ － －	内：－ 外：赤灰色	にぶい赤褐色	口縁部を逆「L」字状に形成する。	ナカウ'07 K-11 B 東 I 1114
	16		口	26.6 － －	内：赤褐色 外：灰赤色	にぶい赤褐色	肥厚帯下方に丸彫りの沈線文を２条、 鍔上面内端近くに１条の沈線文を施す。	ナカウ'07 A I 1205
	17	鉢or甕	底	－ － －	内：灰赤色 外：一部暗灰 黄色の釉	にぶい赤褐色	内面に轆轤成形痕、外面には 一部暗灰黄色の釉が残る。	ナカウ'07 A I 1205
	18		底	－ － 9.3	内：赤褐色 外：赤灰色	にぶい赤褐色	指ナデによる器面調整痕がみられる。 内面、底部には轆轤成形痕が残る。	ナカウ'07 L-11･12 B 南 Ⅲ 1113
	19	火炉	口	19.8 － －	両面ともに 橙色	にぶい橙色	口縁は逆「L」字状を呈し、胴部に煙穴がある。	ナカウ'07 A I 1205
	20	蓋	口	10.4 － －	内：にぶい 赤褐色 外：にぶい褐色	にぶい赤褐色	僅かに屈曲し、ドーム状に形を成す。	ナカウ'07 K-11 B 東 I 1203
	21	蓋	口	－ － －	内：赤色 外：にぶい 赤褐色	赤 色	外面には轆轤成形痕。	ナカウ'07 J-10･11 A SS1 1207
	22		摘み	1.9 － －	橙色	灰黄色	摘み上部は平坦で、中心部が僅かに窪む。	ナカウ'07 L-11･12 B 南 I 1116
	23		摘み	2.3 － －	にぶい褐色	赤褐色	半球形の摘みの一部と思われる資料。 指圧で形を調整している。	ナカウ'07 K-11 B 東 Ⅲ 1204
	24	不明	口	7.7 － －	両面ともに 暗赤灰色	暗紫灰色	口縁は玉縁状を呈する。 肥厚帯下方に圏線を施し、肥厚を強調させる。	ナカウ'07 K-12 B 西 I 1113



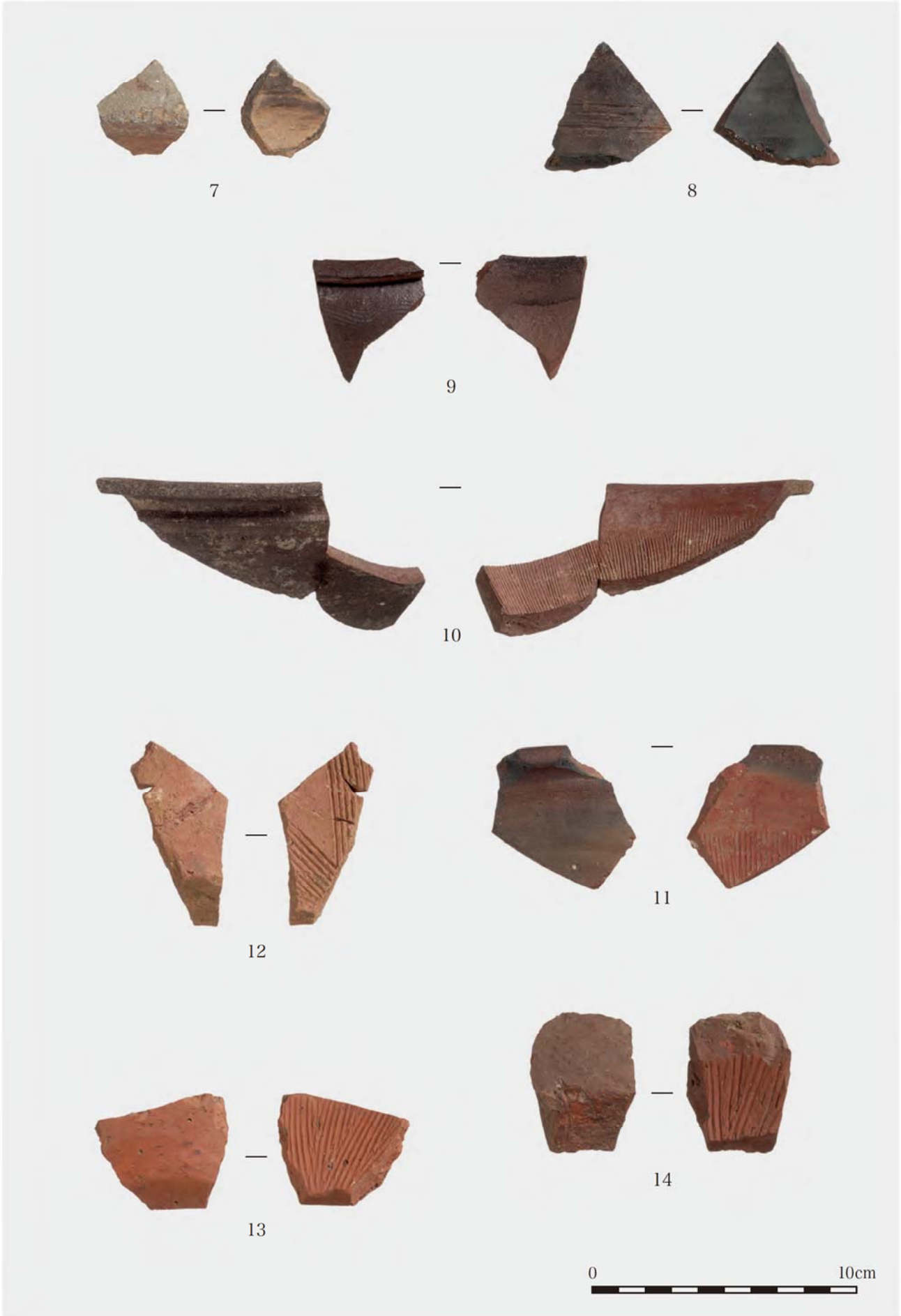
第31図　沖縄産無釉陶器１　実測図



図版22　沖縄産無釉陶器 1

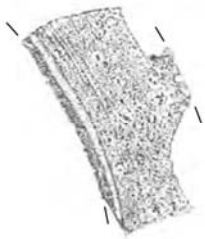


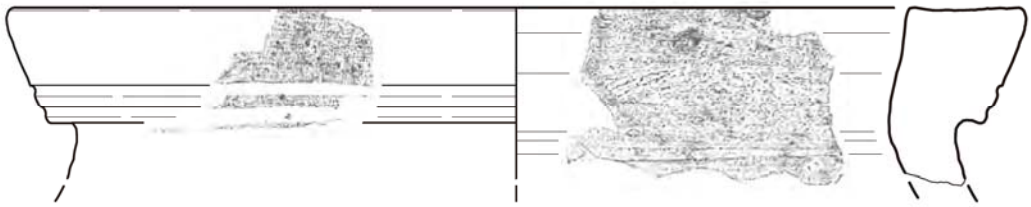
第32図　沖縄産無釉陶器２　実測図



図版23　沖縄産無釉陶器２

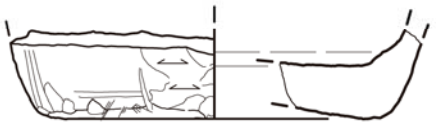
15



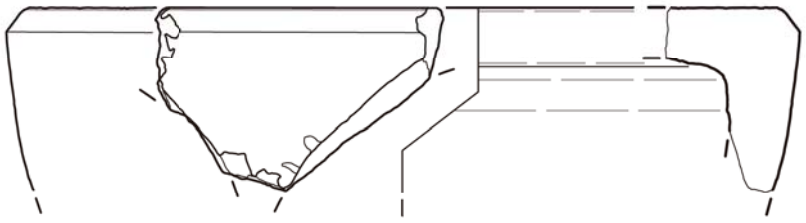


16

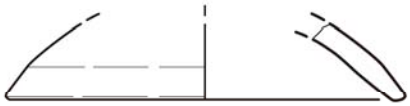
17



18

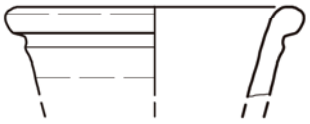


19



20

22

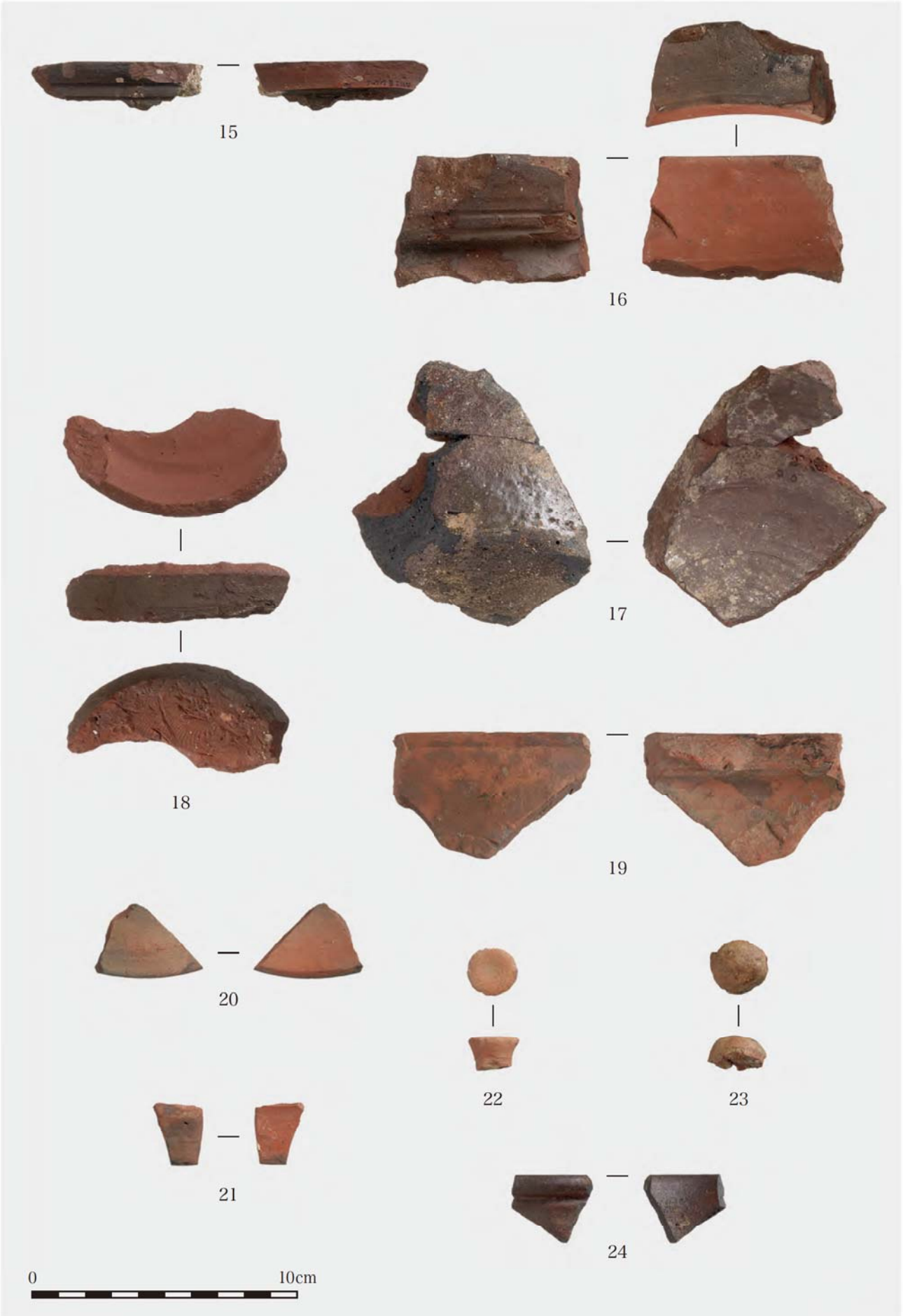


24

21

23

第33図　沖縄産無釉陶器３　実測図



図版24　沖縄産無釉陶器３

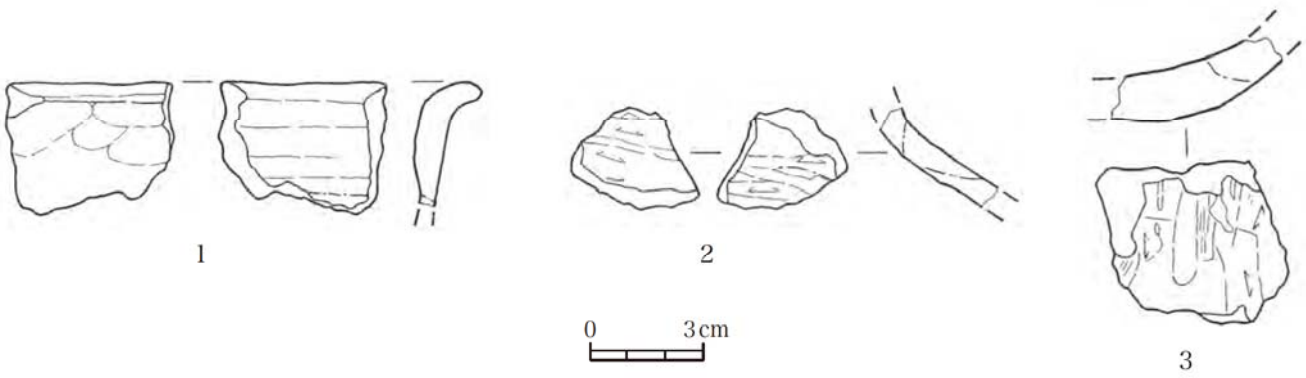
第10節　グスク土器

今回の発掘調査で、土器は総数９点得られた。土器型式で観るとグスク土器のみが出土している。図化が可能な３点あるが、全て小破片で、図上復元が可能な資料は１点も得られていない。詳細は観察一覧に記述を行う。なお、グスク系土器は1992（平成４）年の第１次の発掘調査で２点得られ、グスク土器以外では宮古式土器やパナリ焼等が得られている。

【参考文献】　旧中城御殿『一石牆工事地域にかかる第一次発掘調査―』　1993年３月　沖縄県立博物館

第21表　グスク土器観察一覧

挿図番号 図版番号	番号	器種	部位	口径 胴径 底径 器高	観察事項	出土地
第34図 図版25	1	鉢	口縁部	－ － － －	鉢形土器の口縁部の破片で、図上復元はできない。口唇部の形状は舌状である。頸部からラッパ状に開き、口縁端部で外反するタイプである。残存する部分では、文様は確認できない。無文の土器であると思われる。表面の色調について、口縁部の上端は褐色（Hue7.5YR4/3）で、口縁部下端は黒褐色（Hue7.5YR2/2）を呈する。裏面の色調について、口縁部下端はにぶい褐色（Hue5YR6/4）を呈し、外は暗赤褐色（Hue2.5YR3/2）を呈する。表面の器面調整は口唇部下端がヘラによる調整痕が確認される。口縁部上端は指による調整痕が確認できる。口縁部下端は指による撫で調整を行い、その後、繊維質で右上から左下へ撫で調整が確認できるが部分的である。裏面は口唇部と口縁部上端は丁寧な撫で調整が行われている。口縁部下端はヘラによる撫で調整が行われている。胎土は精製されている。混入物は石灰質の砂粒が確認できる。焼成はかなり良く、緻密である。器壁の厚さは器壁が薄い箇所で約3mm、厚い箇所で約8mm 程度である。口縁部は厚手である。口縁部下端で輪積痕が確認できる。	ナカウ '07 K-10・11 B 東 III 1203
	2	壷	頸胴部	－ － － －	壺形土器の頸胴部の破片で、図上復元はできない。頸部から胴部にかけてやや肩が張るタイプで、頸部はすぼまるタイプである。残存する部分では、文様は確認できない。表面の色調は暗灰色（HueN3/）を呈し、裏面はにぶい褐色（Hue7.5YR5/3）を呈し、部分的に褐灰色（Hue5YR5/1）を呈する。表面の器面調整は丁寧に撫で調整が行われている。裏面の器面調整は撫で調整を行った後に、指による調整痕が確認できる。表裏面の肌障りはツルツルである。混入物には石灰岩の砂粒が確認できる。焼成は良好で、緻密である。器壁の厚さは頸部上端で厚く、約８mm 程度で、それ以外はほぼ均等の厚さで約７mm 程度である。口縁部上端と下端に輪積痕が確認できる。	ナカウ '07 K-11 A III 1212
	3	鉢	底部	－ － － －	鉢形土器の底部の破片で、図上復元はできない。器形は底部から胴部にかけて緩やかに立ち上がるタイプである。底部の形状は丸底である。残存する部分では、文様は確認できない。表面の色調について、底部は黒褐色（Hue5YR2/1）を呈し、胴部へ立ち上がる部分は灰赤色（Hue2.5YR4/2）を呈する。裏面の色調について、底部は暗赤灰色（Hue10YR3/1）を呈し、立ち上がる部分はにぶい橙色（Hue5YR6/3）を呈する。表面の器調整は、ヘラや指による調整痕が施されている。胎土はさほど精製されていない。混入物は石英と少量だが、石灰質の砂粒が確認できる。焼成は良い。器壁の厚さは底部で約 15mm 程度で、胴部は約 10mm 程度である。底部から胴部へ立ち上がる部分に輪積み痕は確認できる。	ナカウ '07 K-10・11 B 東 II 1122



第34図　グスク土器　実測図

図版25　グスク土器

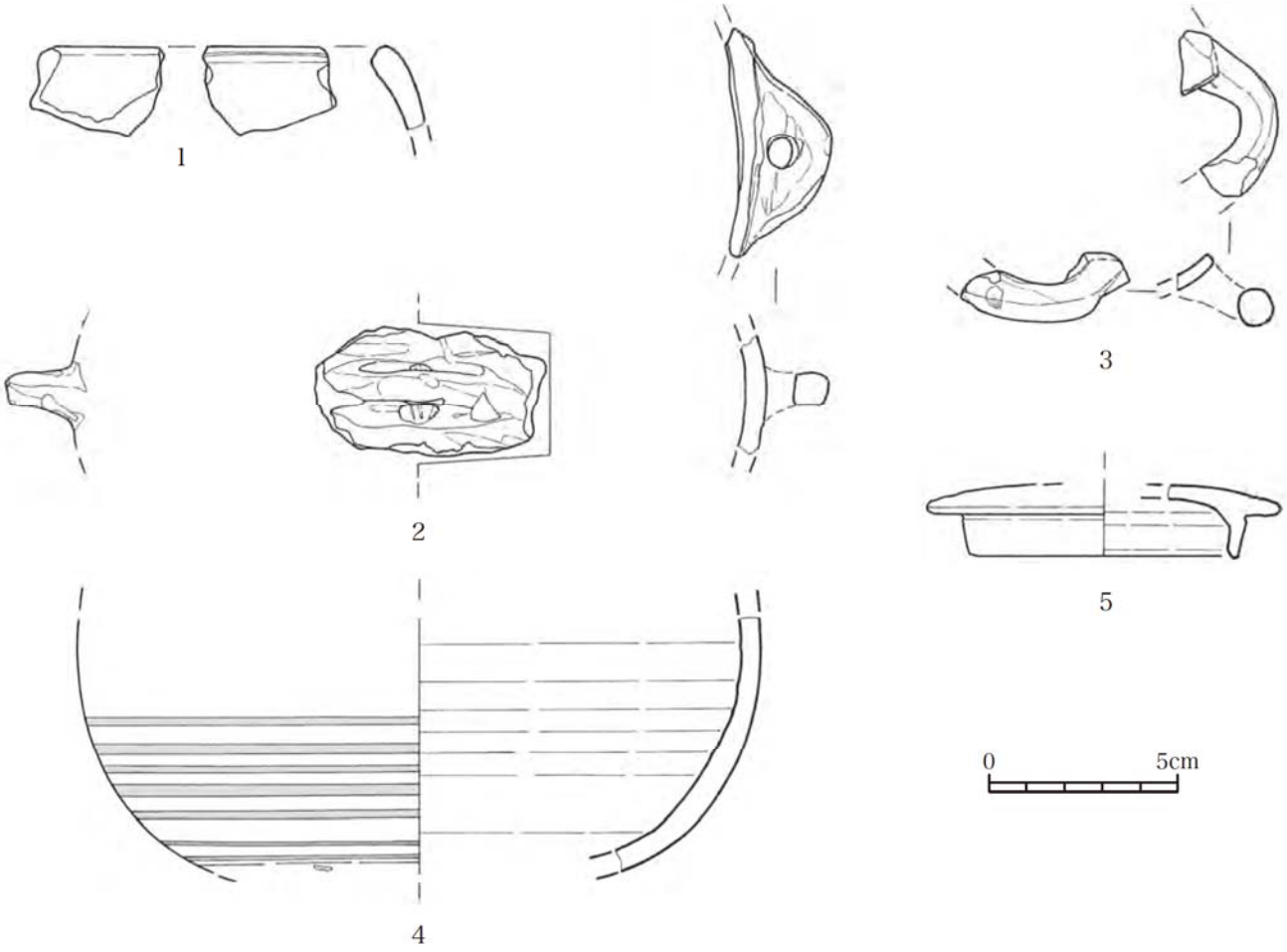
第11節　陶質土器

今回の発掘調査で、陶質土器は16点得られた。そのうち図化が可能な資料は5点で、確認できる器種は鍋や鉢、火炉、急須の蓋であった。全て小破片であるが、3点のみ図上復元が可能である。それ以外について、器形全体の形状は不明である。詳細は観察一覧に記述を行う。この種の遺物の特徴として、成形が轆轤引き、器面調整が撫でやヘラ削りで、胎土は精製され、器色は橙褐色・黄褐色の系統で、焼成温度が良好でない物は触ると細かい粉末が付着する。更に、器壁の厚さは薄く作られている素焼きの焼き物である。壺屋では「アカムヌー」と呼称されている。主に、近世の集落遺跡（古島、元島とも呼称される）から出土している。

第22表　陶質土器観察一覧

単位：cm

挿図番号 図版番号	番号	器種	部位	口径 胴径 底径 器高	観察事項	出土地
第33図 図版26	1	鉢	口縁部	– – – –	鉢形土器の口縁部の破片で、図上復元はできない。器形は内湾するタイプである。口縁部は肥厚する。口唇部は舌状を呈し、やや裏面側に1条の沈線を施している。表面の色調は赤褐色（Hue5YR4/8）を呈し、裏面は明褐色（Hue5YR5/6）を呈する。表面に煤が確認できる。器面調整は表裏面とも撫で調整である。特に、裏面は丁寧な撫で調整である。混入物に細かい砂粒を含み、黒色の鉱物が散見できる。焼成は良好である。器壁の厚さは口縁部の肥厚部分の最大が約8mm で、胴部が約5～8mm 程度である。	ナカウ '07 K-10・11 B 東 II 1122
	2	火炉	耳	– 18.5 – –	火炉の耳の破片で、口縁部・底部は欠損している。図上復元が可能で、推定の胴径が約 18.5cm である。耳の形状はほぼ半円形状を呈し、胴部へ張り付け、丸い棒状の工具で、耳の中央部へ貫通させている。貫通の方向は上から下方向である。表面の色調は明褐色（Hue5YR5/8）を呈し、裏面の色調は褐色（Hue5YR6/8）を呈する。器面調整は表面は撫で調整を行うが、裏面に比べ雑である。特に、裏面は丁寧に撫でによる調整を行っている。胎土は精製されて、粒子が細かい。混入物は雲母や黒色の鉱物が確認できる。焼成は良好である。器壁の厚さは、約5～5.5mm 程度である。	ナカウ '07 K-11・12 B 北 I 1109
	3	土鍋	口縁部	– – – –	土鍋の口縁部並びに、把手の破片で、図上復元はできない。器形は口縁部が外反するタイプである。残存する口唇部は舌状である。口縁部並びに、把手部分の表裏面と断面部分の色調は橙色（Hue7.5YR6/6）を呈している。器面調整は表裏面とも撫で調整である。胎土は精製されて、粒子は細かい。器の表裏面に触れると細かいパウダー状の粉が付着する。混入物は雲母と黒色鉱物等が確認できる。焼成は良好である。残存する口縁部の器の厚さは、約4mm である。把手部分の厚さは9～11mm である。	ナカウ '07 K-10 B 東 III 1107
	4	火炉	胴部	– 18.2 – –	火炉の胴部から底部までの破片で、口縁部と底部は欠損している。図上復元が可能で、推定の胴径が約 18.2cm である。器形は底部から湾曲に立ち上がり、胴部の最大部で直行するタイプである。色調は表面は橙色（Hue5YR6/8）を呈し、裏面は橙色（Hue7.5YR6/8）を呈する。器の表面に白化粧土による横線を胴部から底部付近まで8条巡らしている。器面調整は表裏面とも撫で調整で丁寧に調整されている。胎土は精製されている。混入物に雲母や黒色鉱物を含んでいる。焼成はかなり良好である。器壁の厚さは約6mm である。	ナカウ '07 K-10 B 東 III 1108
	5	土鍋の蓋	被せ？	9.4 – 7.1 –	急須の蓋で、頂部にある摘みの部分が欠損している。図上復元が可能で、口径が約 9.4cm で、底径が約 7.1cm である。色調は表裏面とも赤褐色（Hue5YR4/8）を呈する。器面調整は撫で調整で丁寧に調整されている。胎土は精製されている。混入物に雲母と黒色鉱物を含んでいる。焼成はかなり良好である。摘みに近い部分の器壁の厚さは約5mm である。	ナカウ '07 K-10 B 東 III 1108



第35図　陶質土器　実測図

図版26　陶質土器

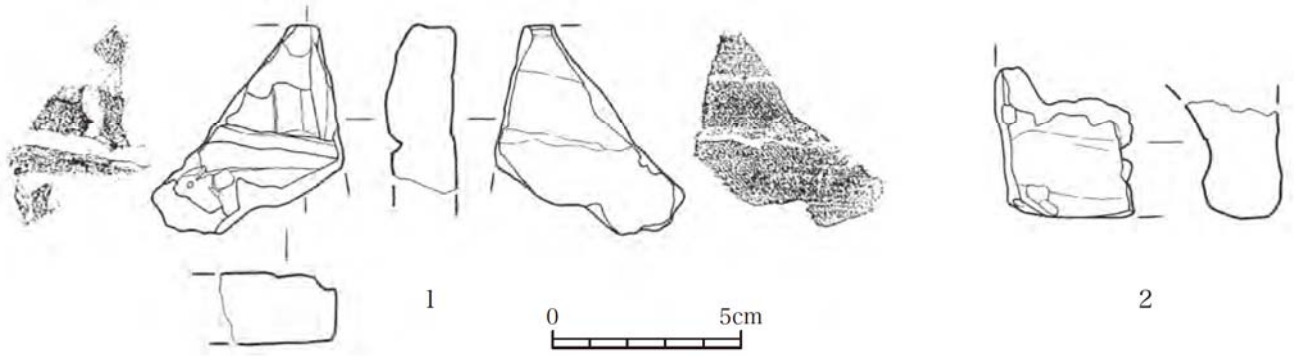
第12節　瓦質土器

今回の発掘調査で、瓦質土器が３点得られている。２点は図化が可能な資料である。両資料とも小破片の資料で、第36図１は部位については、端部が平坦であるが、部位や器形等が詳細不明であることから器種については、不明とした。同図２は火炉の底部の一部と思われる。湧田古窯跡に類似すると思われる資料（第56図40、46～48）があり、その資料を参考に図化を行った。詳細は観察一覧に記述を行う。

【参考文献】　沖縄県文化財調査報告書 第136集 湧田古窯跡(Ⅳ)『一県民広場地下駐車場建設に係る発掘調査―』
1999年３月　沖縄県教育委員会

第23表　瓦質土器観察一覧

挿図番号 図版番号	番号	器種	部位	口径 胴径 底径 器高	観察事項	出土地
第36図 図版27	1	不明	不明	－ － － －	瓦質土器の破片であるが、器種と部位は不明である。上端部と右側面部に縁が確認できる。成形は荒く仕上げ、凹凸が確認できる。平瓦の成形を彷彿させる。表面に縦位に２列、横位に２列の凹文？と思われるが、小破片であるので、文様であるがどうか不明である。縦位のものは、約5.5mmの一定幅のヘラ状と思われる工具で縦位に凹文？を施している。片面のみ押圧が見られる。施文の方向は上端から下端である。横位のものは上部にあるものは約４mmの一定幅のヘラ状と思われる工具で明瞭に左から右方向の施文である。下端にあるものは長さが短く、幅が不明な工具によって施されているので、不明瞭である。残存状況から確認すると左から右方向の施文である。表面の器面調整は荒い仕上げである。裏面の器面調整について、全面的に繊維質のもので撫で調整を行っている。瓦に共通な布目の痕は確認できない。表面の色調は、灰色（Hue 5Y 4/1）を呈する。裏面並びに、表面右側面部の色調はオリーブ色（Hue 5Y 3/1）を呈する。色調から推察して、灰色に含められるが、経年よって酸化し、一部について赤色に変化している。表面の色調調整は荒く、凹凸の面が確認できる。胎土は泥質である。混入物は白色の細かい砂粒が散見できる。焼成は良好である。器壁の厚さは上端部分が薄く約12mmで、最も厚い部分は約18mmである。	ナカウ '07 K-11･12 B 北 II 1113
	2	不明	不明	－ － － －	瓦質土器の破片である。器種は不明である。部位は器形の形態の状態からすると脚台に相当すると思われる。表面部分の立ち上がりはほぼ直口状に呈し、裏面部分は、立ち上がりはほぼ直口状を呈し、その後、外反する。底の部分は丸味を帯びている。表裏面の色調は、明赤色（Hue 5YR 5/6）を呈する。断面部分の色調は一部について、褐灰色（Hue 7.5YR 4/1）となっており、経年よって表裏面が酸化し、赤色に変化している。全ての状態から推察して、灰色のグループに属する。器面調整について、表面は丁寧ではないが、撫で調整である。裏面は雑な仕上げである。瓦質土器であるが、瓦に共通な布目の痕は確認できない。胎土は大粒な粘土の塊が確認できるので、荒い。混入物は少量だが、石灰質の砂粒が散見できる。焼成は良好である。器壁の厚さは脚の部分が約20.5mmで、破損部分の厚さが24mmである。	ナカウ '07 K-11 B 東 I 1130



第36図　瓦質土器　実測図

図版 27　瓦質土器

第13節　円盤状製品

今年度出土した円盤状製品は7点のみ。胴部のみの資料で、大きいもので最大径6.5cm（第37図6）から小さいもので最大径2.9cm（第37図1）。素材別にみると、褐釉陶器、沖縄産無釉陶器、沖縄産施釉陶器、瓦製などに分かれる。個々の詳細については観察一覧に記す。

【参考文献】

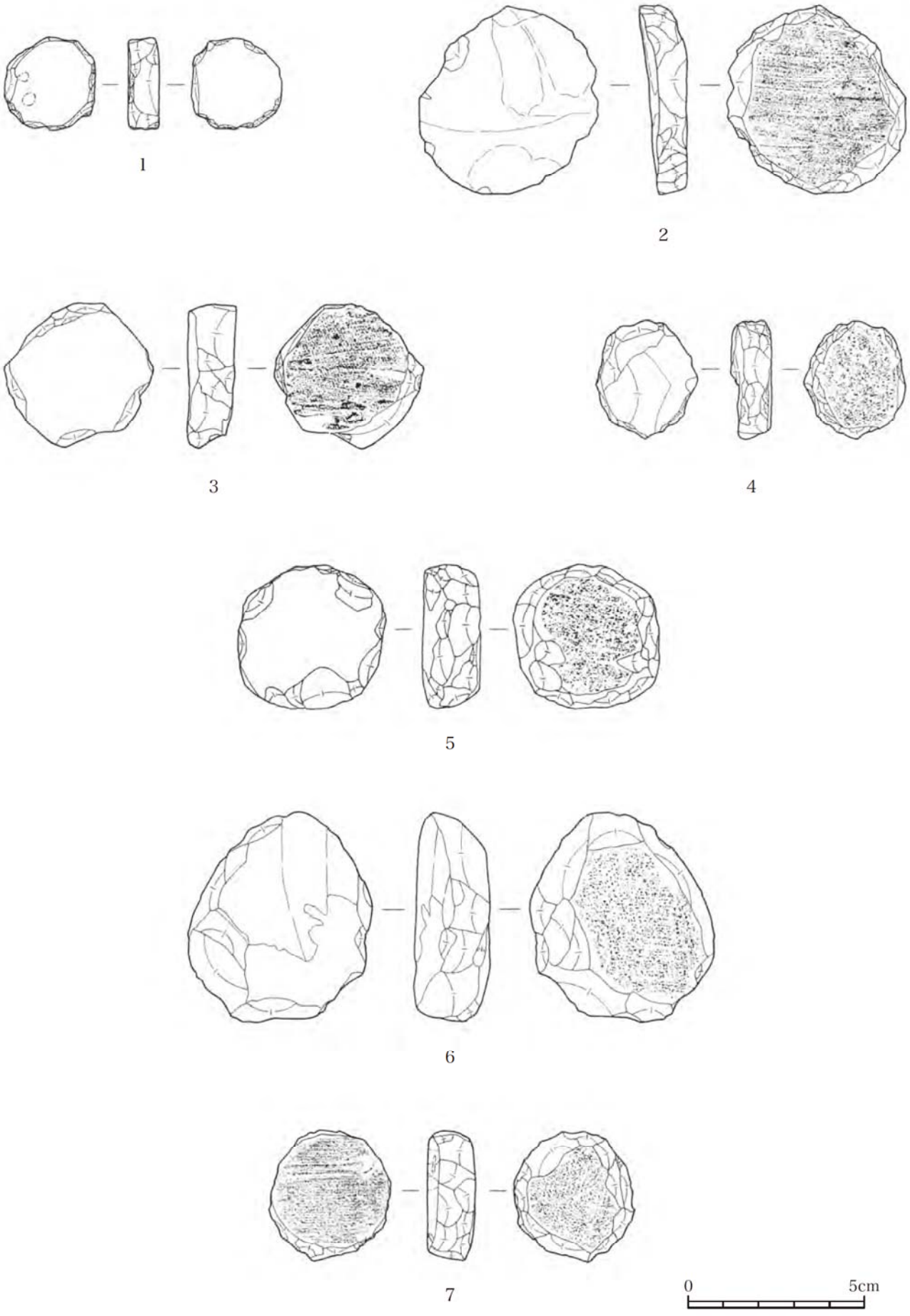
沖縄県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第48集 真珠道跡『―首里城跡真珠道地区発掘調査報告書（Ⅲ）―』
2008（平成20）年３月　沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第46集 渡地村跡『―臨港道跡那覇１号線整備に伴う緊急発掘調査報告―』
2007（平成19）年７月　沖縄県立埋蔵文化財センター

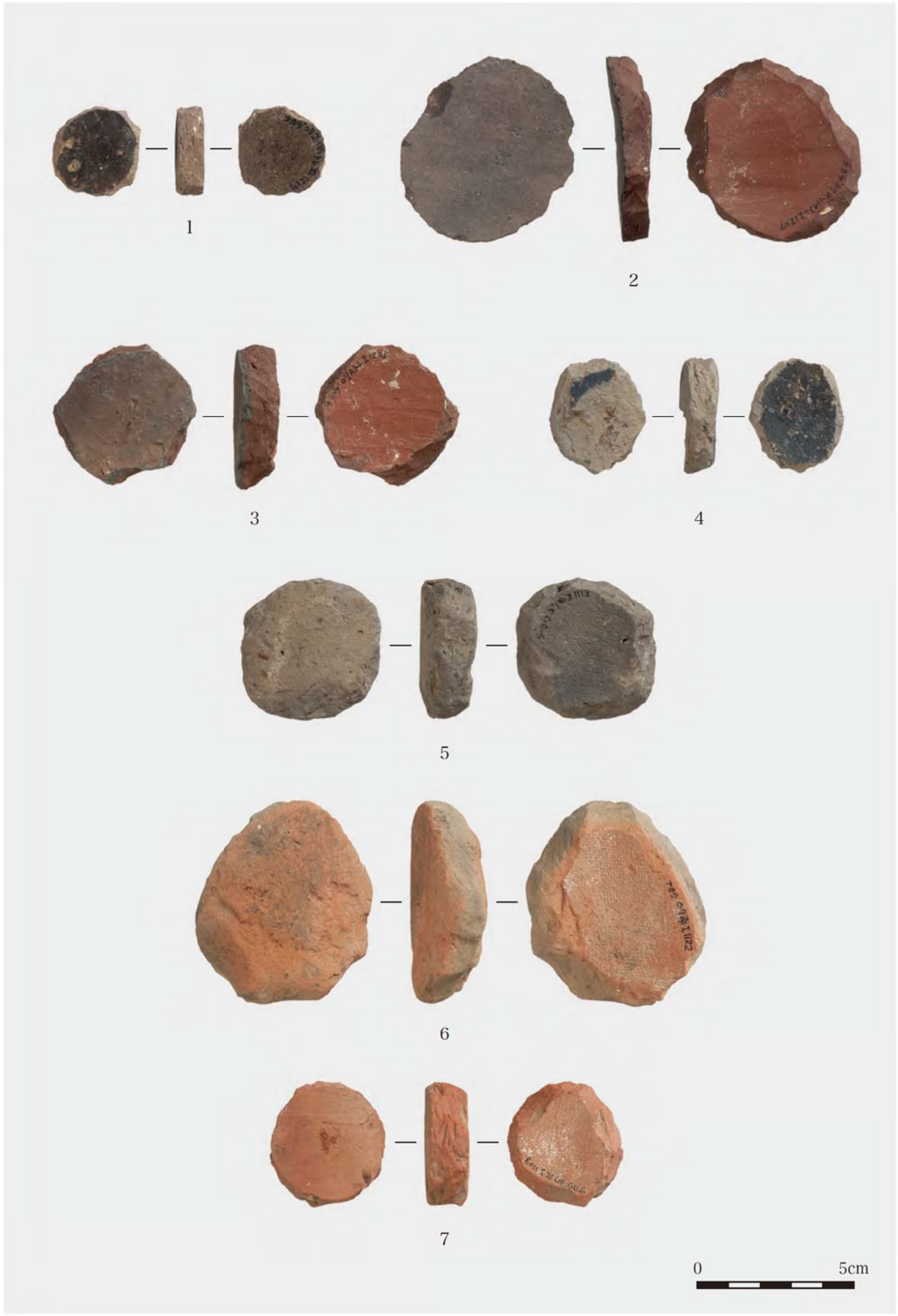
第24表　円盤状製品観察一覧

単位：cm・g

挿図番号 図版番号	番号	素材	長径	短径	厚さ	重量	観察事項	出土地
第37図 図版28	1	中国産 褐釉陶器	2.9	2.8	1.0	12.0	胴部を使用したと推測。外面から打割調整される。 ほぼ円形。白色微粒子の混入物が混じる。	ナカウ'07 J-11 A Ⅲ 1217
	2	沖縄産 無釉陶器	5.9	5.5	0.9	40.1	胴部を加工したと思われる。裏面からの打割が多く見られる。 形状は円形に近い楕円形を呈する。	ナカウ'07 K-11 A Ⅰ 1207
	3	沖縄産 施釉陶器	4.5	4.6	1.6	35.8	胴部を使用。裏面からの打割が多いが、表面からの打割も見られる。 形状は円形を意識しているように考えられるが、打割調整が雑な為、 ややいびつな円形をしている。	ナカウ'07 A Ⅰ 1205
	4	瓦	3.7	3.1	1.1	12.6	内外面共に打割が見られるが、表面のほとんどが欠如しており、 打割調整が雑な為か楕円形をしている。裏面には布目痕が見られる。	ナカウ'07 L-11･12 B 南 Ⅲ 1113
	5	灰色瓦	4.5	4.5	1.8	38.2	裏面からの打割調整が多く、断面に研磨が施されたかのように 摩耗している。方形に近い円形を呈する。	ナカウ'07 K-12 B 西Ⅰ1113
	6	灰色瓦	6.5	5.7	1.9	75.8	平瓦の尖端部を加工したと思われる。表面からの打割も見られるが、 裏面からの打割調整の方が多い。また表面は摩耗していて丸みを 帯びている。裏面には布面も見られる。	ナカウ'07 L-11･12 B 南Ⅰ 1122
	7	赤色瓦	4.1	3.6	1.4	23.9	表面からの打割調整が多く施されており、丁寧で円形を呈する。 また、表面には轆轤痕のような痕、裏面には布目が見られる。	ナカウ'07 J-11･12 B 北Ⅰ 1108



第37図　円盤状製品　実測図



図版28　円盤状製品

第14節　瓦 類

この節では、瓦類としたが、ここでは屋瓦や塼、レンガについて扱う。今回の発掘調査で、屋瓦・塼・レンガが総数198点得られた。内訳は、屋瓦が総数192点（97%）、塼が総数２点（1%）、レンガが総数４点（２%）である。ここでは、屋瓦・塼・レンガの順で個別に記述を行う。

第25表　屋瓦集計表

器種・部位 ＼ 出土地				A										B															総計
				J-10	J-10・11		J-11		K-10	K-11			不明	J-11・12	K-10			K-11		K-11・12				K-12		L-11・12			
														北	東			東		南	北			西		南			
				Ⅳ	SR5	SS1	SD1	Ⅲ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅴ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅲ		
明朝系瓦	軒丸瓦	灰色					1																						1
		赤色																			1	1							2
	軒平瓦	灰色																						1					1
		赤色									1								1		1					2			5
	丸瓦	灰色	玉縁欠 角1つ								2						1												3
			玉縁部 角1つ														2												2
			玉縁片	1			1									1									1	1			5
			端部片						2																	2			4
			筒部						1											1								1	3
		褐色	玉縁欠 角1つ														1												1
			玉縁片										1			1	3					1							6
			端部片								1																		1
			筒部						1				1																2
		赤色	玉縁欠 角1つ						1			1	1				1					1			1	1			7
			玉縁部 角1つ														1												1
			玉縁片											1		3	3	1										2	10
			端部 角1つ																	1				1					2
			端部片					1								1										3	1		6
			筒部										1	1										1		4			7
	平瓦	灰色	広端部 角1つ				1										1											1	3
			広端部 角無し	1			1		3							2	2	2								1			12
			狭端部 角1つ	1									1																2
			狭端部 角無し				1		1																				2
			筒部	3		1	4				2		2	2	2	1	6					3			1	2			29
		褐色	広端部 角1つ						1							1	2												4
			広端部 角無し														2									1			3
			狭端部 角1つ											1															1
			狭端部 角無し				1																						1
			筒部														1						1			3			5
		赤褐色	広端部 角1つ					1																					1
			筒部							1							2									1			4
		赤色	広端部 角1つ					1			1			1		2	1					1							7
			広端部 角無し					1			1			1		2						1							6
			狭端部 角1つ		1						2						1								1				5
			狭端部 角無し								1															2			3
			筒部	1						1	1	1	1	1	1		14	1		1	2	1		2		4	3		35
合計				7	1	1	10	4	10	2	12	2	8	8	3	14	44	4	1	3	4	9	1	6	5	25	8		192

1．屋瓦

屋瓦は、総数192点（97%）得られた。ほとんどの屋瓦は、琉球王府時代から近代までの瓦(明朝系瓦)で、グスク時代の瓦（高麗系瓦・中世大和系瓦）と明治以降の瓦（近代大和瓦）は出土していない。器種は、軒丸瓦や丸瓦、軒平瓦、平瓦が出土している。図化が可能な資料が14点あるが、ほとんどが破片ある。完形品は1点も得られていない。内訳は、軒丸瓦が3点、丸瓦4点、軒平瓦6点、平瓦1点である。詳細は、第26表の観察一覧に記述を行う。なお、屋瓦は1992・93（平成4・5）年の第2・3次の発掘調査で明朝系の屋瓦（軒丸瓦や丸瓦、軒平瓦、平瓦）が得られている。

第26表　屋瓦観察一覧

挿図番号 図版番号	番号	器種	部位	観察事項	出土地
第38図 図版29	1	軒丸瓦	瓦当部	瓦当部の破片で、ほぼ完形に近いものである。なお、筒部は欠損している。瓦当面は、瓦型による成形である。瓦当部の文様は、外周縁の下に珠文を配し、瓦当中央部に花文を配置している。瓦の器色は焼成の状態からすると、灰色系瓦に含められる。表面の色調はにぶい赤褐色（Hue5YR5/3）で、裏面はにぶい赤褐色（Hue5YR5/4）である。断面の色調は、褐灰色（Hue10YR4/1）である。胎土は、粒子が粗く、泥質に近い状態である。混入物は、黒色鉱物や雲母、粘板岩？等が確認できる。焼成は良好である。瓦当部の直径は残存する部分を計ると、約14.2cmである。僅かながらに筒部が残存し、長さは約1.5cmである。瓦当部の器壁の厚さは、1.6～3.2cmである。	ナカウ '07 J-11 A SD1 1212
	2	軒丸瓦	瓦当部	瓦当部の小破片で、外周縁は破損している。筒部も欠損している。瓦当面は、瓦型による成形である。瓦当部の文様は珠文と牡丹文を配置している。瓦の器色は焼成の状態からすると、褐色瓦に含められる。表面の色調はにぶい褐色（Hue7.5YR5/3）で、裏面は褐色（Hue7.5YR4/6）である。断面の色調は、赤褐色（Hue5YR4/6）である。胎土は、粒子が粗い。混入物は、黒色鉱物や雲母等が確認できる。焼成は良好である。瓦当部の直径は縁が欠損することから、計測は不可能である。瓦当部の器壁の厚さは、1.9～2.5cmである。	ナカウ '07 K-11・12 B 北 II 1113
	3	軒丸瓦	瓦当部	瓦当部の小破片で、外周縁と筒部は欠損している。瓦当面は、瓦型による成形である。瓦当部の文様は珠文を配し、瓦当中央部に牡丹文を配置している。瓦の器色は焼成の状態からすると、褐色瓦に含められる。表面の色調はにぶい褐色（Hue5YR4/3）で、裏面はにぶい褐色（Hue5YR5/3）である。断面の色調は、にぶい褐色（Hue7.5YR5/3）である。胎土は、泥質に近い。混入物は、雲母等が散見できる。焼成は良好である。瓦当部の直径は縁が欠損することから、計測は不可能である。瓦当部の器壁の厚さは、1.7～2.5cmである。	ナカウ '07 K-11・12 B 北 I 1109
	4	丸瓦	玉縁片	玉縁部は残存するが、縁辺部の破損は著しい。更に、筒部も破損が著しい。玉縁部の平面の形態は、破損が著しく詳細は不明であるが、玉縁面取を観察すると、破損する以前は丸形であっただろう、と思われる。玉縁面取は、鋭く削られている。凸面に漆喰は付着していない。凹凸面に文様や文字等はない。瓦の器色は焼成の状態からすると、灰色系瓦に含められる。表面の色調は灰色（Hue10Y6/1）で、裏面は灰オリーブ色（Hue7.5Y6/2）である。断面の色調は、灰色（Hue10Y6/1）である。凸面の器面調整は、一部はヘラ状の工具で面取を行い、その後、撫で調整を行っている。凹面は、造瓦の際にできる粗い布目の跡が確認できる。胎土は、粒子が細かい、泥質である。混入物は、黒色鉱物や雲母等が散見できる。焼成は良い。残存する玉縁部の長さは約4.4cmで、玉縁部の器壁の厚さは、1.4～1.6cmである。残存する筒部長さは約5.4cmで、筒部の器壁の厚さは、1.5～2.2cmである。玉縁面取の幅は、約2.0cmである。	ナカウ '07 J-11 A SD1 1212

第26表　屋瓦観察一覧

挿図番号 図版番号	番号	器種	部位	観察事項	出土地
第38図 図版29	5	丸瓦	玉縁角	玉縁部が残存するもので、筒部は欠損している。玉縁部の平面の形態は丸形、と思われる。玉縁面取は、鋭く削られている。凸面に漆喰は付着している。凹凸面に文様や文字等はない。瓦の器色は焼成の状態からすると、赤色瓦に含められる。表裏面の色調は橙色(Hue 5YR 6/6)である。なお、断面の色調も橙色(Hue 5YR 6/6)である。凸面の器面調整について、玉縁部には横位に撫でによる調整を行っている。筒部は器面が剥がれているが、残存する部分を観察すると、縦位に撫で調整が行われている。凹面は、造瓦の際にできる布目の跡が確認できる。混入物は、黒色鉱物や雲母等が確認できる。焼成は良好である。残存する玉縁部の長さは約 4.0cm で、玉縁部の器壁の厚さは約 0.9～1.2cm である。残存する筒部長さは約 12.0cm で、筒部の器壁の厚さは、1. 1～1.8cm である。玉縁面取の幅は、約 1.1～2.1cm である。	ナカウ '07 K-10 B 東 III 1108
	6	丸瓦	玉縁角	玉縁部が残存するもので、筒部は欠損している。玉縁部の平面の形態は台形を呈する。玉縁面取は、鋭く削られている。凸面と玉縁面取に漆喰が付着している。凹凸面に文様や文字等はない。瓦の器色は断面の状態から観察すると、灰色を呈している。この瓦は灰色系瓦に含められる。表面の色調は表面の剥離が著しく、筒部の残存する本来の表面を観察すると、灰白色(Hue 10YR 7/1)で、玉縁部の色調は灰黄褐色(Hue 10YR 6/2)である。裏面は暗灰黄色(Hue 2.5YR 5/2)である。断面の色調は、褐灰色(Hue 10YR 6/1)である。筒部の表面は剥離が著しいが、残存する部分を観察すると、撫で調整が行われている。凹面は、造瓦の際にできる布目の跡が確認できる。胎土は、泥質である。混入物は、黒色鉱物と雲母等が確認できる。焼成は良好である。残存する玉縁部の長さは約5.7cmで、玉縁部の器壁の厚さは、1.5～1.7cmである。残存する筒部長さは約7.9～8.8cmで、筒部の器壁の厚さは、1.5～2.5cmである。玉縁面取の幅は、1.3～2.3cmである。	ナカウ '07 K-10 B 東 III 1108
第39図 図版30	7	丸瓦	玉縁部角	玉縁部の右側部分が残存するもので、筒部は欠損している。玉縁部の平面の形態は円形を呈する。玉縁面取は、鋭く削られている。凸面の筒部の縁に漆喰が付着している。凹面に僅かながら漆喰が付着している。凹凸面に文様や文字等はない。元来、還元焼成で焼かれた灰色瓦は、経年変化で酸化され、表面が赤くなっている。よって、灰色系瓦に含められる。表面の色調はにぶい橙色 (Hue 2.5YR 6/4) で、僅かながら表面に素地である灰色系の色が確認できる。裏面は橙色 (Hue 2.5YR 6/6) である。断面の色調は、にぶい橙色 (Hue 10YR 7/2) である。凸面の器面調整について、玉縁部には横位に撫でによる調整を行っている。筒部はヘラ状の工具で縦位に削った箇所が5面確認できる。胎土は、泥質である。混入物は、黒色鉱物や雲母、粘板岩？等が確認できる。焼成は良好である。残存する玉縁部の長さは約3.85～4.0cmで、玉縁部の器壁の厚さは、1.5～1.6cmである。残存する筒部長さは15.7～15.9cmで、筒部の器壁の厚さは約1.5～2.4cmである。玉縁面取の幅は、1.2cmである。	ナカウ '07 K-10 B 東 III 1108
	8	軒平瓦	瓦当部	瓦当部の破片で、右隅部分の資料である。筒部は破損しているが、一部は残存する。瓦当面は、瓦型による成形である。瓦当部や凹面、凸面に漆喰の付着は見られない。瓦当部の文様は、残存する部分に葉文様が確認できる。瓦の器色は焼成の状態からすると、灰色系瓦に含められる。表面の色調はにぶい黄褐色 (Hue 10YR 5/3) で、裏面は灰褐色 (hue 7.5YR 5/2) である。断面の色調は、褐灰色 (Hue 10YR 5/1) である。凸面の器面調整について、玉縁部には横位に撫でによる調整を行っている。筒部は器面が剥がれているが、残存する部分を観察すると、縦位に撫で調整が行われている。凹面は、造瓦の際にできる布目の跡が確認できる。胎土は、泥質である。混入物は、黒色鉱物や雲母、石灰質砂粒等が確認できる。焼成は良好である。瓦当部の長さは残存する部分を計ると、約5.5cmである。瓦当部の器壁の厚さは、約1.8cmである。残存する筒部の長さは、約4.5cmである。筒部の器の厚さは、約1.5cmである。	ナカウ '07 K-12 B 西 I 1113
	9	軒平瓦	瓦当部	瓦当部の小破片で、右下部分の縁の資料である。筒部は破損し、詳細不明である。瓦当面は、瓦型による成形である。瓦当部と裏面に漆喰の付着は見られない。瓦当部の文様は、残存する部分に葉の痕跡が確認できる。瓦の器色は焼成の状態からすると、褐色系に含められる。表面の色調は灰赤色 (Hue 2.5YR 5/2)で、裏面はにぶい褐色(Hue 2.5YR 5/4)である。断面の色調は、明石褐色(Hue 2.5YR 5/6)である。瓦当面の器面調整について、器面が剥離し、器面の調整は不明である。瓦当部の裏面は器面が剥がれているが、残存する部分を観察すると、撫で調整が行われている。胎土は、泥質である。混入物は、黒色鉱物と雲母が確認できる。焼成は良好である。筒部は欠損していることから、計測は不可能である。瓦当部の器壁の厚さは、0.8～1.5cmである。	ナカウ '07 K-11 A III 1217

第26表　屋瓦観察一覧

挿図番号 図版番号	番号	器種	部位	観察事項	出土地
第39図 図版30	10	軒平瓦	瓦当部	瓦当部の破片で、左隅部分の資料で、縁が破損している。筒部は、破損している。瓦当面は、瓦型による成形である。瓦当部や裏面に漆喰の付着は、見られない。瓦当部の文様は、残存する部分に葉文様が確認できる。瓦の器色は焼成の状態からすると、赤色瓦に含められる。表面の色調は明赤褐色（Hue 2.5YR 5/6）で、裏面はにぶい橙色（Hue 2.5YR 6/4）である。断面の色調は、橙色（Hue 2.5YR 6/6）である。凸面の器面調整について、玉縁部には横位に撫でによる調整を行っている。筒部は器面が剥がれているが、残存する部分を観察すると、撫で調整が行われている。胎土は、泥質である。混入物は、黒色鉱物や雲母、石英？等が確認できる。焼成は良好である。筒部は欠損していることから、計測は不可能である。瓦当部の器壁の厚さは、0.8～3.0cmである。	ナカウ '07 L-11・12 B 南 I 1122
	11	軒平瓦	瓦当部	瓦当部の破片で、右隅部分の資料で、縁が破損している。筒部は破損している。瓦当面は、瓦型による成形である。瓦当部や裏面には、漆喰の付着は見られない。瓦当部の文様は、残存する部分に葉文様と花芯の一部と思われるものが、確認できる。瓦の器色は焼成の状態からすると、褐色瓦に含められる。表面の色調は褐灰色（Hue 10YR 4/1）で、裏面は褐灰色（Hue 10YR 5/1）である。断面の色調は、明赤褐色（Hue 5YR 5/8）である。凸面の器面調整について、器面が剥離しているので、調整は不明である。裏面は、撫で調整が行われている。胎土は、泥質である。混入物は、黒色鉱物や雲母、石英？等が確認できる。焼成は良好である。筒部は欠損していることから、計測は不可能である。瓦当部の器壁の厚さは、1.4～1.8cmである。	ナカウ '07 K-11 B 東 II 1115
	12	軒平瓦	瓦当部	瓦当部の破片で、中央部の資料で、縁が破損している。筒部は、破損している。瓦当面は、瓦型による成形である。瓦当部や裏面に漆喰の付着は見られない。瓦当部の文様は、残存する部分に花芯が確認できる。瓦の器色は焼成の状態からすると、赤色瓦に含められる。表面の色調はにぶい橙色（Hue 7.5YR 6/4）で、裏面はにぶい褐色（Hue 7.5YR 5/4）である。断面の色調は、橙色（Hue 7.5YR）である。瓦当部の器面調整について、瓦型による成形であるため、不明である。裏面は、撫で調整が行われている。胎土は、泥質である。混入物は、黒色鉱物や雲母等が確認できる。焼成は、良好である。瓦当部の器壁の厚さは、1.2～1.7cmである。	ナカウ '07 L-11・12 B 南 I 1112
	13	軒平瓦	瓦当部	瓦当部の顎片の資料である。筒部は破損している。瓦当面は、瓦型による成形である。瓦当部に漆喰の付着は見られないが、裏面に僅かながら、漆喰の付着が見られる。瓦当部の文様は、残存する部分に花芯が確認できる。瓦の器色は焼成の状態からすると、赤色瓦に含められる。表面の色調は灰黄褐色（Hue 10YR 5/2）で、裏面は灰赤色（Hue 2.5YR 5/2）である。断面の色調は、にぶい褐色（Hue 5YR 7/4）である。瓦当部の器面調整は、縁に撫でによる調整を行っている。裏器は残存する部分を観察すると、撫で調整が行われている。胎土は、泥質である。混入物は、黒色鉱物や雲母等が確認できる。焼成は良好である。瓦当部の器壁の厚さは、1.0～1.5cmである。	ナカウ '07 K-11・12 B 北 I 1109
	14	平瓦	広端部角	平瓦の広端部片である。桶板留紐圧痕は３点見られ、1点のみ拓本では円形状に現されているが、遺物を実見すると３点とも楕円形状の窪みが見られる。間隔は左右ともが2.0cmである。凹凸面に文様や文字等はない。瓦の器色は焼成の状態からすると、赤色系瓦に含められる。表面や裏面、断面のの色調は、橙色（Hue 5YR 6/8）である。凸面の器面調整は、一部はヘラ状の工具で３箇所で面取を行い、その後、横位に撫で調整を行っている。凹面は、造瓦の際にできる粗い布目の跡が確認できる。胎土は、泥質である。混入物は、石灰質砂粒や黒色鉱物、ガラス質の鉱物と思われるものが確認できる。焼成は良い。平瓦の器壁の厚さは、1.4～1.6cmである。	ナカウ '07 K-10 B 東 III 1108

2．塼

塼は、総数2点（1%）得られた。図化が可能な資料が1点あるが、完形品は1点も得られていない。詳細は下記に記述を行う。なお、塼は1992（平成4）年の第1次の発掘調査で方形の塼が2点得られている。

第39図15は、塼である。形態は、破損が著しいが、残存する部分からすると、直角三角形である。残存する縁辺部が斜めに形成されている。表面積が多いものが表で、少ないものが裏面である。塼を地面へ敷く際に表面積が少ない方を地面に敷き、多い方は表面する。表面や裏面に文様や文字の表示はない。表面の色調はにぶい橙色（Hue7.5YR7/4）を呈し、裏面がにぶい黄橙色（Hue10YR7/4）を呈する。断面の器色は、灰黄色（Hue2.5Y7/3）を呈する。器面調整は、表面が丁寧に撫で調整が行われており、裏面は器面調整は粗雑である。胎土は、精製されている。混入物等は、黒色鉱物や雲母、石灰質砂粒等が確認できる。焼成はかなり良好である。残存部分の長さは最長で約16.0cm、面がある箇所では12.9cmと9.9cmである。塼の厚さは、約4.1～4.5cmである。重量は、約740ｇである。ナカウ'07 J-11 A SD1 1212 より出土。

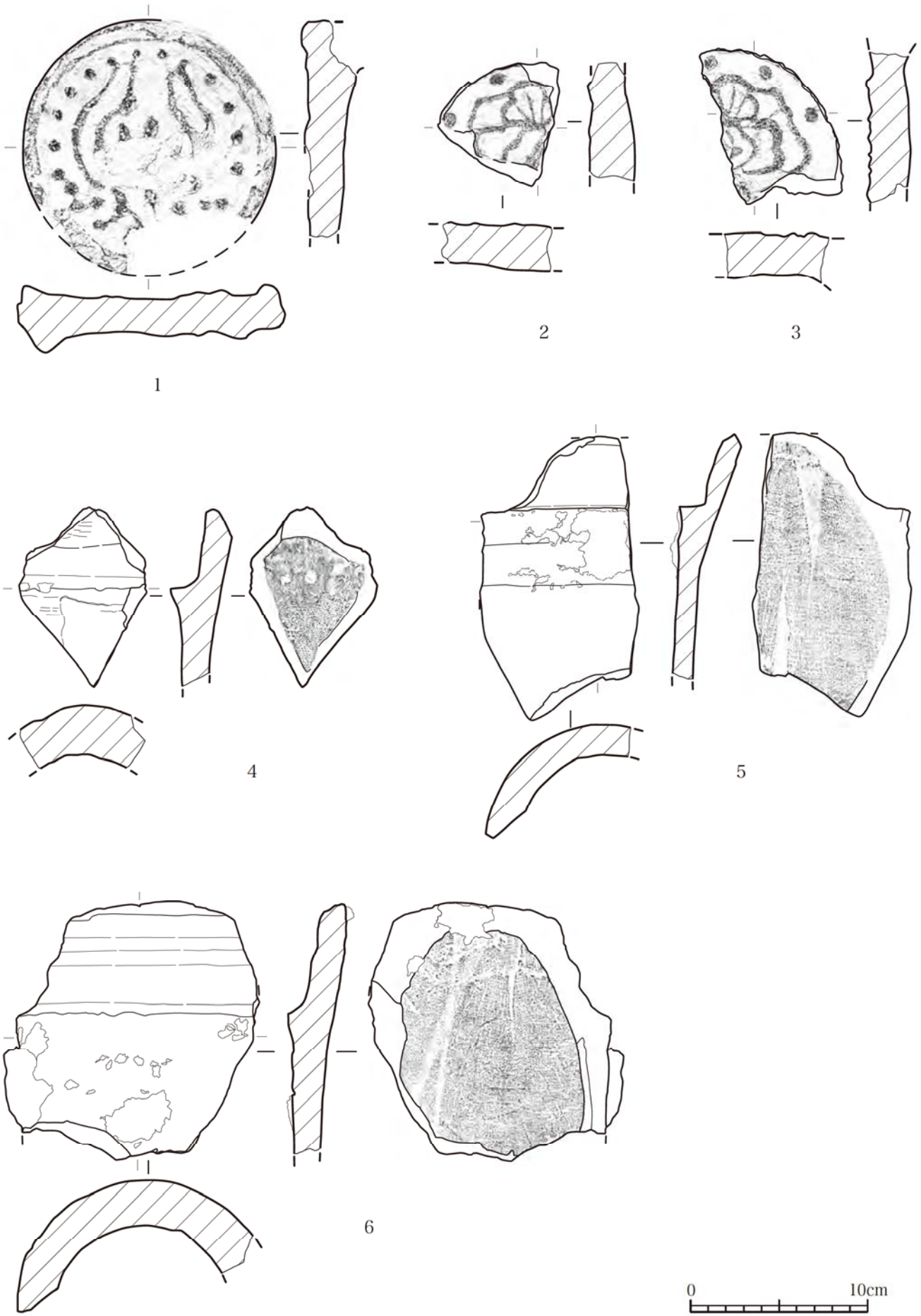
3．レンガ

レンガは、総数4点（2％）得られた。図化が可能な資料が1点ある。詳細は下記に記述を行う。なお、レンガは1992（平成4）～94（平成6）年の第1～3次の発掘調査では、1点も得られていない。

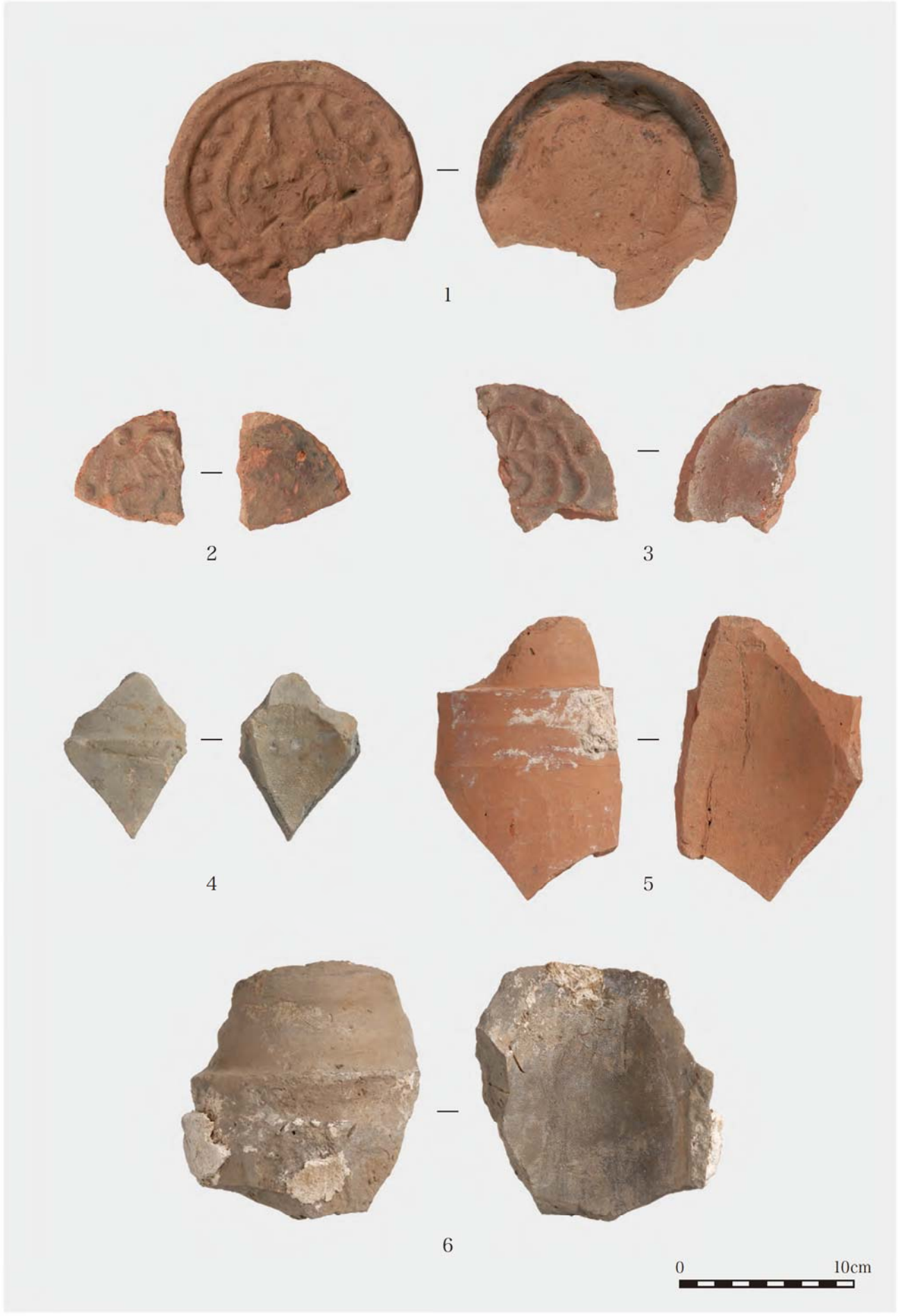
第39図16は、レンガである。形態は、直方体である。表面の色調は橙色（Hue2.5YR6/8）を呈し、裏面がにぶい赤褐色（Hue2.5YR5/4）を呈する。断面の器色は、橙色（Hue2.5YR6/8）を呈する。表面の器面調整は丁寧に撫で調整が行われ、裏面は撫で調整が確認できる。胎土は、精製されている。混入物等は、石灰質砂粒や雲母等が確認できる。焼成は、かなり良好である。残存部分の長さは、約14.0cmで、幅は、約11.5cmである。レンガの厚さは、約6．0cmである。重量は、約1,220ｇである。ナカウ'07 K-11・12 B 南 I 1204 より出土。

【参考文献】

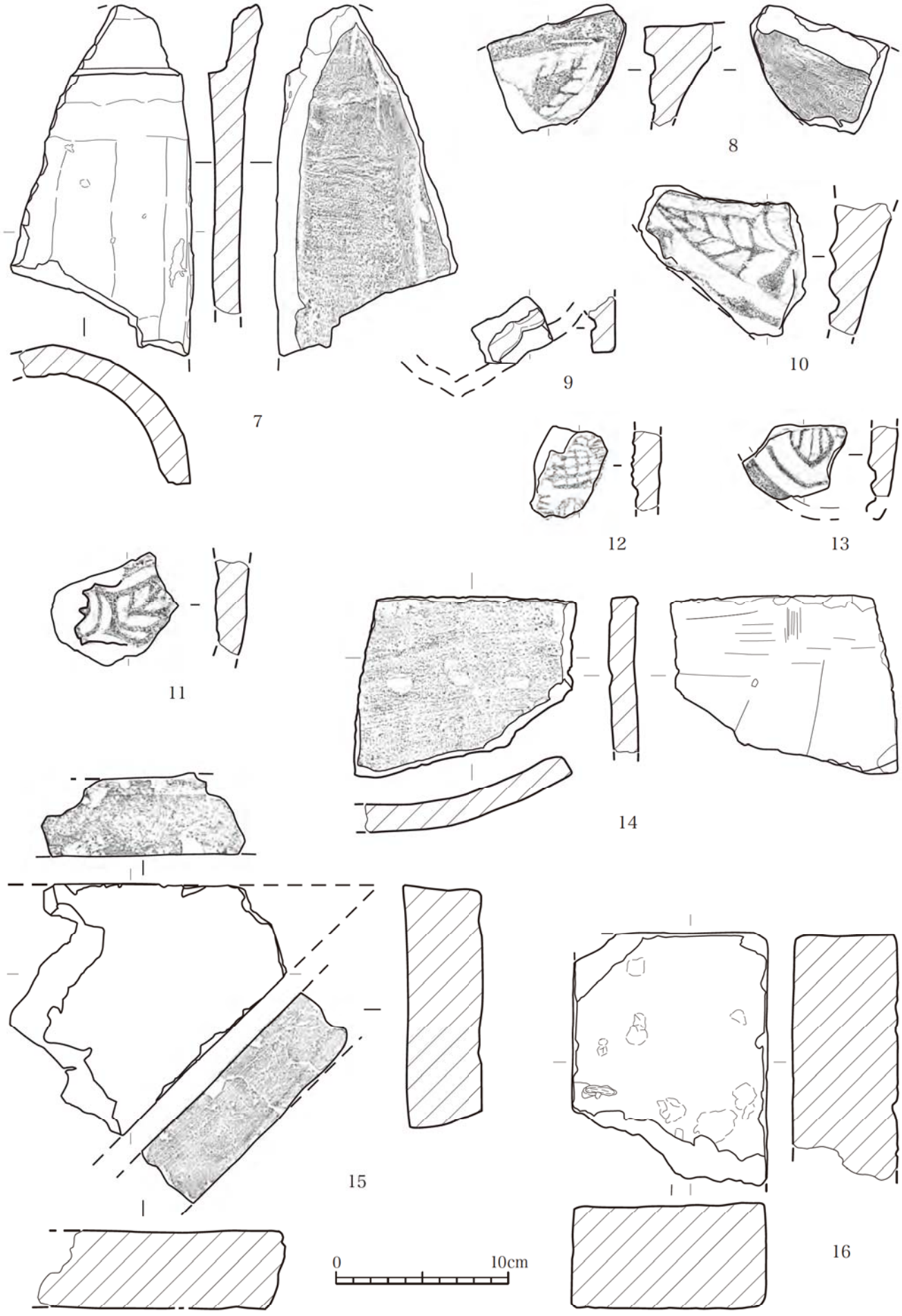
旧中城御殿『―石牆工事地域にかかる第一次発掘調査―』 1993年３月　沖縄県立博物館



第38図　瓦1　実測図



図版 29　瓦 1



第39図　瓦2　瓦(7～14)・塼(15)・レンガ(16)　実測図

図版30　瓦2　瓦(7～14)・塼(15)・レンガ(16)

第15節　銭 貨

今回の調査において得られた資料は 7 点のみ。うち 6 点が有文銭で残り 1 点が無文銭であった。有文銭には中国銭と日本銭があり、前者は元豊通寶や永樂通寶といった北宋銭あるいは、明朝銭が確認できた。後者は寛永通寶のみであった。以下、今回の出土銭貨の個々の所見を観察一覧に記す。

【参考文献】

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第18集 首里城跡『―城の下地区発掘調査報告書―』
2004（平成16）年３月　沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県文化財調査報告書 第120集 首里城跡『―南殿・北殿跡の遺構調査報告―』 平成７年　沖縄県教育委員会

沖縄県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第42集 真珠道跡『―首里城跡真珠道地区発掘調査報告書（Ⅱ）―』
2007（平成19）年３月　沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第27集 首里城跡『―上の毛及び周辺地区発掘調査報告書―』
2005（平成17）年３月　沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第34集 首里城跡『―御内原地区発掘調査報告書―』
2006（平成18）年３月　沖縄県立埋蔵文化財センター

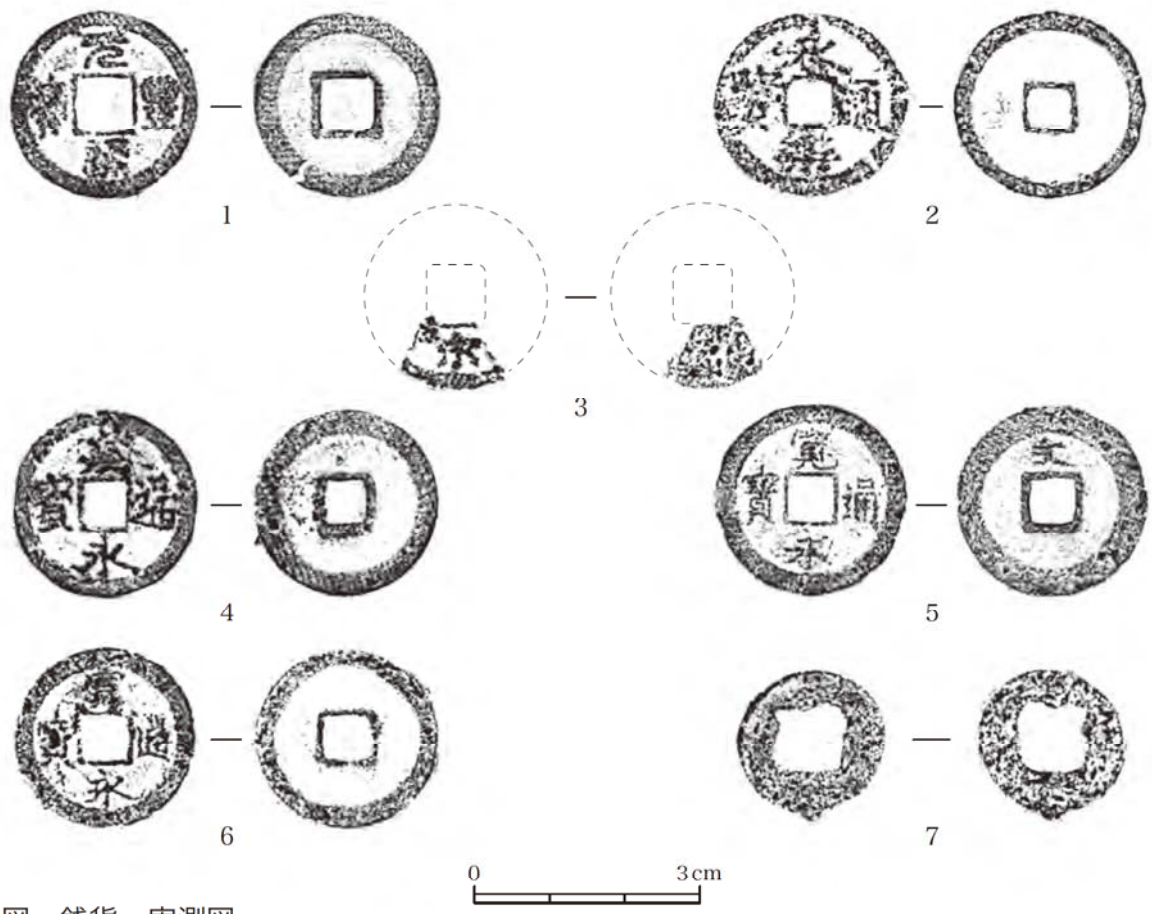
沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第46集 渡地村跡『―臨港道路那覇1号線整備に伴う緊急発掘調査報告―』
2007（平成19）年３月　沖縄県立埋蔵文化財センター

古銭辞典『改訂増補 古銭語辞典』大鎌淳正　平成９年１月30日　国書刊行会

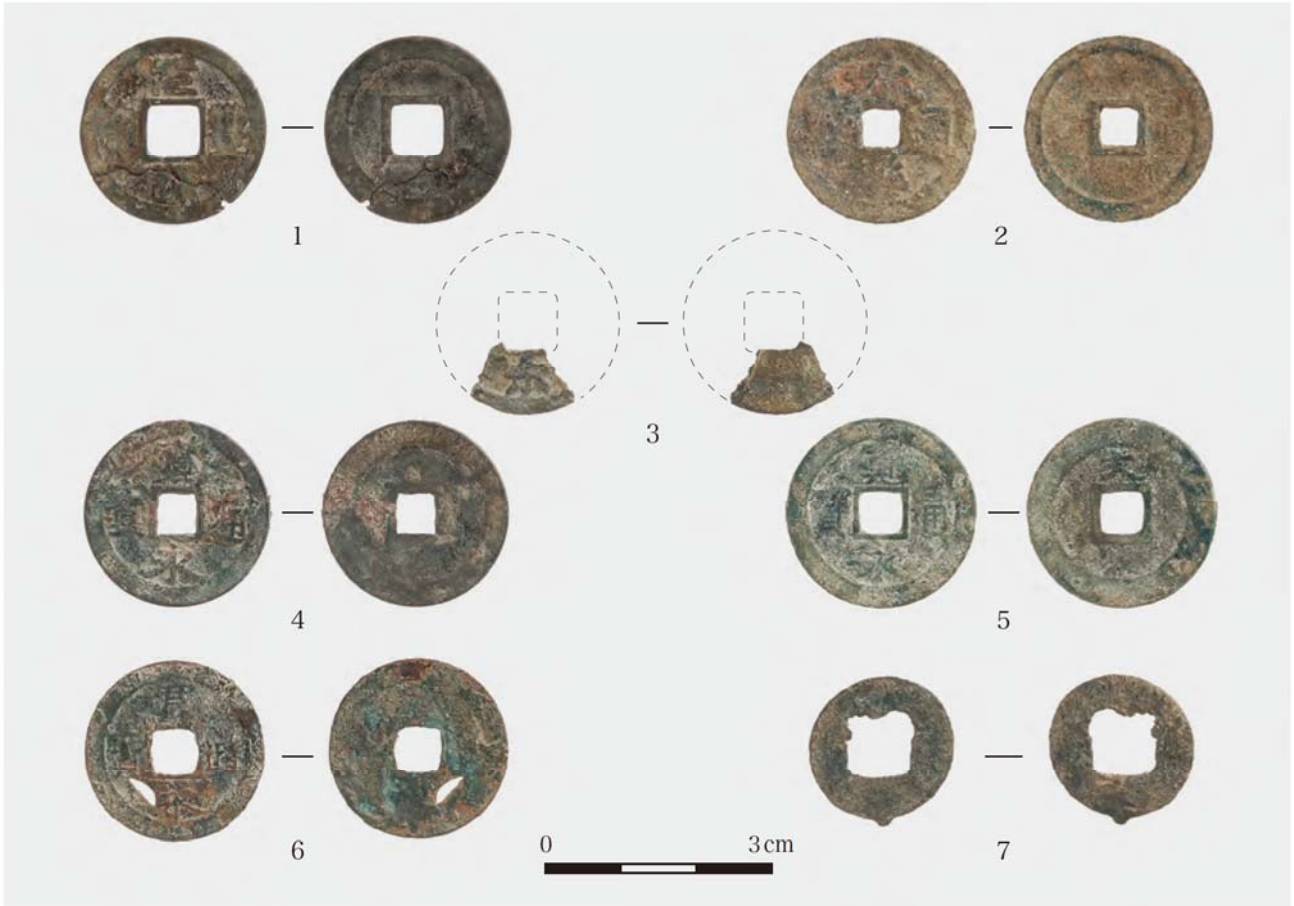
第27表　銭貨観察一覧

単位：mm・g

挿図番号 図版番号	番号	古銭名	書体	時代	初鋳年	銭径 内径	銭厚 最大厚	銭厚 最小厚	残存重量	観察事項	出土地
第40図 図版31	1	元豊通寶	篆書	北宋	1078年	24.8 6.9	1.0	0.3	3.4	完形品。 正面・背ともに輪が明瞭。重量もある。	ナカウ '07 K-11 A Ⅲ1212
	2	永楽通寶	真書	明	1408年	25.1 5.2	1.5	0.7	3.4	完形品。厚みと凹凸感があり、正面・背の輪ともに明瞭。	ナカウ '07 J-11 A Ⅰ 1205
	3	○宋○○	真書	不明	－	0.9 －	0.9	0.8	(0.5)	『宋』の部分以外は欠けている。銭種は皇宋通寶と思われる。背の輪が不明瞭。	ナカウ '07 K-11 A Ⅲ 1211
	4	寛永通寶	真書	江戸	1636年 一期	26.6 5.1	1.2	0.7	3.5	完形品。『寛』の文字が不明瞭。 背の郭が正面よりも僅かだが幅がある。 また正面にやや凹凸感がある。	ナカウ '07 K-11 A Ⅰ 1205
	5	寛永通寶	真書	江戸	1668年	25.2 5.3	1.3	0.7	3.8	完形品。二期新寛永と思われる。 背に「丈」の文字が見られる。	ナカウ '07 K-11 B 東 Ⅰ
	6	寛永通寶	真書	江戸	1697年 三期	23.8 6.0	1.0	0.5	2.3	完形品。一文銭。文字はやや磨耗しているものの、正面・背の輪は明瞭。	ナカウ '07 K-10 B 東 Ⅲ 1108
	7	無文銭	－	－	1657年	20.0 8.1	1.3	0.7	0.9	完形品。鳩目銭。角孔が大きく、孔には工具痕が見られる。	ナカウ '07 J-11・12 B 北 Ⅱ 1108



第40図　銭貨　実測図



図版31　銭貨

第16節　金属製品

今回の発掘調査で、金属製品は総数534点得られた。金属製品は大別して、鉄製品と青銅製品に分けられる。以下、それぞれについて記述を行う。

1．青銅製品

青銅製品は、総数61点得られた。青銅製品は釘や金具、簪、現代の針金、薬莢、青銅の塊等が得られた。なお、青銅製品は1992（平成４）～1994（平成６）年の第１～３次の発掘調査では、１点も得られていない。

１）　釘　　釘は、37点得られた。そのうち、主なものを９点選んで第41図にまとめた。
釘の頭部の形状により、３種に分けられる。
Ⅰ類：頭部を逆「L」字状に造る普通釘。
Ⅱ類：頭部を切断する切り釘。
Ⅲ類：頭部にほぼ正方形の傘状なものが取り付くもの。

２）金 具　　金具は、９点得られた。装飾が施された飾り金具と、装飾がない板状飾り金具、棒状の金具、止め具、不明なものもあり、それらを５種に分けた。
Ⅰ類：飾り金具。
Ⅱ類：板状無文の飾り金具。
Ⅲ類：棒状の金具。
Ⅳ類：止め具。
Ⅴ類：不明。

３）　簪　　簪は、２点得られた。カブと竿の一部が破損しているものと、カブは破損し、折れ曲がっているものがある。

４）不 明　　不明な資料が１点得られた。形状からすると、器の縁若しくは、その他の製品の縁と思われるが、詳細不明である。

2．鉄製品

鉄製品は、総数473点得られた。鉄製品は釘や現代のボルト、針金、釘、金具等が得られた。ここでは、釘について報告を行う。釘は、47点得られた。そのうち、主なものを８点選んで第43図にまとめた。釘の頭部の形状により、２種に分けられる。

Ⅰ類：頭部を逆「L」字状に造る普通釘。
Ⅱ類：頭部を切断する切り釘。
Ⅲ類：頭部形状不明。

【参考文献】

『考古資料より見た沖縄の鉄器文化』沖縄県立博物館　1997年３月

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第１集 首里城跡『―管理用道路地区発掘調査報告書―』
2001（平成13）年３月　沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第２集 天界寺跡（Ⅰ）『―首里社館地下駐車場入り口新設工事に伴う緊急発掘調査―』 2001（平成13）年３月　沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第10集 円覚寺跡『―遺構確認調査報告書―』
2002（平成14）年３月　沖縄県立埋蔵文化財センター

旧中城御殿『―石牆工事地域にかかる第一次発掘調査―』 1993年３月　沖縄県立博物館

旧中城御殿『―石牆工事地域にかかる第二次発掘調査―』 1994年３月　沖縄県立博物館

旧中城御殿『―石牆工事地域にかかる第三次発掘調査―』 1995年３月　沖縄県立博物館

沖縄県文化財調査報告書 第120集 首里城跡『―南殿・北殿跡の遺構調査報告―』 平成７年　沖縄県教育委員会

沖縄県文化財調査報告書 第133集 首里城跡『―御庭跡・奉神門跡の遺構調査報告―』 平成10年　沖縄県教育委員会

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第３集 首里城跡『―下之御庭跡・用持座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡―』 2001（平成13）年３月　沖縄県立埋蔵文化財センター

第28表　金属製品集計表

種類＼出土地		A											B															不明	合計
		J-10	J-10・11		J-11		K-10		K-11			不明	K-10			K-10・11		K-11	K-11・12				K-12		L-11・12			
													東						南		北		西		南			
		Ⅳ	SR5	SS1	Ⅰ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅲ	Ⅱ	Ⅴ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅲ		
青銅製品	釘	1			1				1		1			1	2	2		6	1	4		6		5		5	1		37
	簪																			1						1			2
	金具			1						2	1									1		3					1		9
	止め具																									1			1
	針金									1																	1		2
	管（現代）																			1									1
	薬莢																					2							2
	ボルト																			1									1
	塊					1					1																		2
	不明							4																					4
	小計	1		1	1	1		4	1	3	3			1	2	2		6	1	8		11		5		7	3		61
鉄製品	釘				2	2			2	8		1	1	1	10	2		1	2	6		5	2	2		4	1	4	56
	針金									2					1			2		2		4				5			16
	金具現代													3				1											4
	現代釘	1	1		7		4		8	3		2	7	38	22	7	7	191	1	2	1			3	1	22	4	5	337
	ボルト	1								1				2				1									1		6
	不明	1		1	1	3			1	7	1			7	8	4		1	1	2		4	1	4		6		1	54
	小計	3	1	1	10	5	4		11	21	1	3	8	51	41	13	7	197	4	12	1	13	3	9	1	37	6	10	473
合計		4	1	2	11	6	4	4	12	24	4	3	8	52	43	15	7	203	5	20	1	24	3	14	1	44	9	10	534

第29表　金属製品観察一覧

単位：cm・g

挿図番号 図版番号	番号	器種	分類	長軸	幅	厚さ	重量	観察事項	出土地
第41図 図版32	1	釘	II	(9.5)	0.9	1.03	35.1	頭頂部の形状は、頭部を切断する切り釘と思われる。断面形状がほぼ方形状を呈する角釘である。先端部付近で折れ曲がっている。先端部が欠損しているが、先端部へ行くにつれ、細く尖るタイプであると思われる。サイズ的に３寸半を超える資料と思われる。腐食やひび割れが著しい。	ナカウ '07 L-11・12 B 南 I 1203
	2		I	8.5	0.7	0.6	14.2	頭頂部の形状は、頭部を逆「L」字状に造る普通釘と思われるが、明確ではない。僅かに頭部が折れ曲がった部分が確認できる。断面形状がほぼ方形状を呈する角釘である。先端部付近で折れ曲がっている。先端部に行くにつれ、細く尖るタイプであるが、先端部は尖っていない。サイズ的に３寸弱である。腐食や割れがが著しい。	ナカウ '07 J-10 A IV 1207
	3		I	6.3	0.4	0.5	8.7	頭頂部の形状は、頭部を逆「L」字状に造る普通釘と思われるが、明確ではない。断面形状がほぼ方形状を呈する角釘である。中央部で折れ曲がっている。先端部は鋭角に尖っている。サイズ的に２寸強である。青錆の付着が確認できる。	ナカウ '07 L-11・12 B 南 III 1113
	4		I	6.0	0.5	0.5	8.1	頭部の形状は逆「L」字状に造る普通釘と思われるが、明確ではない。断面形状がほぼ正方形を呈する角釘である。先端部は鋭角に尖っている。中央部から先端部付近で「U」字状に曲がっている。サイズ的にほぼ２寸の範囲に含まれる。青錆の付着が確認できる。	ナカウ '07 K-10 B 東 II 1109
	5		I	5.4	0.5	0.7	9.6	頭部の形状は逆「L」字状に造る普通釘と思われるが、明確ではない。断面形状がほぼ方形状を呈する角釘である。先端部は鋭角に尖っている。頭部付近で「く」の字状に変形している。サイズ的に１寸強である。青錆の付着が確認できる。	ナカウ '07 K-11・12 B 北 II 1113
	6		I	5.3	0.5	0.5	7.2	頭部の形状は逆「L」字状に造る普通釘と思われるが、明確ではない。断面形状が正方形を呈する角釘である。先端部は鋭角に尖っている。中央部で緩やかに曲がっている。ほぼ完形に近い。サイズ的に１寸半強である。青錆の付着が確認できる。	ナカウ '07 K-11・12 B 南 I 1204
	7		III	(2.0)	0.4	0.3	1.6	頭部の形状は頭部にほぼ正方形の傘状なものが取り付くものである。断面形状がほぼ方形状を呈する角釘である。小型の釘である。先端部が欠損しているので、形状は不明である。青錆の付着が確認できる。	ナカウ '07 K-11 A IV 1214
	8		II	3.8	0.3	0.3	2.2	頭部の形状は切断する切り釘と思われる。断面形状がほぼ方形状を呈する角釘である。先端部は鋭角に尖っている。ほぼ完形に近い。頭部付近で緩やかに曲がっている。サイズ的に１寸半弱である。青錆の付着が確認できる。	ナカウ '07 K-10 B 東 III 1112
	9		II	7.5	0.6	0.5	11.9	頭部の形状は切断する切り釘と思われる。断面形状が正形状を呈する角釘である中央部から頭頂部と先端部に行くにつれて細くなる。先端部は鋭角に尖っている。頭部と先端部付近で折れ曲がっている。サイズ的にほぼ２寸半の範囲に含まれる。青錆の付着が確認できる。	ナカウ '07 K-12 B 西 I 1113

第29表　金属製品観察一覧

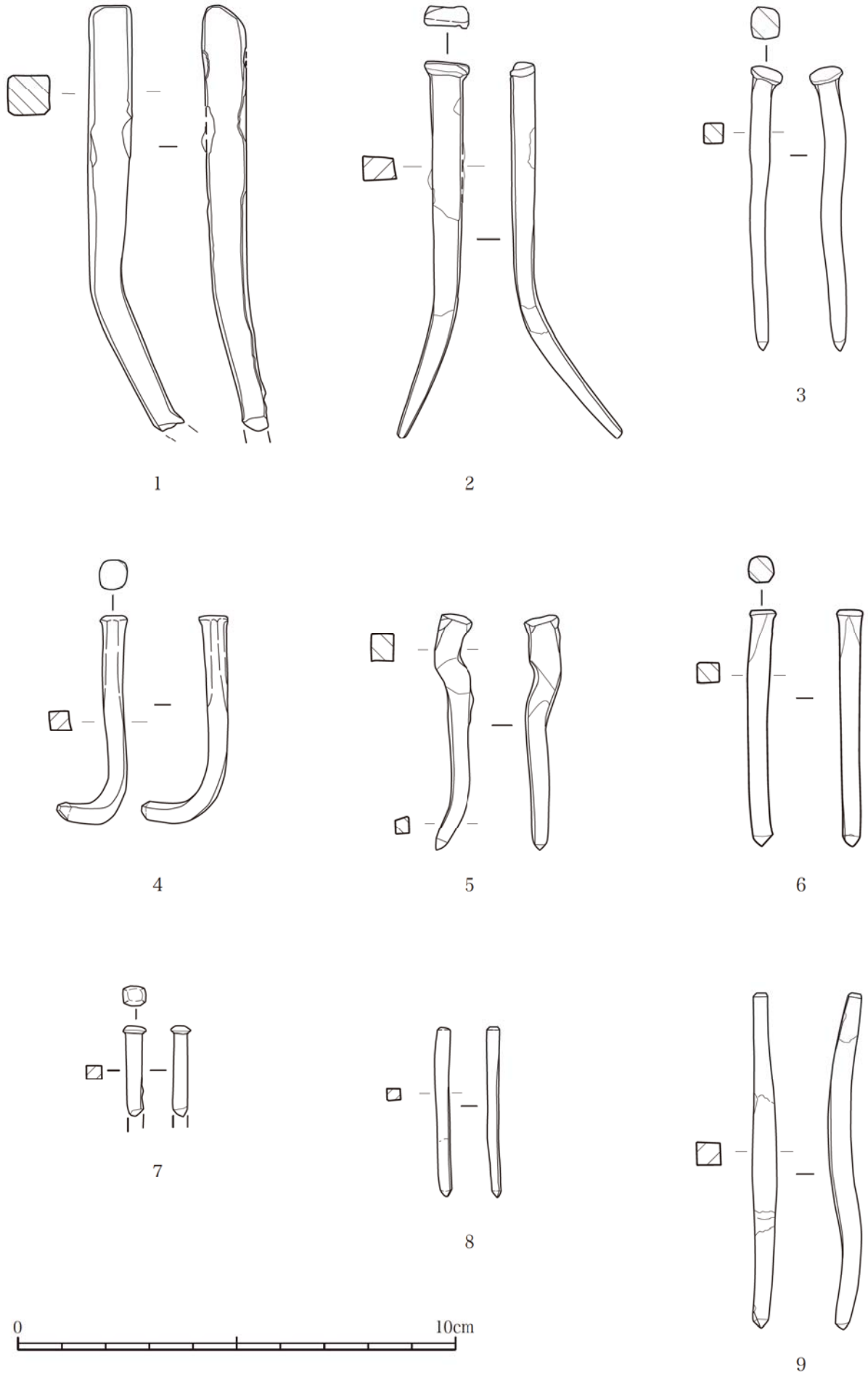
単位：cm・g

挿図番号 図版番号	番号	器種	分類	長軸	幅	厚さ	重量	観察事項	出土地
第42図 図版33	10	金具	I	(3.0)	(3.9)	0.08	6.4	飾り金具の破損資料である。縁部が一部残存するが、それ以外は破損し、一部折れ曲がっている。花弁の飾りが施されている。僅かながら、表裏面に青錆が付着している。ここでは、花弁の飾りが施されていることから、飾り金具とした。	ナカウ'07 K-11・12 B 南 I 1204
	11		II	4.5	1.9	0.15	8.4	端部の一部が破損しているが、それ以外には縁が残存している。形状的に板状である。なお、表裏面に飾りは施されていない。僅かであるが、表裏面に青錆が付着している。石灰岩の付着も確認できる。用途不明だが、ここでは板状無文の飾り金具とした。	ナカウ'07 K-11・12 B 北 II 1112
	12		II	4.0	0.7	0.2	2.7	頭部の形状が英字の「T」の字状に形成されたので、端部付近で折れ曲がっているが、断面の形状は平坦である。端部の形状は尖っていくが、先端部は丸みを帯びている。なお、表裏面に飾りは施されていない。表裏面に青錆が付着している。用途不明だが、板状無文の飾り金具に含めた。	ナカウ'07 K-11 A III 1212
	13		III	(4.7)	0.5	0.05	2.7	横断図が英字の「C」の字状に形成されている。両端部が破損し、それぞれ折れ曲がっている。なお、表裏面に飾りは施されていない。表裏面に青錆が付着している。用途不明だが、ここでは棒状金具とした。	ナカウ'07 K-11 A IV 1217
	14		III	(4.8)	0.6	0.04	2.0	横断図が英字の逆「S」の字状に形成されている。両端部が破損し、下端部が折れ曲がっている。なお、表裏面に飾りは施されていない。僅かであるが、表裏面に青錆が付着している。用途不明だが、ここでは棒状金具とした。	ナカウ'07 K-11 A III 1213
	15		III	(5.1)	0.8	0.4	6.7	横断図が英字の「T」の字状に形成されている。両端部が破損し、中央部で軽く折れ曲がっている。なお、表裏面に飾りは施されていない。僅かであるが、表裏面に青錆が付着している。用途不明だが、ここでは棒状金具とした。	ナカウ'07 K-11・12 B 北 II 1112
	16		III	1.0	0.4	0.4	1.3	止め具と思われる資料で、金具の中に含めた。現代遺物と思われる。鋲に筒状の管を取り付けている。上端にある鋲は円形状で平坦で、下端にある鋲は傘状である。元来は別固体で、管の太さで1方は凹状、他方は凸状になっている。現状では、重ね合わせている。管の高さが約6.0mmで、皮革を止める金具の類と思われる。	ナカウ'07 L-11・12 B 南 I 1114
	17		IV	1.3	2.4	0.3	2.2	ベルトの止め具と思われる資料で、金具の中に含め、不明とした。現代の遺物と思われる。表面に青錆の付着が見られる。厚さ約2.5mmでほぼ円形の針金状のものを長方形に折り曲げて造ったものである。接合面が確認できる。	ナカウ'07 L-11・12 B 南 III 1113
	18	轡	−	(7.7)	0.4	0.4	7.8	カブの一部と竿の部分が破損している。残存するカブの形状からすると、耳掻き状と思われるが、詳細不明である。首の稜線も不明瞭で円形状である。竿の状態も不明である。上記のことから、轡に含めた。	ナカウ'07 L-11・12 B 南 I 1114
	19		−	(15.3)	0.4	0.4	12.1	カブが破損しているので、カブの形状は詳細不明である。首以下が、折れ曲がっている。首の稜線が明確で六角形である。竿に行くにつれ、尖っている。表面に僅かながら青錆と鉄錆が付着している。詳細不明だが、上記のことから、ここでは轡に含めた。	ナカウ'07 K-11・12 B 南 I 1204
	20	不明	−	−	−	−	4.4	器の縁か若しくは、その他の製品の縁の部分と思われる。ここでは不明として扱う。上面観が湾曲しており、図上復元が可能で、口径約13.4cmである。縁の部分が平坦である。縁の部分の厚さが約2.5mmで、下端へ行くにつれ、器壁の厚さが薄くなる。約1.0mmである。	ナカウ'07 K-11・12 B 北 II 1112

第29表　金属製品観察一覧

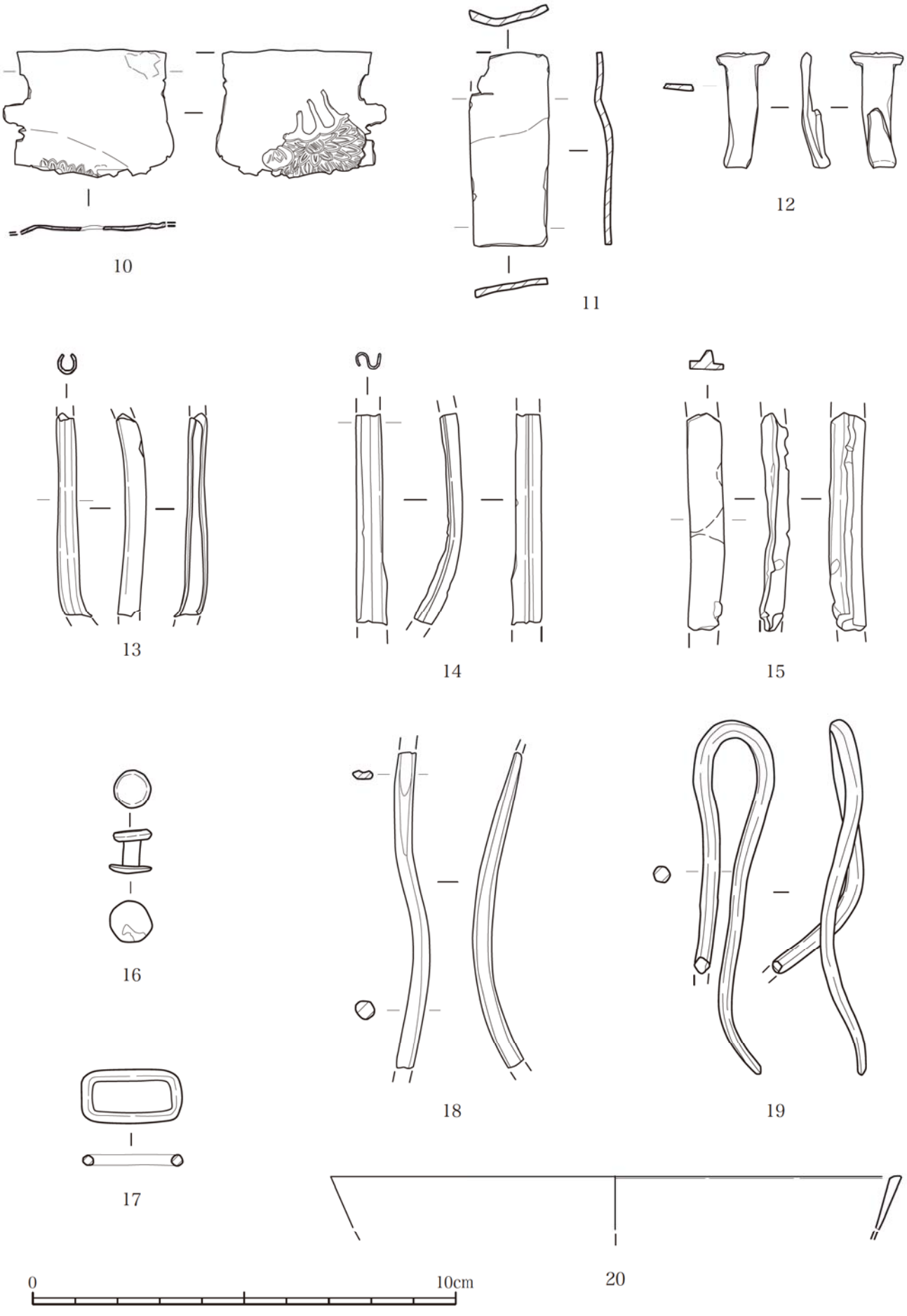
単位：cm・g

挿図番号 図版番号	番号	器種	分類	長軸	幅	厚さ	重量	観察事項	出土地
第43図 図版34	21	釘	Ⅲ	(8.6)	1.0	0.9	30.4	頭頂部は頭部が破損しているので、形状不明である。断面の形状は、ほぼ方形状を呈する角釘である。先端部は鋭角に尖っている。サイズ的に3寸半以上あると思われる。腐食が著しい。	ナカウ '07 L-11・12 B 南 I 1122
	22		Ⅲ	(4.9)	0.8	0.6	9.4	頭頂部は頭部が破損しているので、形状不明である。断面形状はほぼ方形状を呈する角釘である。先端部に行くにつれ鋭く尖っている。 サイズ的に2寸以上あると思われる。腐食が著しい。	ナカウ '07 K-11 B 東 II 1115
	23		II	8.3	0.7	0.7	12.6	頭頂部の形状は、頭部を切断する切り釘である。断面の形状は正方形を呈する角釘である。先端部に行くにつれ鋭く尖っている。ほぼ完形に近い資料である。中央部で緩やかに曲がっている。サイズ的に2寸半強である。腐食が著しい。	ナカウ '07 K-11 A 1213
	24		II	7.5	0.7	0.4	10.5	頭頂部の形状は、頭部を切断する切り釘である。断面の形状は、方形状を呈する角釘である。ほぼ完形に近い資料である。先端部は鋭角に尖っている。先端部付近で「く」の字状に曲がっている。サイズ的にほぼ2寸半の範囲に含まれる。腐食が著しい。	ナカウ '07 L-11・12 B 南 I 1114
	25		II	(6.6)	0.8	0.5	8.5	頭頂部の形状は、頭部を切断する切り釘である。断面の形状は、方形状を呈する角釘である。先端部が欠損しているが、残存部分から推定すると、先端部に行くにつれ、鋭く尖るタイプであると思われる。先端部付近で緩やかに曲がっている。サイズ的に2寸～2寸半の間に含まれるものと思われる。腐食が著しい。	ナカウ '07 K-11 B 東 II 1116
	26		II	3.8	0.7	0.4	3.6	頭頂部の形状は、頭部を切断する切り釘である。断面形状は、方形状を呈する角釘である。ほぼ完形に近い資料である。先端部へ行くにつれ、緩やかに鋭くなるタイプである。サイズ的に1寸半弱で、小型の釘である。腐食が著しい。	ナカウ '07 K-11 B 東 I
	27		I	2.2	0.6	0.5	1.9	頭頂部の形状は、頭部を逆「L」字状に折り曲げる普通釘である。断面形状は、方形状を呈する角釘である。ほぼ完形に近い資料である。頭頂部の折れ曲がった部分は僅かである。先端部は鋭角に尖っている。サイズ的に半寸強である。腐食が著しい。	ナカウ '07 K-11 A III 1212
	28		I	6.3	1.1	0.9	29.2	頭頂部の形状は、頭部を逆「L」字状に折り曲げる普通釘である。断面形状は、方形状を呈する角釘である。腐食が著しく、断面形状は楕円形に近い。頭頂部の折れ曲がった部分は約 1.0cm程度である。長さが約 6.3cm程度で、幅と長さが約1.0cm前後であることから、重量的に重いものである。サイズ的に2寸強である。	ナカウ '07 K-11 A I 1205

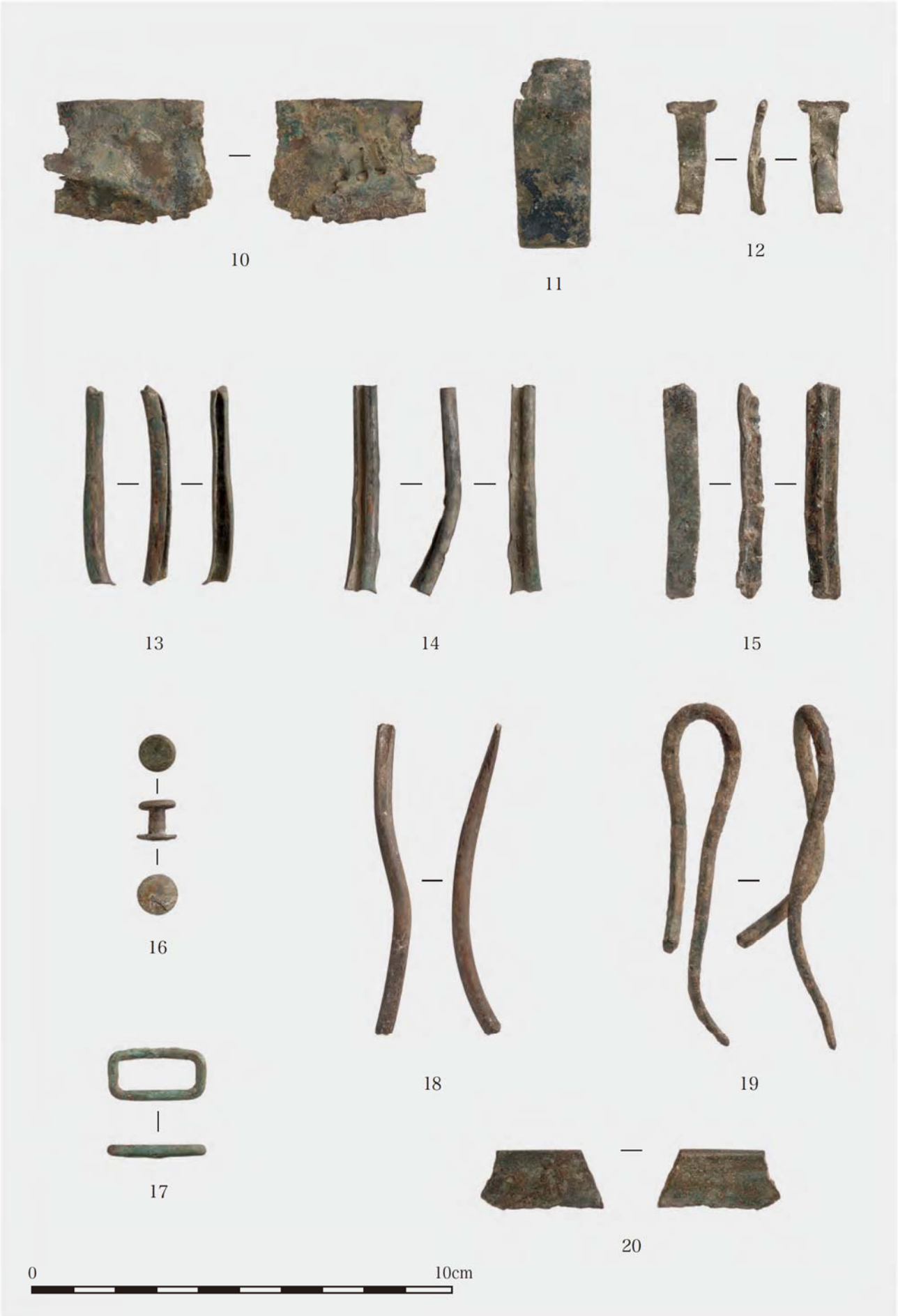


第41図　金属製品１（青銅製品）実測図

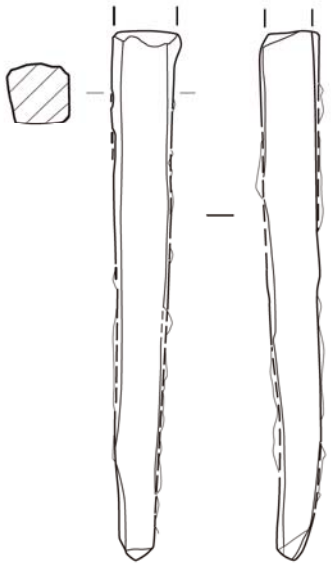
図版32　金属製品１（青銅製品）



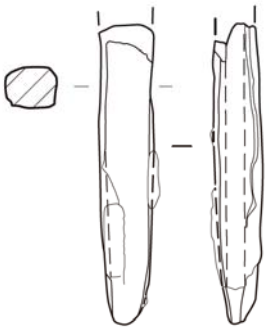
第42図　金属製品２（青銅製品）　実測図



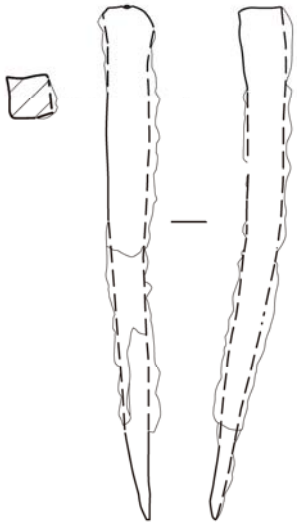
図版33　金属製品２（青銅製品）



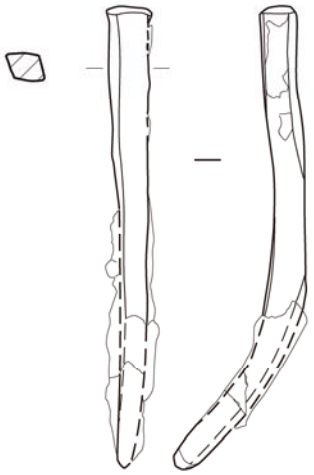
21



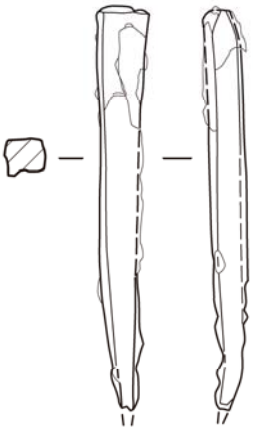
22



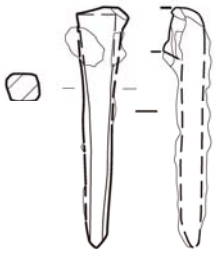
23



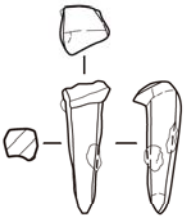
24



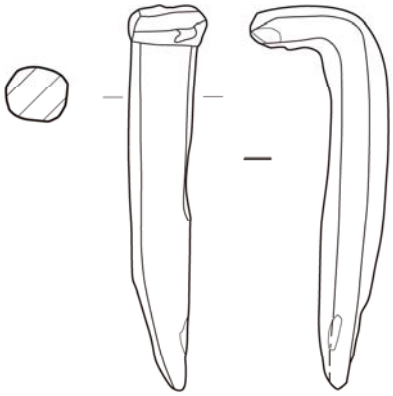
25



26

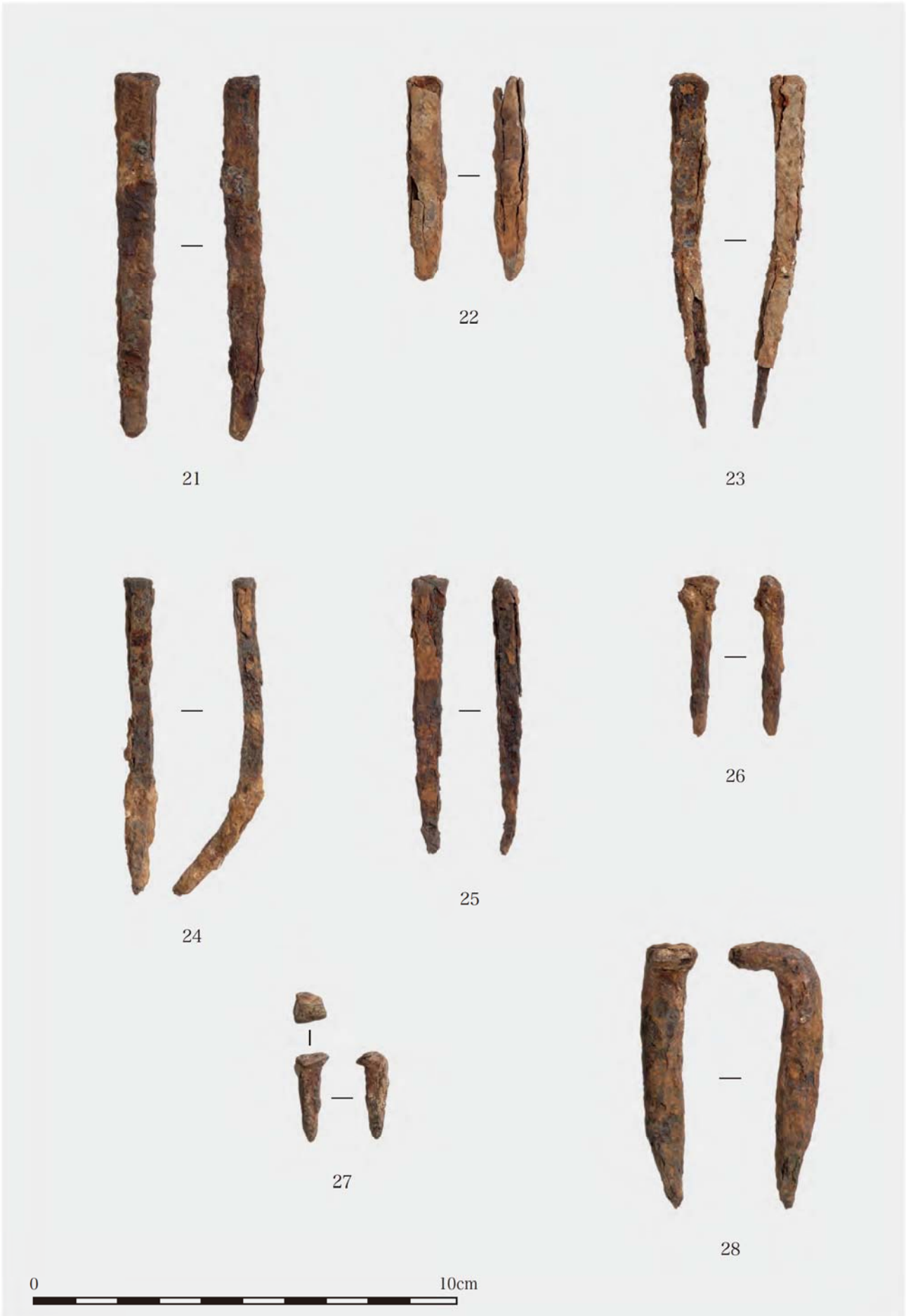


27



28

第43図　金属製品３（鉄製品）　実測図



図版34　金属製品３（鉄製品）

第17節　煙 管

煙管の一部が5点出土し、その内の3点を図示した。材質は沖縄産施釉陶器製と青銅製の2種が確認された。煙管の種類は、煙管に羅宇を挿して使用し、雁首と吸い口がセットになるものもある「羅宇キセル」（第43図1～3）と、羅宇のいらない火皿から吸い口まで繋がっている「延べキセル」がある。今回の調査で延べキセルは確認できなかったことから、本遺跡では羅宇キセルが主流である可能性が考えられる。

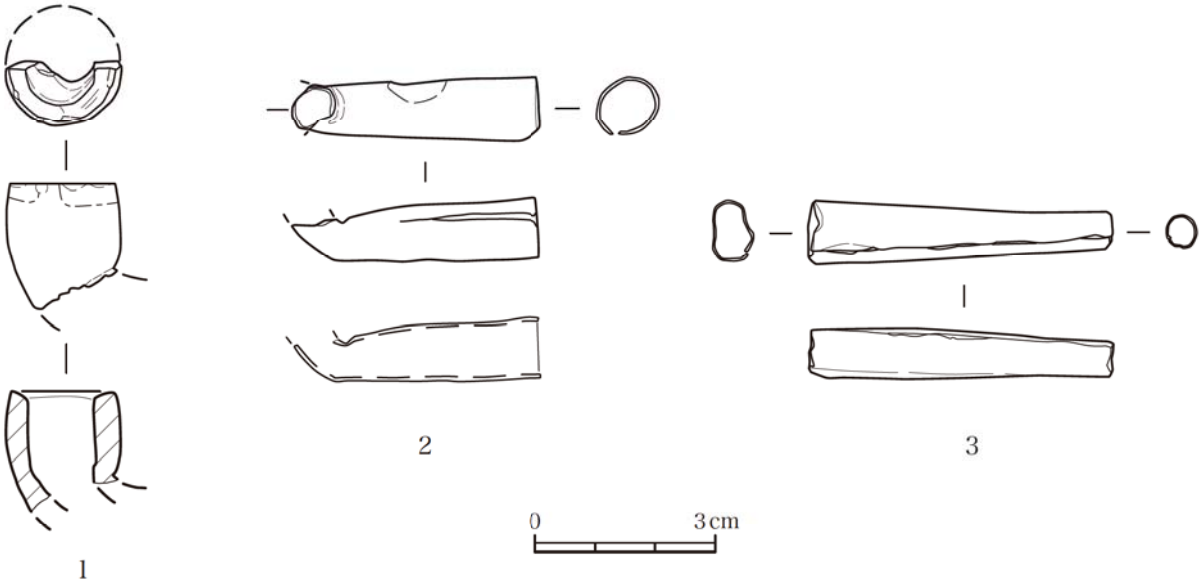
第44図1は、煙管の火皿部分が半分ほど残存する程度である。材質は沖縄産施釉陶器で、素地は灰白色、外面にのみ透明釉を掛ける。丁寧な器面調整を施しており、火皿外縁には釉剥がれが見られる。残存長2cm、火皿部径1.9cm。B地点北のⅡ層より出土。第44図2は火皿部分が欠損している雁首である。材質は青銅。多少変形しているが、断面は円形を呈するものと思われる。残存長4.1cm、残存幅1.0cm。B地点南のⅠ層より出土。第44図3は吸い口で、第44図2と同様に変形がみられる。材質は青銅。残存長5.0cm、残存幅1.0cm。B地点南のⅠ層より出土。

【参考文献】『大辞林』第二版　松村明「編」三省堂

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第２集 天界寺跡（Ⅰ）『一首里社館地下駐車場入り口新設工事に伴う緊急発掘調査―』 2001（平成13）年３月　沖縄県立埋蔵文化財センター

第30表　煙管集計表

			B			総　計
			K-11・12		L-11・12	
			南	北	南	
材　質	器　種	部　位	Ⅰ	Ⅱ	Ⅰ	
青　銅	羅宇キセル	雁　首		1	1	2
		吸い口	1			1
	不明	火　皿	1			1
		吸い口			1	1
総　計			2	1	2	5



第44図　煙管　実測図

図版35　煙管

第18節　ボタン

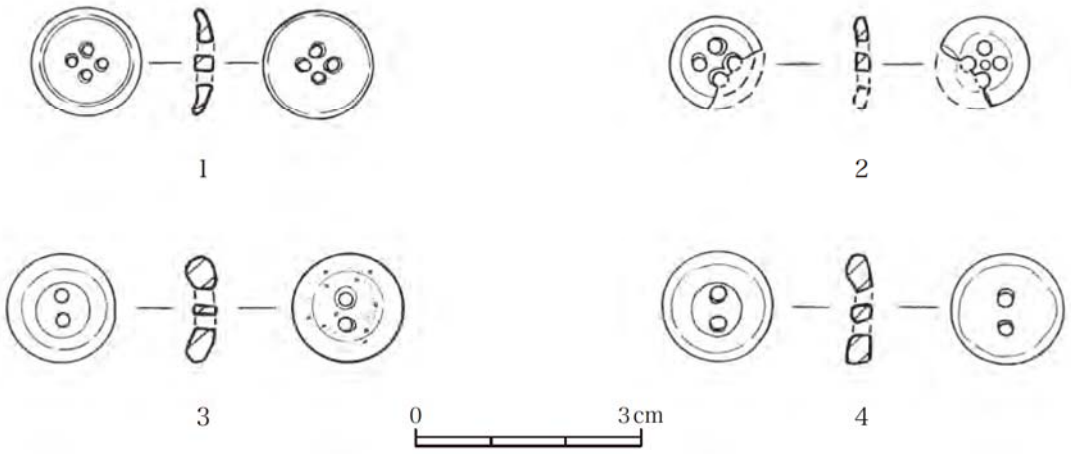
今回の発掘調査で、ボタン4点得られている。4点とも図化が可能な資料である。素材についてはセルロイドが2点、プラスチックが2点である。これらは全て戦後のものと思われるが、今回、報告を行う。詳細は観察一覧に記述を行う。

【参考文献】　沖縄県文化財調査報告書 第136集 湧田古窯跡(IV)『一県民広場地下駐車場建設に係る発掘調査一』
1999年3月　沖縄県教育委員会

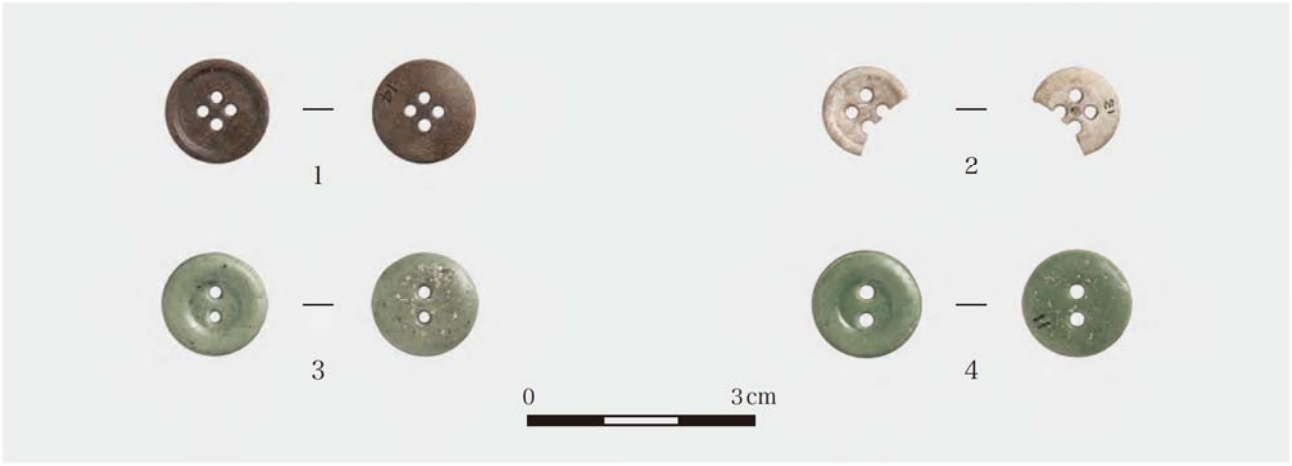
第31表　ボタン観察一覧

単位：mm・g

挿図番号 図版番号	番号	素材	直径	孔径	厚さ	重量	観察事項	出土地
第45図 図版36	1	セルロイド	14.0	2.0	1.0 ～ 2.5	0.3	同遺物はセルロイド製のボタンで、完形品である。平面の形状は円形を呈する。断面の形状は、表面には約2mm程度段があり、中央部にかけてやや膨らみを呈する。裏面は緩い曲線を呈する。中央に糸通し穴4個確認できる。孔径は4個とも一定のサイズである。平面や断面、孔等の形態的特徴から、一定規格品のものと思われる。色調は表裏面とも暗褐色(Hue7.5YR3/3)を呈する。肉眼で表裏面を観察すると、均一に整形した思われるが、ルーペ(30倍)によって表裏面を観察するとアバタ状を呈する。	ナカウ'07 L-11・12 B南 I 1203
	2	セルロイド	(12.0)	2.0	1.0 ～ 2.0	(0.2)	同遺物はセルロイド製のボタンで、破損品である。平面の形状は円形を呈する。断面の形状は、表面には約1mm程度段があり、中央部にかけて平坦を呈する。裏面は緩い曲線を呈する。中央に糸通し穴4個確認できる。2個は破損している。残存する2個の孔径は一定のサイズである。平面や断面、孔等の形態的特徴から、一定規格品のものと思われる。色調は表裏面とも灰白色(Hue10YR7/1)を呈する。肉眼とルーペ(30倍)で表裏面を観察すると、つるつるであることから均一に整形した思われる。第Ⅲ層から出土しているが、上層部からの流れ込みの遺物と思われる。	ナカウ'07 K-10 B東 Ⅲ 1112
	3	プラスチック	14.0	2.0	3.0 ～ 3.5	0.8	同遺物はプラスチック製のボタンで、完形品である。平面の形状は円形を呈する。断面の形状は、表面には約4mm程度盛り上がり、中央部にかけて平坦となる。裏面はほぼ緩やかな曲線を呈する。中央に糸通し穴2個確認できる。孔径は2個とも一定のサイズである。素材や平面、断面、孔等の形態的特徴から、一定規格品のものと思われる。色調は表裏面とも緑灰色(Hue10G6/1)を呈する。肉眼とルーペ(30倍)による観察では、表面はつるつるで、均一に整形されているが、裏面はアバタ状を呈しており、粗い。表裏面ともに艶が確認できるが、強くはない。第Ⅳ層から出土しているが、上層部からの流れ込みの遺物と思われる。	ナカウ'07 K-11 A Ⅳ 1217
	4	プラスチック	14.0	2.0	3.0	1.0	同遺物はプラスチック製のボタンで、完形品である。平面の形状は円形を呈する。断面の形状は、表面には約4mm程度盛り上がり、中央部にかけて平坦となる。裏面はほぼ平坦である。中央に糸通し穴2個確認できる。孔径は2個とも一定のサイズである。素材や平面、断面、孔等の形態的特徴から、一定規格品のものと思われる。色調は表裏面とも緑灰色(Hue5G5/1)を呈する。肉眼とルーペ(30倍)による観察では、表面はつるつるで、均一に整形されているが、裏面はアバタ状を呈している。表裏面ともに艶が確認できる。	ナカウ'07 K-11 B東 I 1130



第45図　ボタン　実測図



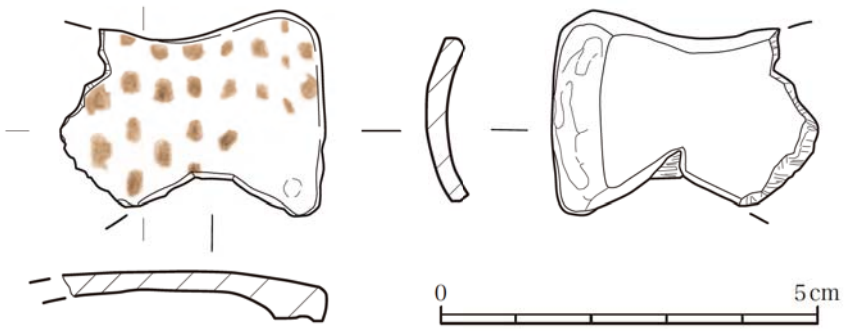
図版36　ボタン

第19節　貝製品

今回の発掘調査で、貝製品は1点得られた。同資料は、図化が可能な資料である。破損している。なお、貝製品は1992（平成4）～1994（平成6）年の第1～3次の発掘調査では、1点も得られていない。

第46図は、唯一中城御殿から出土した貝製品である。素材について、イモガイ科のクロフモドキ若しくは、アンボンクロザメである、と思われる。螺塔部を敲打し、体層部を縦位に切り取って加工したものである。体層部を縦位に切り取った側縁部を丁寧に磨いている。なお、両端の側縁部に抉りを入れ、匙状の柄を形成している。ほぼ対称的に加工を行っているが、一部については、新たな割れが確認できる。形状からすると、貝札若しくは、匙状の柄の部分と思われるが、破損しているため全体の形状は不明であることから、器種や用途等は判然としない。残存部分の長さは、約3.5cmで、幅は、約2.6cmである。貝の厚さは、約2.5mmである。重量は、約6.23ｇである。ナカウ' 07 K-11・12 B 北 II 1113 出土。

【参考文献】　旧中城御殿『—石牆工事地域にかかる第一次発掘調査—』　1993年3月　沖縄県立博物館



第46図　貝製品　実測図

図版37　貝製品

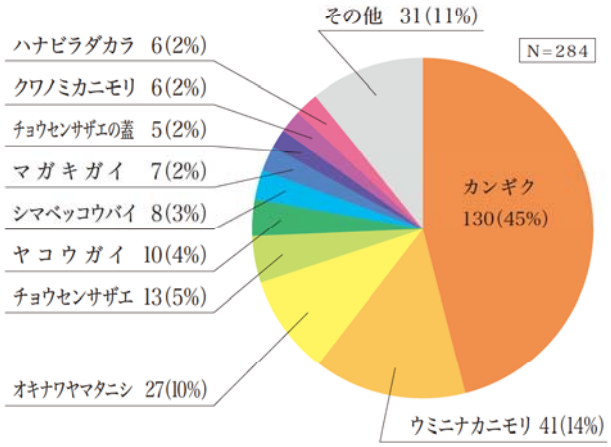
第20節　貝類遺存体

2007（平成19）年度の中城御殿跡より出土した貝類は巻貝14科28種、二枚貝12科23種の合計26科51種が確認されている。

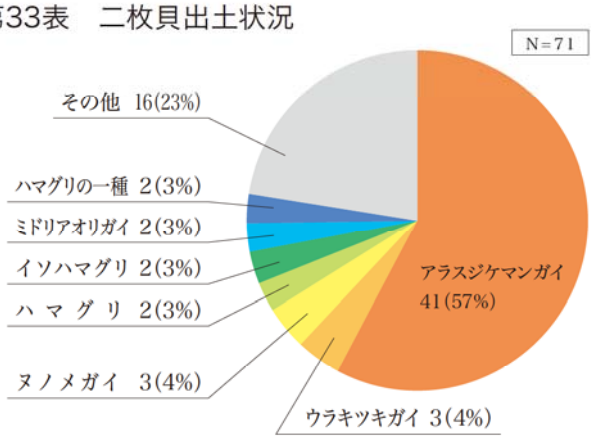
腹足綱と二枚貝綱を比較した場合、種類数、出土量とも腹足綱が圧倒的に主体をなす。巻貝の出土状況をみると、推定個体数は284個体を数える。もっとも多く出土しているのは、サザエ科のカンギク（Ⅱ－1－b）が130個体で45％を占めており、次いでウミニナカモリ（Ⅰ－1－a）が41個体で14％となる。二枚貝ではアラスジケマンガイ（Ⅲ－1－c）が41個で体全体の14％以上を占め、他種を圧倒的に凌駕している。

全体をみると、出土している貝種の多くは潮間帯中・下部の水深に生息しているという特徴がみられた。また、貝類遺存体の出土場所がA地点のⅢ層、SD1に偏ることも特徴として記しておく。

第32表　巻貝出土状況



第33表　二枚貝出土状況



第34表　貝類生息場所類型（habitat）表

外洋～内湾	水深	底質
Ⅰ　外洋－サンゴ礁域 Ⅱ　内湾－転石域 Ⅲ　河口干潟－マングローブ域	0　潮間帯上部（Ⅰではノッチ、Ⅲではマングローブ） 1　潮間帯中・下部 2　亜潮間帯上部（Ⅰではイノー） 3　干瀬（Ⅰにのみ適用） 4　礁斜面およびその下部	a　岩礁／岩盤 b　転石 c　礫／砂／泥底 d　植物上 e　淡水の流入する礫底
Ⅳ　淡水域	5　止水 6　流水	
Ⅴ　陸域	7　林内 8　林内・林縁部 9　林縁部 10　海浜域	
Ⅵ　その他	11　打ち上げ物 12　化石	

【参考文献】　沖縄県文化財調査報告書 第84集『古我知原貝塚』 1987年　沖縄県教育委員会

軟体動物門　MOLLUSCA

腹足綱 GASTROPODA

ニシキウズ科 Trochidae

1. サラサバテイ　*Tectus niloticus* (Linnaeus,1767)

サザエ科 Turbinidae

2. ヤコウガイ　*Turbo (Turbo) marmoratus* Linnaeus,1758
3. ヤコウガイの蓋　*Turbo (Turbo) marmoratus* Linnaeus,1758
4. チョウセンサザエ　*Turbo (Marmarostoma) argyrostomus* Linnaeus,1758
5. チョウセンサザエの蓋　*Turbo (Marmarostoma) argyrostomus* Linnaeus,1758
6. コシダカサザエ　*Turbo (Marmarostoma) stenogyrus* Fischer,1873
7. カンギク　*Turbo (Lunella) coronoatus coronatus* (Gmelin,1791)
8. カンギクの蓋　*Turbo (Lunella) coronoatus coronatus* (Gmelin,1791)

ヤマタニシ科 Cyclophoridae

9. オキナワヤマタニシ　*C.turgidus turgidus* (PFEIFFER,1851)

オニノツノガイ科 Cerithiidae

10. ウミニナカニモリ　*Clypeomorus batillariaeformis* Habe&Kosuge,1966
11. クワノミカニモリ　*Clypeomorus petrosa chemnitziana* (Pilsbry,1901)

ウミニナ科 Batillariidae

12. リュウキュウウミニナ　*Batillaria flectosiphonata* Ozawa,1996

フトヘナタリ科 Potamididae

13. カワアイ　*Cerithidea (Cerithideopsilla) djadjariensis* (Martin,1899)
14. センニンガイ　*Telescopium Telescopium* (Linnaeus,1758)

ソデボラ科 Strombidae

15. オハグロガイ　*Strombus(Canarium)urceus* Linnaeus,1758
16. マガキガイ　*Strombus(Conomurex)luhuanus* Linnaeus,1758

タカラガイ科 Cypraeidae

17. ヒメホシダカラ　*Cypraea (Lyncina) lynx* Linnaeus,1758
18. ハナビラダカラ　*Cypraea(Erosaria)annulus* Linnaeus,1758
19. ハナマルユキ　*Cypraea (Erosaria) caputserpentis caputserpentis* Linnaeus,1758

タマガイ科 Naticidae

20. ホウシュノタマ　*Natica gualteriana* Récluz,1844

アッキガイ科 Muricidae

21. ガンゼキボラ　*Chicoreus (Triplex) brunneus* (Link,1807)

エゾバイ科 Buccinidae

22. シマベッコウバイ　*Japeuthria cingulata* (Reeve,1847)

オニコブシガイ科 Turbinellidae

23. コオニコブシ　*Vasum turbinellum* (Linnaus,1758)

イトマキボラ科 Fasciolariidae

24. イトマキボラ　*Pleuroploca trapezium trapezium* (Linnaeus,1758)

イモガイ科 Conidae

25. マダライモ　*Conus (Virroconus) ebraeus* Linnaeus,1758
26. サヤガタイモ　*Conus (Virroconus) miliaris* Hwass in Bruguière,1792
27. サラサミナシモドキ　*Conus (Dauciconus) planorbis forma vitulinus* HWASS in Bruguière,1792
28. イモガイ科不明

二枚貝綱 BIVALVIA

フネガイ科 Arcidae

1. エガイ　*Barbatia (Abarbatia) lima* (Reeve,1844)
2. カリガネエガイ　*Barbatia (Savignyarca) virescens* (Reeve,1844)
3. ベニエガイ　*Barbatia (Ustularca) fusca* (Bruguière,1789)

タマキガイ科 Glycymerididae

4. ソメワケグリ　*Glycymeris(Veletuceta) reevei* (Mayer,1868)

ウグイスガイ科 Pteriidae

5. ミドリアオリ　*Pinctada maculata* (Gould,1850)

ツキガイ科 Lucinidae

6. ウラキツキガイ　*Codakia paytenorum* (Iredale,1937)

カゴガイ科 Fimbriidae

7. カゴガイ　*Fimbria soverbii* (Reeve,1841)

ザルガイ科 Cardiidae

8. カワラガイ　*Fragum unedo* (Linnaeus,1758)

シャコガイ科 Tridacnidae

9. ヒレシャコガイ　*Tridacna squamosa* Lamarck,1819
10. シラナミガイ　*Tridacna maxima* (Röding,1798)

チドリマスオ科 Mesodesmatidae

11. イソハマグリ　*Atactodea striata* (Gmelin,1791)

シオサザナミ科 Psammobiidae

12. リュウキュウマスオ　*Asaphis violascens* (Forskal,1775)

シジミ科 Corbiculidae

13. シレナシジミ　*G.coaxans* GMELIN,1791

マルスダレガイ科 Veneridae

14. アラヌノメガイ　*Periglypta reticulata* (Linnaeus,1758)
15. ヌノメガイ　*Periglypta puerpera* (Linnaeus,1771)
16. アラスジケマンガイ　*Gafrarium tumidum* (Röding,1798)
17. スダレハマグリ　*Katelysia japonica* (Gmelin,1791)
18. ハマグリ　*Meretrix lusoria* (Röding,1798)
19. ハマグリの一種
20. オキシジミ　*Cyclina sinensis* (Gmelin,1791)

イタヤガイ科(化石種) Pectinidae

21. チサラガイ　*Gloripallium pallium* (Linnaeus,1758)
22. キンチャクガイ　*Decatopecten striatus* (Schumacher,1817)
23. イタヤガイ　*Pecten albicans* (Schröter,1802)

【参考文献】

奥谷喬司編著『日本近海産貝類図鑑』
2000年　東海大学出版会

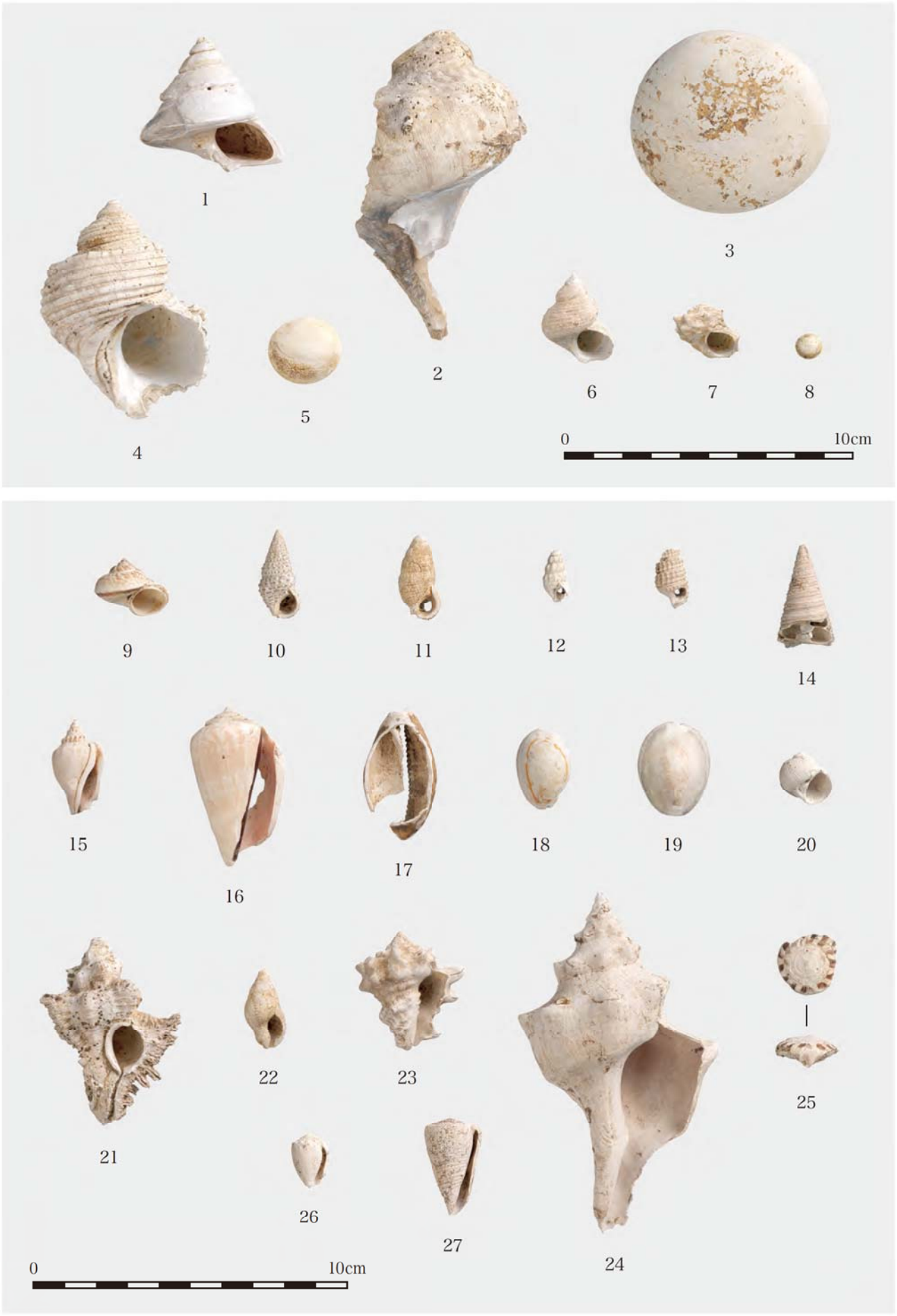
肥後俊一・後藤芳央『日本及び周辺地域産軟体動物総目録』1993年　エル貝類出版局

第35表　貝類遺存体集計表（巻貝）

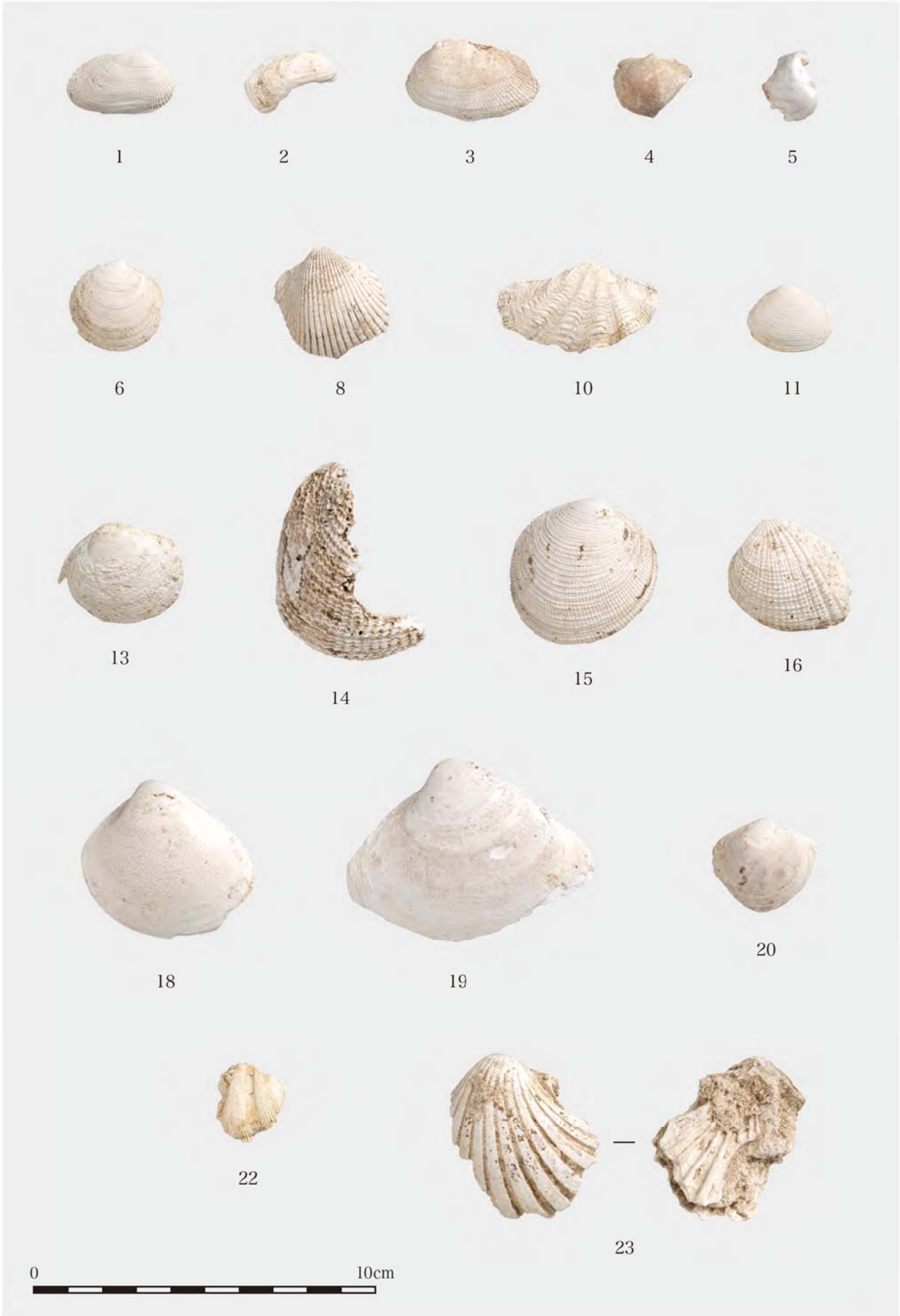
出土地					A																																								B															合計			
					J-10		J-10・11					J-11											K-10					K-11											J-11・12		K-10					K-11・12		L-11・12					
					Ⅳ		SR5		SS1		SD1		Ⅰ		Ⅲ		Ⅳ		Ⅰ		Ⅲ		Ⅰ		Ⅲ		Ⅳ		不明		北 Ⅰ		東 Ⅰ		東 Ⅲ		北 Ⅴ		南 Ⅲ					
番号	綱名	科名	種名	生息地	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	個体数
1		ニシキウズガイ科	サラサバテイ	Ⅰ-4-a																													1	3			2																						0	1	5	1
2		サザエ科	ヤコウガイ	Ⅰ-4-a			5			3			2						1			1											1	8		1	9								1	5						2							0	3	36	3
3			ヤコウガイの蓋	Ⅰ-4-a									1																		1	1		2																									1	0	4	1
4			チョウセンサザエ	Ⅰ-3-a			2						1	1													1					4	2	1		1															1							1	5	5	5	10
5			チョウセンサザエの蓋	Ⅰ-3-a	1															1												3																											5	0	0	5
6			コシダカサザエ	Ⅰ-2-a																1	1																																						1	1	0	2
7			カンギク	Ⅱ-1-b	3						1	1	1	4	18	5				32	27	11	3	5	1				4	5	9				12	14	3		1	1																			59	71	31	130
8	腹		カンギクの蓋	Ⅱ-1-b																																											1												1	0	0	1
9		ヤマタニシ科	オキナワヤマタニシ	Ⅴ-8	2		4							1	2	5				10	4	5							1			1			3	2	6	1																					19	8	20	27
10		オニノツノガイ科	ウミニナカニモリ	Ⅰ-1-a		4					1			1	10	4				2	13	2								5	7					3			1	2														1					4	37	15	41
11			クワノミカニモリ	Ⅰ-1-a																1	1												1			3																							1	5	0	6
12		ウミニナ科	リュウキュウウミニナ	Ⅱ-1-b																		1																																					0	0	1	1
13		フトヘナタリ科	カワアイ	Ⅲ-1-c																		1																																					0	0	1	1
14	足		センニンガイ	Ⅲ-1-d																										1																													0	1	0	1
15		ソデボラ科	オハグロガイ	Ⅱ-2-c																	1											1				1														1									2	2	0	4
16			マガキガイ	Ⅰ-2-c																	1												1			1				1		1												2					0	6	1	6
17		タカラガイ科	ヒメホシダカラ	Ⅰ-2-a																																1																							0	1	0	1
18			ハナビラダカラ	Ⅰ-1-a											2						2	1								1					1																								1	5	1	6
19			ハナマルユキ	Ⅰ-3-a																1																				1																			1	0	1	1
20	綱	タマガイ科	ホウシュノタマ	Ⅱ-1-c																									1																														1	0	0	1
21		アッキガイ科	ガンゼキボラ	Ⅰ-4-a																																		1																					1	0	0	1
22		エゾバイ科	シマベッコウバイ	Ⅱ-1-c																5										1	1				1	1																							6	2	1	8
23		オニコブシガイ科	コオニコブシ	Ⅰ-2-c										1						1			1																										1										3	0	1	3
24		イトマキボラ科	イトマキボラ	Ⅰ-2-a																										1		2																											2	1	0	3
25		イモガイ科	マダライモ	Ⅰ-1-a											1																																												0	1	0	1
26			サヤガタイモ	Ⅰ-1-a																																			1																				0	1	0	1
27			サラサミナシモドキ	Ⅰ-2-a																																1																							0	1	0	1
28			イモガイ科不明									1																		1																													0	2	0	2
合　計					6	4	11	0	0	3	2	2	5	8	33	14	0	0	1	54	50	22	4	5	1	0	1	0	6	15	18	12	6	14	17	29	20	2	3	5	0	1	0	0	1	5	1	0	1	1	1	2	0	3	0	0	0	1	113	154	123	269

第36表　貝類遺存体集計表（二枚貝）

出土地					A																														B																								合計			
					J-10		J-10・11		J-11											K-10		K-11								J-11・12		K-10								K-11		L-11・12											
					Ⅳ		SR5		SD1		Ⅰ		Ⅲ		Ⅳ		Ⅲ		Ⅰ		Ⅲ		Ⅳ		北 Ⅱ		東 Ⅰ		東 Ⅱ		東 Ⅲ		東 Ⅰ		南 Ⅰ		北 Ⅱ		北 Ⅴ					
番号	綱名	科名	種名	生息地	完形 L/R	殻頂 L/R	破片	完形 L/R	殻頂 L/R	破片	完形 L/R	殻頂 L/R	破片	完形 L/R	殻頂 L/R	破片	完形 L/R	殻頂 L/R	破片	完形 L/R	殻頂 L/R	破片	完形 L/R	殻頂 L/R	破片	完形 L/R	殻頂 L/R	破片	完形 L/R	殻頂 L/R	破片	完形 L/R	殻頂 L/R	破片	完形 L/R	殻頂 L/R	破片	完形 L/R	殻頂 L/R	破片	完形 L/R	殻頂 L/R	破片	完形 L/R	殻頂 L/R	破片	完形 L/R	殻頂 L/R	破片	完形 L/R	殻頂 L/R	破片	完形 L/R	殻頂 L/R	破片	完形 L/R	殻頂 L/R	破片	完形 L/R	殻頂 L/R	破片	個体数
1		フネガイ科	エガイ	Ⅰ-1-a													/1																																										0/1	0/0	0	1
2			カリガネエガイ															/1																																									0/0	0/1	0	1
3			ベニエガイ	Ⅰ-2-a																												1/																							1				1/0	0/0	1	1
4		タマキガイ科	ソメワケグリ	Ⅱ-2-c																																									1/														0/0	1/0	0	1
5		ウグイスガイ科	ミドリアオリガイ	Ⅰ-1-a														/1			/1																																						0/0	0/2	0	2
6	二	ツキガイ科	ウラキツキガイ	Ⅱ-2-c				/1															/1	1/						1/														1/		1													1/2	2/0	1	3
7		カゴガイ科	カゴガイ																																														1										0/0	0/0	1	1
8		ザルガイ科	カワラガイ	Ⅱ-2-c								/1							1																											1													0/0	0/1	2	1
9		シャコガイ科	ヒレシャコガイ	Ⅰ-2-c																					1			2												1			1																0/0	0/0	5	1
10	枚		ナガジャコ	Ⅰ-2-a																						1/																																	1/0	0/0	0	1
11		チドリマスオ科	イソハマグリ	Ⅰ-1-c					/1																																			1/	/1														1/0	0/2	0	2
12		シオサザナミ科	リュウキュウマスオ	Ⅱ-1-c																																	1																						0/0	0/0	1	1
13	貝	シジミ科	シレナシジミ	Ⅲ-0-c																	/1			1/																																			0/0	1/1	0	1
14		マルスダレガイ科	アラヌノメガイ	Ⅰ-2-c																								1																															0/0	0/0	1	1
15			ヌノメガイ	Ⅱ-1-c								/1	1										/1																/1				1																0/1	0/2	2	3
16	綱		アラスジケマンガイ	Ⅲ-1-c	3/2	/1		1/	/1		2/2	1/2	23		1/		1/1	9/2	10				2/3	4/5		/2			3/5	6/2	1	3/1	3/7			1/															/1					1/			16/16	25/21	34	41
17			スダレハマグリ	Ⅱ-1-c									1																																														0/0	0/0	1	1
18			ハマグリ	Ⅱ-1-c																						1/	1/																																1/0	1/0	0	2
19			ハマグリの一種															/1	4											/1	2																										/1		0/0	0/3	6	3
20			オキシジミ	Ⅲ-1-c																							1/																																0/0	1/0	0	1
21		イタヤガイ科（化石種）	チサラガイ類の化石	Ⅰ-12-b															2																																								0/0	0/0	2	1
22			キンチャクガイ類の化石	Ⅰ-12-c									2																																														0/0	0/0	2	1
23			イタヤガイ類の化石	Ⅵ-12									3					/1	1												2																												0/0	0/1	6	1
合　計					3/2	0/1	0	1/1	0/2	0	2/2	1/4	30	0/0	1/0	0	1/2	9/6	18	0/0	0/2	0	2/5	6/5	1	2/2	2/0	3	3/5	7/3	5	4/1	3/7	0	0/0	1/0	1	0/0	0/1	1	0/0	0/0	2	2/0	1/1	2	0/0	0/0	1	0/0	0/10	0	0/0	0/0	1	1/0	0/1	0	21/20	31/34	65	72



図版38　貝類遺存体１　巻貝（番号は第35表と一致）



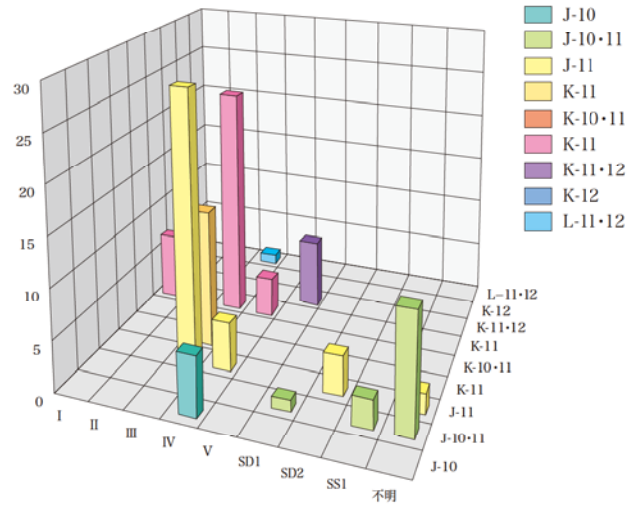
図版39　貝類遺存体２　二枚貝（番号は第36表と一致）

第21節　脊椎動物遺存体

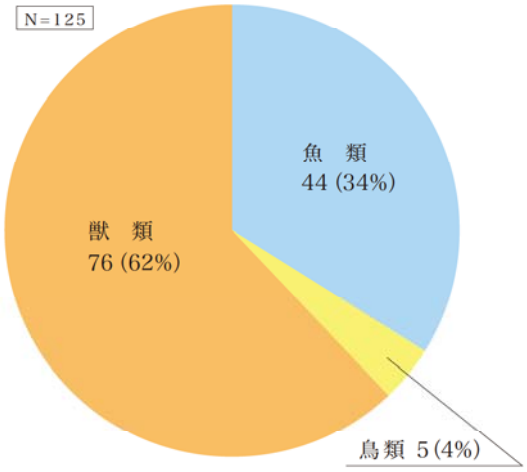
脊椎動物遺存体の出土状況の主体となる層位はⅢ層であった（第37表）。脊椎動物遺存体の出土状況については、第41表～第46表に示した通りである。脊椎動物遺存体を類別でみると、獣類が62%、魚類が34%と、2種で9割を越える結果となっている（第38表）。種別でみると魚類がメジロザメ目のメジロザメ科（メジロザメ）、スズキ目のハタ科、フエキダイ科（ハマフエフキ）、ベラ科（コブダイ）、ブダイ科の5種類であった。鳥類ではキジ科（ニワトリ）の1種。獣類では、ブタ、ウマ、ウシの3種であった。また、1種のみ確認されている鳥類を除いて、複数種確認されている魚類、獣類のそれぞれの内訳を第39表・第40表に示した。

以下、本遺跡から出土した脊椎動物遺存体の種別リストを呈示する。

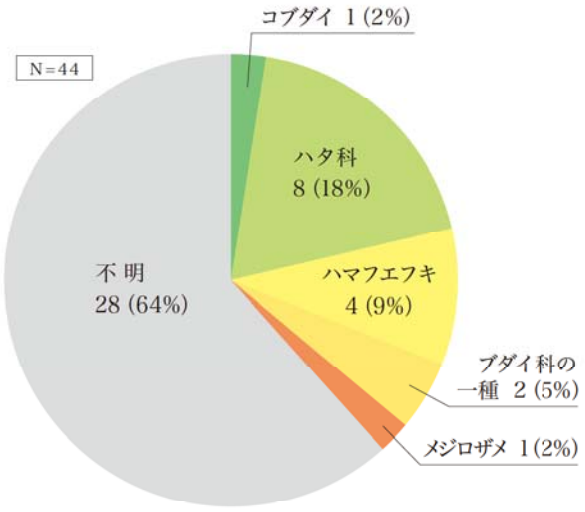
第37表　脊椎動物遺存体の出土地分布表



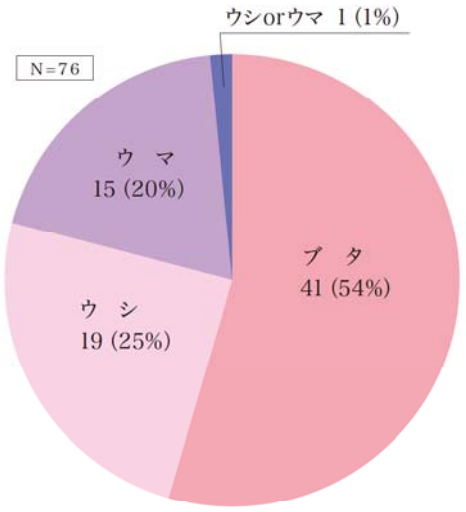
第38表　脊椎動物遺存体の種別割合



第39表　魚類出土割合



第40表　獣類出土割合



脊椎動物門　Phylum VERTEBRATA

軟骨魚綱　Class Chondrichthyes

メジロザメ目　Order Carcharhiniformes
メジロザメ科　Family Charcharhinidae
メジロザメ　Carcharhinus plumbeus

硬骨魚綱　Class Osteichthyes

スズキ目　Order Perciformes
ハタ科　Family Serranidae
属・種不明　Gen.et sp.indet.
フエフキダイ科　Family Lethrinidae
ハマフエフキ　*Lethrinus Nebulosus*
ベラ科　Family Lebrdae
コブダイ　*Semicossyphus reticulatus*
ブダイ科　Family Labrdae
属・種不明　Gen.et sp.indet.

鳥綱　Class Aves

キジ目　Order Galliformes
キジ科　Family Phasianidae
ニワトリ　*Gallus gallus var.domesticu*

哺乳綱　Class Mammalia

奇蹄目　Order Perissodactyla

ウマ科　Family Equidae
ウマ　*Equus caballus*

偶蹄目　Order Artiodactyla

イノシシ科　Family Suidae
ブタ　*Sus scrofa var.domesticus*
ウシ科　Family Bovidae
ウシ　*Bos taurus*

第41表　魚類集計表

器種	科名	種名	部位	左右	A J-10・11 SS1	A J-11 SD1	A J-11 Ⅲ	A J-11 Ⅳ	A K-10 Ⅲ	A K-11 Ⅲ	A K-11 Ⅳ	B K-11 東 I	B K-11・12 北 V	B K-12 西 I	合計
メジロザメ目	メジロザメ科	メジロザメ	脊椎骨									1			1
スズキ目	ハタ科	−	主上顎骨	右		1									1
				不明						1					1
			口蓋	右		1									1
			方骨	右			1								1
			A 前鰓蓋骨	右			1								1
				左			1								1
			B	右	1										1
			擬鎖骨	右			1								1
	フエフキダイ科	ハマフエフキ	前上顎骨	左			1				1				2
			主上顎骨	右						1					1
			角骨	右			1								1
	ベラ科	コブダイ	前上顎骨	右			1								1
	ブダイ科	−	前上顎骨	右			1								1
			歯骨破片	右						1					1
科・種不明			角骨	右			1								1
				左						1					1
			腎鰭血管間棘				1			1			1		3
			脊椎骨		1		7	1	3	8			1	2	23
合計					2	2	17	1	3	13	1	1	2	2	44

第42表　ニワトリ集計表

器種	残存部	左／右	A J-10・11 SS1	A K-10 Ⅲ	A K-11 I	合計
肩甲骨	近位端	左	1			1
尺骨	骨体	右		1		1
	骨体～遠位骨端はずれ	左		1		1
大腿骨	完存	左			1	1
中足骨	遠位部(♀)	左	1			1
合計			2	2	1	5

第43表　ブタ集計表

器種		残存部	左右	A J-10 Ⅳ	A J-10・11 SR5	A J-10・11 SS1	A J-11 Ⅲ	A J-11 Ⅳ	A K-10 Ⅲ	A K-11 Ⅰ	A K-11 Ⅲ	A K-11 Ⅳ	B K-11 東 Ⅰ	B K-11・12 北 Ⅴ	B K-12 西 Ⅰ	合計
上顎	M²	歯根先端欠損	左				1									1
下顎	I₁	完存	左										1			1
	I₁	歯根欠損	左									1			1	2
	M₁	歯根先端欠損	左								1					1
	M₂	歯根先端欠損	左						1							1
	M₃	歯根欠損	左		1											1
第一肋骨		完存	左		1											1
肋骨		近位～	右			1	1									2
		破片	左			2			1							3
			不明								1			1		2
頸椎		ほぼ完存					1	1								2
椎骨		椎体							2							2
肩甲骨		近位端	左											1		1
		骨体	右				1									1
上腕骨		近位部	左								1					1
		骨体～遠位部	左									1				1
		遠位端	左	1												1
		遠位骨端のみ	右						1							1
橈骨		近位端	右							1						1
		近位端～遠位骨端はずれ	左					1								1
尺骨		骨体	左										1			1
		近位端～遠位骨端はずれ	左				1									1
		近位部～骨体	右					1								1
中手骨Ⅲ		近位端～骨体	左								1					1
寛骨		坐骨	右							1		1				2
大腿骨		近位骨頭のみ	不明						1							1
		遠位骨端のみ	左						1							1
脛骨		骨体	左			1					1					2
腓骨		骨体	不明				1									1
踵骨		骨体	左										1			1
距骨		破片	左										1			1
中手・中足骨		骨体	不明		1											1
合計				1	3	4	6	3	7	2	5	3	4	2	1	41

第44表　ウマ集計表

部位		残存状態	左右	A J-10 Ⅳ	A J-10・11 SS1	A J-11 Ⅲ	A K-11 Ⅰ	A K-11 Ⅲ	B K-11 東 Ⅲ	B K-11・12 北 Ⅴ	合計
上顎	P3～M2	歯根先端欠損	右						1		1
上・下顎	切歯	歯冠欠損	不明					1			1
	犬歯	歯冠欠損	不明							1	1
下顎	P3～M2	歯根先端欠損	左					1			1
	M3	歯根欠損	左					1			1
仙骨		ほぼ完存		1							1
椎骨		椎体			1						1
		棘突起		3	1						4
肋骨		破片	不明			1					1
尺骨		遠位部	左					1			1
踵骨		遠位端片	右				1				1
中足骨		近位端～骨体	右					1			1
合計				4	2	1	1	5	1	1	15

第45表　ウシ集計表

部位		残存状態	左右	A J-10 Ⅳ	A J-10・11 SS1	A J-11 SD1	A J-11 Ⅲ	A J-11 Ⅳ	A K-10 Ⅲ	A K-11 Ⅰ	A K-11 Ⅲ	B K-11・12 北 Ⅴ	合計
下顎	切歯	完存	右					1					1
			左			1					1	1	3
		歯根先端欠損	左			2							2
	P3	歯根欠損	右								1		1
		歯根先端欠損	左				1						1
	P4	完存	左							1			1
腰椎		椎体		1			1						2
肋骨		破片	不明				1		1				2
橈側手根骨		破片	左				1						1
大腿骨		遠位部	右		1								1
中足骨		骨体破片	不明		1								1
中手・中足骨		遠位端破片	不明			1							1
基節骨		近位端～骨体	右						1				1
		骨体～遠位部	左								1		1
合計				1	2	4	4	1	2	1	3	1	19

第46表　ウシorウマ集計表

部位	残存状態	左右	B K-11・12 北 Ⅴ	合計
手根・足根骨	完存	不明	1	1
合計			1	1

図版40　脊椎動物遺存体1

魚類　上：　**メジロザメ**　1. 脊椎骨
ハタ科　2. 主上顎骨(右)　3. 口蓋(右)　4. 方骨(右)　5. A 前鰓蓋骨(右)　6. B 前鰓蓋骨(右)　7. 擬鎖骨(右)
ハマフエフキ　8. 前上顎骨(左)　9. 主上顎骨(右)　10. 角骨(右)　**コブダイ**　11. 前上顎骨(右)
ブダイ科　12. 前上顎骨(右)　**科・種不明**　13. 角骨(右)　14. 腎鰭血管間棘

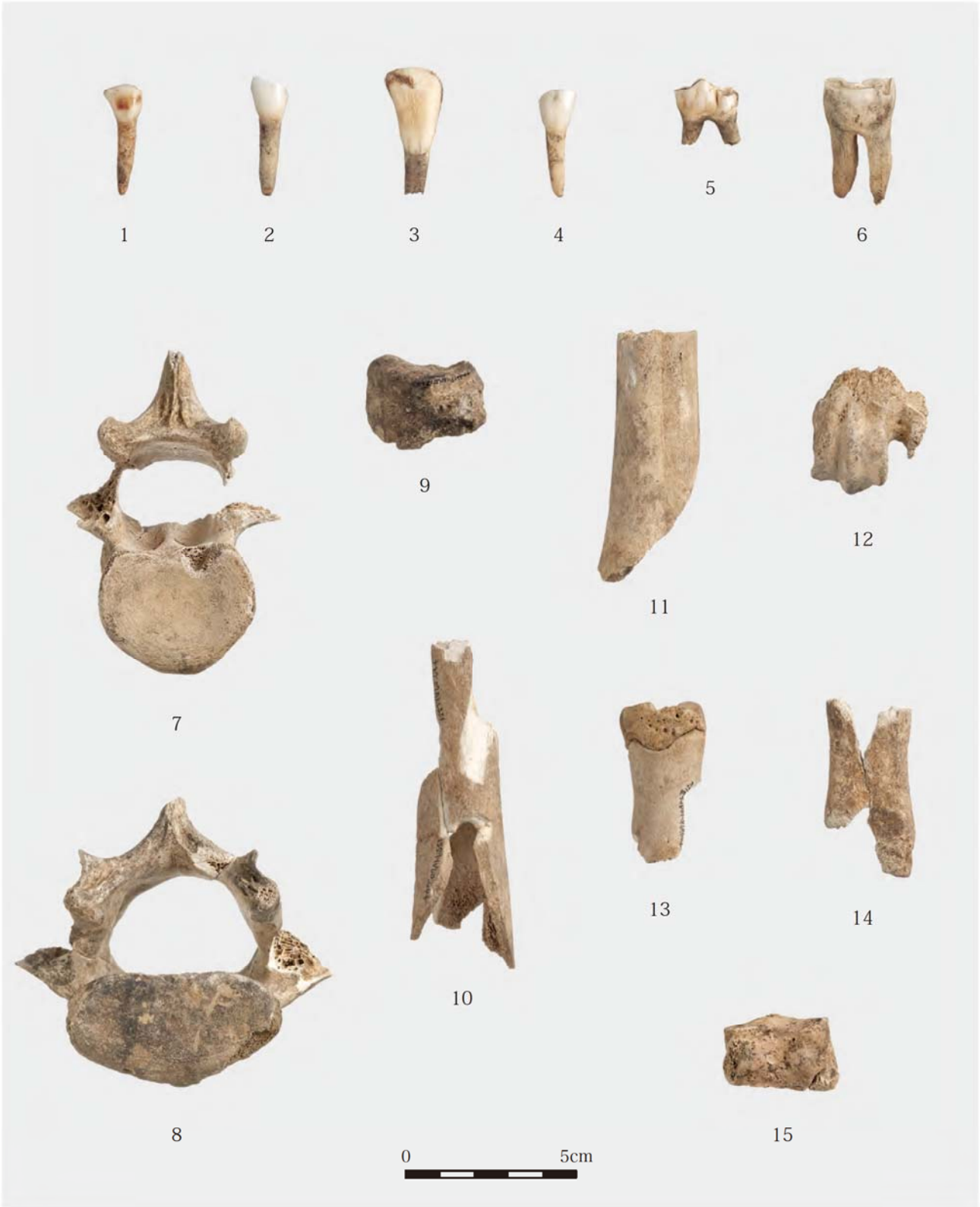
鳥類　下：**ニワトリ**　1. 肩甲骨(左)　2. 尺骨(右)　3. 尺骨(左)　4. 大腿骨(左)　5. 中足骨♀(左)

図版41　脊椎動物遺存体2

ウ　マ　1. 上顎P^3～M^2（右）　2. 上・下顎不明 切歯　3. 上・下顎不明 犬歯
4. 下顎P_3～M_2（左）　5. 下顎M_3（左）
6. 仙骨
7. 尺骨（左）
8. 踵骨（右）
9. 中足骨（右）

図版42　脊椎動物遺存体3

ブ　タ　　1. 上顎M^2（左）
2. 下顎i_1（左）　3. 下顎I_1（左）　4. 下顎M_1（左）　5. 下顎M_2（左）　6. 下顎M_3（左）
7. 肋骨（左）　8. 頸椎　9. 肩甲骨（左）　10. 上腕骨（左）　11. 上腕骨（左）
12. 橈骨（左）　13. 尺骨（左）　14. 中手骨Ⅲ（左）　15. 寛骨（右）　16. 大腿骨（左）
17. 脛骨（左）　18. 腓骨（左右不明）　19. 踵骨（左）　20. 距骨（左）



図版43　脊椎動物遺存体4

ウ　シ　1 ～ 3. 下顎 切歯（左）　4. 下顎 切歯（右）
5. 下顎P_3（左）　6. 下顎P_4（左）
7. 腰椎　8. 腰椎　9. 橈側手根骨（左）　10. 大腿骨 幼（右）
11. 中足骨（左右不明）　12. 中手・中足骨　13. 基節骨（右）　14.基節骨（左）

ウマorウシ　15. 手根・足根骨

第6章　結　語

1．調査概要

現在、県営首里城公園において、首里城周辺並びに綾門大道地区、守礼門周辺等の発掘調査や公園整備が既に完了し、公園整備がまだ実施されていない中城御殿の今後の整備・活用を図るための基礎資料（遺構の情報等）を得るための発掘調査の目的である。更に、建物群があった箇所における発掘調査は今回が始めてということもあり、戦後の造成土の堆積状況並びに、遺構の残存状況を確認することも目的としている。発掘調査は公園整備を目的とし、沖縄県土木建築部から分任予算を受けて、沖縄県教育委員会（事業実施：沖縄県立埋蔵文化財センター）が遺構の確認に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施した。

なお、今回の発掘調査は中城御殿跡の遺構の確認調査を目的としており、同遺跡を確認した場合は遺構の露出を行い、それ以外の遺跡（ここでは北谷御殿〔大村御殿〕を云う。）の遺構を確認すると、平面のみで調査を終え、その下層の掘り下げは行わずに遺構の保護に努めた。

2．遺 構

今回の発掘調査は県営首里城公園の整備に伴う遺構の確認調査が目的である。発掘調査の方法はグリッドとトレンチを設定し、調査を実施した。

調査箇所は中城御殿の南東部分で、御書院・大広間・前之御座座にかかる箇所である（第７図）。御殿は全て赤瓦葺きの屋根であったが、そのほとんどが沖縄戦で破壊された。同箇所は旧沖縄県立博物館の前庭に位置し、閉館後は草刈り等が行われておらず、雑草等が繁茂した状態だった。更に、樹木や花壇、庭石等の障害物が多いことから、障害物がない空間に調査地点（A地点：グリッド〔79㎡〕、B地点：「十」字状のトレンチ〔39㎡〕）を設定した。

発掘調査ではA・B地点において、旧沖縄県立博物館が存在した時期の層、表土層を剥ぎ取ると、戦前から近年の造成土の層で、コンクリートや礫、サンゴ、白砂、コーラル等や一部瓦ブロック等を含む層が確認され、それは攪乱層であった。発掘調査及び、報告書作成の最中に数名の方々から「戦後、発掘調査を実施した箇所には㈱首里バスのバスターミナルがあった。」と、ご教示を頂いた。なお、コンクリートやコーラル等から推定すると、コンクリートは建物の基礎やバスターミナルとして造成の際のコーラルと思われる。また、A地点では西・北壁において第Ⅱ・Ⅲ層は確認できなかったが、コンクリートやコーラル等が確認され、戦後の土地の改変等によるものと思われる。

A地点から表土下約70～80cmの箇所からＳＲ１～５（石列１～５）やＳＤ１（側溝１）、ＳＳ１（石敷１）等の遺構が確認された。しかしながら、B地点から明確な遺構は確認できなかった。両地点の層序や遺構が検出されたレベル等を検討した結果、A地点の南壁面で第Ⅱ層下部と第Ⅲ層上面から拳大の礫が確認でき、第Ⅱ層下部と第Ⅲ層上面は中城御殿の遺構面と思われることが解った。また、発掘調査を実施する際の参考資料として、1945（昭和20）年３月に米軍が撮影した航空写真と測量図を被せたところ（第７図）、平成19年度調査箇所は御書院と大広間の建物の中に位置付けられることが解った。更に、これらの状況から第Ⅱ層の赤褐色礫混じり層は、戦後の造成時の痕跡と思われる。

今回、第Ⅳ層で確認された遺構は中城御殿以前の北谷御殿（大村御殿）の遺構ではないかと想定しているが、今後の調査によって、この遺構の性格等が確認できると思う。なお、今回検出したＳＲ１～５（石列１～５）の立面とＳＤ１（側溝１）の縁部と溝床面、ＳＳ１（石敷１）の縁石等を露出する作業は行わなかった。

3．遺物

今回の発掘調査の結果、中国産陶磁器（青磁や白磁、染付、中国産褐釉陶器）や本土産陶磁器、その他輸入陶磁器、沖縄産陶器（施釉・無釉陶器、陶質土器）、タイ産褐釉陶器・半練土器、グスク土器、瓦質土器、円盤状製品、瓦、塼、銭貨、鉄・青銅製の釘、飾り金具、キセル、ボタン、貝製品、自然遺物（貝や骨）等の遺物も出土しました。総合計1,903点の遺物が得られた。今回は典型的な遺物約300点について報告書へ掲載した。

今回、中城御殿の発掘調査では中国産や肥前産、その他の国産陶磁が多様な内容で出土している。製作年代的にも14世紀後半～15世紀前半明初から20世紀まで年代幅が広く、断え間のない生活がうかがえる。14～15世紀は中国龍泉窯の青磁を中心に白磁が僅か出土し、16世紀には景徳鎮窯の染付（青花）が主となり、国産品では備前の擂鉢が出土している。明末の16世紀後半～17世紀前半になると中国磁器から国産へ推移する時期であるが、当遺跡では僅かながらも景徳鎮の染付などが出土している。国産の肥前磁器は17世紀後半のものや、18世紀の長皿が僅かであるが出土している。御殿の始まる頃の調度品として入った磁器としては、中国景徳鎮系の青花皿類が少なからず出土している。19世紀前半～中葉の製品であり、中国磁器輸入の最後となるグループである。明治以降は国産の染付の印判手の製品が入っている。これら18～20世紀の陶磁器も明治から昭和初期の御殿での使用陶磁を知る上で、貴重な資料といえる。

また、建築物に関わる遺物として、屋瓦や塼、鉄・青銅製の釘、飾り金具等が得られた。特に、屋瓦について、「御殿は全て赤瓦葺きの屋根であった。」と聞き取り調査の報告があり、出土遺物は主に赤瓦が多く出土しており、聞き取り調査と合致する。なお、赤瓦はＢ地点の第Ⅲ層が主体で、灰色瓦はＡ地点のＳＤ１（側溝１）からの出土数が多かった。このことから、ＳＤ１（側溝１）から出土した灰色瓦は中城御殿以前の北谷御殿（大村御殿）に伴うものと思われる。

自然遺物は貝類と脊椎動物遺存体に分けられ、主に、食糧残滓として考えられる。貝類は巻貝14科28種で推定個体数が284固体、二枚貝12科23が71固体確認された。潮間帯中・下の水深に生息しているものが多く、Ａ地点の第Ⅲ層並びに、ＳＤ１（側溝１）から多く出土している。脊椎動物遺存体は獣類と魚類、鳥類に分けられ、獣類はブタ・ウマ・ウシの３種の76点、魚類はメジロサメ目のメジロザメ科（メジロザメ）・スズキ目のハタ科・フエダイ科（ハマフエダイ）・ベラ科（コブダイ）科・ブダイの５種の44点、キジ科（ニワトリ）の１種の５点得られた。総数125点得られ、貝類と同様Ａ地点第Ⅲ層から多く出土している。

これらの遺物は大まかであるが、生活雑貨品や建築資材、食料残滓等に分けられ、近世・近代の御殿の生活・建築様式等や、更に明治から昭和初期の御殿の生活を知る上で貴重な資料であると思われる。

中城御殿歴史年表

西暦	琉球王代	日本年号	中城御殿関連事項
1621	尚豊 1	元和 7	佐敷王子尚文のために、中城御殿が現県立首里高校の地に建設される。
1870	尚泰23	明治 3	中城御殿が龍潭北側、当蔵の現在地に新しく造営されることになる。 「中城御殿御石持夫越屋敷帳」
1871	尚泰24	明治 4	明治政府は全国に廃藩置県を実施した(この時、琉球国を国家としてではなく令制国として扱い、鹿児島県へ編入)。
1872	尚泰25	明治 5	明治政府は琉球王国を強制廃止して琉球藩を設置した。
1873	尚泰26	明治 6	中城御殿竣工「中城御殿御庭作方日記」 「中城御殿御敷替御普請日記」(～光緒3年・明治10)
1875	尚泰28	明治 8	王世子(王子・世子)が中城御殿に移住。
1879	尚泰32	明治 12	明治政府は軍隊と警官を派遣して琉球藩の廃止(廃藩置県)を宣言し、同年中に沖縄県を設置した(琉球処分)。首里城を明け渡し、尚泰王以下中城御殿に移住。
1884	—	明治 17	中城御殿ほか21箇所の敷地、建物など尚泰の私有財産と確定される。
1885	—	明治 18	尚泰は世子尚典とともに東京へ移住した。 同年5月2日に侯爵となり、以後第22代尚家当主 尚裕氏まで代々侯爵を襲爵した。
1921	—	大正 1	東宮殿下(昭和天皇)来県、中城御殿を訪問。
1933	—	昭和 8	井伊文子(歌人。随筆家。尚昌の子女で琉球国王尚泰の曾孫。井伊直愛(元彦根市長)夫人)来訪。
1934	—	昭和 9	田辺泰来訪。
1936	—	昭和 11	津軽照子(歌人。津軽家第12代藩主承昭の養嗣子津軽英麿伯爵夫人)来訪。
1939	—	昭和 14	第二次世界大戦始まる。
1944	—	昭和 19	十・十空襲(米国による南西諸島と沖縄本島に大規模な空襲を敢行)。
1945	—	昭和 20	4月6日頃、中城御殿が米軍の砲撃をあびて炎上。 4月10日頃、日本軍が殿を機関銃陣地にする(上之御殿、防空壕など)。 8月、日本の降伏により、第二次世界大戦終戦。 戦後、一時引揚者のバラックが建つ。
1950	—	昭和 25	1月、首里市役所が中城御殿に移転。 7月、首里市営バスが営業所を同敷地内に設置(～66年まで)。
1954	—	昭和 29	首里市が那覇市に吸収合併され、首里市役所が首里支所となる。
1966	—	昭和 41	首里市役所が当蔵に移転、首里バス(51年に株首里バスとして民営化)、当蔵へ移転琉球政府博物館が当蔵の龍潭東側より移転。
1972	—	昭和 47	本土復帰に伴い、琉球政府博物館が沖縄県立博物館となる。
2007	—	平成 19	おもろまちへの移転(現沖縄県立博物館・美術館)により沖縄県立博物館が閉館。 県営首里城公園整備事業に伴い、発掘調査を開始。

報告書抄録

ふりがな	なかぐすくうどぅんあと
書名	中城御殿跡
副書名	県営首里城公園　中城御殿発掘調査報告書
巻次	－I－
シリーズ名	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第53集
編著者名	上地　博、天願瑞笑、伊藝由希
発行機関	沖縄県立埋蔵文化財センター
所在地	〒903-0125　沖縄県中頭郡西原町字上原193の7　TEL：098-835-8751・8752
発行年月日	2010（平成22）年3月31日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所収遺跡名	市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
なかぐすくうどぅん 中城御殿	おきなわけんなはし 沖縄県那覇市 しゅりおおなかちょう 首里大中町 ちょうめばんばん 1丁目1番～3番	47201 那覇市	—	26° 13′ 15″	127° 43′ 05″	2007年 11月1日 ～ 12月28日	118.0	県営 首里城公園 整備事業

所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中城御殿	建物基壇	近世～ 現代	石列 石敷 側溝等	中国産陶磁器、 本土産陶磁器、 その他輸入陶磁器、 沖縄産陶器、 タイ産褐釉陶器、 半練土器、グスク土器、 瓦質土器、円盤状製品、 瓦、塼、銭貨、 金属製品、 キセル、ボタン、貝製品、 自然遺物	発掘調査から石列・石敷、側溝等の遺構が確認され、瓦や塼、鉄・青銅製の釘、飾り金具等の建築資材が出土している。更に、14～15世紀の龍泉窯の青磁や16世紀の景徳鎮窯の青花、国産品では備前の擂鉢、17～18世紀の肥前産の磁器や明治以後の国産の染付等が出土しており、製作年代的に14世紀後半～15世紀前半から20世紀までの年代幅が広く、絶え間のない生活が伺える資料で、近世・近代の御殿の生活様式を知る上で貴重な資料が得られた。

要約	昭和61（1986）年11月28日に、首里城公園計画区域約17.8haのうち、城郭内側の区域約4haについて沖縄復帰を記念する国の都市公園整備事業（国営沖縄記念公園首里城地区）として、復元整備されることが閣議決定され、併せて城郭外側の区域約13.8haを県営公園事業として庁議決定された。昭和59（1984）年度に首里城公園基本計画調査委員会が策定した『首里城公園基本計画』および、昭和63（1988）年度に沖縄県土木建築部が策定した『首里城公園基本設計』に基づく復元整備を目的とした遺構確認調査である。

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第53集

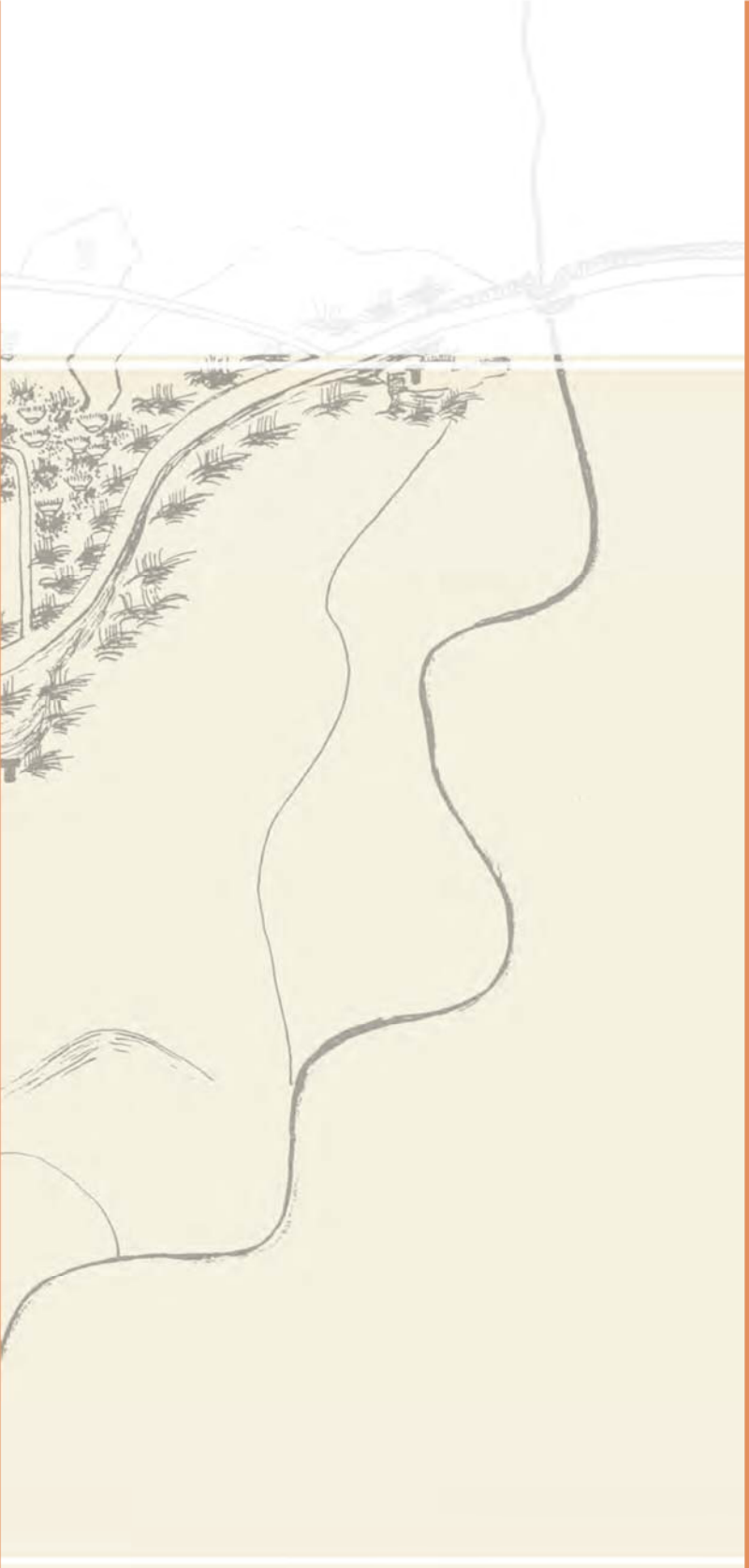
中城御殿跡

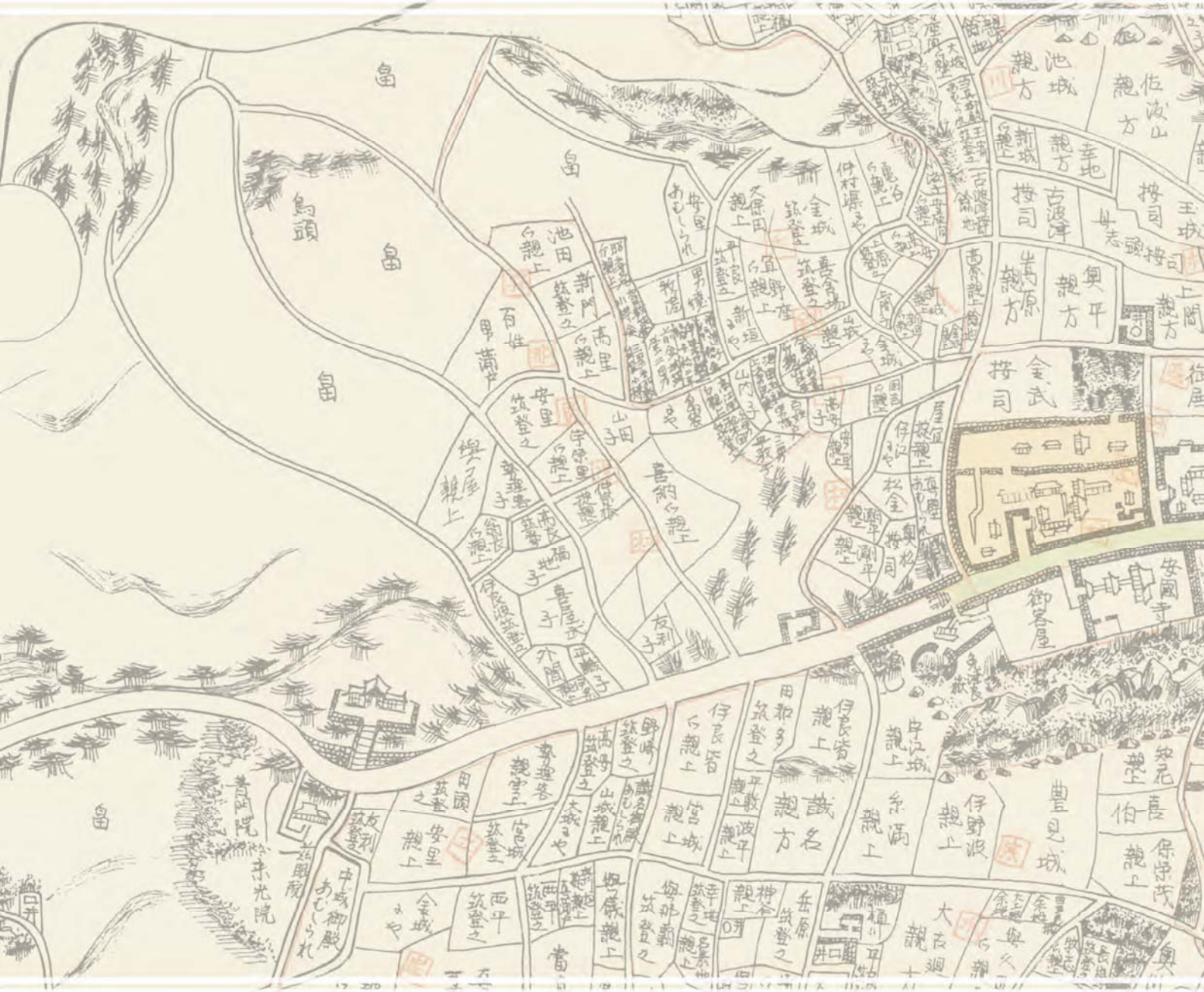
— 県営首里城公園　中城御殿発掘調査報告書（I）—

発行日　2010（平成22）年3月31日

発行・編集　沖縄県立埋蔵文化財センター
〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原193番地の7
TEL：098-835-8751・8752

印　刷　文進印刷株式会社
〒901-0305 沖縄県糸満市西崎町5丁目10-14





沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第53集

中城御殿跡

— 県営首里城公園　中城御殿発掘調査報告書（1）—

首里古地図

康熙39年（1700）に作製されたものである。これより2年前に江戸幕府から全国各藩に対して、地図を作製提出するよう指令が出ておるので、この地図もその一環であろう。

ところが、この地図も時代が経つにつれて、汚損はなはだしく、咸豊のはじめごろには開くことさえ出来ず、まったく使用にたえない状態になっていた。秋姓家譜によると、九世紫俊（さいしゅん）が絵図書調方筆者として、この地図を再調製したことがみえている。当時、原図は使用できないので、屋敷図帳、山敷差員を参照し、各当事者にさいたりて、この仕事を完成し、調査を賜っている。

図中約千百余り公署、屋敷等が細密に記載され、270年前の状況を詳しく伝えているが、この地図が年代査定に疑問を宿した理由は1700年当時の状況を伝えながらも、当事者たちの記憶違い、あるいは伝え違いによって、後代的な要素があるからである。

この地図の原図は6畳敷大の大きさで、研究に不便になるため、よく観察して書きあらためたものである。（藤手納宗徳）

北

西

東

南

2010年（平成22）3月
沖縄県立埋蔵文化財センター